

語り継ぐ 21

継承の使命 -これからを担う私たち-

兵庫県立舞子高等学校
環境防災科 21 期生

題名	名前	頁
過去から未来の防災へ	浅井 悠 慎	1～
私たちの使命	市丸 弥 興	4～
明日への運命を繋ぐ	射 場 叶 夢	8～
つなぐ	柏 本 怜 音	12～
震災を知らない私が伝えたいこと	勝 部 太 智	16～
生きる力	川 中 蒼 空	20～
未来へつなぐ防災	神 田 篤 樹	24～
あの日から 30 年	喜 田 千 尋	27～
経験を受け継ぐ	小 池 陽 華	31～
語り継ぐ	小 村 洸 星	35～
教訓を胸に	坂 本 逞 斗	38～
人から人へ	櫻 井 小 春	42～
防災と未来	塩 田 翔	45～
未来へ	島 希 凜	48～
まえにすすむ	曾 江 厚 志	52～
繋ぐ	武 田 倫 典	56～
共に語る	寺 川 侑 那	60～
語り継ぐ思い	長 友 直 輝	64～
未来を守る責任	永 濱 翔 太	67～
これからの自分	長 峰 陽 斗	71～
廻る思い	中 村 侑 真	74～
次世代へつなぐ防災	二 星 咲 良	77～
語り継ぐ意味とは	野 広 奏	80～
忘れさせない、未来へ残す	橋 口 彩 葉	84～
忘れないために	平 尾 彩 葉	88～
あの日を忘れない	深 田 稜 太	92～
地球と地域を知り、災害に備える	細 谷 悠 彬	95～
未来のために語り継ぐ	松 下 由 奈	100～
まだ未災者のわたしたち	三 村 月 乃	104～
過去から未来へ語り継ぐ	宮 田 和 輝	108～
未災者が紡ぐ	森 田 悠	112～
つなげたい	山 内 皓 成	116～
災害の教訓、私たちの使命	山 口 大 輔	119～
「あの日」から学んだ多くの想いを繋ぎ	山 口 優 心	123～
経験をこれからへ	横 田 翔 星	126～
明日を生きる	渡 邊 陸 斗	130～
30 年に想いを寄せて (21 期生)・「卒業研究」担当者の 30 年		133～

過去から未来の防災へ

浅井 悠慎

はじめに

阪神・淡路大震災から30年となり、震災を経験していない人が増えている。これからも襲ってくるであろう災害に備えるため、これまでの災害について「語り継ぎ」、これまでの災害での教訓の風化を防がなくてはならない。そのためには阪神・淡路大震災について伝えるという行動が重要で必要不可欠となる。今自分ができることである「語り継ぐ」の執筆として、これまでの環境防災科での活動を活かして、私自身が語り継いでいきたい。

1 阪神・淡路大震災の被災体験

(1) 母の体験

母は震災当時、神戸市須磨区に住んでいた。地震が起こって、揺れが収まるまで怖くて丸まっていた。揺れが収まって初めて見た光景は散乱した部屋で、とても大変なことが起こったと感じたそうだ。揺れが収まっても地震が恐ろしく、少しの間は一人で歩くことができず、近くに祖母にいてもらったという。揺れの後、一緒に住んでいた家族の無事がわかり、全員が集まった時はとてもほっとし、一安心したそうだ。幸い家が倒壊することはなく、避難所で生活することはなかった。犬を飼っていて、避難所へのペットの連れ込みは抽選だったため、本当に良かったと語っていた。発災後の生活で最も困ったことは、ライフラインの1つである「水」だそうだ。水道が復旧するまではトイレが流せず、シャワーを浴びることもできなかったのも、衛生面でとても苦労したという。

(2) 叔母の体験

叔母は震災当時、神戸市長田区に住んでいた。地震が起こったときは、家族のお弁当を作るためにすでに起きていたが、何が起こったかわからずとても怖かったという。キッチンにいたため、食器が散乱して、とても危なかった。ベランダに置いていた洗濯機が倒れ、家の前が水浸しになっていた。外を見ると、家の前の建物が大火事になっていたという。それに、そこら中に亡くなった方の死体が倒れていて、とても恐ろしく見ていられなかったそうだ。その光景は震災後、長い間忘れることはできなかったという。地震が起こってから、数日経って困ったことは、食べ物だ。自宅は無事で、避難所で過ごすことはなかったが、救援物資として食べ物をもらい、助けられとても感謝をしてもしきれなかったと話していた。

(3) 祖父の体験

祖父は震災当時、神戸市須磨区に、私の母を含めた家族と住んでいた。地震が起きて、揺れを感じてすぐに布団にくるまった。寝室には、家具をほとんどおいていなかったため、物が倒れてくる心配はなかったという。揺れが収まった後、部屋にあった窓が割れ、床にガラス片が散乱していてとても危なかったそうだ。地震が起きてから、家族の無事が心配でたまらず、無事だった家族を見たときにやっと気が緩んだという。このことがあり、祖母とは同じ寝室で、母や叔母とは近い部屋で寝ようと思うようになった。その後、被災した町を初めてみたときにとても怖くなったそうだ。もし自分の家が倒壊していたら、と考えるととても恐ろしいと語っていた。光景を見たときは、その変わりように言葉を失ったという。そのこともあり、自分の家が倒壊しなかったことにとても感謝したという。

2 被災体験を聞いて

家族3人の話を聞いて、災害が起こった時の行動や、それぞれの思いを知ることができた。そして、災害時にどのような物がうれしいかなども実際の思いを含めて知ることができた。これらのことを、いままで環境防災科として3年間で学んできたことを踏まえてこれからも災害時の対応や生活について考えていきたい。また、災害は予測不能で、被災者や関係者だけでなく全ての人にとって突然の出来事であるので、その体験によって価値観や人生そのものが大きく変わることもある。より強固なコミュニティの形成に向けた努力が生まれることもある。災害は悲劇であるが、人間の強さや連帯の力をも見せてくれる場面もある。その体験から得た教訓を、他の人々にも伝えることで、共感と理解を広げ、より強い社会を築く助けとなることもあると思う。

3 環境防災科と私

(1) 入学のきっかけ

私が環境防災科に入ったきっかけは、大学で防災を学んでいるいところである。その影響で「自分も防災について学びたい」と思い、いとこの大学で行われていた心肺蘇生・災害時の避難についてや防災に対する知識などの講習や避難訓練に小学生の頃から参加していた。その中で、より防災について学んで多くの人を助けられ、防災について多くの人に伝えられるような人になりたいと考えていたところ、いところから環境防災科を勧められて、入学することを決意した。

(2) 環境防災科の授業

環境防災科の授業で学んだことはコミュニティの大切さだ。阪神・淡路大震災では救助活動のほとんどが自助・共助で行われたということを学んだ。また、環境防災科でボランティア活動に参加する際にも、先輩・後輩の縦のつながりも大切となってくる。このように災害時だけではなく、普段の生活からコミュニティは必要となり、大切なものだということを学んだ。他にも「社会環境と防災」の授業では過去に起こった災害について学んだ。フィールドワークを行い、区画整理などの復旧と復興についても目で見て学ぶことができた。これまでに環境防災科で学んだことを、これから近いうちに発生するといわれている南海トラフ巨大地震の発災時や、あらゆる災害から多くの人を災害から守ることのできるよう最大限に活かしていきたい。

(3) ボランティア活動

私は3年間でたくさんのボランティア活動に参加させていただいた。主に募金活動、地域イベントのスタッフボランティアに参加させていただくことが多かった。参加してきたボランティア活動に共通して言えるのは事前準備の大切さだ。どれだけしっかりと準備を行うかどうかで、実際に活動する際にスムーズに問題なく進められるかどうかという重要な点に大きくかかわってくる。これは災害においてもいえる。事前にどのような問題が起こるか考え、対処するために準備しておくことと同じだ。また、ボランティア活動を行う上で、「してあげている」という考えではなく、「させていただいている」という考えを持つ必要があるということも注意しなければならない。ボランティア活動をする全ての人がこれらのことを大切にし、活動が続けていかなければならない。

4 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は消防設備士になることだ。消防設備士はそれぞれの設備に対応した資格を取ることで、消火器やスプリンクラー、火災報知設備などの消火設備や警報設備などの設置工事、点検工事を行うことのできる人だ。

私が消防設備士になりたいと考えるようになった大きなきっかけは、いところが消防設備士として働いていたことだ。いところから消防設備士としての仕事についての話を聞く中で興味を持ち、消防設備士について調べる中で、災害時は建物のなかにいる人を無事に避難させるといった、大変ながらも多くの人の助けになれることや、防災に携われるということに惹かれ、消防設備士を目指すようになった。

(2) 防災との関わり

消防設備士は火災報知設備などの消防設備を日頃から整備・点検・設置することで、災害が起こる前に備える「防災」を進めている。点検などを行っているため、実際に災害が起こった時に消防設備が正しく動作しないと事故をできる限り減らすことができる。火災報知設備や消火器によって、火災の早期発見から初期消火を進めることができる可能性が大きくなり、災害の被害を抑えることができる。また、消防設備士は、消防法や建築基準法などの法規制に基づいて設計を行う。そのため、建物が火災時に適切に機能するよう保証し、火災リスクを最小限に抑える役割を果たす。そして、防災の重要性を広めるために、一般向けの啓発活動や教育を行うこともある。建物の管理者や住民に対して、適切な災害対策や設備の正しい利用方法を指導し、災害の予防と減災を促進する。このように消防設備の整備・点検・設置をしておくことで平時の防災も進めることができ、災害時は消防設備を正しく使用・作動することで、できるだけ被害を抑えることができる。

5 南海トラフ巨大地震

これから30年以内に高確率で発生するといわれている南海トラフ巨大地震が起これと、震度7の揺れや10メートルを超える津波が太平洋沿岸を襲うとの想定がされている。被害では、死者は32万人を超え経済被害も220兆円を超えるとされている。これらの被害を減らすためには、社会全体での災害対策を進めていく必要がある。また、一人一人の備えもとても重要となり、備蓄や家具の固定、家族で避難する場所を決めておくことなど、それぞれの防災意識の向上がこれからもより大切になると考える。

6 令和6年能登半島地震

能登半島地震を受けて、今後は陸域内の地震に対する警戒も必要だ。地震の発生確率や被害想定を踏まえた地域ごとの防災計画の策定が必要になる。地震の早期警戒システムや避難計画の整備、地震時の対応訓練も必要になる。また、能登半島地震では、津波が大きな被害をもたらした。地震と津波の複合災害に備えるため、津波避難経路や避難場所の整備が大切となる。津波の早期警戒システムの充実や、地域住民への正しい避難行動の啓発が重要になる。道路や橋梁などのインフラは被害が大きく、その被害を抑えるためこれからの防災には、インフラの耐震化などのハード面や災害時の機能維持が求められる。インフラの整備も重要であり、災害発生時でも電力や通信の維持ができるような設計が必要だ。

7 これからの防災

これからの防災については、まず、単一の災害だけでなく、地震や洪水、台風など様々な災害に対応するための総合的なリスク管理が必要となる。地域の特性やリスクに応じた災害対策を考え、それを実行することが重要となる。また、地域コミュニティの強化も欠かせない。防災は個々人の努力だけではなく、地域全体での協力が必要になる。地域住民や関係機関との連携強化や防災意識の啓発が大切である。地域ごとの防災計画や避難計画の策定と定期的な訓練を行うことが必要だ。次に、先進技術も取り入れたい。技術の進化により、防災対策にも新たな方法が可能になっている。例えば、人工知能を用いた災害リスク予測などが挙げられる。このような技術を取り入れると、災害リスク予測を踏まえた災害の対策ができ、災害の被害を抑えることにつながる。災害が発生した際にも機能する持続可能なインフラの整備も必要だ。例えば、災害時に電力や通信が確保できるような設計や、水害時に浸水を防ぐための環境整備などがある。最後に、教育と意識の向上だ。防災意識の向上と正しい知識の普及が不可欠となる。学校教育や地域での啓発活動を通じて、災害に対する理解を深め、正しい知識や災害時の行動を身につけることが重要だ。多くの災害は国境を超えて影響を及ぼす。国際的な協力と知識の共有が、防災対策を実現するために重要となる。これらのことを踏まえて、これからの防災について考えていかないといけない。

おわりに

今回の語り継ぐの執筆を終えて、特に印象に残ったことが2つある。ひとつは未災者としての語り継ぎだ。未災者が増えている現在、どのようにして防災を伝えていけるかを考えさせられた。実際に被災した方々から聞いたお話をどのように防災をあまり知らない人たちに伝えることができ、これから起こる災害に対する防災につなげていけるか、これからも考えていかなければならないと感じた。もうひとつは、これまでの災害の被害や講師の方のお話についてだ。「語り継ぐ」を執筆する中で、身近な人の被災体験を多く聞いた。そこで感じたことは防災意識、知識の低さだ。阪神・淡路大震災の時も社会全体での防災意識、知識の水準が高ければ多くの命を救えたはずだ。この語り継ぐという行為でより多くの人に防災を知ってもらい、その重要性を深く考えた。この2つについて執筆する中でこれからもより考える必要があると感じた。

私たちの使命

市丸 弥興

はじめに

「語り継ぐ」を執筆するにあたって、自分なりに語り継ぐとは誰に向けて残すものなのか、残すことの意味は何なのかについて考えた。今年で阪神・淡路大震災から30年を迎え、震災を経験したことのない世代は年々増加している。そのような中で、猛威を振るう自然災害、これから高い確率で発生するとされている南海トラフ巨大地震。若い世代が主体となって動くことが求められている。これら2点を未災者や若者に訴えるのが「語り継ぐ」の役割だと考える。

1 阪神・淡路大震災

私は、母親から話を聞いた。私にとって母親はとても身近な存在である。そんな母親が30年前の1月17日、どこで何をしていたのか。何を思っていたのか語り継ぎたい。

(1) 発災当日の動き

震災当時、淡路島の洲本市に私の曾祖母、祖父、祖母、叔母にあたる5人と暮らしていた。母は寝室で叔母と2人で寝ていた。すると、突然下から突き上げられるようなこれまでに感じたことのない衝撃を感じたという。叔母は私の母をかばうため直ぐに上から覆いかぶさり揺れが収まるのを待った。揺れが収まると祖父が寝室へやってきて、「怪我はしてないか？」と声をかけた。家の壁が剥がれたり、食器が割れたりといった被害が出ていたためとても心配だったという。幸い家族にけがはなく大きな被害は出なかった。

母は社会人3年目で洲本市役所に勤務していた。車を使えないと判断し自転車で職場まで向かった。道中、倒壊した家屋やひびが入った道路など数々の被害を目の当たりにし、ただ事ではないということを実感したという。水道課に配属されていた母の業務内容は普段の仕事に加え、地域の人たちの安否確認だった。当日の仕事は普段よりも早い時間に終わった。慣れない仕事やもともと社交的でなかった母にとって人と話す仕事というのはとても疲れたらしい。それも単なる会話ではなく人の命に繋がる会話だったため、相手に気を遣いながら話した。家に帰ると、足に持病を抱えた曾祖母だけがおり、他の家族は出かけていたという。祖父母は当時、普段から仕事以外に農業をしたり牛を飼っていたりと2つの仕事を震災前から掛け持ちしていたため、帰宅が遅かった。祖父は当時働いていた場所が南あわじ市で、被害は少なかったが食品関係の職に就いていたため物資を送るのに忙しく、遅い時間まで帰ってこなかった。叔母は母と同じく洲本市役所に勤めていたが部署が違ったため、帰宅時間にずれが生まれたらしい。

(2) 周囲の様子

震災が起きてからの数日間、被害が大きく職場までくることができない同僚もいた。市役所勤めだった母は悲惨な状況を目の当たりにしただけでなく仕事量が増え、精神的にも肉体的にもきつかったという。家が全壊し普段通りの生活が送れなくなった人の中には自分の思うように復旧作業が進まずストレスがたまり、心無い言葉をかけてきた。しかし、そんな大変な状況の中でも前を向き少しでも早く普段通りの生活に戻ろうとする人たちがいて、励ましの声や感謝の言葉をいただき、母はまた仕事を頑張ろうという気持ちになれたという。

(3) 母が感じたこと

幸い母の身に怪我はなく、知り合いでも大きなけがをしたという人はいなかった。その時初めて自分が不自由なく健康に生活し、家族がいて、家があるということは当たり前ではなかったのだと実感した。その一方で、倒壊した家や大切な人を亡くした人を見ると、自分も住んでいる場所が少し違えば同じ運命になっていたかもしれないと感じ、何とも言えない気持ちになった。その時、亡くなった人々の分も懸命に生きようと思ったという。「何かできることはないのか、力になりたい」そんな気持ちが込み上げてきたという。自分のことで精一杯だった母は、申し訳なさで自分の無力さに押しつぶされそうになりながらも与えられた仕事をまっとうした。

もし、自分が同じような状況に置かれたら母のように与えられた役割を果たすことが出来るか分からない。母のことを改めて尊敬した。

(4) 地震が発生して変わったこと

発生してから長い年月が経ち、地震の話をする機会は減っていると母はいう。地震を経験しない若い年代が増え、地震に対する関心が低くなっている。その一方で、建物の耐震化や補強工事などは進み町の復興に対して人々の気持ちが追い付いていないように感じている。建物だけでなく人々も変わっていく必要があると母は言った。

2 話を聞いて自分が感じたこと

これまで私は母親に阪神・淡路大震災について詳しく聞いていなかった。祖父母の家の壁が剥がれていたのも知らなかったし、当時母が洲本市役所に勤めていたというのも初耳だった。話すのもつらい内容があったにもかかわらず、胸中を打ち明けてくれた母にとっても感謝したい。環境防災科の活動を通して様々な方から当時のお話を聞かせていただいたが、家族から話を聞くのはまたこれまでとは違った。自分の一番知っている人が当時何をしていたのか、何を思っていたのか、30年前に発生した阪神・淡路大震災が自分にとってとても身近なものに感じた。これまでの教訓を決して無駄にはしてはいけないと改めて認識する機会となった。

当時、耐震基準が違ったり知識の不足が問題となったりして多くの人が犠牲になった。きっと失わずにすんだ命もあったはずだ。そのような犠牲を一つでも少なくするために、目の前の出来事に対して今自分にできる全力を注ぎたい。

3 環境防災科

(1) ボランティア活動

私が初めて募金活動を行ったのは高校1年生の夏だった。ウクライナの人々に向けた支援を垂水駅前で行った。もともと、人前に立つことが得意ではない自分が、伝えたいことを声に出してもみんな聞いてくれるのだろうか、そんな不安が心の中にあった。しかし、実際は多くの人が活動に協力してくださった。中には「頑張って」と声をかけてくれる人もいて、人の心の温かさに感動した。自分の声が垂水区の人々に届いたと実感した瞬間で、やってよかったと思うことができた。

私は部活動にも取り組んでいるため日程が合わず、それ以来学校の外に出て募金活動を行うことはできていないが、校内で昼休みに行う募金活動などに積極的に参加している。学校内の活動でも変わらず多くの生徒や先生方が協力してくださった。この活動が少しでも多くの被災地の人々の生活に役立ってほしい。

(2) 地域活動

私は3年間、地域イベントのボランティアや防災イベントに参加することが多かった。

地域イベントのボランティアは、年齢層の幅が広く色んな年代の人々と関わることができ、とても貴重な経験だった。子どもと話すときは、どのような表現をしたら分かりやすく楽しんでもくれるか考える機会が多かった。また、お年寄りの方々と話すのは自分の知らない世界が広がっていくのを感じることができてとても楽しかった。

防災イベントでは、正しい知識を正確に伝えるために事前の準備を入念に行った。色んな人の視点に立ち、考える過程で発見したことを踏まえた新たな学びがたくさんあった。間違った知識を伝えてはいけないという思いからこの言葉は適切なのか、何度も考え直し自分の中で葛藤することもあった。しかし、その経験が自分を成長させてくれたと感じている。

(3) 講義

環境防災科では定期的に外部講師を招き講義をしていただいている。講義で教えていただく内容はほとんどが自分の知らないことで難しいと思うこともあるが、自分の学習の励みになっているように感じた。1年時に毎週のようにあったレポートや普段の学習がきつくても頑張ろうという気持ちになった。時には専門的な知識や複雑な専門用語が使われることもあったが、今振り返るとそれもすべてが今につながっていて、この3年間での学習を理解するうえで必要なことだったと感じることが出来る。他にも講義の内容を踏まえたうえでプレゼンをすることや学校外で学んだことをみんなで共有することもあつ

た。その取り組みが自分の学びをより深めさせ、自分の知識をより確かなものにしてくれたと感じている。

4 卒業後

(1) 将来の夢

卒業後、私はスポーツ関係の職業、特に怪我の面からアスリートを支えることが出来る柔道整復師になりたいと考えている。私は陸上競技部に所属しており、これまで何度か大きな怪我を経験したことがある。その時、柔道整復師の方にお世話になり、自分も怪我で苦しむアスリートを助けたいと感じ、意識するようになった。人の体、その人の今後の人生を左右するとても責任のある職業ということもあり、自分にできるか不安な気持ちもあったが人を助けたいという気持ちが大きくなり志すようになった。

(2) 柔道整復師

柔道整復師は国家資格として認められており整骨院や接骨院の先生として活躍している。柔道整復師になるためには、資格が取れる大学や専門学校に進学し4年間勉強する必要がある。その他にも、夜間部の学校で社会人をしながら資格を取るという方法もある。一番の特徴は薬を使わずにテーピングやストレッチで怪我を治し、患者の日常生活への復帰を目指すという点だ。また、理学療法士のように医師の指導の下治療を行うのではなく、自分で患者にどのような処置が必要なのかを考えて治療を施すのも魅力の一つとなっている。

(3) 防災と柔道整復師

柔道整復師には災害が発生したら被災地へ医療支援を行う組織「日整災害時救助チーム・DJAT」が存在する。DJATはこれまで熊本地震やトルコ・シリア地震、令和6年能登半島地震が発生した際も活動を行い、受診していた病院が被災し治療を受けられなくなった患者に対して医療支援を行った。他にもエコノミークラス症候群予防の対応や廃用性症候群のある患者への処置も行っている。

普段から薬を使わずに仕事を行う柔道整復師は、物資不足が懸念される災害時において担う役割は大きいだろう。これからも防災と関わりを持ち続け、自分にできることとは何なのか考え行動に移していきたい。

おわりに

今回「語り継ぐ」を執筆する中で、私はこの3年間、貴重な経験をさせていただいたということを改めて感じた。恐らく環境防災科以外で消防学校に体験入校したり、外部講師を招きお話していただく経験をしたりする高校生は少ないだろう。大変なこともあったが全てが今の自分の学びにつながっていると感じる。卒業して新たな進路へ向かうと今よりも防災と触れ合う機会を誰かに作ってもらうことは少なくなるだろう。それでも、これからの日本を生きていくうえでここでの学びを忘れてはいけないし他人事とせず自分事としてとらえなければいけない。自分の力は小さいかも知れないし、思いが届く人も限られているかもしれない。それでも今を生き、環境防災科に在籍する私は、災害に対する危険性を訴え続けるのが自分の義務だと感じる。

これまでの学びで本当に今のままの意識で災害が発生した際、大丈夫なのかと感じたことが何度もあった。この、社会としての「脆弱性」は災害が起きた時に、どのように被害として現れてしまうのか。とても深刻な問題だ。いままで私自身は、環境防災科の一員にも関わらず防災意識が低かったと思う。非常持ち出し袋は用意しているが、入っている中身は不十分だった。家族全員が最低2日間生き延びることのできる水や食料は全く備蓄することが出来ていない。家族で分け合うには少ない量だと感じる。もし用意したとしてもそのものをどこに置くのか、問題は多くある。そのような問題で用意を断念する家庭も少なくないだろう。しかし、自分の命が危険にさらされた際のことを考えたら今の行動も変わってくるはずだ。命を守るための考え方を多くの人にもってもらい災害時にはできるだけ不自由のない生活を送ってほしいと祈っている。

近年、災害は私たちの想像をはるかに上回る規模と頻度で発生している。南海トラフ巨大地震の発生が危惧されていて、私たちが常に安全であるという保障はどこにもない。もしかしたら、明日発生するかもしれないということを頭の中に入れておく必要がある。それによって失うのは自分の命や家族の命かもしれないし、大切な人の命かもしれない。そうならないためにも、家族や友人、身の回りの人を巻

き込んで、今一度多くの人と災害について一緒に学び防災の在り方というものを考えなおし、行動に移すべきだを考える。

明日への運命を繋ぐ

射場 叶夢

はじめに

阪神・淡路大震災が発生してから30年になる。当時被害を受けたとは思えないほどまちの復興が進んでいる。そのため、震災が発生したことを、感覚として知らずに生活している人が多い。発生したことすらさえも知らない人がいるような状況だからこそ、被災者の思いや命を守る大切さを語り継ぐことが大切だと思う。これから生きていく中で災害とは離れられない。災害によって命を落としてしまう人が一人でも出ないように過去の教訓を生かし、明日を生きるために語り継ぎたい。

1 祖父の話

当時、祖父は長田区に住んでおり、まちとして大きな被害を受けた。洗面所に居た祖父は歯磨きをしながら地鳴りの音を聞き、変な音が鳴ったと思っていた。そうすると激しく揺れ始め、洗面台に置いていたドライヤー、コップ、歯ブラシ、タオル、猫の餌が色んなところに飛び散った。祖母の様子を見に行く時、廊下の扉のガラスが右下、真ん中の左側、右上と割れていた。割れているガラスを見て焦りと不安があった。急いで祖母の様子を見に行くと、起きてはいたが何も理解できていない状況だったので、「たぶん地震やから出るぞ」と声をかけた。祖父はリビングにあるタンスの中の防災バックを取りに行った。リビングではテレビの周りに飾ってある写真が飛び散り、天井に吊るしていた照明が割れていた。数時間が経過し、祖父は弟に連絡を取ろうとしたが、ライフラインが止まっているため連絡が取れなかった。生存確認するための選択肢は、弟が住む須磨区まで行くしかなかった、祖父は「弟の様子見てくるわ」と祖母に言い、1人でバイクに乗って須磨区へ向かった。道路は隆起している所があったり、電柱や木が倒れていたりして、「この地震凄いな」と思った。弟の家に到着すると、弟が右手の小指を押さえており、襖が倒れてきたときに滑り、小指が先に地面に着いてしまい、見てすぐにわかる折れ方をしていた。周りには黒煙があがり空を覆いつくしていた。弟が無事なことを確認し、祖母の元へと帰った。数日が経ち、電気が復旧し、情報が得られやすくなった。自分たちの町がテレビで映され、変な気持ちになった。地震を受けてから洗面所の道具を固定化し、写真をファイルに閉じるようになった。最後に祖父は「ほんまにこんな地震来るんやなと思ったわ」と言っていた。

2 話を聞いて

私は、祖父の話を聞いて、昔のことなのに言葉が詰まることなく話しているのが印象に残った。もし今地震が発生してしまうと、私の家の洗面所は固定するなどの防災対策を何も行っていないから、祖父の家と同じような状況になると思う。置かれている物が飛び交う様子が想像できてしまい、不安になった。割れているガラスの話になったときに、割れたガラス全ての位置を覚えていたから、扉を見に行っていたが、すべて直されており、私が見てもどこが割れたのかわからなかった。そこまで祖父が鮮明に覚えているのは、今でも衝撃的な出来事で、災害に対する恐怖心を抱いていると感じた。その中でも祖父の行動力に感銘を受けた。私なら、また同じような地震がすぐに来てしまうと想着て、自分の命が危なくなるし、祖母もいることから、行きたい気持ちがあっても行動できないと思う。今まで色々な方に震災の話を聞いてきたが、一番話が入ってきやすかった。なので、私は祖父から聞いた話を中学1年生の妹に話した。わからない単語もすぐに聞いてくれて、祖父から聞いたことを伝えられた。身近な人に話を聞いて、それを身近な人に語り継ぐのが大切だと感じた。私は将来、社会科の教員として災害や防災を広めていきたいと考えている。祖父の話からの学びや気づき、環境防災科での経験を生かして授業ができる教員になりたい。

3 環境防災科

(1) 入学しようと思った経緯

私が環境防災科の存在を知ったのは中学2年生の頃だ。来年には受験を迎えるので、高校について調べていた。中学3年生になり、家族で岡山県を訪れた。田舎のほうに進んでいく最中に消防車がサイレンを鳴らし進んでいった。向かう方向が同じだったのでどんな被害が出たのか少し気になった。奥のほうに煙が上がっていて、先ほど見た消防車が止まっていたので、私は車から降りて遠くのほうから消防車と家を見ていた。その時、消防士の方が近隣住民に避難誘導や、消火活動をしている姿を見た。私は

その姿に憧れを持った。数週間が経過し、進路面談があった。調べたときに見つけた環境防災科について先生に話を聞いた。「防災」や「災害」について深く学べる場で、消防士になりたいという夢を持った先輩たちが進学したと聞き、人を助けられるような知識が身に付くと良いなと思い入学を決めた。

(2) 入学して

入学し、防災について学ぶ機会が増えた。「災害と人間」では知識を得て、講義で話を聞かせてもらうことがたくさんあった。知識を得る段階の授業でも、私はそれまでの知識量が少なく授業についていけなかった。講義では、来ていただいた講師の方々が同じ「阪神・淡路大震災」をテーマとするのに、被災体験が同じ人は1人もおらず、様々な考えや視点を持つことが出来た。阪神・淡路大震災では瓦礫の下敷きになり、自力で脱出することができなかった人が3万5000人いた。その中で2万7000人が近隣住民によって助けられた。阪神・淡路大震災ではその家に住んでいる人の人数や高齢者の方が住んでいるかを把握していた。そこで私は地域コミュニティ、人と人の繋がりが大切だと気付いた。阪神・淡路大震災の時は自助や公助より共助が多かった。共助が行われるには、地域に住んでいる人同士が親交を深めていないと簡単に助けることが出来ないことが分かった。地域のイベントや防災訓練に参加して繋がりを持つことが自分も相手も助け合えるようになる手段だと私は思う。

(3) 出前授業

私は、近くの小学生に町の危険な場所や子ども110番のある店を知ってもらうまち歩きや、防災やこれから起こる地震についての授業をしにいった。この授業の中で人に伝えることの難しさを感じた。同じ年代に授業するのではなく、小学生に授業するので、どうすれば津波の高さを想像できるかを考えたり、どのくらいの人が亡くなると予測されているのかをわかりやすく表現したりすればいいのかを何時間も考えた。これを考えるだけに時間がかかってしまって自分の語彙力のなさを実感した。だが、小学生に授業をしたことで、中学生や大人の方にも防災について教えることが出来るとも思った。これからの時代、防災教育は考えることが増え、難しいものになると思う。未来に起こる災害に備え、防災力を高めるためにも防災の存在と知識を広めたい。

(4) 神戸市消防学校体験入校

私は消防学校の体験入校で準備の厳しさを体感した。実際に消防士が消火活動、避難誘導をしている姿を見たことがあった。その当時は市民の命を守るのは消防士だから容易だろうと思っていた。だが実際は違い、人の命を守るのと並行して自分の命も守らなければいけないことを知った。自分の命、人の命を守るためには、訓練を重ねることが大事だと思った。訓練は腕立て伏せや腹筋などのトレーニングだけでなく、全員の安否確認をするための規律訓練や集団行動も含まれている。私は規律訓練で動きを覚えることができたが、全員と動きを合わせることが難しいと感じた。私たちの先輩は体験で腕立て伏せを100回していたと言っていた。心構えをしていたが、私たちが体験で行ったのは40回程度だった。半分以下でもしんどそうにしている人がいた。消防隊員の方はリズムよく腕立て伏せをしていて、自分の命や人の命を守るとは厳しい訓練の先にあるということが身に染みてわかった。

環境防災科での3年間を振り返って

私は今までたくさんの講義を受けてきた。初めての講義では、電気、ガス、水道などのライフラインについて、警察、消防、自衛隊など公的機関の方の話を聞き、阪神・淡路大震災や東日本大震災での被害を学習した。その話で知識を深めることができた実感した。一番印象に残った活動は「長田のまちあるき」だ。阪神・淡路大震災の二次被害で大きな被害を受けたまちで、私は復興が進んでいて被害を受けたまちだとは全く思わなかった。その中でも大国公園の大きな木と電柱が印象に残っていて、木に関しては大火災の延焼を止めたと聞いて驚いた。私は木と聞くと簡単に燃えるものだと思い、延焼を止める役割を担うとは思っていなかった。火災の被害を受けた側の地域は新しくまちを立て直し、「区画整理」を行って、規制を設けながら今も「災害に強いまちづくり」を行っている。火災の被害を受けなかった側の地域は家が建ったままで、まち全体の整備をすることは、大国公園を西と東で分けると、建物間の広さや建て方、まちの情景に差が生まれ、二次災害の火災で小さなまちに大きな影響を与えたことを知った。まち全体でもこの経験を活かして、これからどこの地域でも災害に強いまちになってほしいと思う。

4 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は、社会科の教員になることだ。環境防災科に入学した時は、消防士のような人のために動き、社会で役立つ職業に就きたいと考えていた。高校2年生の頃、「地理総合」の時間で自然環境や地震の仕組み、過去の災害について授業していただいた。授業中、先生が当時の被災体験を話した。聞き終わった後に、私が高校3年間で学んできた知識や講義で話していただいたことを先生のように生徒に伝えていきたいと思った。伝えていきたいと思った理由は、環境防災科で学んでいる間に、人から人へ、関わる大切さについて学んだからだ。このような経緯があり、社会科の教員を目指すようになった。

(2) 社会科教員と防災の関わり

まず教員と防災は密接に関係がある。それは災害発生時の対応だ。学校内に生徒がいる際に地震が発生すれば、教員は生徒の命を守り、生徒の安全を確保する必要がある。教員は正確な判断をするためにも防災に関する知識を身に付けておかなければならない。大川小学校では、町が避難を呼びかけていたのにも関わらず、教員たちは校庭にとどまることを選択し、教員が適切な判断、対応ができなかったために児童74人、教員10人が亡くなった。このことから1つの判断が命を左右することが分かった。自分が教員になったときは、生徒全員の命を背負っていることを日頃から自覚して職務に取り組みたい。

次に社会科教員として防災と関わりあっている点についてだ。教員は地理の授業を通じて、地形や気象条件が災害の発生にどのように関わっているかを生徒たちに教える。地震や洪水などの自然災害は地域の地形や気候によって異なるため、地理の知識を通じて生徒たちが自分たちの住む地域でどのような災害が起こりやすいのかを理解させる役割がある。歴史の授業では、過去に起きた災害の事例を取り上げることで、生徒たちに災害の影響や教訓を学ばせることができ過去の災害を振り返ることで、同じような状況が再び起こらないようにするための対策や準備の重要性を生徒たちと一緒に考えることが出来る。公民の授業では、災害時における政府や地方自治体の対応や支援体制、経済的な復興の取り組みなどについて生徒たちに説明し、社会全体での協力や連携の重要性を理解させる役割がある。これらを通じて、生徒が防災への関心を持ち続けられるようにしていきたいと思う。

5 南海トラフ巨大地震

これから起こると言われている南海トラフ巨大地震。南海トラフ巨大地震の震源地と予測されている場所、南海トラフは100～200年間隔で巨大地震が起きている。政府の地震調査委員会は、マグニチュード8～9の巨大地震が今後40年以内に90%の確率で発生するとしている。神戸市でも最大震度5強～6強の揺れと、津波が来ると予測されている。最大30メートルを超える津波の襲来が想定されている沿岸部もあり、四国、近畿、東海などの広い範囲で被害が生じると言われている。最悪の場合、被害は32万人を超え、経済被害も220兆円を超え、関東から九州にかけての30都道府県で今まで経験したことのない数の建物が地震によって全壊、半壊したり火事によって燃失したりする。避難所に避難する人の人数は最大で950万人で、およそ9600万食の食料が不足すると言われ、この人数が避難すると避難所の数が足りなくなる可能性がある。これらにより、被害に対する復旧費用も過去の災害よりも多くなることが考えられる。被害を少しでも抑えるには防災対策が重要だと考えていて、家の耐震化や防災バッグを用意するなどいつどこで災害が起きてもいいように準備しておく必要がある。建物の耐震化をすると80%、家具の固定をすることによって60%から70%の死者を減らすことができると学んだ。

ハザードマップの確認も、自分の命と家族の命や周りの人の命を守るためには必要だと考えていて、ハザードマップを確認することによって避難すべき場所を把握することができ、避難場所や避難所への最短ルートがわかる。一秒でも早く避難することが命を守ることにつながる。

おわりに

私は環境防災科に入学し、災害に対する考え方が大きく変化した。災害は建物を強化すればなんとかなと思っていた。だが、授業を重ねるうちに建物の強化も大事だが、人と人との関わりも大事だと学んだ。私たちは阪神・淡路大震災や東日本大震災のような大災害を経験していない。執筆する中で、自分なりにこれまでの経験を言葉でまとめようとしたが、言葉にして書くのは話すことより難しく感じた。

当たり前のようにご飯や水があり、友達や家族がいて、普通の生活が一瞬にして壊れると思うと、どれだけ防災や災害について学んでいても不安がほかの感情を上回る。3年間を通してこれからの人生で大事にしたいのは、人のためになることを伝えることだ。災害時では情報の正確性や行動で生死を分けることがある。明日を生きたかった人たちの思いを無駄にせず、人を救えるような言葉や行動を未災者に伝えられる人になりたい。それと同時に、私が書いた「語り継ぐ」が人の心を動かせるようなものになり、受け継がれていけば良いと思う。

はじめに

震災から今年で30年。時の流れと共に人々の震災の記憶、大規模災害への危機感が失われつつある。そんな現代を生きる私が「語り継ぐ」を執筆するにあたって、この3年間で学んできた数々のことを将来の自分自身、家族、そして社会へと語り継ぎ、30年前の出来事を「風化」させないようにする。

1 環境防災科での3年間

(1) 入学をしたきっかけ

私が環境防災科に入学したきっかけは、より実践的で肌で感じられる学習が多いという点に惹かれたことにある。防災を学ぶことで自分の大切な人を守ることもできるのではないかと考えた。オープンハイスクールで環境防災科の先輩と話をしたが、とても明るく、優しかった。そんな先輩の姿にあこがれを抱き、自分もあんな先輩のようになりたいと思った。また、中学3年生の頃に発生した静岡県熱海市での大規模な土砂災害の報道で、陸上自衛隊が泥だらけになりながら活動している姿を見て自衛官を目指すようになった。環境防災科での学びを、災害派遣時に被災地で活かすことができるのではないかと、そして環境防災科の多くの先輩が自衛隊員になっていると聞き入学を決めた。

(2) 消防学校体験入校

環境防災科の学習の一環で1年生、2年生のときに神戸市消防学校へ体験入校をさせていただいた。規律訓練や体力錬成、2年生のときには実際に自分たちが防火水槽や消火栓から水を引き上げ、ホースを伸ばし放水するという一連の動作を行った。消防学校で私たちに指導して頂いた消防官の姿から、実際に人を助ける人とはどういう人なのかと深く考えた。挨拶一つするのにでも自分との差を痛感した。市民の命を守ることを職業としている方々はさすがだなと当時思い、少しでも早く自分もあんなに立派な姿になりたいと考えた体験であった。体験で行ったことの中にはとても分かりやすく簡易的なものもあったため市民一人ひとりへの研修があれば、自助、共助のレベルが押し上げられ災害に強いまちに近づけると感じた。

(3) 長田のまちあるき

2年生の1学期に実際にまちを歩き、復興するにあたってそのまちの住民の方々のどんな思いがあったのかというのを感じられた。まちあるきにむけて2か月ほど事前学習を行った。長田のまちあるきでは大国公園のお話と長田商店街のお話が特に印象に残った。大国公園はJR鷹取駅から200mほど東にある。震災当時、公園の東側で火災が発生し、火が西側へ迫っていたが大国公園の木が焼け止まりの役割を果たした。被災後には一時的な避難場所、救護拠点場所として使われていた。大国公園に実際に足を運んだ際には、焼け止まりの効果を果たした木があった。木は黒く焦げていた。木は燃えるものだと思っていたが少し細い感じの木が、長田のまちを守ったのかと考えると逞しく感じた。公園には阪神・淡路大震災時の大国公園の様子が移された写真や記録が残されていた。その近くには復興基準点を示す石のようなものがあった。また、公園では地域のお年寄りの方々が輪投げをしたり散歩をしたりしていて、多くの人に愛されている公園だと感じた。新長田の商店街は震災で全体の9%が焼けた。地震の揺れには耐えることができたが、火が迫ってくると窓を閉めていてもビニールなどに引火し、燃え広がって焼けてしまった。このときに水の大切さを知ったと商店街の方が仰っていた。震災前賑やかだった商店街が震災で焼けてしまった。焼けて店が使えない店は、ベニヤ板の上に商品をのせ営業していたところもあった。商店街を歩いているとたくさんの手形が地面に彫られていた。その手形は歌手、プロ野球選手、お笑い芸人、政治家などたくさんの人の手形があった。それらの手形は長田のまちを応援してくれた人のものでこんなに多くの方が応援してくれているのだと感心した。長田のまちを復興するときに商業面では30年先を見越したまち、コミュニティ的面では、若い世代が大人になった時に、このま

ちのためにがんばれるようなまちを目指している。長田の人は、自分たちのまちに誇りを持っていて愛していると感じた。まちの至るところに住みやすいような工夫がされていた。自分のまちはとくに高齢化が進んでいるので、将来今住んでいるまちに住んでいなくても、たまに帰ってきて、よりよいまちが作れるようにしたいと考えるきっかけになった。

（４）ボランティア活動

あまりボランティア活動に参加できなかったが、今までトルコ・シリア地震の募金活動と名谷地区防災訓練、多聞南地区防災訓練、夏の地域防災セミナーに参加した。募金活動ではたくさんの人が協力してくださり、「がんばってね」と声をかけてくださった方がたくさんいた。また、若い男の人も入れてくださって自分が思っているより、まちのひとは温かく、将来自衛官となってまちの人の暮らしや笑顔を守りたいと強く思った。防災訓練と地域防災セミナーは地域の人とお話する機会が多く、環境防災科を応援してくださっている人が多くもっと頑張らなければならないと感じた。災害時、ペットボトルをどのように活用できるかを、地域の方に教え、教える際に初めて聞いたという方がほとんどだったので自分が教えたことで少しでも役に立ったかもしれないと思った。

地域の防災訓練では地域の防災福祉コミュニティの方とお話する機会があって、防災のことについて詳しく印象に残っている。自分の地域のどこが危ないのかということもよく理解されていてそれに応じた対策が施されていた。長田のまちと同じように、皆さんが自分が住んでいるまちのことを愛しているのだと感じた。

（５）成長したこと

自分が３年間を通して成長したことは、人と話せるようになったことだ。知らない人と話すことは苦手ではなかったが、得意というわけでもなかった。環境防災科での様々な活動で幅広い年齢層の方とお話することができて、相手がどんなことを考えているのか、どんな思いがあるのか少し感じられるようになった。長田のまちあるきや灘のフィールドワークでは、地域の人に自ら声をかけて当時のお話や復興のお話を聞くことができた。そこにたくさんの思い、まちを愛する気持ちが感じられた。また以前は小さい子どもと関わることは少し苦手だったが、自分が小さいときにされて嬉しかったことや楽しかったことを思い出し、それを実践してみると喜んでくれる子や楽しそうに色々なことを話してくれる子が増えて、自分も楽しい気持ちになった。

２ 将来へ繋げる

私が３年間学んだことを将来に活かしたい場面が２つある。それは仕事の場面と一市民としての場面である。先述した通り、私は自衛官を目指し入学した。環境防災科の「災害と人間」の授業で自衛官の方が講義に来てくださったときに海上自衛隊も災害派遣時に活躍していて、物資や、人員を輸送したり、入浴支援を行ったりしているのを知った。あまり目立たないところでとても重要な役割を担っているということを知り海上自衛隊に入りたいと思うようになった。災害時の細かい動きや気を付けるべきところなどあるが、私が活かせると思った場面は被災者の方とお話をするときだと考えた。２年生のころ「Active 防災」の授業で心理学のことについて学んだ。その内容には被災者との接し方も含まれていた。そこで、災害派遣時に直接お話をする機会は少ないと思うが話せる機会があれば、学んだことを活かしていきたい。また小さい子どもとの関わり方も３年間で学ぶことができたから、避難所で遊んだり声をかけたりして気が落ち込んでいる子どものために役に立ちたい。

一市民としては高齢化が進むこの日本の社会において、私が住んでいるまちもかなり高齢化が進んでいると感じる。私は自分のまちに誇りを持っている。雰囲気がとても穏やかで商店街の方は通りすがるときに「おかえり」といってくれる。私は育ったまちへの恩返しとして、まちの活性化に貢献していきたいと考えている。自衛官になって家庭を持つようになり、今自分が住んでいるまちに住むことができれば、若い私たちの世代が地域の核となって活動したい。３年間でまちづくりの話や防災のことはたくさん考えてきたから、環境防災科の卒業生として「市民リーダー」になりたい。私は、長田の復興するときの目標である「今の子どもの世代が１０年後、２０年後に戻ってきたいまちにする」という点が心に

残り、大事にしたいと考える。具体的には小学生・中学生はもちろん、大人や高齢者、幅広い年代の方が楽しめるお祭りや、イベントを開催したいと考える。自分が小学生の頃はあまりそういったイベントがなかったので誰もが楽しく、みんなの思い出に残るようなものにしたい。そこに防災訓練も加えることができれば地域として災害に強いまちづくりができると考えている。また、現在行われている活動をなくさず、継続していくこともしていきたい。特に、ふれあい給食会という一人暮らしの70歳以上の方を対象としている活動では一人暮らしで家に引きこもりがちになりそうな高齢者を一人にさせないという点で残していかななくてはならない活動だと考える。

3 阪神・淡路大震災の体験談

(1) 母の体験談

当時大学1年生だった母は、今も暮らす塩屋のまちに祖父母と叔母と母の4人で住んでいた。午前5時46分地震が発生。母は布団で寝ていた。突然下から突き上げられるような感覚でドン、と体が浮いた。今まで感じたことのない揺れに、夢の中にいるのではと思った。恐ろしい夢だと思い、もう一度寝た。隣の部屋で寝ていた叔母は、母が埋もれていると思い、探しにきたところ、本棚から落ちた本、小さな鏡が地面に散乱していたため、足に怪我をした。母の周りで怪我をしたのは叔母だけだった。祖父が家具の固定を発災前から行っており、食器棚は倒れずお皿は一枚も割れなかった。小物が落ちただけであった。以前まで神戸は大きな自然災害がなく、まさか神戸で地震が起こるとは、という感覚であった。1月17日、試験期間であったため母は学校へ行こうと起床する。起床すると電気、ガスがつかず水は溜まっていたものが少し出た。停電のためテレビが見られず情報がつかめない中、祖父の趣味であるアウトドア用品がたくさんあり、その中にあったラジオで大きい地震が発生して大変な状況にあると知る。試験が無くなり少し嬉しい気持ちがあり、自分の周辺では全く被害がなかったためなんともないと思った。そんな中、17日の昼頃電気が復旧しテレビを見ると、三宮のビルが倒れている様子や阪神高速が倒れている様子が映り、すごいことになっているとそこでようやく事の重大さを感じた。テスト期間の後半はテストがあることになったため、大学へ行くことになる。その道中、塩屋谷川周辺の家屋が軒並み倒れていた。塩屋の地域で家が倒れているのを見たのはそこだけであった。電車に乗り大学へ向かう。その車窓から黒焦げのまちが見えた。長田のまちだった。戦争は体験したことはないが、戦争が起きるとこんな感じになるだろうなと思わされるほど、辺り一帯焼け野原と化していた。テレビでは見えていたが自分の目で見ると違った衝撃を受けた。母は神戸まで電車が動いていたため神戸まで行き、歩いて三宮までいった。発災から数日後、三宮で母が見た光景はいつもとさほど変わらなかったようだ。三宮で乗り換え尼崎まで通学していた。時には友達の家泊めてもらうこともあったそうだ。

暮らしの面ではいつも当たり前のように使っているガス、水に困った。とくにトイレ、風呂、洗濯に困った。給水車が来ると近所の高齢者の方は小さいやかんを持ち並んでいたが、祖父は大きなポリタンクを持っていたため、近所の方に水を分けていた。母は学校が無くなり一日2回給水車に並んでいた。ポリタンクがたくさんあったため給水車がきてから水に困ることはなかった。山の麓にあるゴルフ場へ、祖父が大きいタンクを車にのせ湧き水を汲みに行った。水は洗濯の日、風呂の日など分けて使っていた。発災から数日後、祖父は当時勤めていた所の伝手でプロパンガスを持って帰ってきた。そのガスでお湯を沸かし風呂に入っていた。近所の方も風呂に入りきっていた。当時都市ガスを使用していた家だったがプロパンガスに変えた。まちの店も同じような対応を取っていた。またある日、大きなタンクを台所に置き、蛇口を付け捻ると水が流れるようなものを作った。他の家庭よりもすこし楽な暮らしをしていて困ったことはほんの少しだけであった。食事は、祖父が大のカップラーメン好きということもあり、たくさん備蓄していたため、カップラーメンをよく食べていた。

(2) 話を聞いて

小さい頃、一度母の話を聞いたことがあったが、その時は母の姉が足を怪我したということしか記憶に残っていなかった。しかし、環境防災科で3年間学習してきてもう一度話を聞くと祖父の偉大さを感じた。小学5年生の時に祖父は亡くなってしまったが、祖父の部屋には8個ほどの懐中電灯や手回し発電機、デジタル時計があったのを鮮明に覚えている。母も言っていたが、阪神・淡路大震災で被災する

までは家具の固定をしたり、ポリタンクを大量に集めたり、懐中電灯、時計を大量に集めていたものを見て、家族は「邪魔だな」と思っていたそうだ。さすがにこんなにはいらないだろうといつも祖父に言っていた。しかし被災してみるといつもは邪魔もの扱いされていたものが暮らしを豊かにしてくれて、そこで初めて備えることの大事さを知れたという。祖父が居ない今、防災を勉強している自分が祖父のような存在になっていかなければならないと痛感した。今からでもできる備えをしっかりとしようと思った。

おわりに

「語り継ぐ」を執筆するにあたって自分が大事にしたいことを考えた。たくさんあるが一番大事にしたいことは、未来の自分、家族、そして社会へ訴えかけるようなものを執筆することだ。今年で震災から30年を迎えたが、人間は昔のことを忘れてしまうため、30年前の出来事を忘れかけていっているのではないか、もしそれが、自分が大人になり50年、70年、そして100年経ったときに何人の人が30年前の出来事について覚えているのだろうかと考えたからである。被災した人はきっと忘れることはないだろう。では、30年前の出来事を体験していない人はどうだろうか。自分には関係がないことと思っている人もいないのだろうか。約100年前の関東大震災のことをどれだけの人知っているだろうか。そう考えると自分たちが語り継ぐことの重要性、責任を感じた。だから100年、200年、1000年先まで、未来永劫残るものを執筆しようと思った。執筆する中で3年間を振り返るとたくさんの学習を通してたくさんの知識を得られたがまず大事なのは自分の命を守るための自助、そして自助へ繋がる備えが大事だと改めて気づいた。自分は3年間防災を学んできた身として、また環境防災科の卒業生として社会へ出て責任をもって市民のリーダーとなり防災に携わっていきたいと思っている。そして備えることで自分の愛する人、友人、家族、また社会を守っていかなければならないと考えている。

震災を知らない私が伝えたいこと

勝部 太智

はじめに

30 年前、私たちの住む神戸のまちを襲ったあの大災害は、報道番組などでも徐々に取り上げられなくなり、風化の一途をたどっている気がしてならない。私を含め震災を体験していない人が増え、私自身も、環境防災科の一員ではなく、災害について学んでいなければ、阪神・淡路大震災という出来事を忘れ去っていたかもしれない。しかし、この 30 年の間にも東日本大震災をはじめとした数多くの災害が起こり続けている。2024 年に発生した令和 6 年能登半島地震は、大きな被害をもたらし、長い期間の余震が続いた。南海トラフ巨大地震はいつ起きてもおかしくないと言われる状況にある。それなのに、過去の災害の記憶を風化させてもよいのだろうか。過去の記憶を最大限活かし、同じことを二度と繰り返さないためにも、まずは私が伝えていきたいと思う。「語り継ぐ」を経て、誰かの目に留まり、1 人でも多くの人に災害の危険性を再確認してもらえることを願う。

1 恐怖の記憶

(1) 父の体験

私は、実際に震災を経験した父に当時の話を聞くことにした。

父は当時、震度 7 を計測した西宮市の団地で祖父、祖母、父、叔母の 4 人で暮らしていた。震災当日午前 5 時 46 分、部屋で寝ていた父は最初の揺れで目が覚めたという。頭の方に何か大きなものが落ちたような、ジェットコースターに乗っているような感覚の後、左右の揺れに変わった。父は驚き、どうすればよいかわからないまま布団にくるまっていた。揺れが収まり布団から出ると、頭のすぐ側には地球儀が落ちており、あと数 cm ずれていれば頭を怪我していたかもしれない。その後すぐに、両親が寝ている寝室に行くと、倒れた家具と家具の間で祖父と祖母が丸まっていた。祖母はタンスに頭をぶつけていたが、わずかな隙間のおかげで一命を取り留めた。父は叔母と 2 人で祖父母を引き上げ、リビングへ行くと、家具や物が散乱していた。外は真っ暗で様子は分からなかったが、やけにしんとしており、不気味だったそうだ。このときはまだ電気はついており、家族で部屋を片付けながらテレビを見ていた。テレビのニュース速報では、「ものすごい地震でした」としか言っておらず、大事になっているとは思わなかった。午前 7 時ごろになると、太陽が昇り始め辺りの様子が分かるようになってきたが、周辺もそれほど大きな変化はなかった。古い団地だったため少し液状化していたが、看板が倒れたり、洗濯物が散らばっていたりするくらいで「大きく揺れただけ」と思っていた。しかし、時間が経つにつれ報道番組が組まれ、テレビでは想像を絶するほどの世界が広がっていた。住み慣れたまちやお店が別世界のように荒れ果てているのを見て父は混乱したという。普段、会社に行くときに通る阪神高速はなぎ倒され、道路とは呼べない姿になっていた。もし、発災があと 2 時間遅ければ、普段通り会社に行く予定だった父はこの高速道路の下敷きになっていたかもしれない。昼頃になると、ライフラインは途絶え、使えなくなった。家にはカセットコンロがあり、料理などには困らなかったそうだが、冷蔵庫も使えなくなっていることに気づき、食料が腐らないかと心配した。

発災から一夜が明けた。電気は使えるようになり、交通機関も阪急電車が動き始めた。父はそれほど大きな被害がなかったため家で過ごすことができたが、報道で見た想像もつかないような光景が頭に残りあまり眠ることはできなかった。父は怪我をした祖母の看病のため、会社に長期休暇を出した。家に保存食などは置いておらず、大阪は大きな被害がなかったと聞き、父は叔母と、仕事に向かう祖父と一緒に電車に乗り、買い出しに行くことにした。電車の中にはたくさんの人が乗っており、たくさんの荷物を持った人やスーツ姿の人もいた。父は、こんなに多くの人が行き来しているのなら、同じようなことを考えて大阪に買い出しに行っている人が多いのではないかと考え、ひとつ前の野田駅で降りることにした。野田駅にはあまり被害がなく、最寄りのイオンには普段と変わらず、物資がまだ多く残っていたという。その後、仕事で大阪に通っていた祖父に聞くと、大阪には物資が少しも残っておらず、父が機転を利かし野田駅で降りていなければ、物資を集めることはできなかったという。

震災から 2 週間が経った。自衛隊が団地の近くに仮設トイレを設置し、定期的に給水車がやってくるようになった。当時住んでいた団地には高齢者が多かったため、父たち若い世代は給水車から汲んだ水をバケツリレーのように運んだり、代わりに汲みに行ったりという共助を行っていた。祖父の会社からは、応

援として救援物資が届き、制限はありながらも生活することができていた。しかし、父の職場からは物資が届いたり、連絡が来たりすることはなかったという。会社によって大きな対応の差があることに、父はほかの同僚と不満を感じていた。その後1ヶ月ほどは、西神にある職場に徒歩で5時間ほどかけて通っていたが、結局体力が持たず仕事を辞めてしまった。

その後、街の復興とともに父は再就職をして今の仕事に就いている。父は当時を振り返り、地震の恐ろしさを目の当たりにしたと語る。身内の被害は少なかったが、すぐ近くに住む家族は全員亡くなっていたり、小さな子どもが一人でボロボロになった姿で町を歩いていたといった光景が今でも脳裏に焼き付いて離れないという。

(2) 被災体験を聞いて

私は「語り継ぐ」の執筆をするまで、父に震災当時のことを聞いたことがなかった。普段よく冗談を言って笑わせてくれる父が、普段とは違って真剣に話している姿を見て、震災の経験が父にとってどれだけ大きなものだったのかを感じた。思い返してみると、普段から家族との時間を大切にして、よく実家にも帰っているのは、今という日々が奇跡のようなもので、いつどこで何が起こるかは分からないことを身に染みて感じているからだと思った。私も、家族や大切な人との時間を大切にしていきたい。いつどこで何が起こるかわからないからこそ、今を大切に一生懸命生きていきたい。

2 私を変えた活動

(1) メモリアルアクション KOBÉ

メモリアルアクション KOBÉ とは、阪神・淡路大震災を経験していない私たち未災者が同じように阪神・淡路大震災を経験していない未災者に防災を伝え、各団体で話し合う共有の場だ。私が所属している舞子高校チームでは、防災読本班とインタビュー班に分かれて活動している。

防災読本とは、舞子高校生に防災を伝えるために作成した本である。今後発生する南海トラフ巨大地震をはじめとした地震に対して、いざというとき自分の命や家族の命を守るために事前に備えられるようにして災害時に役立つ本を、読んでいて「楽しい・ためになる本」を目指し作成している。

インタビュー班では、舞子高校の教職員に阪神・淡路大震災を中心とした被災経験をインタビューし、それを冊子にまとめて掲載する活動を行っている。先生にとってもインタビューをする生徒にとってもよく知っている相手だからこそ話しやすい環境になり、災害を直接経験した先生方の生の声を聴くことができる。冊子には歴代の舞子高校チームが集めたインタビューが全て掲載されており、毎年その冊子は更新されている。また、年表という形で先生の年代別にインタビュー内容を並べ替えて比較している。そこでは、年代によって心の支えになったものや、当時の気持ちなどが大きく違っていることが分かった。震災当時、まだ幼かった先生方は、心の支えになったのは友達や親を挙げており、当時は何が起こっているのか分からない状況だったと話していた。それに比べて成人以上の年代の先生方は、心の支えは子ども、家族を挙げていた人が多かった。そして、もっと地震について知っていれば、あの時もっと何かできなかったのだろうかと後悔の念を抱いている先生が多いことが分かった。

私は、インタビュー班として、今まで多くの先生方にインタビューを行ってきた。その中で特に印象に残っているのは「子どもの存在は心の支えにもなるが、逆に負担になってしまうこともある」と話していた先生の話だ。その当時、先生には夫と1歳になったばかりの娘がいた。阪神・淡路大震災発生時、先生は自分の娘を守りたいという一心で避難所へ向かった。3人は無事に避難所へたどり着くことができたのだが、避難所での生活は過酷なものだったという。避難物資は先生のもとへ回って来ないまま無くなってしまうこともあり、制限だらけの避難所で娘の世話と、自身の生活を両立しなければならなかった。ダンボールで作られた薄い仕切りの中では、娘にミルクを与えるのも難しく、恥ずかしい思いをしたこともあったという。また、娘の泣き声が避難所中に響いてしまうことは、周りの人にもストレスを与えてしまったと話していた。私はこの話を聞くまで、子どもの存在は心の支えになるものだと考えていた。しかし、実際には子どもがいることで生まれるストレスもあることを知った。避難所にはたくさんの人が集まり、その中には子どもや高齢者、障がい者、外国人などの災害弱者が含まれる。どの立場の人でも、安心して過ごせるようにするためには避難所の在り方を見直す必要があると思った。

(2) Smile★Café

私は生まれつき片耳難聴という障害を抱えている。このボランティアには、私と同じように耳に障害がある方が来ると聞き、その方と話してみたいという一心で参加した。Smile★Café では、“災害時要配慮

者”と呼ばれる方やその家族が何を思っているのか、災害時にどのように対応すればいいのかをワークショップを通じて考えていく活動だった。

私たち舞子高校生は、非常食班と簡易トイレ班に分かれて活動を行い、私は非常食班のリーダーを任された。これが校外活動での初めてのリーダーだった。災害時要配慮者の避難には配慮が必要である。目が見えない人、耳が聞こえない人、中には体を動かしてはいけない人や、自分の意志で体を動かさない人、見た目だけでは障害があることすらわからない人もいる。どんな人にも当てはまる避難方法はなく、その人に合わせた方法を考えなくてはならなかった。非常食班では、モーリアンヒートパックを実際に使う体験と、非常食の紹介、試食を行った。モーリアンヒートパックは、少量の水があれば食べ物を温めることができる防災グッズで、袋の中に非常食を入れて加熱することで、温かい料理を食べることができるというものだ。その手順を説明し、実際に実践していくのだが練習時も、本番も先輩方に助けられてばかりだった。予定通りに進まないところや、予想していないところでのミスが重なってしまい、リーダーなのにと気持ちが焦り、空回りしてしまい先輩方にフォローしてもらうことが多々あった。

今、自分が先輩という立場になり、あの時の先輩方のように少しでも後輩たちの力になれるように励んでいる。後輩にとって頼りになる先輩になるためには、普段から後輩とコミュニケーションを取り、的確なアドバイスができるようにこれからも積極的に様々な活動に向き合っていきたいと思う。

3 夢と防災

(1) 私の夢

私はまだ、将来就きたい職業が決まっていない。しかし、この環境防災科で学んだ防災への取り組みや、過去の災害、被災者との関わりを最大限活かしたいと思っている。私は、絵画が好きだ。趣味として絵を描いたり、何かを作ったりすることが楽しかった。今回、この機会に自分の好きなことを仕事にできないかと考え、調べると「グラフィックデザイナー」という職業に出会った。グラフィックデザインとは、視覚デザインの領域に属しており、主に印刷メディアにおいて、文字・絵・図・写真等を利用し情報やメッセージを伝えるデザインである。そのグラフィックデザインを駆使して、雑誌の表紙や書籍の装丁、商品のパッケージ、ポスター、カタログ、看板など、さまざまなデザインを行う仕事だ。

(2) グラフィックデザイナーと防災

グラフィックデザインとは、視覚デザインとして、文字・絵・図・写真等を利用し情報やメッセージを伝える美的側面を伴うビジュアルコミュニケーション手法の一つのデザインである。それは、防災にも大いに活かすことができる。

現在、防災グッズやポスターなどをもっと馴染みやすく、身近なものにしようと、防災ポスターにアニメのキャラクターが使われるなど、防災グッズも使いやすくおしゃれなものに変化してきている。無印良品など、馴染みのあるブランドも防災グッズを手掛けており、防災をより身近に感じるようなものが生まれている。例えば過去の事例として、株式会社初田製作所では「クマさん消火器」というかわいー一般家庭用消火機器を取り揃えている。赤の補色である緑で仕上げたパステルカラーや、黄色いクマさん型のシェイプから「防災のかたくるしさ」を無くし、備えることに対するハードルを減らすことができ、子どもから大人まで全ての世代が親しめるようなものになっている。備えることへの抵抗を減らし、小さい子どもからお年寄りまで誰でも使いやすく、親近感の湧くものにすることによって家に置いてみよう、買ってみようという気持ちになると思う。

防災グッズには「悪目立ちする」「怖い気持ちになる」「インテリアに合わない」という声もある。「突っ張り棒」もその一つだ。突っ張り棒は家具やタンスなど室内の背の高いものに設置する。そのため、生活をする中で目に触れる機会も多い。無機質な突っ張り棒はその部屋のイメージを崩しかねない。こちらに関しても、さまざまなカラーリングの突っ張り棒がある。平安伸銅工業の突っ張り棒は、オーソドックスな白のほかにマットブラックも展開しており、2020年グッドデザイン賞を受賞している。大災害が起きた瞬間に命を落とさないためにも、家具の固定はとても重要な防災対策の一つであるため、カラーバリエーションが増えることでその家に合ったもので対策ができると思う。

(3) 自分の夢と防災

私はこのグラフィックデザイナーという職業を知って、こんな仕事があるのかと興味が沸いた。いつも何気なく使っていたものは、すべて誰かのアイデアによって作られたもので、そのアイデアのおかげでそのものの価値が生まれる。とても良い仕事だと思った。

私がグラフィックデザイナーになった時にしたいことを考えた。それは、聴覚障害がある方でも使うことができるマルチハザードマップだ。あるボランティア活動をさせていただいたとき、聴覚障害がある方とお話しさせていただく機会をいただいた。その方は、普段不便に感じることをして、緊急事態時に情報がわからないことだとおっしゃっていた。電車に乗っているときなどに緊急事態が発生したとき、情報を伝えるのはアナウンスや警報だ。緊急事態はまず、音で知らせる。視覚障害やその他の障害がある方は、その音に気付くことができる。アナウンスで事の詳細を説明しているため、どういった状況なのかも把握することができる。しかし、聴覚障害がある方は、みんながなぜ逃げているのかわからない。情報を聞こうにも、周りが慌てている中では難しく、わからないままになってしまうことがあるという。そこで私は、聴覚障害がある方でも安心して使えるようなマルチハザードマップをゲーム系グラフィックデザイナーと、IT エンジニアに協力を依頼してアプリとして作りたいと思う。マルチハザードマップはハザードマップだけでなく防災情報やその地域のニュースを掲載し、普段からそのアプリを覗くことができるようにすることで、ハザードマップや防災情報をみる機会を作れるのではないかと考える。そして私が広告系グラフィックデザイナーとして、そのアプリのマルチハザードマップを広告のように誰もがひと目でわかりやすく、情報を得られるようなものにしたい。それは、聴覚障害がある方だけでなく、耳が遠くなったお年寄りや視覚からの情報の方が分かりやすい子どもたちにとっても、便利で役立つものになるのではないだろうか。

4 令和6年能登半島地震

令和6年能登半島地震が発生した令和6年1月1日、私は親戚と、祖母の住む明石のマンションに集まっていた。私と従兄弟以外、親戚のほぼ全員が阪神・淡路大震災の経験者だった。祖母の部屋はマンションの11階にあり、地震発生時は体を感じるほどの揺れだった。見ていた正月特番は緊急地震速報に切り替わり、能登の様子が映し出された。被災体験をしている祖母はトラウマになっており、揺れや、テレビの中から聞こえるJアラートに過敏に反応していた。その反面、私の従兄弟は、大げさだと正月特番が見られなくなったことに不満をこぼしていた。それを見て私は、震災の経験がある人となない人との違いを思い知った。私は環境防災科で震災の恐ろしさを学んでいるため、災害発生時に身構えることができたが、震災を知らない私たちの世代は、自分は大丈夫、大げさだと思い動こうとしない。南海トラフ巨大地震が迫る今、このままではいけないと感じた。インターネットでも同じようなことが言える。私は災害発生後、現地の様子が気になりインターネットを使って調べていた。そこでは、現地を心配する声や、現地の方のSOSだけでなく事実とかけ離れたデマやうわさが出回っていた。阪神・淡路大震災のころはあまり普及していなかったインターネットが誰でも気軽に使えるようになった今、現地の様子やSOSがすぐわかるようになり、ニュースでもインターネットから情報を吸い上げて伝えているものもある。しかし、そこには事実とは異なった情報やうわさが飛び交っていることを知った。インターネットは情報をいち早く知ることのできる便利な手段だが、その中には偽りの情報も存在し、それを鵜呑みにしてしまう人も生まれてしまう。信頼できる情報かどうか、きちんと真偽を確かめてから発信していくことが大切だと思った。

おわりに

震災を知らない私が次世代に伝えたいことがある。それは、過去の経験をプラスに考え活かしていくことだ。神戸の町は、阪神・淡路大震災という経験を経て今の町がある。震災によって建物の耐久力の低さや防災対策の課題が明らかになった。その課題を少しずつ解消していくことで、災害に強い町になっていった。このことは、災害面だけに限らず私たちの生活にも繋がると思う。何度、失敗を繰り返してもその失敗の原因を突き止めて、対策することで成功に繋がっていく。私自身も、自分の失敗をそのまま放置してしまうことがあるが、もう一度何を失敗してしまったのかを見つめ直すことで解決策を見つけ出すことができた。私は、震災から過去の経験を活かすことで未来に繋がれることを学んだ。災害から学ぶことは多くある。災害という経験を活かすことが未災者のできる復興なのではないだろうか。

生きる力

川中 蒼空

はじめに

「語り継ぐ」を執筆するにあたり、防災の力について考えてみた。1年生のころから、学校での授業や多くのボランティア活動で、いろいろな他者の防災の力について知った。しかし、私が思う防災に辿り着くことができなかった。2年生の1月、令和6年能登半島地震が起こった。この地震は、私が記憶にある地震の中で、とても大きな地震だった。この地震をきっかけに、防災とは自分のためであり、他者のためにもなるのだと考えるようになった。防災の力とは、人を守る力とこれからの進化していく災害に対応する力だと考えている。この考えを広め、防災の重要性を伝えるために執筆をする。

1 環境防災科

(1) 環境防災科に入ろうと思ったきっかけ

中学2年生の時に、テレビで阪神・淡路大震災のニュースを見た。当時は、防災や災害の知識が全くなかったので理解できないことも多くあったが、人が感じる恐怖がどれだけあるのか、どれだけ地震そのものが恐ろしいのかを知った。このニュースを見て、人の命の重みを知り、一人でも多くの命を助けたいと思った。そして、人の命を助けるには、もっと詳しい知識が必要だと思い、そのような知識を学べる高校を探した。そこで見つけた舞子高校環境防災科では、災害などの知識を学べるということ以外に多くのボランティアなどにも参加していることを知り、入学したいと思った。

(2) ボランティア活動

東北訪問

1年生の時に、東日本大震災が影響をもたらした人々の気持ちや防災力に興味を持ち、東北訪問を志望した。実際に宮城県を訪れると、映像で見た場所にいるのだということを実感した。東北訪問で特に印象に残ったことは、大川小学校に訪問したことだ。大川小学校は、震災当時の状態をそのまま残しており、震災の怖さを肌で感じた。大川小学校は地震発生後、教師の判断で50分間校庭にとどまったことにより、84人もの多くの命が失われた。私はこの50分間で、命が救われる方法はないのかと考えた。しかし、小学生である子どもたちは、教師の判断を待つことしかできないと思った。そうすると、教師の判断がとても重要だということに気が付いた。教師だけではなく、働く人々や大人の判断で簡単に命が奪われてしまうのだということを知った。津波で亡くなった方々の親族のお話や、その経験を小さい頃で覚えていない時期に体験した高校生の防災の形など、様々なお話を聞き整理するのにとても時間がかかったが、防災の力や、町における震災のとらえ方など、詳しいことを学んだ。そのような体験から、次世代に生きる私は、過去に起きた災害をもう一度起こしてはならないという思いが強くなった。

石川県被災地支援ボランティア

令和6年1月1日に能登半島地震が起こった。この地震に強い衝撃を受けた私は、被災地支援ボランティアに参加することにした。その時は、発災から2か月ほどが経っていた。実際に参加して現地に行くと、半壊の一軒家が多くあり、全壊の一軒家も数件あった。私たちが、ボランティア活動をさせてもらった一軒家は、一部損壊の一軒家だった。一部損壊であっても、家の中の家具が散乱して使えなくなった災害廃棄物になってしまうものが多くあった。そのような町の様子を見て、防災の大切さを感じた。町全体が災害から命を守ろうという気持ちがなければ、町も命も守ることはできないのだと感じた。一瞬で人の命などすぐに奪われてしまうのだということ、実際に感じることもできた。人と人が助け合って一つの復旧活動に向き合うことで、地域との関わりを繋いでいくのだということボランティア活動での、助け合いを通して知ることができた。現地の方が「もっと防災をしていけば」とおっしゃっていた。そのことから、防災の重要性を改めて考えるきっかけになった。それだけではなく、この経験を伝えていきたいことや、この活動を終わらせてはいけないと思い、これからも継続してこのボランティア活動を行っていかねばならないと考えた。私が地震を経験したときには、自ら行動して人の命を助けに行きたいと思ったし、寄り添いや、人とのかかわり、関係を作ることが大切だと思う。

出前授業

1年時、2年時と出前授業に参加させてもらった。自分たちで授業内容を練り、その授業を行うのはとても大変だった。一番印象に残っている出前授業は、神陵台中学校の生徒を対象とした出前授業で、準備をする段階で、一番伝えたいポイントをうまく伝えるにはどう言葉で表せればよいのかに苦戦した。考える時間を作ったり、パワーポイントの字体を大きくしてみたり、色を変えてみたりなどの工夫をした。一つの授業をするためにこれだけの時間を費やさないと授業ができないのだということを肌で感じた。そして、いざ中学生を目の前にすると、予定通り授業の内容を言葉にして伝えることに苦戦した。何かを伝えることの難しさを感じた。しかし、高校生の中で誰かにもものを伝えるということができたのはとてもいい経験をしたと思った。

この経験は人とのコミュニケーションや災害時の避難所での呼びかけなど、たくさんのことに活用ができると思った。

募金活動

トルコ・シリア地震の募金活動に参加した。三宮駅前の大道で行ったが、通る人のほとんどが呼びかけを聞いてくれて、少しの気持ちでもお金を入려くださる方々が多くいた。その行動から、人の温もりを感じた。人の温もりが被災地の人々に伝わることの大切さを人々の行動で知ることができた。また、令和6年能登半島地震の募金活動も行った。垂水駅付近で活動を行い、地域のやさしさを知ることができた。募金活動は地域の温もりを感じることができるし、地震で苦しんでいる方々に私自身も勇気を与えようと頑張ることができた。募金活動に参加することで、被災者の支援や復興に貢献できると思う。貢献することの関係があるという地域性も知ることができた。地域性を知るとは、災害が起こった時に安否確認をすることにもつながっているし、人とのコミュニケーションを作るための大切なつながりだと思った。

募金活動を通して、災害をみんなで乗り越えようとする前向きな気持ちを感じることができたし、協力する人々はとても頑丈な絆でつながっているのだということを知ることができた。

2 将来の夢

私の将来の夢は救急救命士になることである。この職業に就きたいと思ったきっかけは震災ニュースの特集を見たとき、命がこんなにも簡単に奪われてしまうのかと感じたことにある。この命をどうにかして助けたいと思ったことが初めての将来の夢だった。それまでは、なりたい職業などがなく、スポーツ系の職に就ければよいくらいに思っていた。でも、このきっかけで防災の立場に関わりたと思ったし、災害が起こった時の公助の部分で関わりたいと思った。そのぶん、高校生活では特に環境防災科目には力を入れて取り組んだ。学んでいく中で、防災という言葉がたくさん出てきた。私になりたい救急救命士はどんな防災を行っているのだろうと考えたことがあった。

学びの中で、避難訓練を行うことも消防士がかかわっていることを知った。でも救急救命士は、避難訓練にはあまり参加できないということが現状だ。そこで、人の命と一番身近にかかわっているのは、救急救命士なので、命の大切さ伝えるべきだと感じた。そのような課題を克服し、これからに繋げていく、救急救命士になりたいと思っている。そして、救急救命士は防災に関わり、命を少しでも救うために行っているのだと思った。このような命についてもっと考え、命を少しでも助けるために努力する救急救命士になりたい。

3 祖父母の話

(1) 阪神・淡路大震災における祖母の体験

祖母は当時、神戸市垂水区に住んでいた。地震発生時は、娘（私の母）が風邪を引いており、看病するためにリビングで寝ていた。すると恐ろしい音がして、急に揺れ始めた。舞子坂は地盤が強かった為、揺れの大きさは他の場所より小さかった。しかし、今まで経験したことのない揺れに、すぐに娘の上に覆いかぶさり身を守った。揺れが少し収まってから、三人姉妹だったが、看病していた母以外の娘たちの安否を確認するために、2階に上っていった。娘たちは二段ベッドで寝ているので、もし倒れていたらなどの最悪の状況も考えながら恐る恐る上っていったことを鮮明に覚えている。倒れてはいなかったのが安心はしたが、その時の状況は今でも忘れない。家具などはほとんど動いておらず、テレビが少しずれているだけだった。一安心してテレビをつけると、長田が燃えているのを見た。この焼き果てた町を見て、ここで何もしないわけにはいかないとはい、何日か経ってから避難所運営のボランティア活動を行うために、

西代中学校まで行った。そこで、うどんの炊き出しを行い、いろんな人の顔を見た。悲しそうな顔をしている人であったり、元気そうにはしゃいでいる子どもであったり、いろいろな人がいたが、みなが炊き出しをもらうときに感謝の気持ちを伝えてくれた。そのたびに胸が苦しくなり、自分ができることを必死にしようと何度も誓った。そして、ボランティア活動に多く参加するようになった。そこからいろいろな人のありがたみを知ることができた。地域性を理解することもできたし、その経験を活かして地域の小学校の祭りで屋台を広げて、地域に貢献したりするようになった。この地震のせいで、どれだけの人が夢と希望を失われたかは数えきれないから、絶対にこの経験は忘れてはいけないと語っていた。

（２）祖父の話

祖父は当時、連休明けであったため、いつもより早く起きて出勤の支度をしているときに地震に遭った。大きな音を立ててから、経験したことのない揺れが起こった。神戸は地震が少ない地域だったが、年末から年始にかけて、震度１から２程度の地震が何回かあった。揺れが収まってから、家族の安否を確認した。会社は西宮（バスが高速道路から落ちかけていた場所から徒歩３分程度）にあり、その会社に向かうことになった。車ではいくことができないと判断し、友人にバイクを借りて出発した。須磨を過ぎてから長田区、兵庫区、灘区、東灘区、芦屋市、西宮市といつも見慣れている景色があまりにも違いすぎる状況を見て体が震えた。特に東灘区では、阪神高速道路が横断しているところの真横を通り愕然とした。会社は無事だったが中においてある家具やオフィス用品などが散乱しており、もし自分が会社にいたときに地震が起こっていたら、とても危険な状態だったと後から考え恐怖を感じた。そのような経験をしてから数週間がたった後に、小学校などの避難所で炊き出しなどが行われ、ボランティア活動が始まった。たくさんさんのボランティア活動団体にぬくもりを感じた。その団体活動のお手伝いを行い、少しでもみんなが笑顔になれるように自分ができることを精一杯行った。

数週間が過ぎたころに、新聞を読んでいると、長田区の焼け野原の跡にいる小学校４年生くらいの女の子の話があった。バケツを持って何かを探しているのが新聞記者が聞くと「お母さんのお骨を探している」という内容のものだった。その記事に涙が止まらなかったことを鮮明に覚えている。そのほかにも、阪神・淡路大震災の特集の新聞をたくさん読んだ。何年経っても、あの経験を思い出して夢に出てくる。30年を迎えようとしても、恐怖を感じることもある。しかし、乗り越えないと次の対策はできないと感じ、何度も壁を乗り越えてきている。このような経験をしてから、震災で人のやさしさやつながりを痛感した。そして、この経験を次の災害へ備えていかなければならないと思っている。

（３）祖父母の話を聞いて

私は、震災から影響する記憶は生涯残るのだということを感じた。私がもし同じ立場に置かれたときに、祖母のようにボランティア活動を行おうとする勇気が出るのかということも答えられないと思う。それくらい勇気を持って行動した祖母を尊敬した。祖父も余震が起こる可能性を感じながら、会社に向かうという決断をしたことにとっても勇気を感じた。震災を経験していない私が、このような感情になるということは祖父母の行動力は大きいのだと感じた。祖父母のお話の中で、恐怖を感じたという言葉が何度も出てきた。震災の恐怖はまだ経験していないが、どれだけ恐ろしいもので、命を簡単に奪ってしまうものだという事はあらためて痛感した。そして、この経験をした人々は年々少なくなっているということも切実に感じた。

今回のインタビューからどのような状況においても自分の命は自分で守り、生き抜いていく力がとても大切だということを感じた。命の重みを勉強している私にとっては、当たり前なことだと思ったこともあったが、この根の部分の気持ちは忘れてはいけないのだと思う。南海トラフ巨大地震は必ず来ると言われているので、この災害を経験した方のお話を大切にすべきだと感じた。授業で行ってくださる講義も、インタビューで聞いたお話も、少しずつ理解してこれからに備えていくことが大切だと思う。

おわりに

「語り継ぐ」を執筆することで、防災に取り組み生き抜いていくことの大切さを感じた。たくさんの人からお話を聞き、自分の命は自分で守るということを教えてもらった。自分の命は自分で守ることはとても大切なことなのだが、今までの自分はそこに重要視はしていなかった。しかし、そのような部分を重視しなければ、南海トラフ巨大地震をはじめとした大地震により、過去の災害を活かせず町は一瞬にして壊れてしまうと改めて思った。防災を行うことや災害の恐ろしさに触れることは、学ぶ機会がなければ多くはないだろう。そのような機会を作るのは次世代に生きる私たちなのではないかと思う。そして、そのよ

うなことを伝えなければ命は簡単に奪われてしまうことをこれからも心に留めておく。また、防災をするだけでは災害を乗り越えることができないと思っている。地域の方とのコミュニケーションを欠かさないことや、避難所に行ったときの人々との付き合いなども作っていかなければならないと思っている。

この3年間で学んだ知識や、防災について考えることを忘れない。命の重みを感じるだけではいけないし、自分の命を守るだけでは、他の命を守ることができないと思う。防災の力は、人を守る力と防災を進化させる力があると執筆したが、この考えを広めていきたいと考える。人を守る力は、自分の命を守る防災の力でもあるし、他者を守る力でもある。防災を進化させる力は、これからの経験と共に防災の力も大きく伸ばしていくべきだと考える。これから生きる私たちが、蓄積した知識を活かして今後生き抜いていく力を語り継いで行きたい。そして、救急救命士になったら、今までにはできなかった防災を幅広い人々に伝えていき、一人でも多くの命を助けるような気持ちを持って歩んでいきたい。

未来へつなぐ防災

神田 篤樹

はじめに

日本では多くの災害が発生している。私は環境防災科に入学して、たくさんの方から過去の災害について教えていただいた。教えていただいたことは、大きく分けて2つある。1つ目は過去の災害から得た復旧、復興、防災、減災についての知識、対策。2つ目は災害を経験した人の複雑な心境についてである。私は多くの方から教えていただいたことを、次世代の震災を経験していない人に、余すことなく伝えていくとともに、私が考える「未来に必要な防災」のあり方を語り継いでいく。そして、この災害が多発する日本で、一人でも多くの人が自分の命を自分で守り、生きていくことができる世界になることを願って、私は「語り継ぐ」を執筆する。

1 阪神・淡路大震災

(1) 父の体験

父は震災当時、神戸市中央区の生田町に住んでおり、現在の私たちと同じ高校3年生、受験生であった。

午前5時46分に地震が発生。父は最初地震だとわからず、誰かに家を揺らされているようだと感じた。揺れが収まった後、最初に父は「今日学校に行かなくていいや」という感想が出た。その後、友達と合流。友達から「ビル倒れているよ」という言葉を聞き、興味心からトアロードに向かい、倒壊しているビルを目撃した。ビルの倒壊を目撃し、初めて地震の規模の大きさを理解した。午後、まず父は伯父と一緒に三宮センター街に向かった。向かったことについて父は、今考えるととても怖いと感じており、当時の父には崩壊しそうな建物に近づくことが危険という認識がなかったと語った。三宮センター街はアーケードがバキバキに割れ、そごう百貨店は真二つに割れていた。次に、友達が多く住んでいた二宮商店街に向かった。二宮商店街は火事こそなかったものの、とてもガス臭かった。後日、父は原付でメリケンパークへ向かった。父はよくメリケンパークで遊んでいたのも、見慣れた場所であった。メリケンパークは液状化現象が多く発生しており、車が水面にぷかぷか浮いていたのがとても衝撃的だったそうだ。父は現在でもメリケンパークのメモリアルパークには一人で行こうと思わず、モニュメントを見ると当時の光景がフラッシュバックして思い出されると語った。

父の家は半壊してしまったが、電気は当日に、水道は2月には復旧し、普段とあまり変わらない生活を送ることができた。

(2) 父が現在感じること・父の会社の防災体制

父は現在の神戸の町を見て、災害が起きてもしつかりとした街になったと語る。メリケンパークの面影をみて震災があったことを思い出すが、普段の町からは震災があったことを思い出せないほどに神戸は復興した。

父は現在、高速道路のサービスエリアで働いている。父の会社では施設内に避難場所を設定して避難訓練、消火訓練を行っている。消火器、排煙装置、防火扉を設置し、従業員の防火対策の意識付けを行っている。ここまで対策を行っているのは阪神・淡路大震災があったからだと言った。

(3) 父の話を聞いて

父は震災の記憶を語り始める前に「今でもはっきり鮮明に覚えている」と言った。私はこの17年間で今でもはっきり鮮明に覚えている記憶は一つもない。震災の思い出は、多くの人の記憶に刻み込まれた強烈な記憶なのだと感じた。父から「メリケンパークには一人で行きたくない」という言葉を聞いたとき、私は震災を経験していないのでメモリアルパークを見ても苦しい思いはしないが、震災を経験した人にとってメモリアルパークは、震災を思い出し、辛く苦しい記憶を思い起こさせる意味を持つのだと感じた。震災発生から30年が経とうとしている今でも震災が一人一人に与えた辛い記憶はまだ消えておらず、震災遺構をメモリアルパークなどとして残すことの課題一つだと考える。

2 環境防災科

(1) 入学した理由

私が環境防災科を志願したのは、「社会」について高校で専門的に学びたいと考えたためである。私は中学3年生の2学期まで志望校が明確に決まらなかった。それでも私には明確な目標があった。それは特色のある学科で、社会について学びたいというものだ。社会科の授業や、校舎を出て社会を間近に感じる校外学習が大好きだった。そこで当時の家庭教師の先生から教えてもらったのが環境防災科だった。1年間のカリキュラムの内の3分の1が専門科目であり、多くの校外学習やボランティア活動が行えると知った。私は自分の目で今の社会を間近に見て、自分の知識を広げていきたいと考え、環境防災科への入学を志した。中学生の頃の私は、防災について「大事なことだ」という認識はあったが、実際に地域の避難訓練に参加したり、自分の家で防災バッグを備えたりするなどの行動に移すことはなかった。

(2) 授業から学んだこと

環境防災科に入学してから、私は、普通科ではできない特別な授業、体験を行ってきた。特別な授業の一つに、社会の様々な分野で活躍されている沢山の外部講師の方からの講義がある。講義の内容については専門的な知識を含んだものが多くあり、中には理解するのが難しいものが多くあった。その時、私が理解することを助けてくれたのはレポートの存在である。講義を受けたのち課題として出されるレポートを通して私は2つのことに気づいた。1つは講義の内容のメモをみて文章に文字起こしすることで、難しかった内容がすんなりと理解することができること。もう1つは講義の内容から疑問に思ったところを問題提起、仮説、論証と自分で考え、詳しく調べることで、専門分野についてさらに学びを深めることができることである。私はこの外部講師の授業、レポートからたくさんの知識をつけることができたおかげで、ボランティア活動や防災ジュニアリーダー、震災メモリアル行事でたくさんの人に微力ながらも防災について伝えることができたと感じる。

(3) ボランティア活動から学んだこと

私は数多くのボランティア活動に参加させていただき、たくさんの学びを得た。中には、大きな災害を経験していない若い世代の子どもたちと交流する機会がある。その時に防災を分かりやすく、誰もが興味を持てる伝え方を学んだ。その伝え方の一つが、クイズやダンスなどから防災を楽しく学ぶということである。私はクイズの制作や、ダンスの習得に取り組んだ。「防災楽習」とはNPO ひまわりの夢企画の代表である荒井勲様の言葉だ。クイズやダンスは作って満足、踊りきって満足ではなく、本番までに何度もリハーサルを行い、完璧にして活動に参加する必要がある。私は何度も準備を行う中で失敗を繰り返してきた。時には準備が行き詰まって苦勞を感じたことがあったけれど、当日に来てくれる方々が笑顔で体験を楽しんでくださり、私は普段では味わえない達成感や幸福を得ることができた。私はボランティア活動が終わった後には必ず「本当にボランティア活動に参加してよかった」と感じた。

(4) 兵庫県防災ジュニアリーダー・震災メモリアル行事

私はこの3年間、防災ジュニアリーダーとして、たくさんの活動をさせていただいた。特に記憶に残っている活動は、宮城県訪問とジュニアリーダー活動報告会だ。宮城県訪問では2泊3日で宮城県内の震災遺構や被災したまちを訪れたり、東日本大震災を経験された方々のお話を聞かせていただいたりした。私はあおい地区での活動が記憶に残っている。あおい地区は東日本大震災で津波の影響を受けた東松島市大曲地区の方々が集団移転をしてできたまちである。「日本一のまち」を目指してまちづくりを行う地区会長の小野竹一様と、あおい地区に暮らす住民の方からお話を伺った。あおい地区は、本当に綺麗で活気のあるまちであった。まちを歩きながら小野竹一様がまちづくりの工夫を教えてください、なぜあおい地区が「日本一のまち」と呼ばれるのか理解することができた。あおい地区の道幅は広く、住民のそれぞれの要望に合わせた家が立ち並んでいる。このまちなみは長田の区画整理地区、まちなみ誘導型地区と似ていて、快適なまちにはやはり大きな道路が必要だと感じた。まちを歩いていると住民の方が温かい声をかけてくださり、温かみのあるまちだと感じた。あおい地区で公園の草刈りのボランティアをさせていただいた。活動を行う中で、あおい地区は、訪れるすべての人がまちづくりに関わっているまちだと感じた。あおい地区のまちの作り方は、私が将来地域の活性化に携わりたい私にとって本当に参考になると感じた。

ジュニアリーダー報告会・震災メモリアル行事では宮城県訪問の活動を報告する機会を頂いた。私は

この報告会で、パワーポイントの作成を担当した。講師の方の感情、東日本大震災から得た知識、経験を、多くの人に決まりのある時間で分かりやすく、正確に伝えることの難しさをとても痛感した。何度も先生方に見てもらい、パワーポイントのアドバイスや発表の良かった点、悪かった点を教えていただいた。本番では、リハーサル通りに分かりやすい発表を行うことができた。私がこの報告活動から得たことは、限られた時間で自分の伝えたいことを伝える能力である。今までの発表はパワーポイント頼りですべてのことを伝えようとして早口になってしまうこともあったけれど、要点をまとめて何度も練習することで、自信をもって話すことができるようになった。この経験を今後の発表の機会に活かしていきたい。

3 私の未来

(1) 将来の夢

私は将来、観光産業に関わる仕事に就きたいと考えている。私は、日本の各地へ旅行し、観光をしてきたが、日本各地を訪れて感じたことは、その地域が観光地としてメジャーかマイナーかの差はあれども、どの地域も素晴らしい魅力を持っているということである。そこで私は日本各地の魅力を伝え、地域活性化の力になりたい。地域を活性化するためには、地域社会の弱さと向き合い、住民の安全を確保することが重要になってくる。そのため私は環境防災科で学んだ知識をすべて活用して、地域の防災に全力で携わっていく。

(2) 観光と防災

観光活動を行う上で、防災活動は外せない。観光客の多くは、遠く県外や海外から訪れている。そのような人たちが大災害に見舞われたとき、見ず知らずの土地で長期間滞在することになる。いつ帰れるのかわからない不安、方言や言語の違いによる違和感から身にかかるストレスはとても大きくなるだろう。大震災による帰宅困難者のストレスを軽減させるために、日本の交通インフラ、インターネットインフラをもっと快適で素早く、安全にすることが必要だと考える。日本全体が新幹線や高速道路、海上、航空航路で結ばれていくことで救援物資や人の流れを円滑にすることで、帰宅困難者がより安全で快適な生活が送れる。そのようになるためには多くの人、企業、地域、国が連携した防災事業を行う必要があると考える。

(3) 地域と防災

私は2年生の時から多聞東地域(神戸市垂水区)リーダーとして、地域の会議、避難訓練、イベントに参加させていただいている。その中でとても記憶に残っているのは総合防災訓練である。避難訓練は、舞子高等学校の他に、消防署や小学校、青少年育成協議会などの地域にある団体が多く参加していた。地域の防災には多くの団体との連携が大切だと感じた。そして多くの団体が防災を広めようとする意志が大切になるとも感じた。

おわりに

外部講師の方の講義やボランティア活動で多くの人と交流をさせていただいて、私はまだ防災の世界に足を踏み入れたばかりだと感じた。生きていくためにはどの職業であっても人の命を守るための選択をしなければならないときがある。その選択が失敗に繋がらないために、防災について深く考え学んでいく必要がある。私はこの3年間で、果てしなく防災を追求し続け、進化させていくことが大切だと学んだ。これからの将来、私は誰もが幸せを奪われず、幸せに生きていける社会を創っていきたい。そのために私はこれからも防災を学び続け、絶対に安心安全で幸せに過ごすことができる世界を作っていくと、ここに誓う。

あの日から 30 年

喜田 千尋

はじめに

発災から 30 年。「30 年」という時間が早いのか遅いのか私にはわからない。大きな災害を経験していない。あの日の衝撃や悲しみは直接体験した人々にしかわからない。しかし、30 年前に起きた阪神・淡路大震災の教訓は伝えることができる。私は、震災を知らない私たちの世代に語り継ぎたい。自然災害がなくなることはない。次にくる災害に備え、知識を増やし、命を落とす人がいなくなるように私が、学んだことや経験を活かしたい。

1 家族の体験

(1) 母の体験

母は当時京都で一人暮らしをする大学生だった。しかし発生時は実家に帰省していた。17 日の夕方ごろに戻る予定だった。地震が発生した。母はその 1 週間後に後期のテストがあったため帰らないといけない。京都は大きな被害はなく後期のテストは予定通り行われることがわかった。母はこのような状態でも大学に行くべきか、残るべきかと究極の選択を迫られた。選択したのは大学だった。大学を選んだのには祖母の存在が大きかった。テストがあるなら行きなさいという言葉で大学を選択。交通手段がなく困っていたが私の祖父が車を出し何時間もかけて送ってくれた。家族の温かみを感じた。

母の弟も大学受験だった。勉強をするために母の家にきて最後まで勉強をした。しんどい状況でも子どもの背中を押してくれる両親はかっこよかったと当時感じた。

(2) 祖父・祖母の体験

① 祖父

祖父は当時 NTT 西日本に勤めていた。仕事内容は主に電話工事だった。地震が発生してすぐに他の会社は地下にあるガス管や水道管などがたくさん埋まっているところの工事を行った。NTT 西日本の電話機械も地下に埋めていた。機械が傷ついて事故が起きないように、機械があるところを 1 ヶ所ずつまわり、他の会社の工事に立ち会った。他の会社の工事が終わるまで毎日通っていた。はじめの一日二日は車で移動が出来たが、どんどん道が通れなくなったため会社が準備したバイクで通っていた。

私の曾祖父の家は芦屋市内にあり阪神・淡路大震災で家や店が全壊した。曾祖母と曾祖父は 2 人で暮らしていた。曾祖父は家の隣で居酒屋を営んでいたため生活も仕事もなくなった。命が助かったことが奇跡だった。2 人は前にある公園で一日をブルーシートで囲って過ごした。次の日に曾祖父は近くの学校に避難し、曾祖母は娘の家に避難した。その後 2 人は仮設住宅に暮らすことになった。店もなくなり不安が多かったけど 2 人で仲良く過ごしていた。仮設住宅から元の場所に仮の家が建った。祖父は本当の家を建ててあげたいと思った。しかしそれは叶わず曾祖父、曾祖母は逝去した。祖父は最後自分の家を建ててあげたかったと少し後悔がある。

② 祖母

発生直後、家の中はぐしゃぐしゃで驚きを隠せなかった。出口を確保し、外の状況を確認し、近所の方の安否確認をしないといけないのに体が動かなかった。余震はずっと続いている。その度に怖くて生きた心地がしなかった。その地域は電気の回復は早く、テレビでニュースを見ることができた。しかし、テレビを見ると余計に不安にさせられた番組ばかりだった。離れている親戚や友達の安否を早く知りたい。ずっと不安と戦わないといけない毎日だった。生活も突然不自由になった。電気が通っていたため食事は在庫の分で食べることができた。小学校に給水車が来てくれた。また近所の方が井戸水の蛇口を貸してください顔や頭を洗うことができた。この災害が起きたことでお互いに助け合い、譲り合う連帯意識が生み出されたのだと思い、すばらしいことだと感じた。この地震で家の中には必要なものだけ置いて、余分なものがない質素な生活にしようと思った。食材や日用品を日ごろから確保することが大事だと祖母は言っていた。

(3) 家族の体験を聞いて

私は大きな地震を経験したことがない。阪神・淡路大震災のことを環境防災科に入って勉強したが、

やはり一番胸にささるものは家族や親せき、身近な人が体験した話をしてくれるものだ。母の通っている大学は被害がなく、いつも通り生活を送っている人がいることを聞いたが、災害国とも言われる日本でも、災害が起こっても多くの人は他人事のように災害を見てしまうのかもしれない。でも、災害はいつでもどこで来るかわからないものだ。運が悪かったと思ってもおかしくない。だからその運に負けないぐらいの防災対策、知識が必要だと母の話を聞いて感じた。

祖父が会社のために毎日働いていたことにとっても尊敬した。二次災害を防ぐには人の努力があることを、改めて思わされた話だった。曾祖父、祖母の家は全壊。家のない生活など想像できない。仕事もなくなると、私は不安が大きくなっていつも通りに過ごすことは難しいと思ってしまう。けれども曾祖父、祖母は楽しく暮らしていた。どんなにしんどくても家族や親せきなど気楽に相談できる人は大切だと思った。

祖母は生きた心地がしないと語った。当時は安否確認もすぐにできない状況。ずっと不安との闘い。私と同じ状況ならどのような気持ちになるだろうか。現在はスマートフォンや SNS もあるため、安否が確認できたり元気になる動画やメッセージを見られたりするため、祖母のような感情はあまり出てこないのではないかと感じた。

2 環境防災科に入って

(1) きっかけ

私が環境防災科に入ったきっかけは中学3年生のとき、環境防災科の先輩が中学校に講義にきてくれたことだ。小学生のときから阪神・淡路大震災の概要や経験は教えてもらっていた。小学校では一日使って体育館にろうそくをつけ、阪神・淡路大震災の集いの日が毎年あった。しかし、環境防災科の先輩は今後の災害に備えて対策を考えることをたくさん教えてくれた。南海トラフ巨大地震は私たちが生きている間に起きる。そこで避難した私たちができることはなにか考える時間があつた。私は何ができるのかわからなく、何も書けなかった。環境防災科の先輩は「幼児の相手、高齢者の話を聞く、地域の人々の安否を確認できる」と胸を張って言っていたのが印象的だった。また自分だけの防災バックも持っていて自分の命を本当に守ろうとしている先輩はかっこよく、災害時に避難所で役に立つことができるという気持ちがあると言っていてとてもかっこよかった。

(2) ボランティア活動

① 令和6年能登半島地震支援募金活動

現在でも復旧・復興が続いている能登半島。私は発生当時祖父母の家で寝ていた。その時少し揺れたのが分かった。すぐに目が覚めテレビを見るとすべてのチャンネルが津波の注意を呼び掛けている場面だった。本当に津波が押し寄せているところを見て衝撃だった。次の日の新聞は、一面能登半島地震で埋め尽くされていた。新聞を毎日読み、私ができることを探した。被災地は道路にひび割れができ道が狭く、人命救助が最優先でボランティアが入る隙など一切ない。そこで私たちは、募金活動をすることにした。いつもなら先輩などが募金活動をしているのを横で見て手伝っただけだった。募金活動を一から考えて実行することは初めてだった。まず人に伝えるために私たちが石川県の特徴や現在の状況などしっかり把握することからだった。調べていくと知らないことだらけで、たくさんの方々からお金をもらうことは、私がどれだけ信頼されているか、そのためにも知識があることも大切だと感じた。次に大変だったことはどこにお金を届けるかを決めることだった。しかし私たちが2年間学んだ知識が発揮できたときだった。環境防災科で学んだ知識で被害が多いところはたくさん物資や資金が送られるが、田舎の人口が少ない地域に支援が届かない事態が起こっている。それは講義をしてくださった人が語ってくれたことを覚えている。そのため私たちは資金が足りないところを中心に届くよう考えた。募金活動をする中でありがたうや募金するところなどを探していたと言ってもらい、私たちの「届けたい」という思いがたくさんの人に伝えられたと感じた瞬間だった。

② 視覚特別支援学校との交流

私が3年間継続して行った活動だ。私は「交流」という言葉を大切にしたいと思った。特別支援学校との交流は、1年生の時はまだコロナ禍だったためオンラインで始まった。初めての活動だったため、私は先輩の話や特別支援学校の生徒の話を聞くことに必死で自分から話した記憶はあまりない。交流が終わった後、先輩から「交流だから楽しめばいい、自分の意見を気楽に話せばいい」とアドバイスをもらい、私は交流に積極的に参加することを決めた。特別支援学校ということにもこだわって活動もした。特別支

援学校は障害がある子どもたちが通う学校である。交流をしていく中で一緒に学ぶ機会があった。私たちより元気に動き話しかけてくれる姿は障害者という言葉に気を遣いすぎている気がした。ルールやボールの特徴などはあるがスポーツはやっていると障害など関係ない。いつも通りの体育をしている感覚だった。防災について一緒に考える時間があった。避難所で困ることはたくさんあると話してくれた。階段はもちろん登れない、トイレなども一人では難しい。私たちより特別支援学校の生徒は避難所で大変なことや悲しみを感じることは多い。そのような人が私の地域でもいるはずだ。障害のある方がやってもらいたいこと、自分でできることを気軽に話してくださり交流の良さに気が付いた瞬間だった。交流は一方的に話すのではなく共に成長できる環境だ。交流は人と人をつなげてくれる輪だと感じた。

（３）３年間を通して学んだこと

私はこの３年間でたくさんの人と出会い、貴重な経験をさせていただいた。１年生の初めはボランティア活動よりも毎週ある講義に精一杯だった。メモを取り、苦手なパソコンと毎日向き合っていた気がする。そんな大変な毎日だったけれど確実に知識や経験を増やした１年だった。災害時に起こるライフラインの問題や自分の地域で防災対策、公助・自助・共助の役割など様々な視点から学ぶことができた。ボランティア活動も先輩について行きメモをとることが限界だった。２年生になって授業はますます深くなっていき区画整理、法律、建築とそれぞれの分野の中で初めて聞く言葉が多かったけれど、将来自分が家を建てる時や災害で家が全壊してしまったときに役立つ事ばかりで、未来につながるお話だった。２年生になっても１年生のときの知識は重要で、基礎の防災は大切だと改めて思った。部活動も忙しくなったためあまりボランティアに参加できなかったけど、毎学期ある防災教育は力を入れて頑張った。ジュニアリーダーが決めてくれるテーマに沿って環境防災科の生徒が各クラスに出回り、わかりやすく授業をする取り組みだ。私がなぜ防災教育に力を入れたかという、１年生のときジュニアリーダーとして防災教育班に入っていたからだ。その時は先輩の指示でプリントを作り、初めから授業の準備をする大変さを横で見ていた。２年生になってもやろうと思っていたが部活動の方を選んだため防災教育班はやめてそのサポート側にまわった。１年生のときから経験をしていたので自信を持って実践することができて、ジュニアリーダーに入っていてよかったと思った。主体となって動いた２年生の１年間はたくさん怒られ大変だったけど、１年生のときに教えてもらったことを知らない人に教えることができた１年だった。高校生最後の１年は、これまで経験したことをまとめて、自分なりの考えを持ち将来につなげる１年にしたい。

３ 夢と防災

一見、防災と関連していないように思う職業でも被災地でボランティアとして活動できる。私の夢はスポーツ栄養士になることだ。なりたいと思い始めたころは、防災に関係のない職業だと勝手に決めつけていた。スポーツ選手も被災をすることがある。スポーツ選手は毎日のコンディションに合わせて変えるぐらい「食」を大切にしている。被災してもアスリートの体を維持出来るようにサポートしたいと思った。またそのスポーツ選手が食べているご飯を被災している人にも体験してもらい、「食」を通してたくさんの方とコミュニケーションとりたいと思った。災害食を使ったごはんをみんなで作って食に興味をもってもらい、少しでも安心出来る環境を作りたい。スポーツ栄養士としてできることはたくさんある。スポーツ栄養士は管理栄養士としても働くことが出来る。資格をとって管理栄養士としても被災地で活動をしたいと考えている。被災後の生活はストレスもかかり、少しずつ怒りも増える中、食でストレスを感じることの事例が絶えていない。東日本大震災では温かいご飯がとれない、ミルク不足、特別医療品が手に入らない、といった精神的ストレスで食べる意欲さえなくしてしまった人がいたのが現実だった。栄養問題で悩む人も多く発生した。そこから栄養士会は東日本大震災を教訓に２０１２年日本栄養士会災害支援チームを設立した。そのチームは災害発生から７２時間以内に行動できる機動性、大規模災害に対応できる広域性、栄養支援トレーニングによる専門的スキルを持っている。現在でも被災が続いている能登半島地震では要配慮者向け食品の物資運送、避難所巡回等の実践、栄養相談コーナーでの栄養アセスメントと食事提供を実施している。災害が起きたら支援チームに入って活動したいと思った。環境防災科で学んだ知識を活かし、たくさんの方面で頑張りたい。

おわりに

私はこの「語り継ぐ」の執筆を通して、改めて今まで出会った人との関係が無駄にはしていないと思った。けれど、やはり聴いた話を伝えるのが難しい。震災を体験していない人も多い中、私が阪神・

淡路大震災を伝えてもいいのか、理解してくれるのか、私が語っても良いのか。私たちが3年間たくさんの方々の話を聴いて、その話を自分たちだけのものにすると助けたい人の命も助けることはできない。私が生きている間に南海トラフ巨大地震は来る。「対策」とずっと言われているが、どれほどの人が対策しているのだろうか。震災を知らない世代は何を対策すべきなのか。勉強している私たちでも不安はまだある。インターネットが主流となっている世の中で今までに起きたことのない問題も出てくるだろう。自分の命は自分で守ることを語り継ぎたい。

経験を受け継ぐ

小池 陽華

はじめに

過去にはいくつもの大きな災害が発生しているが、それを経験した人は時間が経つにつれて減っていく。過去に起きた災害の状況を知らないまま、また同じような大災害が起きてしまうと、同様の被害、もしくはそれ以上の被害が及ぶこともある。自分一人の力では、二次災害を防ぐことはできないが、日頃から、家具の固定の大切さや落下物の危険性を周りに知らせることはできる。同じ過ちを繰り返さないために、過去に大きな被害をもたらした災害については把握し、地域のコミュニティが大切だとよくいわれるため、日頃から地域の人や家族に挨拶して、関係づくりをしていくことを心がけていきたいと思う。

1 祖父の体験

(1) 自宅とその周辺の様子

当時、電気は早く復旧したが、祖父母が住んでいる地域ではガス漏れがあり、3か月間ガスのない生活を送った。地震直後、家の中は戸棚の中身がでてきたり、大きな水槽のガラスが割れて、中にいた魚が飛び出てきて足元がぐちゃぐちゃになったり、壁にひびが入っていたりした。家自体は造る際に鉄骨を入れてもらっていて、基礎がしっかりしていたため倒壊することもなく被害が少なかった。また、瓦をひとつひとつ留めていたため、2、3個落ちてきたぐらいで済んだ。外に出てみると、新幹線の線路が落ちて運行不可能となっていた。新幹線が通っていた付近の家は、地震により、土の瓦が落ちて、屋根に青色のブルーシートがかけられていた。川の上には橋があるが、鉄筋でできているため、壊れていなかった。

(2) 仕事場の様子

祖父は当時、県庁に勤めていたが、地震が起きてから3日間は仕事に行かなかった。その後、出勤してほしいといわれたのでバイクで須磨まで行った。火事が家の近くで起きている場所はなかったが、移動している間に建物が燃えているのを見た。道は屋根、木、瓦にふさがれて通れる状況ではなかった。電車も動いていなかったため、そこからは歩いて仕事場へと向かった。仕事場の屋上は上がることができなくなっており、建物の西側も崩れて穴が開いていた。建物の中は足の踏み場もないほどぐちゃぐちゃになっていたため、まず、建物内の片付けを行った。

2 祖母の体験

(1) うれしかったこと

地震の発生直後、水道から水が出なかった。その中で農家の人が井戸の水をポンプで出してくれ、地域の人に配っていた。その水は飲むことができないので、浴槽に貯めて洗濯物やトイレに使った。体を洗う水としても使えないため、明石の銭湯に行った。銭湯では、人が一気に湯船に入ると、お湯が冷めてしまうので、人数制限があった。

飲み水は明石市が提供してくれた。今は住宅となっているが、昔は貯水池だったため、地域の人はこちらまで水をもらいに行っていた。貯水池に行く道の途中で、調理したご飯を配っている店が少しあった。祖母はこのような経験を通して「親切にしてもらったことを忘れない」と言っていた。

(2) 実体験

祖母は和室で寝ていた。地震直後、タンスが倒れてきて下敷きとなった。家族にタンスをどけてもらって、部屋から出ることができた。布団を被っていたためか、怪我を負っておらず、命に別状はなかった。

3 話を聞いて

祖父母から震災体験を聞くのは初めてだった。いつも穏やかに優しい声で話してくれるが、この話をしてくれた時は少し真剣そうに、もう記憶が薄くなっているといいながらも、思い出しながら話をしてくれた。祖父母が話してくれた内容には身内が亡くなってしまったというようなことはなかったが、震災を体験しただけでもつらいことだったと思うので、話を安易に忘れることはできないと思った。また、祖母の話のなかにタンスの下敷きになってしまったとあり、実体験を聞いたことでより家具の固定

の大切さを感じた。偶然助かったが、ものが倒れてきて絶対助かるというわけではないので、家具の配置や固定は徹底しようと思った。そして、何かしてもらったら感謝をして忘れないでおこうと思った。日頃から一人で解決できない場合は、誰かの手をどこかで借りると思う。いつ人にお世話になるかわからないが、してもらったことは忘れない。いつでも感謝の心を持ち続けようと思う。

4 環境防災科

私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは、小学生の頃、環境防災科の生徒が学校に来て遊んでくれ、新聞スリッパの作り方を教えてくれたことにある。小学校で地震体験車「ゆれるん」などが体験できる防災訓練が行われた日があった。その日、友達と「ゆれるん」に乗りに行く約束をしていて、小学校に行った。そこでは、消火器の使い方や煙体験などが行われていた。運動場を見て回っているときに環境防災科の生徒が「新聞スリッパを作ってみないか」と声をかけてくれた。当時は防災についてなにも知らず、なぜ新聞スリッパを作るのか、どのように作るのか分かっていなかったため、一から説明をしてくれた。作る工程で分からないことが何度もあったが、「次はこうだよ」とおしゃべりを交えながら優しく作り方を教えてくれ、最終的に新聞スリッパを作ることができた。その日以外にも休みの日に遊びに来てくれ、一緒に遊んだ。その当時は環境防災科といった学科があるのを知っただけだったが、中学生になって進路について考える時間があったとき、ふと環境防災科を思い出した。環境防災科の生徒の新聞紙スリッパの説明は、分かりやすく、会話を交えながら教えてくれたため、防災に興味を湧いた。その経験を通して、私は、相手に伝わりやすく、かつ楽しみながら防災について学んでもらえる方法を学びたいと思った。

(1) 環境防災科で行った活動

私は、神戸市立児童センター（こべっこランド）で行われる防災イベントのボランティアを継続して行ってきた。こべっこランドは神戸駅近くにあったが、今は和田岬駅の近くに移転しており、両方の場所で経験させていただいた。1回目はポリ袋でのポンチョのつくり方を説明し、来てくれたこどもとその親御さんと一緒に作った。言葉で説明するだけでは、作っている最中だと次何をすればいいのか分からなくなる方が多くなってしまったため、画用紙に作り方の説明を書いた。また、一つ一つの工程でポリ袋がどのような形になるのかを分かりやすくするため、一工程ずつのポリ袋の形を作っていた。私は、工程を説明する係だった。参加者のことを考えて凝らした工夫だったが、私も説明がしやすかった。説明をした後、一緒に作る側にまわったが、子どもも親御さんも楽しそうに作っていた。シールを貼ったり、ペンで絵をかくてポンチョをかわいくする時にシールを見せてくれたり、何を描いたか教えてくれたりする子もいた。また、どのように子どもと接すればいいかが準備の時には分からなかったが、自分から話しかけてくれる子どももいれば、話しかけたら楽しそうに返してくれる子どももあり、体験をすることで子どもの接し方を学ぶことができた。2回目は「ラッタッタ呼吸体操」を子どもと一緒に踊った。ラッタッタ呼吸体操は授業で習っていたため、覚えることがすぐにできた。しかし、体操をしながら動きの説明をすることが難しかった。曲を流しながら丁寧に説明しようと思えば、次の動きにいつてしまっ、最後の振付を教えることができなかった。そのため、最初に曲なしで踊るときは丁寧に説明して、曲を流して一緒に踊るときは「手をあげて」「まわって」と簡単に言うだけにした。子どもは、話をきいて覚えるよりかは前で踊っているのを見て、見よう見まねでしていたので、言葉を並べてつらつら話すのではなく、前に立って体を動かしてそれにプラスして話をするほうが伝わりやすいと思った。説明に集中するのではなく、子どもが踊れているか、楽しくしているかを一人一人の表情を見ながらすると、周りの状況を把握しやすく、自分を成長させることができていると思った。また、子どもが楽しめるようにしようとしていたが、ボランティアとして行っている側が楽しいと感じることができたので、誰かを幸せにすると自分も幸せになれるのだと考えさせられた。

(2) 校外学習

環境防災科目の授業の中で記憶に残っているのは長田のまちあるきと灘のフィールドワークだ。それぞれのまちを訪れて、まちごとの雰囲気を実感し、何を大切にしているのかを学ぶことができた。

長田のまちは、公共施設を整備・改善し、土地の区画を整え、宅地の利用の増進を図る「土地区画整理事業」と、都市開発法に基づき、老朽木造建築物が密集している地区で、敷地の統一、不燃化された共同建築物の建築、公園・広場の整備をする「市街地再開発事業」が行われた。区画整理事業の対象に

ならなかった白地地区もあった。市民の手でまちづくりがされた街並み環境整備事業区域では、街並みを大事にしながら暮らしが考えられた。土地が限られる密集市街地で、花や木を植える、道路を整理するなど下町らしさを出すことを大事にされてきた。

灘のまちは、震災から2か月で都市計画を決定し、「市街地再開発事業」と「土地区画整理事業」が行われた。六甲道駅西では、土地区画と地区計画が導入された。地区計画は、地区の特性に応じて、良好な都市環境の整備と保全を図るため、必要な事項を定める地区単位の都市計画だ。今では、子育てに良いまちとなっており、若い世代が増えてきている。

灘区役所は免震建築物と記されていた。免震と記されている建物を見たことがなかったので、珍しいと思った。耐震構造であると外に記されていることで、歩いているときに確認することができ、災害が起こったときには、他の建物より安心して避難することができると思う。

都賀川を訪れて、直線と曲線の川どちらが安全なのかを知ることができた。都賀川は直線だ。曲線の川の場合、川の水が増えてしまったときに、川が曲がっているところに水が溜まってしまい、川の水が溢れてしまう。直線の方が私たちの身の安全を確保することができるのではないかと思った。都賀川には、暗渠や回転灯があった。日頃から家の周りはコンクリートなのか、砂なのかを見て、雨水が地面にしみこむことができるのかを考えながら歩こうと思った。回転灯は、川の水が増加した際にライトがついて回る。回転灯が回っているときは、川から離れて身の安全を守ろうと思った。

長田のまちと灘のまちの共通点は、行政に全てを任せるのではなく、住民が声を上げ、行政と住民の双方がまちの活性化を図っていることだ。長田のまちは、まちづくり協議会で、区画整理事業勉強会や夏祭り、餅つき大会を行っている。住民が、新しいものを作るのではなく、住民の繋がりや、生活文化を大切にしている。灘のまちは、行政主導の復興事業が行われていたが、住民がいないまちづくりは意味がない、と住民と行政が話し合い、特色あるまちづくりが進められた。

長田のまちと灘のまちで違うところは、建物だ。長田のまちは、低家賃住宅で高齢者が多く、長屋やアパートが密集していた。一方で灘のまちは、多様なタイプの住宅を大量供給している。

2つのまちを比べてみて、ハード面で違いがあったとしても、ソフト面はどちらも自分たちのまちを思う気持ちは同じだと思った。

5 将来の夢と防災の結びつき

私の将来の夢は歯科衛生士になることだ。小さい頃、歯が弱く何度も歯医者に通っていた。歯を見られることが怖く抵抗していたところ、歯科衛生士の方が手を繋いでくれたり、声をかけてくれたりと優しくしてくれていたそう。そのことを中学生になって親から聞き、歯科衛生士という職業に憧れを抱いた。また、歯科衛生士は医師が患者の歯を見る前に歯の掃除をし、歯磨きの仕方、どの歯磨き粉を使うのかがいいのかを患者に教え、歯の健康を保つための方法を学び、知識をつけることで自分の歯の予防もでき、歯を強くできるのではないかと思いこの職業に就きたいと思うようになった。

そして大きなきっかけは、環境防災科の入学前に歯科衛生士について調べたことにある。調べた内容の中には自分が思っているような基本的な仕事内容以外に、被災地に行き、被災者の口腔ケアをするということがあった。病院で仕事をするのが当たり前で、防災と関わりがあるとは思ってもしなかった。実際に災害歯科保健活動の研修を受けた歯科衛生士が災害歯科保健歯科衛生士の登録をし、支援活動を行っている。令和6年能登半島地震の際にも歯科衛生士が被災地で医療活動・保健活動を行っていた。被災地では最初、ケガの治療が優先で歯のことが後回しになってくる。また、被災地では水を確保することが難しく、歯ブラシを持って避難所に行く人も少なく、歯磨きをする機会が少ない。歯磨きをしないことで、感染症のリスクが上がる。高齢者は誤嚥性肺炎になりやすく、支援物資には菓子パンやお菓子といったものが多いが、子どもが泣くからといって仕上げの歯磨きをしないこともある。そうすると歯の汚れがたまって虫歯になってしまう。このように年齢によって起こる病気の原因が違っており、治療方法、防止方法も様々だ。歯科衛生士になって年齢ごとのなりうる病気や簡単かつ早く綺麗に磨ける方法の勉強と実践を行い、歯磨きができない状況で口腔内を綺麗に保つことが難しいからと諦めてしまう人を減らしたいと思う。

おわりに

執筆をして、今まで聞かせていただいた話を忘れてしまっただけとはいけないと思った。私は、震災を経験していないため、自分が話をするより経験をした方のお話を聞くことが多かった。語り部が心苦しくなりながら話してくれた内容を、そこで終わらせるのではなく、聞いた話を家族や友達に自分の言葉で伝

えようと思った。また、感謝を忘れずに過ごしていきたい。ボランティアをするにしても講義をしていただくのにしても相手がいないと成立しない。環境防災科でボランティアはさせていただいているという気持ちで行動することが大切だと教わった。自分一人で行動を起こして解決することは難しい。他者がいるほうが多くのアイデアが出てきて、関係を広げることができる。一人でできないと思ったら他者に協力を求めて、助けてもらったら感謝の心を持ち、相手にその気持ちを伝えていきたいと思う。そして出会いを大切にし、そこで終わらせるのではなく、その後も関係を築いていける人になりたい。

語り継ぐ

小村 洸星

はじめに

阪神・淡路大震災から 30 年になり、町は綺麗に整備され震災の面影もなくなっている。今では私たちのような震災を体験していない人たちも多く増え、その時の様子を聞いたり、写真や映像を見たりすることでしか知ることができない状態だ。震災については被害に遭った地域でしかテレビでは流れなくなり、どんどんと風化していくのが目に見えてわかる。しかし 2024 年 1 月には令和 6 年能登半島地震が起こり、神戸市内でも震度 3 の揺れを記録した。また南海トラフ巨大地震は 30 年以内に 80% の確率（2025 年 1 月 15 日発表）で起こるとされている。いつ起こるかわからない災害にどう備えるのか考え、伝えていく責任が私にはあると思う。

1 阪神・淡路大震災での体験談

（1）母の話

母は当時小学 6 年生で、西明石に住んでいた。

1 月 17 日午前 5 時 46 分、寝ていると「ゴー」 という地鳴りとともに下から何かで突き上げられるような大きな揺れで目を覚ました。その後の横揺れで地震だと気づき布団を頭からかぶった。体感で 1 分ほど揺れていたように感じた。二段ベッドの上で眠っていた姉は地震が起こったにもかかわらず、ゆっくりと寝ていた。揺れが収まった後父が来てくれ安心した。父が姉を起こすと「まだ学校行く時間じゃない」と言って、地震という状況が分かっていない状態だった。その後明かりがなかったため太陽が昇るのをベッドで待った。朝になり周りを見ると、食器は散乱して割れ棚に入っていた本は散らかり、テレビや電子レンジは置いていた場所とは全く違うところに落ちており、どのように生活していたのかわからない状態になっていた。家には何の被害もなく生活できる状態だったが、町では窓ガラスが割れたお店やブロック塀が倒れていて、道路にも亀裂が入って、インフラも使えない状態だった。また、長田のほうでは黒い雲がかかっており、かすかに焦げ臭いにおいがした。8 時頃に電気が回復し、テレビをつけると火災や建物が倒壊している様子が広がっていて悲惨な状態となっており、いつも見慣れた神戸が壊滅的な状態だった。震災後すぐに西宮に住んでいる親戚に電話した。発災後すぐにかけたからか電話はつながり、無事を確認することができた。しかしその後はなかなかつながらなかった。水道は早く復旧作業が行われ、2 週間以内には使えるようになった。

（2）父の話

父は当時鹿児島に住んでおり、直接被災はしなかったので被害はなかった。地震の揺れなどなくいつも通り起床して朝ご飯を食べていると、テレビで神戸の映像が映り地震があったことを知った。当時のテレビ映像の中には長田の火災や阪神高速が倒れている映像が流れていた。「本当に神戸でこんなことが起きているのか」というのが映像を見ての第一印象だった。連日震災の報道がされるが、身近に起こった地震ではなかったので、震災について理解するのに少し時間がかかった。

（3）両親の話を聞いて

私は母から詳しく震災の話を聞くことは初めてで、母という身近な人の話を聞き、震災の恐ろしさや恐怖など多くのことを感じさせられた。また身近な存在なので今まで聞いた震災の話よりも一つひとつの言葉の重みが違うと感じた。私が住んでいる神戸で震災時にどのような被害があったのか細部まで知ることができた。当時の写真や映像などは見たことがある。しかしそれ以上に鮮明で、当時の様子を想像してわかるような感じだった。普段何気なく生活しているけど、ある一瞬の出来事によってその生活がなくなってしまうということの残酷さや、身近な人の助けが大切だということなど多くのことを感じ学ぶことができた。

父の話からは、ほかの地域で災害が起こっても実感がわきにくいものだと感じることもできた。私も実際に同じ体験をしたことがある。今年の令和 6 年能登半島地震だ。震災発生時、私はアウトレットで買い物をしていた。立っていてもわかる揺れが神戸でもあり、吊り下げられているものなどが揺れているのに、周りの人は揺れていることにも気づかないで楽しそうに話しながら買い物をしていた。揺れが起こっ

た時の人々の行動に、防災への意識の低さを改めて感じた。

2 環境防災科

(1) 入学した理由

私は環境防災科に入学するまで震災について全く興味もなく知らなかった。そして、「人のために何かしたい」というぼんやりとした考えで夢もなかったため進路について悩んでいた。そんな時に学校の先生から環境防災科について教えてもらい、災害時に自分には何ができるのかと興味を持ち調べると、ボランティア活動に力を入れていることを知り、自分に合った学科はここだと感じたことをきっかけに、入学することを決めた。

(2) 環境防災科での学び

私は環境防災科で多くの方から講義という時間を通してお話を聞かせてもらうことができた。その中には震災に遭われた方、警察官や自衛隊などの行政の方、水道局や電力会社などのインフラを整備する方など多種多様な知識と技術について、また多くの人の思いについて知ることができた。その中で私は人とつながることがどれほど大切なのか知った。そのきっかけとなったのが、1年生の時に野島断層の見学でお話をいただいた北淡震災記念公園の米山さんのお話だ。米山さんは、「近所の方々同士どのように生活しているか知っているので建物が倒壊してもすぐに助け出すことができた。淡路市の消防団だけでなく、町の人々が普段からコミュニケーションをとり互いの情報を知っていたことが死者を少なくすることにつながった」とおっしゃっていた。私はその話がとても印象に残り、私も地域の方々ともっとコミュニケーションをとらないといけないということに気づくことができた。

(3) ボランティア活動で学んだこと

私は部活動などで忙しくあまりボランティア活動に参加はできなかったがとても多くの貴重な体験ができた。多くのボランティア活動がある中でも、地域のお祭りや防災訓練など地域の活動に力を入れてきた。また、多聞東地区の担当として防コミの会議に参加させていただいた。多聞東地区では高齢化が進んでおり高齢者が増えている一方で、小学生などの若い人たちも増えてきていて、地域の行事の時には幅広い世代の方々が来られている。防災訓練では、私たちが説明するブースもあり、それぞれの世代で伝え方を変えないと理解してもらいにくいということに気づかされた。小学生などの小さな子どもには、新聞スリッパを一緒に作ったりクイズを出したりなど、楽しく体験してもらいながら知っていただき、私より年代の上の方には壁新聞などを使い可視化できる状態で簡潔に説明をして知っていただくなど年齢によって体験してもらう方法を変えるなど多くのことを考えさせられた。理解する速さも人それぞれで、多聞東地区では防災意識がある人とそうでない人で理解してもらうのに大きな差があった。誰もがわかるような説明を考えるにはどうすればよいのか事前からしっかり準備を行うことがどれほど大切なのか学ぶことができた。

3 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は薬剤師になることだ。薬剤師は薬の調剤・管理、服薬指導、薬歴管理、疑義照会、医薬品の販売・管理まで幅広く、薬局やドラッグストア、医療機関のほか、医薬品の研究開発や製造に関与、学校で環境衛生管理など様々な人と関わり多くの責任がある仕事だ。私が薬剤師を目指そうと思ったきっかけは、私が小さいころから母が病気になっていて毎日多くの薬を飲んでいるのを目にしたことにある。母と病院に一緒に行ったときに、母に薬剤師の方が丁寧に説明をされていてその姿にあこがれを持ったことだ。

(2) 防災とのかかわり

私は災害時でも患者さんに安心してお薬を飲んでもらいたいと思っている。大規模災害時は多くの患者さんが津波や火災で薬に関する情報がなくなるという状況に陥ると考えている。被災地で診療が可能な医療機関は、被災者を受け入れて適切な医療提供を行うことが求められ、薬剤師は診療を支える環境を構築する必要がある。被災地外から受け入れた医薬品の管理や、他職種への情報提供も重要な活動の一つ。薬局では、被災者に対する医薬品の供給や、医療救護所での支援活動をはじめとした多くの役割がある。津波で患者さんの薬の情報を知るものがなくなってしまった時には、患者さんに話を聞き薬を割り出

さないといけない。このことから迅速な対応ができるような判断力や患者さんと話をするためのコミュニケーション能力が求められる。このような活動を円滑に行うためには、平時にあらゆる状況を想定し、それぞれの患者さんと話をしてコミュニケーション能力を身に付けておく必要がある。

おわりに

「語り継ぐ」を執筆している中で私は震災の恐ろしさを改めて感じる事ができた。私が今までいろんな方々からお話を聞く中で、共通してその話を自分で止めてはいけないということを感じた。環境防災科を卒業しても私は防災と深く関わっていきたい。日本では、近い将来南海トラフ巨大地震が起こるといわれており、最大でも 32 万人の死者が想定されている。私は、巨大災害が来てもみんなが死なずに生きていけるためにも、舞子高校環境防災科で過ごし学んできた 3 年間の経験を發揮し、家族や友人などの身近な人たちをはじめ、様々な方々に防災・減災の重要性や、自分の身を守る方法を教えていきたい。

教訓を胸に

坂本 逞斗

はじめに

「語り継ぐ」を執筆するにあたり私は3年間を振り返った。阪神・淡路大震災から30年となった。私はこの30年という長い年月をもちろん実感したことがない。30年間で町や人々がどのように変わっていったのか。これから30年という数字は増えていき語り継げる人が少なくなっていく。高校生活3年間で多くの方々からお話を聞いたことや自分自身が学んだことを、今読んでくださっている貴方や私自身が他者へ伝えることで知ってもらい、一つでも多くの命を守るよう語り継いでいきたい。

1 母と祖母の話

母は当時一戸建ての実家に住んでおり、父、母、姉、私の母、祖母(以下このように表記)の5人で一緒に住んでいた。

1月17日私の母は2階で寝ていて、ドンッと下から突き上げるような揺れで起きた。だが、地震とは思わないほどの揺れだった。まだ少し揺れながらも私の母は1階で寝ている祖母の元へ行って布団を覆い被せた。リビングは食器が散乱しており、素足で皿を退けるように家から出た。家族5人で近くの小学校に避難をした。食べ物を口にしたのは夕方、クリームパンを食べたのは今でも忘れない。トイレでは祖母以外は仮設トイレまで歩いて行けたが、足が悪い祖母にとってはそこまで行くのはとても苦難なことだったため、運動場の隅で用を足していた。寝床は運動場に車を止めて、車の中で一夜を過ごした。翌日避難所を離れ、西区にいる母の友人の家に10日程泊めさせてもらった(震災から10年間毎年1月17日はお礼に行った)。しかし、一気に5人も増えると迷惑が掛かるので、家族5人は友人や親戚の家に3か月程分散して暮らした。

私の母の実家の横が焼肉屋で地震が起きたことにより営業がストップしているため大工を雇った。大工さんの寝床がなく私の母の実家に10日程泊めた。そのこともあり、地震によって半壊になった家を大工さんに修理してもらった。

2 話を聞いて

母からは何度か当時の話を聞いていたが、今回初めて祖母から話を聞いた。これまで、様々な被災体験や当時の状況をお話していただいたが、どの講義よりも聞いていて胸が苦しくなった。祖母は泣きながら当時の話をしてくれたのだ。聞いてからいろいろと考えた。もしあの時両親が亡くなっていたら、今の自分はもちろんいない。なおさら、両親には感謝しないといけなし、恩を返さないといけなしと思った。環境防災科の存在を知ったのもここで学んでいるのも両親のおかげだ。私は阪神・淡路大震災を体験していないけれど、これからの世代に伝えていって欲しいと言われた以上、私たちは伝えていかなければならない存在なのである。話を聞いて人と人の繋がりがとても大切と感じ、これから起き得る災害では「共助」が鍵となると思った。

3 環境防災科との出会い

私は小学校の頃から消防士になりたいという夢を持っている。中学生の時に母に環境防災科を教えてください、消防士を目指している私にとって防災を専門的に学べるのはいいと思ったので目指すことにした。

入学してまず思ったことは、ボランティア活動が多いことだ。入学する前から環境防災科のことを調べていてボランティアがあることは知っていたが、こんなにもたくさんボランティアがあることは知らなかった。その中でも驚いた活動は東北訪問だ。ボランティア活動は兵庫県内でするものだと勝手に思っていたが違った。実際現地に行き東日本大震災の被害が大きかったところを見に行ったり、現地の方の体験談を聞いたり、現地の学校の方と交流したりなどとても貴重な機会だと感じた。もう1つは外部講師の方がよく来てくださることだ。1年生の時「災害と人間」という授業があった。その授業は毎週火曜日と金曜日にありどちらも2時間使って授業する。そのため、どのような授業なのだろうとわくわくしていた。すると外部講師の方がやって来て災害や防災のことを教えてくれた。外部講師の方は消防士、警察官、大学の教授など様々な分野の方が来られた。その方たちは災害や防災のことにとっても詳し

く、とても分かりやすい講義をしてくださった。このような貴重な体験ができて環境防災科に入ってよかったと実感した。授業を聞くことによって、これから必要であろう様々な知識を得ることが出来た。正直、入学前は災害について知っていることは、ほとんどなかった。知らないことばかりで、新しいことを学ぶことが楽しかった。

4 環境防災科の行事やボランティア活動

(1) 募金活動

私が印象に残っている募金活動が2つある。三宮で行ったトルコ・シリア地震への募金活動と垂水駅で行った石川県能登半島地震への募金活動だ。募金活動をするのはとても難しい。募金活動の準備をしていく中で、なぜ募金するのか、送金先はどこなのか、どのような被害や状況なのかを一から調べ、自分たちで募金の際の呼びかけの言葉を考え、そして街に出て活動する形となる。募金活動をしていくなかで、人の前で大きな声を出して呼びかけをする勇気や募金をしてくださる方の助け合う気持ちなどの温かさを感じ、とてもやりがいのある活動だった。

(2) 出前授業

私が出前授業から特に学んだことが2つある。

1つ目は「してあげている」という気持ちじゃなく「させてもらっている」という気持ちを忘れないこと。ボランティア活動は、「参加させてもらっている」という謙虚な気持ちで取り組むことが大切だ。

2つ目は出前授業への準備の大切さ。出前授業ではもちろん教えるのは私たち生徒なので、まず自分が一番理解をしないと行けない。そして、自分が学んだことを相手にどうしたら上手く伝わるのか、視覚障がい者など伝える人によっても伝え方は変わる。年齢や性格などその人の特徴などによって話し方や話すスピード言葉選びなどを考えた。このように私たちは授業の内容だけではなく、出前授業では多くのことを学んだ。

(3) 東北訪問

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震の被災地である宮城県に行かせていただいた。東日本大震災は私が環境防災科に興味を持ち出したきっかけともいえる出来事だ。東北訪問に参加させていただくにあたり、過去から未来へ繋げたい、忘れてはいけないという思いを持ち参加した。大川小学校訪問では、言葉にならないような想いが込み上げてきた。連日ニュースやテレビで見てきた大川小学校へ実際に行き、現地に行かなければわからないことも多くあると思った。大川小学校の裏山は校庭から歩いて5分もかからないような場所で、川も思っていたより近かった。正直に述べると、海からの距離を考えるとまさかここまで津波が川を遡上してくるはずがない、そう思うってしまうところだった。しかし津波は確かに小学校を襲った。ここまで津波が来たといわれてもなかなか想像できるようなものではなく、自然の脅威を感じた。語り部である佐藤敏郎さんは、大川小学校で子どもを亡くした保護者でありながら、語り部の活動をしている。保護者と元教師という立場からお話をさせていただいた。「学校が生徒の最期の場所にはなってはいけない」、「ハッピーエンドの防災を」など、私たちの心に訴えかけるような語りは、防災について考えを改める機会となった。

(4) 令和6年能登半島地震

令和6年3月16日(土)～3月19日(火)の期間災害ボランティアとして石川県を訪れた。17日と18日に志賀町と七尾市で活動させていただいた。16日の夕方に石川県金沢市に到着し、夜は歩きながら街を観察し晩御飯を食べるお店まで歩いた。歩いていて金沢市では被害が多くは見られなかった。

活動1日目は依頼を受けたお宅で災害ゴミを軽トラックに積み、仮置き場まで運んだ。軽トラックの助手席でナビ係を担当するなどとても責任のある仕事が私たちにもあり、全員がサポートしながら取り組むことができた。

2日目のボランティア活動は2班に分かれ志賀町と七尾市でそれぞれ活動をした。七尾市ではさらに2班に分かれ舞子生徒や先生などと離れることとなり、一般の方とも一緒にグループになった。リーダーを決めることになり私が自ら手を挙げ、リーダーとして活動を開始することになった。すべての案件が終わり、2日間の活動を終えた。

この4日間の活動を終えて、率直に思うことは本当にまだまだ復興は厳しいということだ。一回きりで終わらずにボランティアは継続することが大切なので、何度も何度も機会があればまた帰ろうと思った。

私がこの2日間で一番成長できたと思うのは、周りを見る目を養う力がついたこと。3日目にリーダーとして任せ自分自身の言葉、発言がとても責任があると感じ、何かを誰かに伝えるのもとても難しいことを改めて痛感した。これは日常の生活や語り継ぐことと同じで、相手にどうわかりやすく簡潔に伝わるのかを改めて考え直すことができた。まだまだ、復興段階の一步を踏み出したばかりだと思うが、一日でもはやく復興を支援できるよう石川に帰りたいと思った。

5 南海トラフ巨大地震

南海トラフとは、日本列島に位置するユーラシア大陸プレートの下に海洋プレートであるフィリピン海プレートが南側から年間数センチの割合で沈んでいる場所である。30年以内の発生確率は80%とされている（2025年1月15日発表）南海トラフ巨大地震は、最悪想定死者・行方不明者は合わせて約32万人とされている。約100年～200年間隔で蓄積されたひずみを解放する大地震が発生しており、近年では、1944年に発生した昭和東南海地震、その2年後の1946年に発生した昭和南海地震がこれに当たる。昭和東南海地震及び昭和南海地震が起きてから80年近くが経過しており、南海トラフにおける次の大地震発生の可能性が高まってきていると言える。私は「32万」という数字を聞いて、私もそのうちの1人になってしまうのではないかと度々思う。考えれば考えるほど怖くて仕方がない。南海トラフ巨大地震を知った中学生の頃は、ただ地震が怖いという思いしかなかった。だが今は違う。環境防災科で3年間たくさんの方からお話を聞いて、家族や大切な人たちが居なくなるかもしれないと感じ、ただの恐怖心とは何か違う新たな別の恐怖心を抱いた。南海トラフ巨大地震だけではなく次の災害で失うものがゼロに近くなるように、被害をできるだけ最小限にする必要がある。被害を最小限にしようと1人ひとりが備えをし、正しい情報を収集することで被害は減り犠牲者も何百人、何千人、何万人と減らせることができるという。阪神・淡路大震災や東日本大震災の教訓を学ぶことも、南海トラフ巨大地震や次の災害に活きるだろう。実際、南海トラフ巨大地震が30年以内に発生する確率が高いと言われていたのにも関わらず、災害の備えをしている人は少ない。だから今すぐにも家庭内でできる非常持ち出し袋の準備、家具の固定、耐震化、避難経路の確認など、簡単にできることから取り組むことが必要である。まずは地域の方に南海トラフ巨大地震について知ってもらい、防災対策をするきっかけを私が作れたらいいと思う。

6 将来の夢

私の夢は消防士になることだ。もともと消防士という職に憧れていたが、ある幼い子どもの行動を知ったことによりさらにその決意が強くなった。

2019年7月30日、岡山市東区の千町川で釣りをしていた70歳の男性が川に転落。8歳の孫が助けようと川に入ったが溺れ、近所の女性に助けられた。その後、警官が男性を発見し、男性は病院に搬送されたが死亡が確認された。

この報道があつて私は8歳の孫の勇敢な行動、勇気がすごいと思った。まだ小学生3年生にもかかわらず、ためらわず川に飛び込み大事なおじいちゃんを助けに行ったという行動に惹かれ、私も人を助ける人になりたいと消防士を目指そうと思った。緊急の場面にあつたら8歳の子のような勇気のある行動をしたいと思った。

おわりに

今回、私は初めて真剣になって親に阪神・淡路大震災についての話を聞いた。環境防災科では、常に防災の授業をしているので、ある程度の知識としては頭の中に入っていたが、私の記憶にない新しいことばかりを聞かせてもらいとても勉強になった。そしてこれから起きうる災害に向き合って生きる糧にしたいと思った。この「語り継ぐ」を執筆するにあたり私は3年間を振り返って、阪神・淡路大震災は発災から30年が経とうとしている。私がこのように働きかけ、どんな世代であっても阪神・淡路大震災と聞いたら一つ以上のエピソードを話せるようになることを目標にすることによって、すべての人の中に阪神・淡路大震災がある状態を作り、この震災に対する風化を防ぐ、そして次の災害へどんどん変化していく「防災・減災」の備えや防災活動もしてもらえらる社会ができたら良いと思っている。震災を知

らない世代だけではなく、全ての人に知ってほしい。環境防災科で防災を学んできた責任として、私はこれからも防災と関わり、防災を広めていきたい。

人から人へ

櫻井 小春

はじめに

令和6年1月1日午後4時10分、震度7を観測する令和6年能登半島地震が発生した。揺れにより建物が倒壊し、火災のほかに津波も発生。多くの被害が出た。近い将来、南海トラフ巨大地震が起こると言われている。私は、地震という災害の怖さと防災に取り組むことの重要性を多くの人に知ってもらい、阪神・淡路大震災を含め、忘れてはならないものにするという思いでこの「語り継ぐ」を執筆する。

1 阪神・淡路大震災の被災体験

(1) 友人の母Tさんの被災体験

阪神・淡路大震災当時、Tさんは高校2年生で神戸市長田区西代通の2階建ての木造アパートの1階に住んでいた。午前5時46分地震発生時、床から音がし、自分の家が震源地だと思ったくらいの大きな揺れで目が覚めた。家が倒壊し、下敷きになった。母が、「誰か助けてください。子どもたちが埋まっています。助けてください」と叫ぶ声に気づいて、向かいに住んでいたおじさんが壁をかちわって助けてくれた。近所に住む人に、「靴を履いて線路に行け」と言われ線路を歩いて小学校まで避難をした。歩いている時、道の向こうは火柱が立って燃えていた。

小学校の体育館に避難をしたが、中は真っ暗で寒く、家族で座るのがやっとくらいぎゅうぎゅうだった。避難所にいた人が、おにぎりを作って持ってきてくれたがその途端、人が大勢集まって、目の前は人が手を伸ばしておにぎりを取ろうとしている光景だった。大人が配給された食べ物を貯めて自分のところに持って帰っている姿は、大人の嫌なところが見えた瞬間だった。

避難所には何もなかったため、火災が収まってからは、余震で揺れているけど何か取りに行かないといけないと思い、コンビニに行ってレジにお金を置いてパンをもらったり、体育館の床が冷たいので壊れた家から毛布を取りに行き床に敷いたりした。避難所生活は1月から7月まで続いた。生活をしていると徐々に配給される物資にも飽きてきたので、自分たちでボランティア活動をして温かいご飯を食べた。状況を把握しなかったが、テレビは見られず、情報が何もなかった状態だったため、周りでボランティア活動が行われていたことや高速道路が倒れたことは知らなかった。

学校はすぐ始まったが連絡手段がないため学校の先生が安否確認のため避難所まで来てくれた。学校に行く通学路は、板宿までは地獄なのに名谷に着くと普通の町の光景であり、こんなに場所によって違うのだと思った。学校に行くと泣いて友達が心配してくれた。先生が「学校のクラブシャワー使っているよ」と言ってくれたり、友達が家に泊まらせてくれたりして、高校に行って人のありがたさを実感することができた。

避難所では、仕事を失い泣いて落ち込んでいる大人や夜中に段ボールに頭を叩きつける人、叫ぶ人がいた。避難所はみんな同じ状況だから励まし合っていた。時間が経って避難所に赤十字のお医者さんと看護師さんが来てくれた。それを見て、「助けてもらえるかも」という安心感があり、看護師になろうと決めた。

(2) お話を聞いて

実際に震災を体験した方の声を生で聴かせていただいて、人の存在は命を助けるうえで大きいものということ、また、災害が発生してから救出される話を細かく聞いたことがなかったので地震の恐ろしさがどれだけのものなのかということを感じることができた。身近な人で地震で大きな被害を受けて避難所生活を送られた方がいて、改めて貴重なお話を聞かせていただいたということを実感することができた。お話の中で、携帯の写真を消去するほど苦しい記憶だったという言葉を知り、被災体験はなかなか聞くことができるものではないものなのだと知り、環境防災科の授業の中でも震災のお話を聞かせていただいているということの貴重さを感じることができた。

今は耐震補強がされていてほとんどの家が地震に強い構造になっているけれど、いつ、どれだけ大きな地震がやってくるかは誰にもわからない。家に防災バックがあるが中身は大丈夫なのか、本当に役に立つのか、備えがどれだけ大切かをもう一度考え直したいと思った。そして、何気なく話している友達

や家族は時に私にとって救われる存在になるかもしれないことを改めて知ることができ、人と人との関係性は命を繋ぐものなのだと知った。普段から家族や地域の方、友人など私に関わってくださっているすべての方を大事にしてこれから起こるといわれている南海トラフ巨大地震に対して自分の命と周りの命を守れるようになりたい。

2 ボランティア活動

私は、環境防災科に入学してたくさんのボランティア活動に参加させていただいた。そこで多くの方と出会い、関係を築いてきた。私たちがボランティア活動をできているのは先輩方が繋いできてくれたからでもある。先輩方が繋いできた思いを忘れてはいけなく同時に、ボランティア活動は一人で成り立っているものではないということを心にとどめとかなくてはいけない。ボランティア活動で出会ったたくさんの方に感謝をし、環境防災科でしかできない経験、体験を一度だけではなく継続することが大切だ。

(1) 出前授業

私は1年生の時から様々な出前授業に参加させていただいた。その中でも継続して参加していたのが南あわじ市の出前授業だった。私が小中学生に防災を教えていいのだろうか、不安な気持ちから始まった出前授業だったが、継続して参加するうちに自分に自信がつき、小中学生が元気よく発表してくれるのを見て、不安な気持ちから授業をするのが楽しいという気持ちに変わっていた。

出前授業を通して感じたことが、2つある。1つ目は小中学生の発想や考える力はすごいということだった。私たち高校生が考えないような防災グッズの使い方や考えを発表してくれる。毎回の授業で小中学生から学ぶことがたくさんあり、私の成長につながった。2つ目は、人前に立って話すことの楽しさだった。中学生の頃は、人前に立って淡々と文章を読んでいるだけだったが、出前授業をするうちに人の前に立って話すことの楽しさを実感するようになった。小中学生の笑顔や拍手をもらった時の嬉しさは忘れることはない。

私は、震災を経験していない小中学生に向けて一緒に楽しく防災の授業をし、防災を知ってもらい、災害に強くなってほしいという気持ちで授業をしている。近い将来、南海トラフ巨大地震が起こると言われている。災害が起こった時、小中学生が授業で学んだことを自助・共助に繋げて命を守ってほしいと思った。

(2) 芦屋特別支援学校

初めて支援学校に行かせていただいた経験であった。芦屋特別支援学校では出前授業ではなく、芦屋特別支援学校の生徒さんと一緒に学ぶ「交流共同学習」をさせていただいた。「交流共同学習と出前授業は違う」この言葉を先生方や先輩から何度も聞いた。出前授業はある程度内容が決まっていて授業を構成し、私たちが前に立って防災を知ってもらう授業を行うのに対して、交流共同学習は互いの特性や環境を尊重、理解し、生徒さんと一緒に体を動かして防災を知ってもらったり、一緒に考えたりすることだ。交流共同学習で難しかったのは、伝える方法だった。どうしたらテーマについてみんなに理解してもらえるか、楽しみを分かち合えるのかと、考えるのがとても難しかった。何度も仲間と考え、長い時間をかけて準備を行った。実際、芦屋特別支援学校で後悔がない交流共同授業をすることができたとは思わなかった。交流共同学習だけでなく、全てのボランティア活動において準備は手を抜いてはいけない。しかし、この交流共同学習で後悔があったのは準備が足りていないからだ。自分は完璧にできていたと思っていても実際やってみると足りなかった部分がよくわかる。私は交流共同学習を通して、生徒さん自身が災害に強くなってもらえるような工夫を考えていきたいと思った。

(3) 募金活動

私はこれまで校内で行われる募金活動に参加したことはあったが、外に出て地域の方の前で募金活動はしたことがなかった。環境防災科に入学してボランティア活動の一覧を見たとき、募金活動をするというのを見て気になり、友達から誘われたのをきっかけに高校1年生の時、初めて地域で行う募金活動に参加した。

募金活動を通して学んだことはただ呼びかけをするだけではないということだ。募金活動に行く前に被災地について調べ、どこに募金するのかを考える。そして、募金活動をするときは、誠意をもって募金活動をさせていただいているという気持ちで活動する。募金活動をしていて募金をさせていただいた方に

「ありがとうございます」と言うと、「頑張って」という応援をいただいて募金活動は地域の方に支えられてできているものだと感じた瞬間だった。ボランティア活動ではたくさんの方と交流する。その中で感謝の言葉や元気をもらえる言葉をいただいたときはボランティア活動をしてよかったと思える。募金活動をして人の温かさを感じ、少しでも被災地の方やボランティア団体の方の役に立てばという気持ちでこれからも募金活動に参加していきたいと思った。

（４）高齢者疑似体験

私は２年生で受講する「社会環境と防災Ⅰ」という授業で、高齢者体験を行った。腕や、足、腰が曲がる装備や視界が狭くなる眼鏡を装着して教室の中を歩いた。その時、高齢者の方が普段どれだけ大変な思いで街を歩いているかを感じることができた。普段、軽々と歩ける平坦な道も膝を思うように動かすことができず、引きずらないと歩くことができなかった。私たちもいずれ高齢者になるという現実がある中で、高齢者の大変さを今、知れたことは私の中で大きな体験だった。毎日見る高齢の方は元気な方が多く、挨拶をよくしてくれる。挨拶をされると私はいつも元気をもらっている。日常生活の中で高齢者を理解することはその方がどこに住んでいて、どのような生活をしているのかを知り、災害時、私たちがいざという時に助けることができると思った。私は人と話すこと好きなので自分自身が元気で過ごすために自分から挨拶をして元気に過ごしてもらえようという行動をしたいと思う。

また、将来の夢である看護師は高齢者や子どもといったあらゆる世代の人と関わる仕事なので、高齢者疑似体験を通して人の気持ちを考えるきっかけにもなって、もっと人と関わってコミュニケーションを大切にしたいと思った。

３ 将来の夢

（１）看護師

私は将来、看護師になることが夢だ。夢を持つきっかけは、母が看護師をしており、小さい頃から一生懸命に働く母の姿に憧れを抱いたことだ。看護師と聞くと病院で患者さんのケアを行っているイメージがあるが、それだけではなく災害現場に行って被災者の心身のケアや衛生管理を行うなど、各地で活躍している。環境防災科の学習の中で、看護師の活躍の場は様々であることを知り、私も被災地に行って被災者の心の支えになれるような看護師になって、多くの方をサポートしたいという思いが強くなっていった。

（２）看護師と防災

看護師には「災害支援ナース」としての働き方がある。災害支援ナースとは、被災地に行って地域住民の健康確保・維持や、看護職員の心身の負担を軽減し支えることを行う看護職のことである。私は看護師になって、災害現場で活動するとともに、様々な災害現場で看護師が活動していることをもっと多くの方に知ってもらい広報的な活動をしていきたいと考える。環境防災科に入学するまでは医療従事者の活躍をあまり知らなかったが、入学して防災について知るうちに災害現場で活動しているのを知って、私のように知らなかった人たちに広めていきたい。

阪神・淡路大震災や令和６年能登半島地震でも看護師が活躍した。私も災害支援ナースになって様々な被災地に行かせていただいて被災地の安全のお手伝いをさせていただくと同時に、被災地に行って看護師という視点からどんなことが分かって何を思ったのか、看護師と防災は実は関わっているということを伝え、地域から医療が減っていくのをなくしたい。

おわりに

私は体験談を聞かせていただいて、それらを「文字」で伝えることの難しさを知った。私は震災を体験していないため当時の状況は想像ができない。しかし、体験した方の思いは重く、私はその思いを語り継ぐことを通して震災を体験していない方たちに知ってほしいと感じた。また、私は１年生の頃からたくさんのボランティア活動に参加させていただいた。今までボランティア活動をしたことがなかった私は環境防災科に入学してボランティア活動を通して、たくさんの人と関わるのができ、防災をより知り、人と話すことの楽しさを実感することができた。そして、成長することができた。

私はボランティア活動で会ったたくさんの方々に感謝の思いを伝えたい。未災者から未災者へと変わっていく中で私たちはあの日を忘れてはいけない。あの日が消えないために、未来に繋ぐために、語り継ぐを残して 1.17 を風化させない。

防災と未来

塩田 翔

はじめに

阪神・淡路大震災が発生してから 30 年を迎えた。長い月日を迎えるにつれ、神戸のまちは発展していくとともに災害の歴史は人々の記憶から消えつつあり、阪神・淡路大震災を知らない世代が増えてくるだろう。しかし私たちは環境防災科で学べる身として、授業や講義、ボランティア活動を通して皆さんの防災に関する知識を身に付けてきた。そんな災害を経験していない未災者である私たちにもできること、それは語り継ぐことだ。阪神・淡路大震災の教訓を忘れずに、災害を知らない世代にそして、人々の記憶から消えないように語り継ぐことこそが環境防災科で 3 年間学んだ私たちができることだと考えている。

1 阪神・淡路大震災

(1) U 先生の被災体験

当時高校 2 年生だった U 先生は中央区と灘区の境目にある木造平屋建ての家に住んでいた。発災時は寝ており、揺れや物音とともに目覚めたと言う。その直後、父が家族全員の安否を確認するために叫んでいたのが聞こえたらしく、家のドアを何とか開け、家族全員が家から脱出することができた。家にいるときは分からなかったが外に出て実家を見るととても傾いており、最終的には全壊という形になった。家の壁は崩れ、外からでも家の中を見ることができた。廊下や台所などあらゆるところで家具が散乱し、家の中はぐちゃぐちゃだった。その後実家の向かいにある学校のグラウンドに避難するために歩いて行くと、被害は自分の家だけだと思っていたが、周りの家も甚大な被害を受けており、一階だけがつぶれている二階建ての家があったり、煙が出ている家があったりしてとても驚いたと言う。

体育館が開き、避難してきたすべての人たちが一斉に入り、その後の避難所生活は 1 週間から 10 日ぐらい続いた。その日の夜には電気は戻り、後日自衛隊が来て、飲料水や冷たいおにぎりを配った。少しするとお風呂にも入ることができ、今後の生活について考える時期となった。避難所のトイレにたくさんのおしっこがたまっていたことは今でも忘れられない光景だと言う。その後、姫路にある親戚の家に向かったが途中の三宮の被害はとても驚いたようだ。

阪神・淡路大震災が起きるまで地震を経験することを他人事のように考えている部分があり、地震が起きることなんて全く考えられなかったと語る。

(2) お話を聞いて

私は先生からお話を聞いて、家族が誰ひとり亡くなることなく生活することができて良かったという思いを抱くとともに、災害の恐ろしさを知った。もし家が平屋建てじゃなかったら、もし家が発生直後に完全に崩れていたらどうなっていたかと考えれば考えるほど危険でいっぱいだと感じる。お話を聞く前は先生が震災で家族を失っていたらどうしようなど不安でいっぱいだった。しかし、お話をしてくださった U 先生は、いつも授業でみる感じと同じで少しホッとした自分がいた。だからといって災害によって亡くなった人たちの思いが消えるわけではない。先生が、今でも忘れられない光景があるというほど恐ろしい経験で、改めて災害が人々に与える影響を実感した。先生から聞いたことを自分なりにまとめ語り継ぐ、そのようなことを私がしてもよいのかと不安になる気持ちもあった。だが辛い被災体験の話を聞かせてもらった以上、丁寧に自分の言葉でまとめ、語り継いでいきたいと思った。

2 環境防災科

(1) 志望のきっかけ

私は中学 3 年生の時、消防士になるという夢を持ちながら進路に悩んでいた。そんな時にお世話になっていた先生から「舞子高校にある環境防災科やったら消防士になるために必要なことが学べる」と聞いて、環境防災科という科があることを初めて知った。私は阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた神戸市長田区出身であり、小さい時から避難訓練や防災学習がたくさんあった。しかし私は、災害を経験していないこともあり、災害についてあまり深く考えていなかった。しかし、この機会に防災について学ぶことで身近にいる大切な人を守ることができると思い、消防士になるという思いを胸に入学した。

3 ボランティア活動

(1) 環境防災科としてのボランティア

ボランティアという言葉はよく耳にしていたが、実際にボランティアに参加するというのは初めてでも緊張した。私が参加した中で特に印象に残っているのが芦屋特別支援学校との交流だ。

芦屋特別支援学校との交流では生徒たちと一緒にクイズの答えを考えたり、阪神・淡路大震災の教訓を学び合ったりした。少し遠くまで行って、たくさんの人の前で話すのはとても緊張したが、皆さんがとても温かく迎えてくれ、舞子高校が今まで交流を続けてきたことの意味とその大切さを知った。

交流の準備では3年生の先輩とペアになり、担当の教室でどのように授業を進めていいのかを相手の視点になって考えた。準備の時間はとても少なく、その少しの時間で練習や案を考えるのはとても大変だった。しかし準備や本番を通して、ボランティアは、本番はもちろん大事だが、それよりも準備をしっかりして出向くことが大切だと知った。先生や先輩方が「準備は大切だ」ということをよく口に出しているのを見て、ボランティアとは何かを考えるきっかけとなった。

(2) ボランティア部としてのボランティア

私はボランティア部としても様々な活動に参加した。私が参加した中で印象に残っているのは垂水駅周辺の募金活動と「つくしクラブ」での防災講演会だ。

私自身募金活動に参加するのは初めてだった。私はあまり寄付をしたことが無かったので、「どうせ全然集まらない」と思っていた。しかし寒い中声掛けをしながら箱を持って立っていると、遊んでいた中学生や周辺を通りかかった年配の方、親子など様々な人から「頑張ってるね」や「寒い中ご苦労さん」など優しく声をかけられた。寄付をしてくれる人が想像以上にたくさんいた。驚きと同時に達成感が押し寄せ、感謝と歓喜の気持ちでいっぱいになった。中には息子さんが舞子高校の卒業生という理由で寄付してくれる人がいたり、舞子高校と知ったら寄付してくれる人がいたり、飴をくれる人がいたりなど、舞子高校だからという理由で寄付してくれる人も少なくなく、舞子高校が地域とのかかわりを大切にしていたことでたくさんの人が舞子高校を知り、地域と良い関係が築けるのだと感じた。

私の代の部員は今までとは比べものにならないくらい多かったため、「つくしクラブ」から時々遊びの誘いを受けることがあった。「つくしクラブ」は障がいがある子どもたちを預かり、様々な遊びをしている事業所である。子どもとたくさん遊び、疲れた私たちは子どもたちの元気さに圧倒されることもあった。しかし、防災講演会の依頼が来たときはボランティア部である私たちに務まるかととても心配だった。私もこのような経験は初めてで、部員一同緊張と焦りでいっぱいだった。必ず子どもたちが楽しくそして記憶に残るような内容にしようと顧問の先生に聞いては試行錯誤を繰り返した。

講演会当日緊張でいっぱいだった私たちを皆さんはいつも通りの笑顔で迎えてくれ、絶対に成功させたいという思いに変わっていた。身近な危険について子どもたちと一緒に考えたり、登下校時にどのような場所に気を付けるかを見つかったりした。その中でも印象深かったのが小学生の子が防災についての質問してくれたことだ。小学生から質問が出ることは全く考えていなかったのも、私は驚くと同時に防災について興味を持ってくれていることがとてもうれしかった。これは環境防災科に属していることにより、防災について知っている信頼されているから聞かれたのだと考えた。これらのことは舞子高校が防災に力を入れ、地域との連携を忘れないところが子どもたちや職員の方の信頼につながり、防災講演会を任されたのだと思う。

4 夢と防災

(1) 将来の夢

私は消防士になりたいという思いから環境防災科に入学した。だが環境防災科での授業やボランティア、学校生活を通じて、地域の高齢者や小学校の子どもたちから感謝をされることに感動し、現在は介護福祉士を目指している。介護福祉士という職業は高齢者だけの生活を支援する職業だと思っていたが、学校生活を通して障がい者や援助が必要な子どもも支援することができる職業ということを知り、介護福祉士は様々な人々の個性や身体状況を理解し、多職種と連携することが大切だと思った。

(2) 防災と福祉

私が介護福祉士を目指し始めてまず思ったことは、福祉と防災がどう関わっているのかだ。介護福祉士になりたいと思いだした1年生の終わりごろ、防災と福祉は全く関わりのないものだと思っていたが、探究活動や発表を通して、介護福祉という業界が現代社会において防災と密接な関わりがあるとい

うことまた、日常的に高齢者施設の利用者がいる環境で起こりうる災害から身を守るのを支援するという点では、毎日が防災であると考えた。

介護福祉士の過去の災害対応の事例として平成30年7月豪雨災害では発災時だけでなく、被災後の避難所生活において、体が不自由な人のために支援をしたり要援護者の戸別支援をしたり、熊本地震や東日本大震災では避難所での見守り支援など、災害時に要援護者となる高齢者や障がい者、外国人などの方々の一人でも取り残さないような支援を行っていた。災害時に弱い立場にいる人がいつも通りの生活を送れるような支援をすることが、介護福祉士としての防災との関わり方だと考えた。

私は介護福祉士となり、同じ施設の職員と必要な支援について考え、意見を共有し、利用者一人一人のニーズに合った支援を考えていきたい。またすべての施設に防災の大切さを理解してもらうために防災訓練を定期的に行ったり、災害の恐ろしさを動画や画像などを用いて伝えたりしたい。介護施設はいざという時に福祉避難所として開設されるので、職員全員が適切な判断をできるように正しい知識を持つ必要があると考えている。職員同士が協力し利用者全員を守れるような体制を整えていきたい。また防災マニュアルを作り、職員一人一人の動きや役割を決め、避難方法や備蓄品の取り扱い方法を定めておくことでいざという時に落ち着いて行動し、正しく対処できるように準備しておきたい。このようなことが環境防災科という防災に特化した科で学び、その知識を自分の将来で上手に活用することが私にできることだと考え、災害時に必要な支援を考えるのに積極的に携わっていききたいと思う。

5 令和6年能登半島地震

石川県を中心に甚大な被害を与えた令和6年能登半島地震。令和6年という名称に私は違和感を覚えた。そして冬休みが明け、環境防災科の授業を受けていく中で、その違和感は解消された。それは平成19年にも能登半島地震と呼ばれる地震が能登地方で起きていたからだ。

私は令和6年能登半島地震が起きた時、初詣から帰り、家の中を歩いていた。歩いていても揺れを感じるくらい私の家は揺れていた。自分の命を守るためにできることはないかと考えた。しかし私はそこで立って揺れを感じることはできなくなった。その経験から震災は経験してはじめて恐ろしさを知るものだと感じた。その後テレビやスマホで石川県が甚大な被害を受けていることを知り、もし自分の地域で震度7の地震が起きていたらどうなっていたかと考えるととても恐ろしく、自分から動くことができるのかとても不安になった。私の家族もその時エレベーターに乗っており、もしかしたら止まって出られなくなっていたかもしれない。そうなら自分から動くことはできたのだろうかなど、本当に大きな災害が起きた時どれだけ自分がちっぽけで非力な存在なのかを知るきっかけとなった。だがそんな時に頼るべきためにあるのが共助の力だと考えた。地域や近隣の住民の人に助けを呼び掛けることで、一人でできないこともたくさんの人と協力することで助けられる命がある。非常時に協力できるように地域の人とのあいさつやコミュニケーションを欠かさず、地域の共助の力を強くしたいと思った。また、過去に起きた阪神・淡路大震災などのその地域で起きた災害を教訓とし、地域とのかかわりなどのソフト面だけでなく、定期的な点検や家具の固定などのハード面も日本全体での課題として受け止め、防災や減災に力を入れるべきだと考えた。これから起こりうる地震に備えるべく、過去の災害から学び続けていきたいと思った。

おわりに

私は今回の語り継ぐの執筆を通して、自分の思いや感じたことを言葉にして伝える難しさを改めて実感した。環境防災科に入学して3年間、講師の方や先生から実際の被災体験や様々な職業の視点から見た阪神・淡路大震災のお話を聞かせていただいた。これらの経験は環境防災科以外ではなかなかできないことだと思う。ただただ伝えたいという思いで話をしているのを見たり聞いたりして感じた。私たちが入学した科は震災体験や想いを間近で聞くことができ、そこから見聞きしたことを語り継ぐ、それが震災を経験していない未災者である私たちにできることだと強く感じた。

わたしは途中で夢が変わったこともあり、防災とどう関われるかとても悩んだ時があった。しかし環境防災科ではおのずと防災とかわる機会があり、その中で防災と関わっている職業をたくさん知ることができた。そこからどの職業も防災と切っても切れない関係であり、防災と密接であることを知り、進化していく災害に対して社会の防災力を向上させる必要があると感じた。そのためにも今まで私たちのためにつらい経験を話してくださった方々の想いを風化させないように語り継いでいきたいと思った。これからも環境防災科で学んできたことを忘れず、仕事や日常生活などの様々な場面で積極的に活かしていきたいと考えている。

未来へ

島 希凜

はじめに

阪神・淡路大震災から30年が経つ年に私たち環境防災科21期生が卒業する。現在、阪神・淡路大震災を経験していない人が多くなり、経験したことを語ることができる人は少なくなっている。そこで、阪神・淡路大震災や過去の震災を経験した方から、直接お話を聞き、未来の防災のために語り継いでいくことは、環境防災科生である私たちの使命だと考え、「語り継ぐ」を執筆する。

1 T先生の阪神・淡路大震災での体験談

(1) 地震発生

震災当時、T先生は神戸市中央区のマンションに住んでいた。以下はT先生の言葉である。

1995年1月17日午前5時46分強い地震が起こった。地震の揺れで目が覚め、ベッドごと動き、近くで飛行機が落ちたと思った。何が起きたかわからなかったので、外に出て情報を得ようと思ったが、玄関のドアが開かなかった。ドアを壊し外に出ると、トラックの運転手がいて「地震や」と聞いた。そこで初めて、地震が発生したことが分かった。外はまだ真っ暗で近くの古い商店街の方から「助けて」と聞こえ、瓦礫に埋もれた人を2人引きずり出し、救助した。その時は、冷静ではなかったため、裸足で外に出ていて、ガラスや瓦礫を踏んで足が血だらけだった。その後、神戸市垂水区舞子にある実家のことが気になり電話を掛けたがつながらなかった。午前6時30分に車で舞子に向かう。道中は瓦礫まみれだったが舞子は被害がなかったため、自宅のある中央区に戻った。戻る途中で、長田区の火災が発生していた。移動手段に困っていた人がいたので、車に乗せて神戸駅まで送った。そして、家に帰ると台所が散乱していたり、ドアが曲がっていたりして自宅は半壊していた。震災当日は、兵庫区に住んでいる友達と近くの小学校に避難した。だが、夜になっても食べ物や水は来なかった。

翌日、支援物資が届いたがお年寄りや小さい子どもが多かったので譲った。その後、自宅に戻ったが、ライフラインはすべて止まっており懐中電灯で一晩過ごした。

(2) 震災後の学校

地震発生から2日後、学校に向かおうとするが、車を出すこともできない、電車も動いていない状況だった。だが、地下鉄だけは動いていたので、ハーバーランドから神戸市須磨区の板宿まで歩きそこから地下鉄に乗って当時勤務していた兵庫県立伊川谷高校へ行った。学校までの道は危険箇所がたくさんあり、生徒は学校に来ることができる状況ではなかった。生徒の安否を確認するために、職場の人に原付を借りて避難所や生徒の家を周り安否確認を行った。学年全員の安否が確認できたのは、震災から2～3週間後だった。当時、3年生の担任だったため受験等の対応が困った。交通手段がなく受験する学校までいけない生徒や受験票が無くなった生徒もいた。だが、受験する学校まで行かなくても合格できたり受験票がなくても受験できたりした。なかには、進学をあきらめる生徒もいた。学校が再開するまで、1か月かかった。

(3) 当時の印象に残っていること

1月19日に妻の同僚が生き埋めになったという知らせがあった。その人は救助されて助かり、地元である淡路に帰った。その翌日、淡路から神戸までおにぎりを作って持ってきてくれた。昨日まで生き埋めになっていた神戸に翌日足を運んで、困っている人のために何かしてあげようという姿勢がとてうれしかった。このことから、食べ物のあるありがたさや困っている人を助けようとする気持ちを忘れないでおくために、毎年1月17日は「おにぎりの日」とし、その日は、どんなことがあろうとおにぎりだけを食べている。

2 T先生の話聞いて

先生のお話を聞かせていただき、「普通」の日常がどれだけ大切かを学んだ。阪神・淡路大震災が発生し、生き埋めになった人や進学をあきらめる生徒、大切な人が亡くなってしまった人などたくさんの人がつらい思いをしている。震災が起これなければ、受験し進学できたのに、普通の日常を過ごせていたかもしれないのに、人の人生を一瞬にして壊す災害はとても恐ろしいと改めて感じた。

さらに、先生の家族では1月17日は食べ物のあるありがたさ、人のやさしさを忘れないための「おにぎりの日」があるように、阪神・淡路大震災を風化させないために、今回聞いたお話や災害を経験された方のお話を語り継いでいこうと思った。

3 環境防災科

(1) 東北訪問

私は、1年生の時に東北訪問に参加させていただいた。私が東北訪問で一番印象に残ったことは、東日本大震災で津波の被害を受けた大川小学校に行ったことだ。大川小学校は、津波の被害を受けたままの姿で、天井に泥がついていたり渡り廊下が倒れたりしていた。私は、衝撃的で本当に津波が襲ってきた現実と津波の恐ろしさを肌で感じた。小学校では、語り部の佐藤敏郎様から当時のことについてのお話を聞いた。佐藤さんはこの大川小学校で6年生だった娘さんを亡くされた。当時の状況について校舎を見たり、実際に津波から逃げようと避難した経路をたどったりしながらお話を聞いた。実際被害を受けた場所に行くと、学校で習っていたことと覚えることが違った。その場所に行くと、お話を聞くことによって当時の状況が鮮明に想像することができた。私は、話を聞き、想像しただけで不安や悲しみの感情が湧き出た。なぜ不安な感情になったかというと、災害時子どもたちの命が助かるかどうかは教員の判断次第だと思ったからだ。大川小学校では津波の情報はあったにもかかわらず教員の判断で校庭にとどまることを決め、津波が来る直前に橋のたもとの小高い場所へ避難しようとしたが、間に合わずに子どもたちと教員は津波に巻き込まれてしまった。

私は将来教員になりたいと考えている。もし災害が起こったら、自分の判断でたくさんの命が奪われてしまうと想像したら不安になる。だから、東北訪問で聞いたお話を活かして、固定概念にとらわれず適切な判断ができる、防災に強い教員になろうと強く思った。さらに、東北訪問では命の尊さや大切さを改めて学ぶことができた。この経験を自分の強みとし、自分の身を自分で守りさらに身近な人の命まで守ることができる人になりたい。

(2) 出前授業

私が環境防災科に入って初めて参加した出前授業は南あわじ市への出前授業だった。はじめ、出前授業は何となく楽しそうだと思い参加した。すると、先輩たちの授業の仕方や内容、話し方に圧倒された。自分はこんな風に話ができるのかとても不安だった。先輩方と事前準備をしていくうちに緊張がほぐれて本番では何とか自分の役割を成し遂げることができた。出前授業本番を終えると、事前準備の大変さを忘れるほど、子どもたちと学習することが楽しく達成感を感じた。それから、南あわじ市への出前授業は継続して参加している。2年生の後半になるにつれてボランティア活動自体が2年生中心で動いていくようになり先輩がいない出前授業に焦りや不安が出たが、回数を重ねるうちに、話し方や授業の仕方がいい意味で慣れてきたと感じた。慣れてくることで、子どもたちに積極的に話しかけたり意見交換したりすることで相手にとって楽しく防災の授業ができるようになったと感じた。

この出前授業の経験から将来、学校の先生になりたいと考えるようになった。

(3) 募金活動

私が初めて参加した募金活動は、トルコ・シリア地震に向けたものだった。募金活動の当日までトルコ・シリア地震について調べ、ひとりひとり当日の原稿を考えた。当日、いざ町に立って呼びかけをしようとすると、初めは緊張して大きな声を出すことも原稿を自分のものにして声に出すことができなかった。だが、募金してくださる方から「頑張ってね」や「舞子高校だから募金しとくね。」などの声をいただく中で舞子高校を背負っていることを実感し、大きな声で呼びかけができるようになった。それから、募金活動に対する意識が変わった。募金に協力してくれる喜びや地域の人々のやさしさがうれしいので募金活動には継続的に参加している。最近では、令和6年能登半島地震に向けた募金活動を行った。この募金活動は、今までと何か違って募金してくださるお金や気持ちの重みが大きかった。入れてくださるお金をその人の思いだと受け止め、感謝の気持ちを忘れず「ありがとうございます」の言葉を大切により一層大きな声で募金を呼びかけた。すると2時間の活動で驚くほどの支援金が集まり、地域の人々の温かさや、自分たちの言葉や行動の責任を感じた。これからも地域の方々を大切にし、責任を持って募金活動に参加したいと思った。

(4) 芦屋特別支援学校との交流・共同学習

私は、芦屋特別支援学校との交流授業に参加して障がいがある方への考え方が変わった。私は昔から警戒心が強く、町で障がいがある方を見かけると避けてしまう部分があった。だが、交流授業に参加してみて、積極的に話しかけてくれたり、授業の中で質問してみると自分が思ったことを率直に話してくれたりしてくれたことがとてもうれしかった。そこから私は、障がいの有無に関係なく話していると楽しいし、障がい者へ対する偏見などの意識が変わった。そして、この経験から特別支援学校にも興味を持った。

4 将来の夢

(1) きっかけ

私は環境防災科入学当初、看護師を目指していた。だが、出前授業をきっかけに体育教員になりたいと考えるようになった。

私は子どもと遊んだりその世話をしたりすることが好きなので、もともと子どもとかかわる仕事に就きたいと考えていた。そして、高校生活初めてのボランティアで出前授業に参加した。出前授業では、事前準備で当時の先輩方の姿を見ながら準備や練習を繰り返して大変なことが多かった。だが、本番になって小学生や中学生を目の前に授業をすると、大変だった準備期間を忘れるくらいとても楽しくてやりがいを感じた。そこから出前授業を継続的に参加していくことによって「先生」という職業にあこがれを持った。さらに私は体育の授業が好きで、中学生の時から体育の先生と親しくさせてもらっていることから体育教員を目指そうと考えた。

(2) 体育教員と防災

学校教員と防災は深く関わりがあると考え。今では、子どもたちに命の大切さを学ばせる防災教育や訓練は義務となっている。そのほかにも、学校が避難所になった際に避難者を対応するなどたくさんの役割がある。

私が将来体育教員になってやりたいことが2つある。1つ目は、体育の授業で地震が来たときのことを想定し、どこに逃げるのかを考えさせたり、校庭の危険箇所を見つけたりする授業だ。授業の中に、災害が来ても生徒自身が日ごろの授業を思い出して自分の身を守ることができるような内容を取り入れたい。また、保健の授業では災害が起きた後のけがの応急処置や心肺蘇生の仕方などについて徹底的に教えた

い。

2つ目は、もし災害が起きたらそのあとの子どもの心のケアを第一に考えることだ。今までの環境防災科での講義を思い出すと、子どもの心は繊細で災害が起こった後 PTSD になってしまう子や自分の気持ちを我慢したり性格が変わってしまったりする子が出てくると学んだ。そういう生徒たちの心に寄り添える教員になるために、防災についての知識もちろんだが心理についても勉強し、日ごろから生徒と話して心を開いてもらえるように考えながら接していきたい。また、保健の授業で心身の健康について教えるので、過去の災害での子どもたちの心の変化や心のケアについて環境防災科で学んだことやこれからの勉強を活かし子どもたちに知ってもらおうと考えている。

5 南海トラフ巨大地震

南海トラフ巨大地震は近い将来高確率で起こるとされている。この大災害を生き抜くために私たちはたくさんのことを備えていかなければならない。いつ起こるかわからないので常に防災バッグや避難経路の確認などはしておくべきだ。私は、将来教員になりたいので教員の立場からの備えを考えておく必要がある。現時点で考えているのは、防災マニュアルだけにとらわれずその時々に応じて、教員同士でコミュニケーションをとり、適切な判断を瞬時にできるようにしたいと考えている。そのためには、過去の災害についてより深く勉強し、日々の訓練や想定が大切となってくる。子どもたちの安全を確保するために日ごろから細心の注意を払い防災に強い教員を目指していきたい。

また、普段からの対策として独り暮らしをする際には、安くて古いアパートに住むのではなく耐震性の高い家に住むなどハード面からも対策していこうと考える。

おわりに

私は「語り継ぐ」の執筆を終えて感じたことがある。1つ目は、当たり前の日々がどれだけ大切かということだ。阪神・淡路大震災のように大きな災害が起こると一瞬にして当たり前だった日常がなくな

り、つらい避難所生活を過ごすことになる。そう考えると、当たり前の日常は大切だということが分かった。2つ目は、語り継ぐことの難しさだ。今回私は、先生に阪神・淡路大震災での経験を聞かせていただいた。このお話を自分の中に落とし込んで、この「語り継ぐ」に書くことはとても難しかった。だが、自分なりに理解して他者に語ることで語り継ぐことに対して自信がついた。そして、これから先、「災間」を生きる私たちは3年間の学びや経験、被災体験をした方からの話をこれからも語り続けていこうと考える。

まえにすすむ

曾江 厚志

はじめに

「語り継ぐ」を執筆するにあたって私が考えたこと。それは、私が語り継いでもいいのか、そこにどんな意義があるのかということだ。兵庫県生まれではない私は、違った視点から防災について考え、この「語り継ぐ」を通して、読み手に兵庫県以外の防災についても伝えることができる。それが私の執筆する意義だと考える。ほかの環境防災科生に比べてこの場所に住んでいた年数がとても短い、ほかの県の防災意識や防災対策を、生活を通して身にしみて感じているのだ。

1 災害に興味を持ったきっかけ

私は環境防災科に入った理由を聞かれると、環境問題に興味があったからだといつも答えていることに気が付いた。そこで私は、なぜもともと環境問題に興味があるのか考え、いくつかの理由を導き出した。

1つ目は、私が静岡県に住んでいたことだ。わたしが住んでいた地域は海が近く川もあり、ひとたび大雨が降れば川が増水し、グレーチング(排水溝にふたをする網)から水が噴き出してしまうような地域だった。通っていた小学校では多少そんなことがあっても学校が休校になることがなく、兵庫県にきて初めて大雨警報で学校が休校になったときは正直こんな雨でと驚いた。そして、私はこの違いをただの地域の違いとして終わらせてしまっていていいものか、圧倒的に危ないのは前者なのに警報がでるのは後者でもよいのかというようなことを考えるようになっていた。

2つ目は同じく通っていた小学校の授業によるものだった。私の通っていた小学校では珍しい授業があった。それは5年生と6年生で行われる30分間海泳という授業。内容は名前通りで30分間足を休まずに泳ぎ続けることができるかというテストだった。私が通っていたころはすでにプールでの実施だったが、昔は本当に海でやっていた。このテストの目的は洪水や津波などの水害に対して少しでも自衛できる手段を身に付けるというもので、テストで合格するまで何度でもやり続けるというところからもそれだけ水害の被害を重く受け止めているのがわかる。私はこれら2つの経験から災害や自然環境に興味を持ったのだと自分で感じた。

2 環境防災科での学び・経験

(1) 出前授業

私が一番印象に残っているのは神戸市垂水区の多聞東小学校の生徒に向けた出前授業である。班に分かれてそれぞれのお題について調べ、それをまとめた壁新聞をつくり、その用紙を使いながら防災に役立つ情報を小学生に教えるというものだった。私は新聞スリッパの有用性について紹介する班になって出前授業を行った。この授業を通して私が学んだことは2つある。

1つ目は、調べたことのまとめ方。班の人たちと協力して、どうやったらわかりやすくまとめることができるか、見やすいものになるのか考え、例えば、小学生に見せるものなので漢字にフリガナを振ったり、イラストを入れてみたりという工夫をした。

2つ目は発表の仕方。相手が小学生ということもあり、ただ淡々と文章を読み上げているだけでは絶対に興味を持ってくれない。そこで私が工夫したのは動きを入れることそして話をするときには前を向いてはきはきと話すことだ。新聞スリッパの作り方の説明をする際に、前で実演しながら説明するというのも大切で、これらを心がけることで分かりやすく楽しい発表になるということを理解できた。

(2) ボランティア活動

私が今まで参加してきたボランティア活動の中で最も印象に残っているのは、たるみっこまつりのボランティア活動だ。地域の祭りに参加し、環境防災科のブース出展、防災楽習迷路組み立て・運営そして募金活動であった。私はこの活動で失敗をして学んだことがある。それは事前準備の大切さだった。ひまわり迷路には各所に設問があり、私はそれらの問題についてわからない人に説明する係であった。わたしは阪神・淡路大震災に訪れたボランティアの人数についての問題を担当しており質問をしてくれた方々に約130万人、人口の2倍と説明をしていた。そんなときあるお客さんから尋ねられたのが兵庫県の人口なのか神戸市の人口なのかということ。わたしはその質問に答えることができなかった。なぜなら用意

された文言を自分で調べもせずと言っていただけであったからだ。その場では付き添いの先生に聞くことで解決できたのだが自分の中で情けなさが残った。このようなことからわたしは事前準備の大切さを学んだ。

(3) フィールドワーク

フィールドワークで最も印象に残っているのは2年生で取り組んだまちあるきである。長田の町を歩きながら阪神・淡路大震災のときに重要な役割を果たした場所や慰霊碑、区画整理の影響が顕著に表れている住宅を見ていくというものであった。私がこの活動を通して考えたことは、私の住んでいた地域で阪神・淡路大震災のような大災害がおこったらどのような被害がでて、どのような復旧が行われるのかということだ。私が住んでいた地域は前述にもある通り海も川も近い地域で、いくら直下型地震で海溝型よりも津波の心配が少ないとは言えある程度の水害の被害はあると考えられる。また、災害時火災の被害が増える原因になる木造建築も多くある。これらの条件から私の町でも甚大な被害が出るのがわかる。では、そのような甚大な被害をどう復旧していくのか。過去にそこまでの大きな災害を経験したことのない地域で円滑な復旧作業ができるのか。結論から言えば円滑に復旧活動を進めることはできない。そして、水害という観点を抜いて阪神・淡路大震災と同じような復旧をすることになると考える。このように考えた理由は簡単で私が以前その土地で生活していて地震について意識することが兵庫県に住んでいる今と比べて圧倒的に少ないからだ。これらのことからわかる学びは当たり前ではあるが地域やそのコミュニティによってまったく防災意識やその対象が変わってくるということで、例えば、兵庫県なら地震、静岡県なら津波などさまざまである。まとめとして、私がこのように考えることができたのもフィールドワークがあったからこそで、そういう意味で環境防災科に在籍していて印象に残ったもの、学びになったものの一つになっている。

(4) 南海トラフ巨大地震について

南海トラフ巨大地震のマグニチュードや被害はすさまじく政府の予測では最大震度7、死者約32万人、津波の高さは10m以上にも上る地域があるとされている。環境防災科ではこれから起こる地震の例としてたびたび議題として上がっている。発生確率だったり、被害を防ぐまたは軽減するにはどうすればよいのかだったりを考えた。地震は必ず訪れるものであってどんな場所にしようが油断するべきではない。実際神戸で阪神・淡路大震災があったときも「想定外」とよく言われた。だが、できることはたくさんある。南海トラフ巨大地震の被害予測を考えるとその規模が大きすぎて一見何もできない、あきらめようと思える人も少なくないだろう。しかし、そんなことはない。確かに南海トラフ巨大地震の想定ではとても考えられないような被害が予測されている。ただ、本当にそんな被害が出るとしても対策の方法がある。例を挙げるなら、手っ取り早いのは引っ越しをすること。地震の正確な予測はできないとは言え統計的な周期で予測することは多少できる。なので、できるだけ直近で大きな地震が起こった地域や歴史的に考えて地震の被害が少ないところに引っ越すのは一つの手だといえる。次に自分の今住んでいる家を調べ、危険なら改修工事を行うこと。大きな地震でも家が強ければ被害が出ることはほとんどないといえる。ただ津波を伴う場合はハザードマップなどを確認しなら避難経路を知ることが大切になる。ただ、これらの方法のほとんどが相当にお金のかかることだということがある。家庭の経済状況によってはこれらの対策は厳しいこともあるだろう。ではそんな人にできることは何か、それは部分部分でできることをすること。具体的に言うなら前述したような避難経路の確認、あまり丈夫な家でなくても海や川からは遠ざけるなどがあると思う。このように、どんな家庭や人でも何かできることがあり、それをすることで少しでも被害を減らす。これが、私が南海トラフ巨大地震について調べて学んだことだ。

3 被災体験

(1) 母の被災体験

大阪府豊中市に住む20代の学生であった母は、1995年1月17日の朝、普段と変わらない穏やかな日常を過ごしていた。母は大学生で、週末には友人と楽しい時間を過ごすことが多かった。しかし、その日は午前5時46分、突如として訪れた大地震によって全てが一変することになる。母は眠っていたが、突然の激しい揺れによって目を覚ます。初めは何が起こったのか理解できず、寝室の天井から粉塵が舞い上がり、家具がバタバタと音を立てて倒れる音が聞こえた。母は慌ててベッドから飛び起き、震える手で懐中電灯を探し、部屋の明かりをつけようとしたが、停電で部屋は真っ暗だった。恐怖に駆られながらも、母は冷静さを保とうと努めた。自分が無事であることを確認し、次に別居している両親や学校にいる妹の

安否を確認するために携帯電話を手を取ったが、電波が全く届かないことに気づいた。家の外に出てみると、街はパニックに陥っていた。倒壊した建物、人々の悲鳴と泣き声があちこちから聞こえてきた。母は隣の家から出てきた近所のおばあさんに声をかけられた。おばあさんは足を痛めて動けないと言い、母に見守ってほしいと頼んできた。母は決断し、おばあさんを自分の家の庭に連れ出し、危険な場所から遠ざけた。その間にも余震が続いた。数時間が経過し、母は家族が無事であることを確認できたとき、ほっとした。しかし、母の住んでいた地域は甚大な被害を受け、生活は一変した。停電や断水、食料や医療品の不足が続き、避難所での生活が始まった。母は家族や地域の人々と協力し合いながら、少しずつ生活のリズムを取り戻していったが、それでも心に深い傷が残った。阪神・淡路大震災は、母の人生にとって忘れがたい出来事となり、母はその経験が自分の強さや人間性を深めるきっかけにもなったと述べていた。震災から数十年が経った今でも、母はその日のことを鮮明に覚えており、地震が起きるたびに過去の記憶がよみがえることもある。

（２）避難所での困りごととはあったのか

最初の数日間、避難所での生活がまならぬものだった。トイレやシャワーが十分に確保されておらず、特に女性や高齢者の人々は不便を強いられた。食料も不足し、配給された食事は栄養不足で、特に子どもたちや妊婦の母親たちにとって心配の種であったと思った。また、避難所では混雑が激しく、家族とは別の場所で寝なければならないこともあり、夜間は安眠を得ることが難しかった。さらに、情報の不足もあり、地震の影響で自分の家がどうなったのかすらわからず、不安な日々が続いた。精神的な負担も大きく、特に高齢の祖母は新しい環境でのストレスから体調を崩すこともあった。また、避難所内ではトラブルも起きやすく、限られたスペースでの共同生活によるストレスが蓄積されることもあった。その後ある程度被害が落ち着くと家に戻ることができ安心したのもつかの間、一定の期間は不安のある生活が続いた。

（３）私が考えたこと

この被災体験を聞いて私が感じたことは２つある。１つ目は地震は思ったよりも身近にあるということ。前述にもあるとおり私は生まれが兵庫の人間ではない。正直私が今まで住んできた地域では地震の危険性やその被害についてそこまで詳しく教えられた記憶もない。だからこそ私は当時、地震をそんなに近いものとしてとらえていなかったし、まず地震について考える機会もなかった。しかし、今回自分の母に被災体験を聞いてみると、思っていたよりも多くのことを語ってくれた。これは私にとっては結構意外だった。今までそんなことを話してもらったことはなかったし、聞かなければわからない情報だったからだ。今まで生活していてあまり感じたことのなかったことが考えていたより近くにあったということだ。２つ目は自分が母と同じ立場に立った時同じ行動ができるのかということだ。今と昔では地域の交流に差があるからだ。今、近所の人のことについてどれぐらい知っているとか聞かれれば、まったくと答えるしかないほど交流がない。これを時代のせいだけにするのもあまり良いとは言えないが、交流がしにくくなったというのも事実としてあるだろう。このようなことから私は同じような行動はとれないと考えた。

（３）父の話

阪神・淡路大震災を振り返ると、あの出来事はまさに日本中を震撼させた大災害だったと今でも思う。当時、テレビで流れた被害の映像やニュースを見て、本当に驚いたし、心が痛んだ。自分たちが遠く離れた富山にいても、あんなに大きな地震が日本で起こるなんて、想像もしていなかったから。富山は地震が少ない地域だから、自分たちが災害に遭う可能性が低いと思っていたけれど、阪神・淡路の大震災によって、地震や自然災害の恐ろしさや影響の大きさを改めて感じた。被災地の人々がどれだけ大変な思いをしているのか、そのリアルさが伝わってきたし、その時の報道や復興の様子を見るたびに、自分たちもいざという時にどう備えるべきか、考えさせられた。それから、阪神・淡路大震災がもたらしたのは、地域社会の絆や連帯感の大切だった。被災地の人々が助け合って立ち上がる姿を見て、自分たちの地域でもそういう絆を築くことの大切さを学んだ気がした。災害時には近隣の人たちと協力し合って、助け合うことが何より大切だということを、あの時は感じた。阪神・淡路大震災があったからこそ、日本中で防災意識が高まったし、富山でも地域の防災対策や避難訓練がさらに強化されたと思う。あんな大きな災害がいつ自分たちの身近にも起こるかもしれないという現実を直視し、備えることの大切さを再認識した。阪神・淡路大震災はただのニュースでは終わらせられないと思う。自分たちの生活にも、いつ何が起こるか分からないという不安を背負った時期でもあった。でもその中で学んだことや感じたことは、これから

先の生活や社会で役立つ大切な経験だったと思う。

おわりに

私がこの語り継ぐを通して考えたことは、「はじめに」にも書いたように自分には自分の防災の伝え方があるということだ。この語り継ぐには兵庫生まれではない自分の考えを盛り込んで書いた。そして書いているうちに自分だからこそ考えられる防災に対する考えを持てることに自信を持つことができ、書くこと自体にも自信を持てた。また、この「語り継ぐ」を見る人には兵庫県以外の場所に住んだ時にもその地域の人たちに防災を広める必要があること、大きな地震があった地域となかった地域では全然災害への意識が違うことを伝えたいと思った。最後に私はこれからこの語り継ぐに書いたことに背かないように今後も様々な災害について考え、ほかの地域ではどうなのかについて考えたいと思った。

繋ぐ

武田 倫典

はじめに

私は 30 年前の大震災を経験していない未災者の 1 人である。同じ過ちや悲しみを体験しないために私は語り継ぎをする。過去を忘れないため、そして未来に繋げていく。それが私の役割であると考えている。40 年、50 年と経っていくと、被災した方々がますます減っていつてしまう。記録は残っていくが人々の記憶から消えていくことのないようにしなければならない。近頃に来ると言われている南海トラフ巨大地震やそれ以外の地震に向き合うためである。環境防災科での 3 年間、沢山の方々から講義を受け、まちあるきなどを行った。3 年間の学習を無駄にしない。そのために、未災者の私が、この「語り継ぐ」を執筆していく。

1 祖母の話

当時西区に祖母と祖父、私の母と母の妹の 4 人暮らしだった。午前 5 時 46 分、祖母は朝食の準備をしていた。その時、「ゴー」という音と共に強い揺れを感じた。トラックが突っ込んできたような衝撃だと感じたそう。少し時間が経ってから地震だと分かり、机の下に急いで隠れた。食器が割れたり、本棚も倒れたり、足の踏み場があまりない状態だった。揺れが少し収まったところで、祖母は子ども 2 人が生きているか確認しに行った。2 階で寝ていたので階段を上がらないといけませんが、2 階へ行くのにもとても簡単ではなく、足場を探しながら上がっていった。幸い、本棚や、タンスなど、身長を超えるものはなく、部屋に飾っていた写真が落ち、椅子が倒れていただけであり、怪我はしておらず、今までにないくらい安心したそう。大学の教師をしていた祖父は、すでに家を出ており、祖父の帰りを待ち、庭で外の様子を見ていると、土にはひびが入っており、掘り起こされたかのような跡もあった。外はあまりにも見たことのない光景が広がっており、絶望を感じたそう。約 1 時間後に祖父は帰ってきたが家の周りを見たことのない世界だと言っており、悪い夢だとずっと言い聞かせていた。子ども 2 人を祖父に任せて、祖母は家から歩いて 20 分の職場へと向かった。職場へ着いたところでドアを開けようとしたが、びくともせず、祖母 1 人では絶対に開けられないようになっていた。離れて見ているとドアの左側が少し浮いていて歪んでいることが分かった。仕方なく窓を割って中に入ると、書類などは散乱しており、書類を入れている棚は倒れており、足の踏み場はなく、誰も下敷きにはなっていないことを確認して、家に帰っていった。友人や姉妹には連絡は取れず安否がとても気になったと言っていた。少し落ち着きを取り戻せたのが、8 時ごろだった。外は明るくなり、沢山の人が外にはいたそうで、大きな被害はなかったと言っていた。ライフラインの復旧はすごく時間がかかったという印象はなく、家の中も大きな損壊はなく避難所には入らずに家で過ごしたそう。改めてニュースで見た長田の町は、火の海で、戦争でもあったかのように赤かった。高速道路も倒れて、あの光景は必ず忘れることはないと言っていた。西区の町は他の区と比べると被害は少なく、近所の方にも死者はいなかった。幸い祖母の家の周辺では火事はなく、大きな被害もなかった。しかし、またいつ起こるかわからない大きな地震がとても怖くその日から防災や地震について少しの知識をつけたそう。祖母は地震に強い家というのを目指して、家具の固定や寝室に自分より背の高いものは置かないようにしている。防災バッグも用意している。特に印象に残っている言葉は、「常に最悪の状況を想定して生活をしている」と言っていたことだ。少し日が経った頃、長田区に住んでいた友人が祖母の家に避難してきたが「燃やしてやりたい」と涙ながらに祖母に訴えるように言っていたそう。理由を聞くと、西区は全然被害がなかったため、火の町になった長田と比べると、火事が無かった祖母の家周辺を憎み、悔しかったそう。祖母はどうすることもできず悔しいと言っていた。

2 祖母の話を聞いて

私は、長田の町や高速道路が倒れたその映像が神戸全体で起こっていると思っていた。しかし、少し離れた場所では被害は少ないのだと知れた。西区の話は聞いたことはなく、祖母の話から当時の状況を知ることができた。私は話を聞きながら、祖母の家の周りの状況を想像したり、家の中が大変だったりしたことを想像するととても怖く、冷静さは保てないものだと感じた。町の状態は今ではきれいに戻ったが、また同じような地震が来たときには、強く耐えられる町になってほしいと感じた。私の町では震災当時どのようなことが起きていたのかは分からないが、同じような地震が来た時に、強いまちであってほしいと感じた。そのためには、まず今住んでいる家が強い家なのかを知ること、強いまちに住めているのかを知

ることが大切だと思った。

3 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

私は、中学生の時、舞子高校の震災メモリアル行事に参加した。東日本大震災の語り部である雁部さんの話も聞かせていただいた。その時に環境防災科があることを知った。メモリアルの話の中で、「地震はとても怖い」「少しの揺れでも怖い」と言っていた。その話を聞いて、私は何ができるのか、このまま地震が来て何もできない状態はとても怖いと思った。大きな地震が来た時に少しでも被害を減らせるようにしたいと思い、自然環境と社会環境の関わりについて興味を持った。また、教員になりたいという夢を持っていて、防災とつながるのではないかと思った。そして、テレビで見たボランティア活動で高校生が被災地へ直接行き活動している姿を見て、カッコよくて、たくましいと思った。募金活動では、高校生ができるなんてすごいと思った。環境防災科の生徒は高校生ながら、私には立派な大人に見えた。このようなあこがれもあり入学したいという強い気持ちを持った。

(2) 入学後

環境防災科では外部講師の講義や校外学習もあった。その中で、色んな方からのたくさんの話が聞けた。1年生の時には、様々な職業の方から、阪神・淡路大震災での活動や当時の話を色々な視点から聞かせていただいた。環境防災科だけでしかできない、とても貴重な体験をする機会もあった。2年生の時には、実際火事があった長田のまちを歩き、今の状況と当時の状況の写真を見て、きれいになった場所と当時の状態のまま残っている場所などたくさん歩き知ることができた。私は野球部に所属していたため、ボランティアに参加できる期間が限られていた。私はとても不器用なので、部活動とボランティア活動の両立はとても大変だった。しかし、そのおかげで計画力が身についた。参加できる期間は積極的に取り組むことができた。地域の高齢者をはじめ色々な世代の方々に必要とされることも多くあり、とてもやりがいを感じた。高齢者にはできないことは、私たちにできるという高齢者の方に言われた言葉がとても印象に残っており、高齢者が必要とすることをまず理解する必要がある、さらに気を遣わせないということも大切だとわかった。他には、高齢者への対応、高齢者は体が弱くなっていくので、どのような時に私たちが手伝わないといけないか、どのような時は、高齢者の方ができるかを教えてもらうことができた。

(3) 募金活動

私は募金活動に参加してきた。高校生が行っている募金活動は実際お金を入れてもらえるのか、うまくいくか不安だった。最初は声を出すことに抵抗があった。しかし、先輩が見本になってくれ、私も先輩と変わらず大きな声で募金活動を行えた。まちの方から「がんばってね」や、「ご苦労様」と言ってもらい、たくさんのお金も集まった。その時に改めて地域の人の温かさが伝わってきた。募金活動は地域の方が色々な思いを込めて協力してくださっているのだと感じた。1年生の時には多く募金活動を行い、経験を積ませてもらった。そして2年生になってから、後輩とも一緒に募金活動を行った。最初のころはやはり声を出せておらず、苦戦している様に私は見えた。その時に先輩が言っていたことを思いだした。「声をたくさん出したら、地域の人にも協力してくださる」ということを伝えたと後輩も大きな声を出せるようになっており、後輩の成長も感じる事が出来た。

トルコ・シリア地震での募金活動を三宮で行った際に、違う団体さんと一緒に募金活動を行った。人通りがとても多く、これまで行ってきた募金活動の倍以上の声を出す必要があった。しかし人通りが多い分、多くの義援金が集まった。「頑張ってください」や「雨なのに大変だねお疲れ様です」といった多くの言葉をかけていただいた。募金活動は被災したまちの復旧、復興を願っているものだと思う。今までたくさん募金活動を行ってきて、被災地の気持ちも考えながら活動を行っていくことを一番に頑張った。

(4) 芦屋特別支援学校

私は、芦屋特別支援学校との交流を通して沢山の失敗から2つのものを得ることができた。

1つ目は障がい者と一緒に学ぶことの難しさだ。伝えるということは発表ではないので、ただ知っている知識を言うのではない。そこにとっても苦戦した。ペアの後輩とも試行錯誤し、初めて見た人でもわかりやすいように何度もやり直した。絵や、体で覚えることのできるものを用意した。必要な情報だけを選び、クイズや防災ダックを使いながら、なるべく簡単に伝えることにした。声に出して覚えたり、何回も

繰り返すことで生徒もたくさん答えてくれたりした。実際に体を使ったり積極的に取り組んでくれたりしてくれた。そしてとても楽しい時間はあっという間に過ぎた。最後、教室に出る際に「わかりやすかった。ありがとうございました。」と言ってくれる生徒もいて、「また来年も来てな」と言ってくれる生徒もいた。沢山練習をして、試行錯誤を繰り返した結果がこのように生徒に感謝される結果に結びついたのだと思った。普段私は教えてもらう立場だったが、初めて様々な問いかけをする立場になった。障がいがある生徒なので、ただ言葉で伝えることや、一緒に考えることは難しかった。多くの時間をかけて練習した甲斐を感じ、これからも生徒に伝えたり、私が誰かに何かを教えたりする時は、多くの時間を要して、いい授業を作り、感謝されるように頑張りたいと思った。

2つ目は、教員の大変さを知れた。教員はとても楽しい職業だと思っていた。だが、授業を行う準備がとても簡単なものではないとわかった。私は50分1回の授業を作るために多くの時間を費やした。これが毎日6時間の授業だと考えると教員は楽しい反面、このようなしんどいこともできる人がなれるのだと知れた。

芦屋特別支援学校との交流・共同学習は、私にとって障がい者への勝手な思い込みが間違っていることや、障がい者の避難行動など多くの面で勉強になった。社会全体でも、障がい者への大きな偏見を無くして行く必要もあると感じた。芦屋特別支援学校は私にとって、成長のできる場であり、教員の大変さを学ぶことができた。この経験を将来、教員になった際にもつなげたい。

（５）防災と教員

私は教員になって、多くの生徒が自分の命を自分で守れる人になるように指導していきたい。高校生のうちに防災の基本的な知識を教えて、大きな地震、津波などが来た時に、物怖じせず正しい行動をとれるようになり、学生や、若者を1人でも多く救えるような教員になりたい。そして、生徒自身が家族や大切な人を守れるようになってほしい。教員という立場で、沢山の知識だけではなく、防災に興味を持ってもらえる生徒を多くしたい。そのような生徒を多くしていくと、被災することはあったとしても最小限にとどめることも可能だと思う。阪神・淡路大震災、東日本大震災などの背景を知り、同じような失敗を繰り返さないように何ができるのか、生徒と考えていきたい。未災者は多くなっていく一方で、阪神・淡路大震災を始め多くの災害が風化していくことがあってはならないと思う。だから、未災者である私もだが、未災者に阪神・淡路大震災について繋げていく。次に来ると言われている南海トラフ巨大地震のための準備だと思うからだ。

（６）南海トラフ巨大地震と教員

私は、教員になり、これから来ると言われている南海トラフ巨大地震について、教員ができることについて考えた。この地震では、多くの被害が出ると予測されている。30年以内の発生確率は80%程度に引き上げられた。ある地域では30メートルを超える大きな津波が来ることも予想されている。神戸市では震度6強と予想されている。震度6強は這わないと動くことができない状態だ。もしこれが授業中や学校にいるときに起きてしまったら、私は生徒全員が無傷で生き抜くことは難しいと考えている。だから地震が起きる前に私が正しい情報を伝えなければならない。だから私は教員という立場で、生徒を一人残さず助けられるようになる。いざ起きた時に、未知の状態では何もできないので、日頃から教員という立場で、生徒に防災力をつけるように指導していきたい。そして生徒自ら、自分の命は自分で守れるような生徒を育てたい。そうすると生徒自身は、自分の周囲の人だって助けることも可能だと思う。私は教員として出来ることはすべてしたい。私自身は周りの人を助けないといけない立場だと考えている。まずは日ごろから、防災教育をすることは大切だと考える。自然災害の怖さを知ってもらう。過去の震災から、同じことを繰り返さないように過去を振り返ることは大切だと考える。また、避難訓練も大切だと考える。色々な災害に備えて避難行動を確認しておく、災害が起きた時に、すぐに行動を起こすことができるのでしっかり教えたいと考えている。

おわりに

私は「語り継ぐ」を執筆して、私自身の中での防災のあり方をもう一度考えた。阪神・淡路大震災についても私の中でまだまだ知らないところがあった。未災者である私たちは、阪神・淡路大震災を経験した人がいなくなっていく中でこれを風化させてはいけないと思った。だから、未災者の私が色々な人の話を繋げていく必要があると思う。阪神・淡路大震災や、東日本大震災、これまでの災害で起きた被害をもう起きないようにするためにもこの語り継ぐはとても大切だと思う。次に起こると言われてい

る、南海トラフ巨大地震へ向き合うことは今からでも遅くないので、少しでも被害を減らせられるようになりたい。それを将来、教員という立場で生徒に伝えられるようになりたい。まだまだこれから勉強をしていき、防災の知識についても深めていく必要もある。この3年間はすごく短く感じた。次のステージでも、「語り継ぐ」ことを大切にしていき、同時に一日一日を大切に生きていこうと思った。誰かが伝えてくれる、繋いでくれるのではなく、私が次世代に繋げていこうと思う。これが私の使命であり役割だと考えた。

共に語る

寺川 侑那

はじめに

30年を迎えた阪神・淡路大震災を風化させないために、実際に体験していない私たちも次の世代へ継いでいく必要がある。実際に被災された方々のお話を聞き、災害の恐ろしさや思いを知り、未災者の私たちがその「語り」を継ぐことが、私たちにできることであり、お話を聞いた私たちの使命だと思う。このような思いで「語り継ぐ」を執筆する。

1 阪神・淡路大震災

(1) 母の話

母は当時神戸市西区に住み、西宮で働いていた。三連休明けの朝、そろそろ起きようと思っていた時だった。下からドンッという衝撃があり、怖くてすぐに布団を被った。揺れが収まり部屋を見渡すと物が散らばり、ピアノが飛び跳ねてキャスターがピアノの足に食い込んでいた。そこからの生活はとても大変で、ライフラインがすべて止まった。電気はすぐにつき、ガスはプロパンガスだったおかげで、1週間ほどで復旧した。しかし水道は復旧するのが遅く、トイレやお風呂、飲み水に困った。水道が使えるまで近くのため池に水を汲みに行き、トイレはそれで流していた。飲み水は加古川方面まで買い出しに行き、生活をしていった。お風呂は数日後に近くの銭湯が無料開放して、1時間ほど並び、入ることが出来た。しかし、シャワーは多くの人で並ぶことが出来ず、内風呂のお湯で頭や体を洗った。ゆっくりはできなかったがほっとし、すっきりすることが出来た。

母の家は被害が小さかったため、灘区に住んでいた親戚家族2世帯と明石に住んでいた1世帯が避難し、4世帯15人が1家族1部屋で少しの間一緒に暮らすことになった。ご飯を大人数分作ることや、いつでも避難できるように私服で寝るなど、普段と違う日常で必死だった。

仕事場がある鳴尾浜は液状化現象の被害が大きく電車も使えないため、本社がある兵庫区まで原付バイクで1時間かけて出勤していた。約1週間後、電車と代行バスを乗り継ぎ3時間かけて西宮の仕事場に通った。電車から代行バスへの乗り場まで倒壊した建物の横を歩いて行った。建物には、「ここに人が埋まっています」「無事です」などの張り紙が貼られていた。それを見たとき、なんとも言えない気持ちになり、現実ではなく映画で見た戦争後のような信じられない光景で、人間の無力さを感じた。

この地震が発生するまで防災や減災という言葉を知っていたことはなく、学校で行う避難訓練は火災時の避難訓練しか経験していなかった。母はこの地震を経験してから、お風呂の水はその日には流さず、次の日に流すようになった。

(2) 母の話を聞いて

これまでも少しは母の被災した体験を聞いたことはあったが、詳しく聞いたのは初めてだった。母の災害時の思いも知ることが出来た。今回身近な人からお話を聞き、これまで以上に災害を身近に感じた。たくさんの方のお話の中で、家具が飛んでいくほどの大きな地震だったとしっかりと想像することが出来なかった。しかし、今回何度も行ったことがある祖父母の家で、家具や部屋がどのような状態になったのかリアルに想像することができ、改めて災害の恐ろしさを感じる事が出来た。

また、防災訓練の大切さやライフラインの備えの重要性を知ることができ、今取り組んでいる防災をもう一度見直したいと思う。母だけでなく、やはり実際に被災された方からお話を聞くことは大切で、この貴重なお話は次の世代に継いでいかなければならないと思った。

2 環境防災科として

(1) きっかけ

私は舞子高校に環境防災科があると知り、出前授業やボランティア活動などから多くの人とかわり、防災を学ぶことが出来ることに興味を持った。そして学校説明会で「防災はすべての生活につながる」という言葉を聞き、将来の夢である警察官に必要なものの1つが防災であると感じた。そして、社会に必要な防災力・減災力を学びたいと思い、環境防災科に入学した。この言葉が防災を学ぼうと思ったきっかけであり、今でもすべての生活につながる防災を考え、出前授業やボランティア活動に取り組んでいる。

(2) 学んだこと・身についたこと

私がこの3年間で学んだことは防災・減災だけではなく、命の尊さや人とのつながりの重要さだ。過去の災害を学んでいくうえで、恐ろしさを知り被害状況を知ると、命の尊さを感じた。そしてそこから防災を学び、人とのつながりがあるからこそ、お話を聞くことができ、これからの防災につながると思った。

阪神・淡路大震災でも地域の人同士で助け合う「共助」で多くの命が助かったと知り、地域のコミュニティをより一層深めたいと思った。そして、この3年間で身についたことは主体性だ。ただ指示を待つだけではなく、自分自身で考えて責任をもって行動に移すことが出来るようになった。この主体性はボランティア活動や出前授業などで養い、それぞれの活動で主体的に行動することができた。

(3) 出前授業

私はこの3年間でたくさんの出前授業に参加させていただいた。私が出前授業に行くときに大切にしていることが2つある。1つ目は継続して行くことだ。継続して参加することで、反省点などを次の授業では改善でき、1回1回より良い授業ができるようになる。2つ目は本番直前まで準備を怠らないことだ。準備は毎回完璧にするがそれだけで満足はせず、何度も改良し、直前まで一番良い授業を考えることだ。

私は特に年に3回ある南あわじ市の出前授業に取り組んだ。南あわじ市の地形は私が住んでいる街と特徴が違い、それぞれの場所でその土地や、予想される災害や被害にあった授業をするのにとっても苦戦した。しかし仲間と話し、何度も打ち合わせやリハーサルを行い、その地域にあった授業を行うことが出来た。また、小学校や中学校で災害時にできることや、ためになることも変わってくるため、小学校の低学年・高学年には伝え方を変えるなどを工夫し、それぞれにあった出前授業を行うことが出来た。そうすることで楽しく、分かりやすく学んでもらえると思う。

私は出前授業を通して、私たちが若い世代に防災を伝えることで、防災をもっと身近に感じてもらい、興味を持ってもらいたいと思う。私たちが防災を広めていくことで少しでも防災に興味を持ってもらい、防災は難しいものではなく、身の回りの簡単なことから始められるということをこれからも伝えていきたい。

(4) こばと聴覚特別支援学校との共同学習・交流授業

私は毎年こばと聴覚特別支援学校(こばと)での交流授業に参加させていただいた。こばとには、聴覚に障がいがある子どもが通っており、手話やジェスチャーなどを使い、防災を楽しく学べる工夫をたくさんした。交流授業の事前に手話を覚えることや、動きの確認などをしていたが、リハーサルでは上手に出来なかった。そこで先生方にアドバイスをいただいたことは、表情だ。私は手話やジェスチャーのみで伝えようとしていたが、それだけでは正確に楽しく学んでもらうことが出来ないと気付いた。そこからは、手話を正確にすることだけにこだわらず、私たちの表情を豊かにし、「楽しい」や「怖い」などの表現をできるようにした。そして、正しい防災を楽しく学ぶ機会となった。

こばとの子どもたちとの学習の中で、自分自身も「聴覚障がい」の特性を知ることが出来た。実際に使っている教室を見させていただくと、すべてが目に見えるようにポスターや張り紙があり、工夫がされていた。この工夫を知ること、聴覚障がいの方への対応を学ぶことが出来た。

そして、防災を学んでもらうだけではなく、障がいがある方の災害時の対応や避難所生活などを考えるきっかけを私もらい、それが共同学習の意義だと思う。災害時にもこばとで学んだことを活かし、これからもどんな人でも困らず、過ごしやすく、助け合いができる環境を作りたい。

(5) ひまわり防災楽習迷路

私はこれまでのボランティア活動の多くの場面で「ひまわり防災楽習迷路(ひまわり迷路)」を使用し、たくさんの人に楽しく防災を学んでもらった。ひまわり迷路は「NPOひまわりの夢企画」から譲り受けたものだ。この迷路は、行き止まりを見つけながら防災のクイズを解き、ゴールを目指していくものだ。迷路という子どもから大人まで広い世代が楽しむことができる遊びを活かしながら、深く防災を学ぶことが出来る。

特に小さい子どもでも防災を知ってもらうことができるのが、ひまわり迷路の最大の魅力だと思う。ボランティア活動でひまわり迷路をしている際、小学生の子に付き添って一緒に防災迷路をしたことがあった。その時に小学生がクイズの問題が分らなかったのも、ヒントを出していくと解くことができ、

とても喜んでもらえた。その時に、「防災」は難しいというイメージを消し、誰でもできるすぐにできることを伝えることが、私たちがひまわり迷路をしていく中で大切なことだと感じた。

ひまわりの夢企画の荒井さんがひまわり迷路を私たちに継いでくださったように、私も次の世代にひまわり迷路の魅力や、大切にしてほしいことを繋いでいきたいと思う。

（６）東北訪問

私は１年生の時に東北訪問をさせていただいた。東北訪問で印象に残っていることは大川小学校でのお話だ。大川小学校では学校のマニュアルや判断のミスから多くの生徒と先生方の命が津波によって奪われた。大川小学校では娘をなくされた佐藤敏郎さんに、災害時と変わらないままの小学校の前で話していただいた。最初に小学校を見たとき、驚きと悲しみと恐怖で言葉が出てこなかった。また、生徒がここで学校生活を送っていたことを想像することができず、信じることもできなかった。佐藤敏郎さんから、自分の子どもが実際にこの小学校で勉強をし、走り、毎日を過ごしていたというお話をしていた時、私は教室の形や崩れそうな渡り廊下を見て、本当にここは小学校で生徒と先生が当たり前のように生活していた場所だと感じる事ができた。私はこの時、普段通りの生活を送れることはありがたいことだと思った。一つの災害で、一つの判断で、一瞬にして当たり前の生活を奪い、「行ってきます」から「ただいま」の声がないことがどれだけ悲しいことであるかと考えた。そして、災害の恐ろしさを改めて感じ、二度とこのような過ちはおかしてはいけないと思った。このような出来事をこれから起こさないために、しっかりとした学校のマニュアルを決め、「想定外」を「想定内」していくことが子どもの命を預かる学校が行うべき防災だと思った。また、マニュアルだけにとらわれすぎず、先生や生徒も冷静に素早く正しい判断ができるような防災教育をし、命を守る知識をつけていくべきだと思った。

私はこれからも過去の災害を知り、それらを教訓として二度と同じ被害を出さないために防災を広め続けたいと思う。

３ 夢と防災

（１）きっかけ

警察官になりたいと思ったきっかけは、小さい頃からテレビに映る警察官を見て憧れたことだ。今は憧れだけではなく、防災に力を入れ、地域の安全を守り、警察官として犯罪に直接向き合い人々を守りたいと思う。私は、警察官の中でも、鑑識官になりたい。鑑識官の主な仕事内容は、犯罪の現場から、犯人の手掛かりとなる指紋や足跡などを捜して犯罪を証明することだ。自分自身が痕跡などの証拠を採取し、声なき被害者の情報を得て犯罪が解決し、社会の役に立てるところを魅力に感じた。

（２）警察官として

私は警察官になり地域の方が安全に暮らせるように積極的に地域活動を行い、防災について身近に感じてもらえるような活動をしたい。例えば、避難訓練の大切さを伝えることや、警察官としてイベントなどに積極的に参加し、幅広い世代に正しい災害時の行動や防災の身近さを広めたいと思う。そして、万が一災害が発生した時には、救助活動だけではなく、災害後の被災者の心に寄り添える警察官になりたい。直接現地でお話を聞き、少しでも安心感を抱いてもらえるような環境をつくりたい。また、鑑識官は災害で亡くなった方の自宅で指紋を取り、遺体と照合するという仕事がある。普段指紋をたくさん採取している鑑識官にしかできない仕事だと思う。しっかりと責任感を持ち、一人でも多くの亡くなった方が家や遺族のもとへ帰れるように努めたい。

おわりに

私は環境防災科に入学し、３年間防災のことを考え、多くの人と関わり、防災や減災の大切さを学んだ。たくさんの方からお話も聞き、自分にできることは、過去の災害を学び、その災害からの教訓を私たちが防災につなげ、広めることだと思った。広めるにはたくさんの方がいるが、どのような形でも、被災された方の思いは大切にし、語りを継いでいきたい。

私には１つ決めたことがある。それは、防災を考え続けることだ。この３年間で災害は他人事ではなく、自分事として捉え、防災を身近に感じる事が大切だと感じた。だからこそ、どんな場所でどのような状況でも防災はすべての生活につながり、生活の一つであると考え、幅広い世代の多くの人に防災

をもっと身近に感じてもらえるように、広めていきたい。この決めたことを続けていくことで「語りを継ぐ」ことができ、語ってくださったことを継いでいくことが、「共に語る」の意味だと思う。

語り継ぐ思い

長友 直輝

はじめに

阪神・淡路大震災から 30 年になる。震災を体験していない世代が増える一方、震災当時の記憶が風化している。この風化を止めるために私には何ができるのか、今後どのように語り継いでいくかを考えながらこの「語り継ぐ」を執筆する。

1 阪神・淡路大震災での父の被災体験

(1) 発災前

父が高校生の頃、震度 4 程度の地震が頻繁に発生していた。当時、地学の先生は京都大学出身で、「六甲山の造山運動」について研究していたそうだ。先生はよく「千年に一度、六甲山の造山運動で巨大地震が起こる。その周期がもうすぐだ」と話していたらしい。父はその話を思い出し、震災前に貴重品を枕元に置くようにしていた。震災直前の年末頃から、テレビを見ているとノイズのようなものがよく映り、水を入れたコップが少し揺れることもあった。今思えば、これらは地震の前兆だったのかもしれないと感じる。

(2) 発災直後

1995 年 1 月 17 日、午前 5 時 46 分、地震が発生した。そのとき、父は寝ていたが、「ゴー」という唸るような音と激しい揺れを感じ、飛び起きた。近所の知人が「他国が攻めてきたのか」というほどの衝撃だったという。起きた父がテレビをつけても、「阪神間で大きな揺れがあったが、神戸周辺の詳しい震度はまだわからない」という情報しか流れていなかった。近くの踏切が鳴り続ける中、出勤しようとしていたサラリーマンたちが引き返してくる様子を見て、電車が止まっていることに気づいたのは、午前 7 時頃のことだった。7 時のニュースで初めて「神戸で震度 6 を観測」という情報が流れ、それを知った父は、西宮に住む母親（私の祖母）に連絡を試みたが、電話は繋がらなかった。当時、父は明石市の魚住に住んでいたが、すぐに祖母のもとへ向かうことを決意した。

(3) 母親の安否確認

祖母のもとへ向かう際、父はコンビニエンスストアで食料を買い込み、山麓バイパスを經由して三宮へ向かった。三宮に到着すると、立ち並ぶビルが倒壊しており、激震の爪痕が生々しく残っていた。その光景を見た父は、恐怖と不安を感じるとともに、街全体に殺伐とした雰囲気立ち込めているのを感じた。西宮へ向かうために国道 2 号線に向かったが、そこは通行止めになっていたため、国道 43 号線から進むことにした。ようやく到着すると、祖母は無事だったが、家に向かう途中、周囲の家屋が倒壊しているのを見て、父は不安に苛まれていたという。

(4) 安否確認後

祖母の安否を確認した後、父はそのまま祖母の家に泊まることにした。翌朝、外で水の流れる音が聞こえたため、元をたどってみると、水が出る蛇口が見つかった。父がそこで水を汲んでいると、一人のおじさんが近づいてきた。父が「ここは水が出るんですね」と声をかけると、おじさんは「チッ」と舌打ちをしたという。翌日、その場所を再び確認してみると、すでに長蛇の列ができていた。近くの人に話を聞くと、どうやらその蛇口はマンションの貯水槽から水が出ている場所だったらしい。あのおじさんは、おそらくそのことを知られなくなかったのだろう、と父は思った。

(5) 掘り出したご遺体と警察官

発災から 2 日後、父は難区にいる知り合いに会いに行った。そこで「まだあそこの家に人がいるらしい」という話を聞き、現場に向かうと、瓦礫の中からおじいさんのご遺体が見つかった。すでに硬直していたが、周囲で瓦礫を除け、外に出した。父は警察に連絡したが、「検視のためそのままにしておいてほしい」と言われた。しかし、そのままではいけないと思い、せめてもの思いで布団を掛けた。しばらくして警察官が到着し、「近くの安置所にご遺体を運んでほしい」と依頼されたため、父は他の人たちと一緒に担架に乗せて運んだ。しかし、途中で警察官が戻ってきて、「安置所がいっぱいで、元の場所へご遺体

を戻してほしい」と伝えられた。その後、ご遺体の安置所が見つかるまで、警察官はそばで待機することになった。父はその警察官に話しかけ、「家族の安否はわからないが、職務が優先です。ここで待機するしかありません」と聞かされた。その後警察官は12時間ほど待機していたため、父は缶コーヒーを差し入れた。

2 父に話を聞いて

父の話を聞き、警察という職業の重責と、非常時に人がどのような行動を取るのかについて深く考えさせられた。警察官は大規模災害が発生した際、所属する部署に関係なく被災地へ派遣される。そのとき、職務が最優先されるため、自分の家族や友人の安否確認は後回しになってしまう。そのような状況で被災地で活動するのは非常に辛いことであり、自分が被災者であればなおさら、その負担は計り知れない。だからこそ、警察官として働くことは非常に大きな責任を伴い、精神的にも大きな負担を強いられる職業なのだと痛感した。また、人が極限の状況に置かれたとき、どのような行動を取るのかについても少し理解できたように思う。たとえば、(4)の話のように、水が出る場所を独り占めしたくて、他人に気づかされると舌打ちをする人がいる。生存本能が働くとどうしても自分を優先する考えに至るのは当然かもしれない。しかし、そのような状況においても冷静であることや他者との共存を考えることが大切であり、私たちもそのような対応ができる心構えを持つ必要があると感じた。

3 環境防災科で学んだ3年間

(1) 入学した経緯

私は小さい頃から警察官になることを夢見ていた。警察官を目指す中で、地域や街を守るためには、私自身や地域全体が災害について正しい知識を持ち、災害時に発生する事件や事故に対して臨機応変に対応できる力が必要だと考えるようになった。しかし、どのようにして災害について学び、そのような対応力を身につければよいのか悩んでいた。中学3年生のとき、進路について真剣に考えていたときに舞子高校の環境防災科の出前授業に参加する機会があった。その授業では、年の近い高校生たちが私たちに授業をしてくれた。彼らは自信に満ちたはきはきとした声で授業を進め、トラブルが起こっても臨機応変に対応した。その姿を見て、私は環境防災科に強い興味を持ち、調べ始めた。調べていくうちに、環境防災科では、災害や防災についての専門的な授業のカリキュラムがあり、さらに様々なボランティア活動を通じて防災の重要性を広める活動も行っていることを知った。このことを知り、私は、警察官になるために必要な知識とスキルを身につけたいと思い、環境防災科への入学を決意した。

(2) 環境防災科で学んだこと

環境防災科に入学してから、さまざまな分野の専門家から防災について学ぶ機会が多くあった。その中で、防災に対する自分の考えを改める機会もたくさんあった。専門家の方々のお話に共通していたのは、「命の大切さ」についてだった。小さい頃から「命は大切だ」と教わってきたが、なぜ命が大切なのか、自分なりに答えることができなかった。授業では、自然災害のメカニズムや過去の大規模災害について学んだ。また、外部講師の方々から実際の体験談を聞くことで、自分の命や周りの人々の命について考える機会が増え、「命」について深く関心を持つようになった。命は一つしかなく、その一つを失えばすべてが終わってしまう。だからこそ、今、自分がどう生きるのかを真剣に考えなければならないと感じた。さらに、自分の命を守るためには何が必要か、また他人の命を守るためにはどうすればよいのか、今後も引き続き自分なりの答えを探し続けていきたい。

(3) ボランティア活動を通して

環境防災科では、環境防災科特有の授業があり、今まで教わらなかったことが多かった。その中でさらに、自分で新しく学ぶことや整理しなければいけないことが多くなった。授業内では必死にメモや板書を取り、家に帰ればその日に学んだことの復習やまとめを行う。講義があった日には、その講義内容をまとめたレポートを作成する毎日であった。この日常で行うボランティア活動は非常に大変なものであったが、そこでしか得られないものがたくさんあった。その中で特に感じたことは、自分の限界である。授業にもなれ少しずつ災害や防災に関する知識が増えてきた頃にテスト期間にあるボランティア活動に参加した。当初は、ボランティア活動とテスト勉強を両立すればいいと軽く考えていたが、そう甘くはなく、自分の睡眠時間を削り何とかやりくりしていた。当時のことを思い出してみると自分で何とかしなければいけないという使命感にも駆られていた。その後行ったボランティア活動は成功することができた

が、自分の限界に気づかず、次の日に体調を崩してしまい学校を休んでしまった。そこで自分の手に負えないことは仲間と協力して解決することの大切さを私は深く痛感したのである。仲間に相談していればこのようなことにはなっていなかっただろうし、よりよいものになっていたように感じる。

4 将来の夢

(1) きっかけ

私が小学3年生の頃、落とし物を拾い、近くの交番に届けたことがきっかけで、警察官という職業に憧れを抱くようになった。ある日、友人と遊んでいた際に、大学生の学生証を拾った。子どもながらに学生証が重要なものであると感じた私は、友人に無理を言って、近くの交番に落とし物を届けることに決めた。交番に到着し、拾った学生証を警察官に渡すとき、私は非常に緊張していた。しかし、対応してくれた警察官は、私が緊張していることを理解し、優しい口調と笑顔で接してくれた。その警察官の温かい対応により、私は次第に落ち着きを取り戻し、質問にも一生懸命に答えることができた。落とし物の手続きを終え、交番を出るときには、その警察官に対して強い憧れを抱いた。小学3年生のときに抱いた憧れは、今でも消えることなく、私が目指す警察官像は当時の交番で対応してくれた警察官である。警察官になるという夢は、その出来事によってさらに強固なものとなった。この経験こそが、私が警察官を目指すきっかけとなった重要な出来事である。

(2) 夢と防災

警察官として働くうえで、防災は密接で不可分な関係にある。警察官は、その責務として「個人の生命、身体及び財産の保護に任じ（中略）公共の安全と秩序の維持にあたることをもってその責務とする」と警察法第二条第一項に記載されている通り、市民の安全と秩序を保護することが職務である。また、各警察官は交通課や刑事課などの部署で勤務し、交通の取締りや被疑者の逮捕など、その勤務場所が担当する警察活動を行う。しかし、大規模災害が発生すると、勤務している部署に関係なく被災地へ派遣される。そのため、普段から警察官はいつ起こるかわからない災害に対して十分な準備をしなければならない。私は環境防災科で学んだ知識をもとに、災害派遣を任じられた際には現地で活躍できる警察官になりたいと考えている。また、現地に行けない場合でも様々な形で支援できるように、努力し続けたいと思う。私にはもう一つ叶えたい夢がある。それは駐在所に勤務し、勤務先の地域並びに社会全体の防災力を向上させることである。私は東灘マスターズ会という、50歳以上の中高年男性を中心に地域を活気づける活動を行う会に参加する機会が多くあり、私より年齢が上の方々と接することが多かった。ここで地域の方と密接に関わり、頼られる警察官として働きたいと感じたのが、この夢を目指すきっかけである。駐在所というのは、離島や過疎化された地域など、いわゆる田舎と呼ばれる場所に常駐する場所であり、警察官がその地域に住みながら働く場所でもある。駐在所で勤務する警察官は、地域住民から親しまれやすく、住民からの要望や管内の実態を把握しやすいという利点がある。そのため、私は駐在所勤務を目指している。また、駐在所勤務は単独勤務のため、自分の意思で地域とどのように関わるかを考えることができる。この利点を生かし、地域で防災の講座を開いたり、防災イベントを実施したりするなど、防災の啓発活動を積極的に行いたいと考えている。このような活動を続けることで、社会全体にも活動が広がると信じている。このような夢を持ち、様々なことに挑戦していきたいと考えている。

おわりに

「語り継ぐ」の執筆にあたり、語り継ぐうえでの責任について考えながら執筆を行った。父から震災体験の話を聞く際に、語り継ぐことや伝えることの重要性を理解しつつも、人によっては忘れた記憶を持っている場合もあるという話を聞いた。人が体験したことを語るということは、大きな責任を伴うものであると知った。そのうえで、この「語り継ぐ」を執筆するにあたり、多くの感情を抱いた。自分が本当に語り継いでよいのか、語ることによって不快な思いをする人がいるのではないかという不安があった。しかし、私はこの「語り継ぐ」を最後までやり遂げたいと考えている。それは、語ってくれた内容を後世に伝えることだけでなく、一つ一つの行動に責任が伴い、人命を左右する職業である警察官として働くうえでも必要なことであるからである。また、この「語り継ぐ」の執筆が終わった後も、将来的に防災について関わり続けたいと考えている。ただ防災に関わるだけでなく、自分なりの防災について今後とも模索し続けたいと思っている。

未来を守る責任

永瀨 翔太

はじめに

阪神・淡路大震災が起きて 30 年になる。阪神・淡路大震災を経験していないが、神戸で生まれ、神戸で育ち、環境防災科に入学した者として阪神・淡路大震災という大災害を、風化させずに次の世代へと語り継ぐ責任が私にはあると考える。

私は、語り継ぐことで、人の命を救うことができると思っている。なぜなら、語り継ぐことで、色々な人たちに阪神・淡路大震災の悲惨な出来事について知ってもらい、被災者の気持ちを理解してもらうことで、災害への危機感が強まり、防災意識の向上につながると考えたからだ。「語り継ぐ」を読んだ人の命を救うためにも私は語り継ぎたい。

1 阪神・淡路大震災の被災体験

(1) 母親

神戸市垂水区塩屋町のマンションの 5 階に住んでいて、高校 1 年生だった。両親と本人（私の母）、妹の 4 人家族で暮らしていた。

驚きすぎてあまり覚えてないが、怖かったという気持ちだけは鮮明に覚えている。両親だけ起きていて子どもは寝ていた。どんっという音と同時に起きてとても揺れ、この揺れはやばいと思って、一緒に寝ていた妹の上にすぐ覆いかぶさって布団にくるまった。余震に長い間おびえて、中腰になって動いていた。すぐに母と父が来てくれてリビングに行ったら、食器棚から食器が出ていてたくさん割れていた。スリッパをすぐ履いて動いた。どういった対応をすればよいのかわからなかったため、外には出ずに家にいた。被害があまり無かったため、避難はしていない。時間が経ってから家を出たらマンションにヒビが入っていた。周りの家も見ただけはあまり被害がなかった。そこからは怖すぎて逆に覚えていないようだ。電話とかも繋がらなかった記憶があるそうで、線路がぐにゅぐにゅで電車は通ることができず歩いて高校に行った。家が潰れて、家の便器などが丸出しになっていて、変わり果てた須磨の町の姿に驚いた。コンビニになにか買いに行っても何も無かった。ライフラインが止まり、お風呂に入れなかったため、銭湯に行ったけど、たくさんの人が並んでいて苦労した。プロパンガスの人はお風呂に入れた。妹が中学 3 年生だったが、受験が無くなり、受験生にも影響を及ぼした。

(2) 父親

神戸市須磨区（東須磨）のマンションの 2 階に住んでいた父は、19 歳で働いていた。両親と本人（私の父）、姉の 4 人家族で暮らしていた。

父は仕事でもう家を出ていた。私の父は前日の仕事の終わりの時間が遅く、家で寝ていた。揺れで起きなくて、母に「地震や！」と言われて起きた。タンスが自分の足元にひっくり返っていて、家がぐちゃぐちゃになり、食器棚がひっくり返ってガラスまみれになっていた。母が泣きそうになって寄ってきた。姉と同じ部屋で寝ていて、姉は怯えながら布団にくるまっていた。余震もとてもあって、怖かった覚えがある。歩くところがなくて自分だけ家の玄関まで行って、家族分の靴を持っていった。そこから窓から出たのは覚えている。その後はパニックで覚えていないようだ。家を出ないといけなそうと思って 3 人で家を出て、隣のマンションを見ると、1 階が潰れて、斜めになっていた。そのマンションに火がついていて近くの人が「消火器もってこい！」と言っていてマンションにあった消火器を持ってきて初期消火を一緒にした。消火がとても大変でみんなで協力して火を消した。小さい消防車がきて、消火栓のホースを 2 本置いてどっかに行ったが、消火栓の水が断水されていて、そのホースは意味がなかった。その後、駐車場に行き、自分の車の所に行った。けれど駐車場の地面もぐちゃぐちゃで車が出せなくて、家族 3 人、車で一日をすごした（暖房をつけていた）。夕方に父が来て合流して、2 つの車で過ごした。次の日ぐちゃぐちゃの家に帰って、食パンとか余っているものを家で食べて、使えそうなものを車に持って帰った。その時避難所にはまだ行っていない。車のガソリンがなくなって暖房が使えなくなった。1 週間後にやっと自衛隊が来て、プールみたいなお風呂を持ってきて、カセットコンロや大阪コテコテ焼きそば、カンパン、サトウのごはんとかが配られた。配給されるまでは、ぐちゃぐちゃになった商店街の中の店に入って食料を探したり、自動販売機を倒して、ジュースを出したりして生きるために必死に生きていた。新聞屋のカブ（バイク）と郵便局のバイクがたくさん盗まれていた。燃費がいいからという理由でみんな盗んで

どっか離れた場所に行っていた。警察がそんなのを取り締まっている暇がないからそれでも捕まらない状況だった。警察がいらないから犯罪が増えていた。潰れた家からの盗難が多く、無法地帯だった。お風呂は明石とかの銭湯に行き入っていた。地震発生から4日目ぐらいで避難所に行って、避難所でお風呂係のボランティアをした。お風呂入りたい人に番号札を渡すボランティア。なんかしないといけないと思ってた。お風呂で順番抜かす人も出てきた。家に帰ろうとしたら赤の紙が貼られていた。(要注意が黄色で危険が赤色) 仕事にも行けずに避難所に2日、3日ぐらいた。その後、父と一緒に長田周辺に行き、ぐちゃぐちゃになっている長田を見て驚いたそう。避難所から家に帰ったのはいつか覚えていない。

2 話を聞いて

私は父と母が共通して言っていたことは、地震が起こってとても怖くて、そんな鮮明に覚えていないということで、どちらも恐怖で頭がいっぱいだったということだ。地震が起こって、生活が一変して当たり前前に過ごしていた日常が、阪神・淡路大震災によって壊されて、災害の怖さを改めて知ることができた。父の住んでいたところはマンションが傾き、家の中がぐちゃぐちゃで歩けないぐらい被害がすごくて、食べ物もなく商店街の中を漁ったというのを聞いて、本当のリアルな話を聞くことができて聞いたことを語り継ぐに書くだけでなく、これから自分の口から伝えていきたいと思った。

3 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

私が環境防災科に入学しようと思ったきっかけは、小学生の頃に授業で阪神・淡路大震災の動画を見て、消防士が火災に巻き込まれながら人々の救助活動をしていて、自分の命よりも困っている人を優先する姿にあこがれを持ったことだ。

消防士になって困っている人を助けるために何をすればいいのか、と考えたときに、災害や防災についてもっと深く学び、知識をつける必要があると考えた。この考えを持ちながら、高校を探していて見つけたのが環境防災科だった。環境防災科では過去の災害のデータから災害や防災に関する知識を得ることができたり、実際に消防学校体験に行ったりして、人の命を救う術を身に付けることができることを知った。環境防災科に入学することが消防士になるための第1歩のなると考え、環境防災科に入学することを決めた。

(2) 印象に残っているボランティア

私が印象に残っている活動は、令和6年能登半島地震の被災地支援活動だ。令和6年1月1日に起きた能登半島地震の被災地域での災害ボランティアとして活動させていただいた。

舞子高校環境防災科から9人の生徒、4人の先生が参加した。参加日は災害発生から約3か月後の3月16日～3月19日の3泊4日で、1日目の16日と最終日の19日は移動に費やした。主に活動したのは、17と18日の2日間である。

活動場所は、石川県志賀町と七尾市。活動内容は依頼者の家に行き、がれきの撤去や災害ごみの片付け、運搬などであった。

ボランティア初日の17日は、志賀町で活動を行った。自分が何をすればいいのか、どこに行けばいいのか、全てがわからない状況で作業に取り組んだ。サポートできる場所はサポートして、自分なりに判断して自分の役割を理解して行動することができた。飲食店で作業をしたときに、飲食店は、普通の家よりも、食器が多かったり、冷蔵庫が大きかったりして被害が大きかった。そのため、人数がとても必要になるが、そこに人数をかけていたら、他の依頼の場所が作業できなくなることが分かって、ボランティアの人数が不足していて、もっと必要だと感じた。慣れないことをする大変さやしんどさを身にしみて感じて、慣れない生活をしている被災者の方々がどれだけ苦労しているのかをほんの少しは理解できたと思う。

2日目は志賀町のグループと七尾市のグループで分かれて活動を行った。私は、七尾市で活動した。活動が始まると、ボランティアリーダーという役を任されて、正直できると思っていた。しかし、いざ、依頼者に電話をかけたり、メンバーに指示したり、本部に無線で連絡をしたりして、やることはたくさんあったのに、ほぼ何もできなかった。依頼者の方とお話する際に、本当にほぼ何もできなかった。無線が使えないトラブルが起きたときも、無線を直すのが先なのか、作業に取り組むのが先なのか物事の優先順位の判断が全くできなくて悔しかった。電話や無線で現状を伝える時も自分の思っていることをまとめて言葉にするのがとても難しくて苦労した。この体験からリーダーはとても大変だけど絶対に必要な存

在であることを改めて実感した。

神戸に戻ってきて、車に乗っているときに、石川で車に乗って行動していた時の街の風景と勝手に比較してしまい、「あたりまえ」に過ごせている日常が当たり前ではないことを実感した。

（３） 消防学校体験入校

環境防災科では、１年時に初級、２年時に上級のプログラムで、神戸市消防学校に体験入校させていた。

（１年生）

初めに準備体操・体力錬成を行った。消防学校のグラウンドを走って準備体操をしてから、腕立て、腹筋を少し行った。消防士の方はいつも重たい装備を着て走っていると考えたらともしんどいんだろうなと思った。次に規律訓練を教わった。規律訓練では普段体育で行っている集団行動とほとんど一緒で、「右向け右」や「回れ右」など知っている動きも多かった。しかし、消防士の方の手本を見ると、私たちの動きとはまるで違う別のことをしているかのような動きだった。キレが全く違い、声の出し方などがとてもかっこよかった。これが市民を守っている人たちなんだと改めて実感した。実際に自分たちがやってみて、動きをそろえるのにとっても苦労した。初めてする行動もあり苦労したが、班のメンバーと協力して、乗り越えることができた。午後からは、地震体験や、煙・暗闇の中での救助活動、VR 土砂災害を実際に体験した。地震体験は、地震体験用の車「ゆれるん」に乗って地震を体験した。思ったより揺れて怖かった。何かにつかまってないと耐えられなくて、地震の怖さを改めて実感した。煙・暗闇の中での救助活動は、何も見えない場所で班の人と協力して人形を助け出した。呼吸もとても苦しくて火災の中に救助しに行く、消防士の人たちのすごさが分かった。VR 土砂災害では、実際に土砂災害に巻き込まれているようなVRに身を置いた。土石流が怖かったし、木とかも流れてきて土砂災害の怖さを実感することができた。もし土砂災害が起こりそうになったらすぐに逃げようと思った。１年生の初級で１番思ったことは、声の大切さだ。何をするにしても声を大きく出すことが大切ということ学べた。

（２年生）

私は小隊長を務めた。先生が小隊長をしたい人を募集していた時、私は手を挙げられなかった。それは、ミスしたらどうしよう、自分には班をまとめることができるのだろうか、という不安で失敗を恐れて逃げていたからだ。しかし、このまま他の人が小隊長を務めて自分は満足できるのかと考えたときに後悔すると思い、小隊長をすることを決意した。小隊長（リーダー）になっていろいろなことに気付いた。規律訓練では基礎的な敬礼などをして、１年生の頃の復習を行った。１年生の頃にしたことを忘れていた部分もあって悔しかった。１年生の時もそうだったけど長時間立ちっぱなしの状態をキープするのがともしんどくて嫌だったので、普段から良い姿勢を心がけながら生活しようと思った。また、１年生の時とは違い、小隊長になったので小隊長の声かけの訓練も行った。そこでは覚えることも多く、班のみんなをまとめるのがとても難しくて苦労した。ホースや消火器の説明では、ホースの伸ばし方や巻き方、小型ポンプの持ち方、消火栓をどうやって使うのかを学んだ。はじめはホースを伸ばすのが難しくて困っていたけど、消防士の方がコツを教えてくれてそれからうまくホースを伸ばすことができた。最後に総合訓練を行った。私は主に防火水槽から水を送るための可搬式ポンプの役割を行った。可搬式ポンプのエンジンをつける時に、ロープを思いっきり引っ張らないといけなくて、そのロープが思っていたよりとても固くて驚いた。足を引っ張らないためにも体づくりが大切だと思った。総合訓練ではみんなの気持ちを一つにして取り組む協調性を学んだ。

消防学校体験入校を通して私は、人をまとめる難しさやリーダーの重要性、協調性や声の大切さを学ぶことができた。この貴重な体験を活かしてみんなに頼られる消防士になりたいと思う。

（４） 学んだこと

私が環境防災科で学んだことは、たくさんある。そのなかでも特に印象に残っていることが２つある。１つ目は、地域コミュニティ、コミュニケーション能力の重要性である。授業やまち歩きなどを通して、地域の人々同士で仲のいいところは地域が活性化していて、災害に強いことを学んだ。阪神・淡路大震災でも、旧北淡町の人たちは、だれがどこに住んでいるのか、この人は、高齢者で足が悪い、といった地域間で情報を共有しあって、コミュニケーションが取れていた。そのため、行方不明者がすぐにわかり、どの家から救助に当たればいいのか優先順位をすぐにつけることができ、多くの命を救うことができた。２つ目は、リーダーの重要性である。参加させていただいたボランティア活動や体験学習を通して、何事にもリーダーの存在が必要であることを学んだ。私もリーダー的存在になったことがあり、人をまとめるこ

とや、自分の考えをまとめることのむずかしさ、まとめたことを人に伝えるむずかしさを実感し、リーダーは多くの役割を担っており、必要不可欠な存在であることを学んだ。

4 将来の夢

私の将来の夢は、神戸市の消防士になって、レスキュー隊として人々の命を救うことだ。目指すようになったきっかけは、小学生の頃に授業で阪神・淡路大震災の動画を見て、消防士が火災に巻き込まれながら人々の救助活動をしていて、自分の命よりも困っている人の命を優先する姿にあこがれを持ったことだ。消防士になるために環境防災科に入学して、たくさんのことを学んだ。消防署体験や、消防学校体験など、実際に体験をして学びを深めることもできた。その学びから、消防士のことについて詳しく知ることができ、興味を深め、なりたいという気持ちから、絶対になるという強い信念に変わっていった。絶対に神戸市消防のレスキュー隊になって、自分の生まれた町と、人々の安全を守り、みんなに笑顔で感謝されるような立派な消防士になる。

おわりに

この3年間で学んだことを「語り継ぐ」に執筆したが、3年後、または、それ以降も消防士として防災にかかわっていききたい。最近、大きな災害が頻繁に発生しており、今まで以上に災害に対する危機感を持たなければならない。災害は、人々の当たり前を簡単に奪ってしまうもので、とても恐ろしいものである。このことをよく理解している私たちが、多くの人の助けになれるような存在になる必要がある。

これからの自分

長峰 陽斗

はじめに

舞子高校に入学してからの3年間は、多くの人の支えでボランティア活動などの貴重な経験をさせていただくことができた。

私が環境防災科に入学した理由は、小中学校で受けた防災教育や災害のニュースを通して、災害から自分自身や身の回りの人やものを守りたいと思ったからだ。入学してからの3年間は、自分や周りの人やものを守ることができるように、防災や過去の災害の概要を知識として学ぶだけでなく、自分だったらどうしていたのかと自分事として考えるように意識して授業に取り組んだ。ボランティア活動では、自分のように防災に興味を持ってくれる人が増えてほしいと思い、地域の防災訓練などに参加させていただいた。この経験を活かして、今後も仕事やボランティア活動を通して、防災に関わっていきたい。

1 阪神・淡路大震災の体験

(1) 祖父母の体験談

祖父母は震災当時から今も西区伊川谷町にあるマンションに住んでいる。地震が発生した時、マンションの下と上から叩かれるような衝撃があり、縦揺れが続いた。体感で3分から5分くらい揺れが続いた。揺れるとすぐに机の下に隠れて、揺れが収まると急いでバックに貴重品などを入れた。初めて体験した不気味な揺れで、怖かった。

地震によって祖父母の家が受けた被害は、壁にひびが入り食器棚の位置が少し動くくらいだった。近所でも大きな被害はなく、すぐ近くの西区池上では被害がでるどころか揺れを少ししか感じなかった人もいたそうだ。

祖父母が震災で一番困ったことは水道が止まったことだ。風呂に貯めていた水でトイレを流すことはできたが、飲み水もなく風呂にも入れなかった。飲み水と食料を求めてコンビニエンスストアや店に行っても、水もすぐ食べられそうな物も全て売れ切れていた。飲み水は得られなかったが、食料はレトルト食品を買って食べていた。店に水がないので、震災から2日後に明石高校の近くにある配水場に行き、なんとか飲み水を確保できた。風呂は3～4日に1回銭湯に行き、水道やガスが通っていた須磨の知人の家を訪ねて風呂を借りることもあった。水道以外のライフラインで、電気は一瞬消えたがすぐに復旧した。ガスが止まったかは記憶が曖昧である。

電気が復旧したことでテレビを見ることができ、そこで初めて神戸の惨状を知った。長田で火災が発生したことや、本山から芦屋にかけて多くの家が倒壊したことでたくさんの人が犠牲になったと知人から聞くこともあった。震災の翌日には伊川谷でも長田の火災による灰や煙が見られた。少し遠くの明石市へ行くとガスが漏れているところもあった。断層が走っている浜や山際で被害が大きく、神戸でも場所によって被害の規模が異なった。

(2) 体験談を聞いて

私は体験談を聞いて、ライフラインの大切さ、特に水が生活するために必要不可欠だと感じた。水は飲んだり、トイレを流したり、風呂で体を洗うために必要である。祖父母はお風呂に水を張っていたけど、トイレを流すためにしか使うことができなかった。もしペットボトルに入った水を家に備蓄していたら飲み水を探し回らなくてよかったのかもしれない。しかし水を備蓄していたとしても風呂で使う水の量を考えたら足りないということが考えられた。備蓄をすることも大切だけど、備蓄だけで足りない水をどう補うかを考えないといけない。

祖父母は私に体験談を話す前に、30年近く前のことだから忘れていくかもしれないと言っていた。人は昔のことを忘れることがよくあるし、忘れることは仕方ないことである。震災の記憶も忘れることがあるかもしれないが、忘れる前に話を聞いて覚えておくことが震災を経験していない私にできることだと考えた。今回、体験談を聞くことができたので、その話を覚えておいて、いつかどこかで震災を知らない人に伝えたいと思う。

2 3年間の活動

(1) 授業や校外学習で学んだこと

環境防災科では、災害や防災・減災について授業や外部講師の先生の講義で学んできた。そんな中で私が特に印象に残っていることは、阪神・淡路大震災のことである。

1年生では外部講師の講義や人と防災未来センター、北淡震災記念公園の見学を通して、阪神・淡路大震災で起こったことを知った。講義では特に阪神・淡路大震災が発災した時の消防などの公助の活動や、ライフラインの被害と復旧のお話が印象に残った。施設の見学では、実際に阪神・淡路大震災で壊れた物や当時の写真や説明を見た。2年生では、災害に関連する法律や建築物について授業や講義で学んだ。また、長田区の復興の事前学習と長田まちあるきをして、復興をするために行政や住民の動きなどを知った。

私は震災について学んで、甚大な被害から今のきれいな街に復興したことに驚いた。施設見学で、実際に断層や地震によって壊れたものを見て、今の神戸と比較して考えてみると、もっと実感することになった。震災で被害を受けた神戸の様子について学び、今の神戸を見てみるととても綺麗な街になったと感じた。そのような綺麗な街にするための行政や地域住民のはたらきや紆余曲折についても学び、復興の難しさや大変さを知った。

(2) ボランティア活動

私は3年間で出前授業や防災訓練など、色々なボランティア活動に参加させていただいた。特に一人一人と直接関わることができる防災イベントに積極的に参加させていただいた。防災イベントでは防災を知ってもらうだけでなく、来てくれた人や地域の人と交流して、災害の経験や考えを聞かせていただくこともあった。

私は特に事前準備が大切だということを学んだ。例えば防災イベントでブースを出す時には、防災クイズやひまわり楽習迷路をするのか、どんな体験をしてもらうのかを決める。次にクイズは何を出題するのか、防災の何を話すのかを決めて、説明できるように勉強したり調べたりする。そして説明をする練習や、どのように来てくれた人の対応するのかを考える。これでようやく防災イベントに参加できるようになるが、これだけ準備しても必ずと言っていいほど後から反省をすることになる。もっとわかりやすく説明するべきだった、必要な物をもって来るのを忘れたということを全員で反省するのである。私は説明の言葉選びをあとから後悔することがよくあった。そんな反省をしないためには、事前に何回も練習しておいたり、必要なものの確認を何度も行ったりすることが必要である。ボランティア活動以外でも事前に学校の準備をしておくことも事前準備であり、日常の色々なところで事前準備ということが必要になってくると感じた。また、ボランティア活動は相手のニーズに応えることが必要だ。防災イベントのボランティア活動だと、ブースを訪れた人が知りたいことを伝えることが、ニーズに応えることになるし、そのためにも事前準備が必要になると思う。

他にも、先輩後輩など人との関わり方や、1回だけではなく何度も継続して参加することなどが、ボランティア活動を通して身についたし、防災や減災の色々な考えについて知ることができたので、ボランティア活動に参加することができてよかったと感じている。

(3) 高校生等防災ジュニアリーダー

私は1、2年生の時に防災ジュニアリーダーとして活動した。防災ジュニアリーダーは、色々な高校の取り組みや計画について聞いたり、アクションプランを作成し実践したりした。舞子高校のアクションプランは避難訓練、防災教育、防災運動会の3本柱である。

私は1年生の時に避難訓練班として学期末の避難訓練を企画することに携わり訓練を行った。企画では、何の災害が発生したのかを決め、学校が受けた被害や避難経路を想定する。他にも怪我人や窓ガラスが割れているところなども決める。

訓練から感じたことは、思うようにいかないということだった。避難訓練は、教員や生徒が、災害が発生した時に身を守り、安全に避難ができるようになることを目標にしていた。しかし、防災教育で災害が発生した時に、身を守る方法や避難する方法を説明しても、避難訓練で実践する人は少なかった。

1回目の訓練ではサイレンが流れても、机の下に隠れず話している人がいて、地震を想定して傘立てで逃げ道を制限しても乗り越える人もいた。実際に地震が発生したらシェイクアウトをして先生の指示を待って避難する。訓練でもシェイクアウトをして先生の指示を待ち避難をしたが、シェイクアウトをできていない人がいた。そのため、全員がシェイクアウトをして避難することができるということを目指

に防災教育でシェイクアウトをするように話してもらい、2回目を行った。それでもシェイクアウトをしない人がいて、行動に移してもらうことの難しさや伝えることの難しさを知った。

2年生からは防災運動会の班に入り、実施する種目を決めたり開催する準備をしたりした。防災運動会では、年2回行っていて、防災に絡めた4つほどの種目を体験してもらうイベントである。開催するにあたって、特に種目の内容について、誰を対象にどのような体験をしてもらうかを決めることが難しく、悩むところであった。年2回だけど、種目は毎回似たようなものばかりで新しい種目を考えることが必要だと考えてもアイデアがなかった。先生にも意見をいただきつつ、新しい種目を考えたり、既存の種目を進化させたりした。

おわりに

私が3年間学び続けてこられたのは、色々な人のおかげである。両親は、環境防災科に入学することやボランティア活動に行くことを応援して、支えてくれた。学校の先生は、授業以外にもボランティア活動での指導や生活指導などをしてくださった。その他にも色々な人が支えてくれたことで、環境防災科で学ぶことができた。このことを忘れず、これからも感謝していきたい。色々な人の力も借りつつ、環境防災科で学んだ3年間はとても有意義なものであった。防災や減災、災害の多くのことを学ぶことができたし、なによりも今の日常が当たり前ではなく、一つ一つを大切にしないといけないということを知ることができた。

環境防災科に入学した時の初心を忘れずに、私はこれからの人生で、災害が発生したときに自分にできることをして、自分事として考える姿勢を大切にしたい。そして自分や周りを守れるようになりたい。

廻る想い

中村 侑真

はじめに

30年前阪神・淡路大震災が起きた。小さい頃、父から聞いたことがきっかけで環境防災科に入学した。そこで感じたこと、聞いたことを風化させないために、阪神・淡路大震災を経験したことがない私が語り継ぐ。

1 父の体験

地震当日は明石市のワンルームマンションで、大きな縦揺れで目が覚めた。それ以降も断続的に激しい揺れが続いて、マンションの壁に亀裂が入り、窓ガラスが割れ、天井面が裂け、天井裏内に敷設されていた水道管が割れて大量の水道水が噴出していた。とりあえず、部屋内の状況確認のために照明を点灯したが停電のためにつかず、余震も頻繁にきていたので、寝巻のまま屋外に避難した。近所にあった公衆電話を見つけて、安否確認のために長田区の祖母と母親の住んでいる実家にかけたが繋がらなかった。

仕方なく近隣の駐車場に駐車している自家用車まで行き、車のエンジンをかけた。問題なくかかったためそのまま運転して実家に向かった。明石から長田まで通常30分もあれば行ける距離だが、大渋滞の中、約3時間かけて須磨離宮公園まで到達した。そこは、まるで戦争映画のワンシーンだった。須磨離宮公園から長田まではさらに、約5時間かかった。

実家は全焼したが、近所に住んでいたお兄さんが駆けつけて家から引っ張り出したおかげで、祖母と母親は九死に一生を得た。救出から30分もしないうちに家は全焼した。その中には2匹の猫もいたが炎により灰になった。子どもの頃育った家とともにすべてが燃えてなくなった。近所では家の下敷きになったおばあさんが取り残されていて、その家族が必死に助けを呼んでいた。近隣にいた男性たちが5、6人駆けつけて、一斉に救助に取り掛かったがびくともしない。火がどんどん近づいてきている。その時、瓦礫の下からかすかな声が聞こえた。「ありがとう、もう十分。逃げて」瓦礫の下のおばあさんだった。大の男が大勢でかかっても土壁の破片一つ動かさなかった。おばあさんは生きたまま動かなかった。後で祖母から聞いた話だが、そのおばあさんと祖母は仲が良く、父も小さい頃によくお菓子をもらっていた。長田の町は崩れた瓦礫で消防車や救急車が来ることができなかった。長田の町は焼け野原となった。その後、母や祖母には叔父が付き添い、親戚の家に避難させてもらうことになった。父は市役所職員なので、震災対応のためにすぐに職場に行く必要があり、一晩かけて職場のある中央区に向かった。

通常業務は市内の道路の破損や不具合のある場所を調べて、業者への修繕発注を行うことなので、震災時も同様に市内の各地区をパトロールし、現状を報告することが指示された。その地区が偶然にも実家周辺である長田区だった。神戸市職員4人1組で道路維持のための黄色いパトロール車に乗りこみ、朝7時に出発したが、中央区から長田区までの道は倒壊した住宅の瓦礫の影響で大渋滞し、10m前進するのに20分かかった。現地15時過ぎに到着した父たちは、破損状況を記録するため、写真撮影をする指示を受けていたが、崩れた家屋と火事により、どこが道かもわからない状態だった。気を取り直して現状の撮影を始めると今度は地域の住人から「公務員が何もしないから妻が死んだ。」「なぜ助けに来てくれなかった。子どもを返せ」等の罵声を浴びせられた。その住人にただただ「すみません」と謝るしかなかった。そんな状況を本部に報告すると「国に報告するので、見晴らしの良い高い場所で全体を撮影してほしい」と指示があり、長田にある山の頂上まで移動した。山の頂上に到着し、下を見下ろしたが愕然とした。実はこの場所は子どものころ友達とよく登っていた思い出の場所で、一番眺めの良い景色だったはずが悲惨な状況が広範囲にわたって広がった。ここまでの範囲が焼け野原になったため、もう戻れないのではと絶望感が生まれた。

その日以降、業務体制は全員中央区の事務所で24時間待機になった。それから1か月が経過して、神戸市内すべての記録写真撮影の業務が一段落を迎え、新たに次の震災対応に伴う配置先に移ることになった。父はしあわせの村の支援物資センターを希望した。しあわせの村の支援物資センターはその名の通り各地から支援物資が届けられて、それらがしあわせの村内の体育館や複数の会議室いっぱいになった。その支援物資を避難所となっている各小学校や公民館に、避難している被災者に平等に配ることと、必要な物品要望リストから物品を用意してこれらを配送車や配送トラックに積み込む。各地から届く支援物資の数がものすごい量で、早朝から夜中まで作業が終わらず休憩時間は食事の時と寝るときだ

けで全員の疲弊が見られた。寒い季節の影響もあり、複数の職員が体調を崩していった。そんな中、本部からボランティアが来てくれることになったと連絡があり、人員の増加はとても助かると全員喜んだ。そして間もなくしあわせの村の支援物資センターに多くの団体がボランティアに来ていただいて助けてもらった。他府県からも公務員や一般の方、企業の方が手伝ってくれた。そんな中ありがたいボランティアの方も確かにいた。支援物資の作業中に紙おむつやトイレットペーパーでドッチボールをする人、飲用水やペットボトルのお茶でキャッチボールをする人。支援物資配布ボランティアが物資を収集に来た時、被災者の容姿や炊き出しの内容を馬鹿にする者までいた。真面目なボランティアの方々にも不評を得ていたので、職員が注意したのだが不貞腐れながら「気を付けます」と一旦詫げるも、その後「来たくて来たのではない」「進学や就職に有利になるから来た」と続いた。そういうボランティアは決して多くはないが少なからずいた。本部に「自分から行きたいという気持ちがない、進学や就職への評価のためだけに来ているボランティアは正直迷惑なので断ってほしい」とクレームを入れたが、あまり聞いてもらえず支援物資センターの市職員全員が本部の無責任な回答に憤慨した。支援物資センターの運営が続く中、物資が減ってきたのとボランティアの人員が増えたこともあり、支援物資センターに従事する職員を半分にし、残りの半分の市職員は震災前の通常業務に戻るようになった。戻った職員のほとんどが震災前の業務から、震災復興に絡む業務に変更された。

阪神・淡路大震災は地震や火事が多くの人々の命や暮らしを奪った悲惨な出来事だったが、その苦難の中でいろいろな人の善意との出会いもあり、神戸市職員という義務感だけでなく、神戸市民としてこの街を復興させたいと強く思ったと最後に父は言っていた。

父の話を聞いて

被害の大きかった長田の状況をととても詳しく教えてくれた。30年経った今でも当時の状況をほとんど覚えていることに気づき、私が思っている以上に悲惨な状況なのだと再認識した。ボランティアの話を聞いて、ボランティアの重要性や、させていてあげているという考え方の大切さを改めて知った。公務員に罵倒しているという話を聞いて、私は父に、そのようなことを言われて怒らなかったのかと聞いた。だが父は自分の子どもが災害で死んでしまったら誰でも悲しくなる。でも責任は誰にもないから必然的に公務員に怒りを向けると教えてくれた。その話を聞き、私は私が少しの話を聞いているだけで決めつけていることに気が付いた。これからは少し考えて、相手の話を聞いてから判断しようと思った。

散乱している瓦礫やあちらこちらに広がる炎で、まるで地獄のようだったと教えてくれた。だがそれはほとんど家が木造だったり、防災、減災の認知があまりされていなかったりしたからだ。この話を聞いて、私は地域にもよるが時代が進歩するにつれて被害が少なくなり、死者数が減るということに気が付いた。体験を語った父は最後に「震災は地獄のようだったが多くの出会いに恵まれた。震災を体験したすべての人の記憶と思いが教訓となっている」と語った。それを聞いて私は、過去失敗をしても後悔しても次に繋げられるが、それを忘れてしまったら再度失敗するから災害の記憶は風化させてはいけなかった。

2 災害に興味を持つようになったきっかけ

私は小さい頃長野県の白馬村に旅行に行ったのだが、そこで白馬岳を見た。それは雄大でとても綺麗だった。それと同時に、土砂崩れや雪崩が起きたらその麓にいる人たちはどうやって逃げるのだろうかという疑問に思った。それを調べていくうちに災害に興味を持ち始めた。中学に上がり、担任の先生に災害に興味があると伝えたところ環境防災科を進められた。私は環境防災科でもっと災害のことを勉強したいと思い受験しようと思った。

(1) 入学後

入学後、私は家の都合で環境防災科のボランティアに参加できず、このままでもいいのかと思い悩んだ。また、講義が多く、レポートを書く数も多く、とても苦労した。だが親からは社会に出るとレポートは大事なもので今のうちに慣れておくべきと言われた。校外学習が多く、新たに知ったことなどもあった。2年生に上がってからは街を歩いたり学んだ知識を活かし、もっと深く学んだりということが多かった。

(2) 環境防災科

環境防災科に入学してから私は専門科目をみて、防災の勉強ができると思い、心が躍った。1～3年

生では「環境と科学」「災害と人間」「自然環境と防災」「社会環境と防災」「Active 防災」「卒業研究」等がある。その中でも特に私は「環境と科学」が楽しみだった。なぜなら主に地学の勉強をするのだが、私が気になっていた山の地形の勉強ができるからだ。実際に花崗岩や石灰岩の硬さなどといった岩の種類やその特徴を学ぶことができたので環境防災科に入学できてよかった。

（３）講義

私は多くの講義を受けてきたが一番印象に残っていることは２年の時の「高齢者疑似体験」だ。手足首、関節、目に専用の器具をつけて高齢者の体験をした。予想以上に動きづらく、視界がぼやけた。他にも腰も曲がったまま歩いた。高齢者の方はこのような状態で日中いるのかと驚いた。また、このような状態の一人暮らしの高齢者が災害にあった場合近所の人が助けるしかないと思った。そのため私は、近所の人に積極的に挨拶をし、いざというときには手助けしたい。

（４）神戸市消防学校体験入校

消防学校体験入校は１年と２年と２回行った。１年の時には体力錬成と規律訓練を行ったが規律訓練がつかかった。規律訓練では敬礼や整列などの動作を行ったのだが、長時間同じ姿勢で保ったが手や足が痛くなった。２年生は規律訓練のほかにもっと専門的なことをした。その中で印象に残っていることは放水訓練だ。私はホースをつなぐ役割だったのだが、ホースを伸ばすときにうまく転がらずにとっても苦戦した。だが試行錯誤してやっていくうちに次第にうまくなっていった。最後にはみんなで放水をしたのだが、私のホースがうまくつながらず焦ってしまった。その時に近くにいた消防士の方が手伝ってくれたおかげでうまくつなげることができた。

３ 将来の夢

私の夢はレスキュー隊員になることだ。小さい頃に「め組のだいご」というアニメを見てどれだけ辛い状況でも諦めずに人を救おうとする姿に憧れを抱いたからだ。レスキュー隊員になるには消防試験に合格してそのあとレスキュー隊員の筆記試験に合格し、厳しい訓練課程を修了することが条件である。私はどれだけつらく厳しい状況でも諦めずどれだけ自分がつらくても被災者の方には安心させることができるようなレスキュー隊員になり、地域を守りたい。そのためにはつらい状況から逃げないことが必要だと思う。

レスキュー隊員になったら災害予防活動や救助訓練をしたいと思っている。なぜなら、災害が起こる前に適切な対策をすることにより、被害を減らすことができると考えているからである。また、国際的な救助活動にも参加したいと思っている。実際に阪神・淡路大震災や令和６年能登半島地震でも日本は海外に支援をしてもらった。そのため国際的な救助活動に参加することで恩返しができる。

４ 南海トラフ巨大地震

近いうちに必ず来る南海トラフ巨大地震に対して被害を減らすためには今からの準備をするしかない。なぜなら過去の災害ではそれが起こる前から準備していなかったことが原因ですぐに行動や対策ができずに遅れたり、逃げるができなかったりしたことがあったからだ。ではどのように準備をすればいいのか。それは例えば、災害が起きたときに困らないように懐中電灯や食料、水などを備蓄しておくことだ。日本は世界の中でも災害が多く発生する国だ。だがその災害を自分事として捉えることができる人が多く、その結果、大切な人が亡くなってしまったり、一生消えないほどの傷を負ってしまったりした人がある。そのような人を減らすためにも災害について知り、防災について勉強することが大切だ。

おわりに

私は「語り継ぐ」を執筆する前、一度自分を振り返り、今まで多くの人に助けられ支えられてきたと感じた。入学前と入学後を比べてみると以前は簡単に逃げるができるし、事前の準備などいらなかっただろうと甘く見ていた。しかし、今ではそのようなことはなく、自分の防災意識が高まっていることに気が付いた。

災害は自分だけでなくほかの大切な人の命も脅かす。大切な人の命を守るためには少しでも最悪の事態に備えておくこと大切だ。そのためには災害の教訓を次に生かさなければならない。私はこれからも人との出会いを大切に、その中で見て聴いて学んだことを次世代に伝えていきたいと思った。

次世代へつなぐ防災

二星 咲良

はじめに

1995年1月17日、多くの人の命を一瞬にして奪っていった阪神・淡路大震災が発生した。今年であれから30年という年月が経とうとしている。震災後に生まれた私たちが今できることは何なのか。それは当時の出来事を忘れず、震災によって得た教訓などを後世に伝えていくことではないかと思う。

1 阪神・淡路大震災体験談

(1) 母の震災体験

母は当時高校3年生で、神戸市須磨区に住んでいた。急な斜面に建つ一軒家の2階で姉妹たちと寝ていた。午前5時46分、下からドンドンと突き上げてくるような感覚で目が覚め、突然縦横に激しく揺れ動かされパニックになった。しばらくして揺れが収まると、姉妹と1階にいる両親の安否を確認した。1階に降りると食器が落ちてガラスの破片が床に散らばっていたが「早く外にでろ」と声を掛け合い、なんとか外へ飛び出した。外へ出てみると家の外壁や擁壁は崩れ落ち、家の左半分が倒壊寸前の状態だった。奇跡的に大きな柱が支えとなりなんとか家の形を保っていた。母たちは家族で体育館に避難した。仮設住宅はなかなか当たらず、体育館での生活は4ヵ月も続き、その間仕切りもない空間で皆がスペースを譲り合いながら寝食を共にしていた。当時、飼っていたペットの犬は学校のグラウンドに繋がれていて、毎日誰かが餌やりや散歩の世話をしてくれていた。体育館での生活が1ヵ月を過ぎたころに初めて電気がついた。大歓声と拍手が起きた。あの時の感動は忘れない。当時一番困ったのは水に関することだった。水がないためにミルクが作れず、泣きじゃくる赤ちゃんがいた。特に避難所でのトイレ問題は深刻だった。トイレを使用しても流すことができないため、だんだん新聞紙の上で排泄を袋に入れて溜めたり、校庭に穴を掘ってそこで排泄をする人が増えてきた。そのせいで避難所には悪臭が漂い、体調不良を訴える人も多かった。またトイレに行けないため水分を控えようとして脱水症状を起こす高齢者もいた。数日後、仮設トイレができ、トイレ問題は解決していった。避難所には毛布や必要最低限の物しか持っていけなかった。日頃から自分に必要なものをまとめておく必要があったと思っている。

(2) 母の話を聴いて

今まで母から震災当時のことについての話は何度か聞いたことがあったが、執筆をするまではこんなに詳しく話を聞いたことがなかった。母の中の怖い記憶を思い出させてしまうのではないかという気持ちもあり、詳しく話を聞くのをためらう気持ちもあった。しかし、母は自分の体験を防災に活かしてほしいと言い、今回話してくれた。母から当時の避難所での様子や困った事などを聞いて、授業で震災のお話を聞いた時よりもよりリアルで身近なことに感じた。授業でも聞いた通り、やはり避難所での一番の問題はトイレに関することなのだということが分かった。改めてなぜ私たちが日頃から防災を学び、備えていかなければならないのかを知った。母から震災当時の話を聞いた事を無駄にせず、今こうして防災が学べる環境にいることに感謝し、将来起こると予測されている災害に対して自分ができることを精一杯やり、今後も備えを大切にしていきたいと思う。

2 環境防災科での3年間

(1) 入学したきっかけ

私が舞子高校環境防災科に入学しようと思ったきっかけは中学生の時にふと見たニュースだった。そのニュースの内容は、南海トラフ巨大地震が起こる確率が年々高くなっているというものだった。私はそのニュースをきっかけに地震や災害が起こるメカニズムについて興味を持ち始め、もし巨大な地震が起きた時どうすれば自分や大切な人の命を守れるだろうと考え、防災を学びたいと思った。また、私は進路として看護師になることを視野に入れていた。そのため環境防災科で防災を学び、災害時にも活躍できる看護師になりたいと思ったので入学を決めた。

(2) 環境防災科での授業

環境防災科では一般科目に加え、防災をテーマにした授業を受けることができた。1年生では、災害が起きるメカニズムや、災害と自然環境がどのようにつながっているのかを学んだ。また、神戸市消防学校

での体験入校で経験した規律訓練やトレーニングを通してクラスメイトとの絆が深まっただけでなく、コミュニケーションの取り方も学ぶことができた。2年生では、災害に備えるという事の大切さや、様々な災害からうまれた教訓について学んだ。そしてその教訓を活かし、自分であればどのような防災が出来るのかを考える事ができた。3年生では、社会が過去の災害をうけてどのように変化しているのかを学んだり、人為災害の恐ろしさについて考えたりすることができた。

(3) 講義

この3年間、私は様々な分野の専門家や、自衛隊や警察官といった公務員の方などからたくさんのご講義をしていただき、貴重なお話を聞かせていただいた。中でも私は特に印象に残っている講義が2つある。1つ目は心理学に関する講義だ。災害が起きた時、人の心はどのように変化するかということについて詳しく教えていただき、災害時に被災するのは町や物だけではなく、人の心も深く傷を負ってしまうのだということが分かった。この講義を通して、もし自分が災害を経験した時には周囲の人に積極的な声掛けを行うなど、相手に寄り添えるような行動をとりたいと思った。2つ目は高齢者疑似体験の講義だ。この講義では、特殊な疑似体験装置を使い、高齢者の体を実際に体験させていただいた。実際に装置をつけてみると体がとても重く感じ、視界も悪く関節も曲げにくいため素早く動くことができなかった。この経験を通し、実際に高齢者の立場になることによって災害時に高齢者がどのような支援を必要としているのかを考えることができた。

(4) ボランティア活動

今まで様々なボランティア活動に参加させていただいたが、中でも特に私が印象に残っているのは、こばと聴覚特別支援学校での共同学習・交流だ。学習内容は、聴覚に障害のある子どもたちに手話や紙芝居を使って災害の恐ろしさや備えの大切さを伝えるというものだった。このボランティアを通して、私は相手に伝えるということの難しさや楽しさを学んだ。紙芝居の内容を手話で覚え、どうしたら子どもたちにわかりやすく伝わるかなどを考えながら、何度も練習を重ねた。当日、学校に行くと、子どもたちが笑顔で私たちを迎えてくれた。紙芝居が始まると皆熱心に話を聞いてくれた。手話を頑張ってきてよかったと思った。慣れない手話はとても難しいと感じたが、災害時に手話ができるのは防災につながるとも感じた。少しでも手話ができるようになり、避難所などで耳の聞こえない方のサポートができればいいなと思った。

この3年間で行ってきたボランティアを通して学んだことは、相手の立場になって考え、行動するという事の大切さだ。今までは相手の立場になるという事がどういうことなのかあまりよく分からなかった。しかしボランティア活動を通し、様々な年齢の方や身体的な障害がある方などと交流したことで、相手の立場になるというのはその人の状況を理解し、その人が何を必要としているのかを考え、自分自身がその人に気持ちを寄せ行動することだということが分かった。

(5) 3年間で成長したこと

私はこの3年間で大きく成長したことがある。それは自分自身と向きあえるようになったことだ。入学当初は初めてのことばかりでいろいろな場面でミスをしてしまい、自分を責めてばかりいた。しかし、舞子高校での生活を通して、大切なのはミスをしてしまったときや物事がうまくいかなかった時にすぐに自分の改善すべき点を明確にし、次につなげることだと分かった。また、長所だと言えることができ、自分に自信が持てるようになった。自分のことをよく理解しておくという事は、災害時だけに限らず日常生活で他者とコミュニケーションをとる際にもとても大切な事だと気付かされた3年間であった。

3 将来の夢

(1) 私が目指すもの

私の将来の夢は看護師になることだ。私は高校生になるまで、看護師になりたいとは思っておらず、漠然と人の役に立つ仕事がしたいと思っていた。しかし、私が看護師を目指そうと思ったきっかけが2つある。1つ目は環境防災科での授業だ。災害時には身体的だけでなく、精神的にも大きなダメージを受けるということを学び、災害時に被災者の心に優しく寄り添えるような看護師になりたいと思った。2つ目は看護師をしている母の存在だ。ある日、家族で外食をしている時に、突如後ろに座っていたお客さんが倒れた。私は怖くなってしまい、何もすることができなかったが、母が素早くそのお客さんに駆け寄って応急処置をし、救急車が到着するまで看病している姿をみて、看護師という仕事に憧れを持った。

（２）看護師と防災

私は看護師と防災は大きく関わっていると考えている。看護師は災害時に、災害派遣医療チームを結成し、被災地に派遣され、ケガや病気の人に看護を提供する。それに加え、避難所での生活を強いられている人に対する心身のケアも担うなど、災害発生から長期にわたって防災と関わっていく。また、避難所で感染症などが起きないように、日頃から地域の防災会議に加わり、医療的な面で強い避難所づくりに力を入れている看護師もいる。

（３）看護師になったら取り組みたいこと

私が看護師になったら取り組みたいことは、入院中の子どもたちに向けての防災教育だ。出前授業のボランティアを通して、小さな子どもたちに防災の知識を伝えるのはとても大切なことだと思った。そのため、病院に入院している子どもたちを対象とした避難訓練や防災教育を行いたいと思った。

おわりに

「語り継ぐ」を執筆するにあたって３年間で振り返ってみると、たくさんの貴重な体験をさせていだいてきたのだということが分かった。今回、母から阪神・淡路大震災の当時の様子について詳しく話を聞き、改めて備えることがとても重要であると実感した。地震だけでなく、台風などといった気象災害も頻繁に起こり、災害の種類も多様化している現代を生きる私たちにとって、防災に関心を持ち、命を守るすべを学ぶことはとても重要なことだと思う。この３年間で学びや経験は必ず今後の私の人生において役に立つものだった。今後も防災に力をいれ、相手を思いやる心を大切にしながら自分だけでなく他者の命も守れるような人間になれるよう日々努力していきたいと思った。

語り継ぐ意味とは

野広 奏

はじめに

1995年1月17日に阪神・淡路大震災が発生した。この日から30年目を迎える年になり、今一度震災に対して向き合えないといけないと感じた。月日が経つにつれて災害を経験したことのない未災者が増えていく中で、私が環境防災科で学んだ知識を語り継いでいく必要がある。なぜなら、災害は繰り返し、そのたびに同じ被害を繰り返していたら阪神・淡路大震災で学んだことが一切生かせていないし、自分に悔いが残ってしまうからだ。震災の記憶を風化させてはいけない。

1 阪神・淡路大震災

母の被災体験

母は震災当時長田のマンションに住んでいてその時間はまだ寝ていたそう。突然の大きな揺れで目が覚めた。目が覚めてから何秒間も経験したことのない揺れが続いたのでただごとではないことはすぐ理解したそう。タンスが倒れていて非常ベルが鳴り響き、暗い中リビングに向かうと床に様々な物が散乱し、玄関に向かったけど大きな揺れでドアが歪み、外に出ることができなかったそう。ベランダの非常壁はパニックになっていたせいか破ることができず、8階のベランダから隣の家に助けを求めようとしたけどすでにいないようで再び戻った。その時はあちらこちらで火の手が上がり、一面真っ赤だった光景は今でも鮮明に記憶しているそう。しばらくして近所の人窓を破って助けに来てくれて、近所の避難所（御蔵小学校）へ避難した。祖父とは避難所でようやく会えたそう。地震直後は家の電話に祖父から連絡があり、お互い無事だと知ったが細かい話をする間もなく避難所で会えるまで不安だったそう。今のように携帯電話はなく、安否も地震の状況も知るのに時間がかかった。車で1時間ほど離れて暮らしている母のおじさん夫妻が7～8時間かけて作れるだけのおにぎり50個くらいと、飲み物や生活に必要なものなどを車に積めるだけたくさん届けてくれた。その時、私たち家族に「よく無事でいてくれた」と言ってくれてみんなで涙したそう。

一日避難所で過ごした次の日、外に出てみると別世界だった。昨日まであった家や商店街、慣れ親しんだ道が全部焼けてなくなっていた。この時2度目の恐怖を感じたそう。余震があるたびに怖さと不安で眠れなかった。

話を聞いて

私はこの話を聞いて母がこのような大変な体験をしたことにとっても驚いた。自分の親から聞く話と外部講師の方が話してくださる被災体験を聞くのとではまた違う感じ方だった。震災で家族が命をひとつも落とさなかったのを聞いてとても安心した。震災の話をしてくれた時、いつもとは顔の表情も声のトーンも違ったのでやはり阪神・淡路大震災はとても恐ろしい災害だったのだと改めて感じた。私が同じ状況にいたと考える時に、私も同じようにパニックになってしまうと思う。非常壁は簡単に蹴破れるものだがパニックになってしまい思った通りに力が入らなかったのだと思う。大きな揺れの影響でドアが開かなかったらとても焦るし、辺りが火まみれだったら頭が真っ白になって思った通りに体が動かないと思う。私は普段防災授業に取り組んでいるが、災害が起こってしまったら実際にそのようなことができるのかとこの話を聞いて不安になった。だから普段の避難訓練や防災授業で何も意識せずするのではなく、実際に災害が起きているのを想像しながらしていくことが必要であり、大切なことだと考えた。

2 環境防災科について

(1) 入学のきっかけ

私が入学したいと思ったきっかけが、中学生の時の将来の夢が消防士で環境防災科から消防士の道に進む人が多いと知ったことだ。また、他の学校では経験できないようなボランティア活動ができると耳にして、高校生の間に様々なボランティア活動に参加してみたいと思ったのも入学を決める要因の一つだった。

(2) 入学後

入学後、私は様々なボランティア活動に参加させていただいた。出前授業に参加する機会が多く、そこで学んだことは相手の立場になって話をしていくこと、何を一番学んでほしいかを明確にして防災授業をしていくことだ。小学生に防災授業をすることが多かったけど、一度だけ支援を必要とする高校生と防災を学び合う交流があった。そのときは、いつも通りにはなかなか進まなかった。落ち着きがない子や急に動いてしまう子などもいて、初めての環境で不安でいっぱいになった。その時に私は何を一番学んでほしいかを考えて授業を行った。芦屋の海の近くの学校だったため、津波が来た際の避難行動に着眼点を置いて授業をしていくうちにみんなが授業に参加してくれて、私は達成感を得るとともに交流を深められたと感じた。実際の避難所では足の不自由な方や耳が不自由な方など支援を必要とする方が来られても、私たちが臨機応変に対応して避難所運営をしていくべきだと思った。

(3) 神戸市消防学校体験入校

1年生の時に1回と2年生の時に1回の計2回行った。1年生の時は消防士の基本と言われている規律訓練に励み講義を受けた。規律訓練では手の位置や足の向きなど細かい部分を厳しく指導された。午後には煙暗闇体験という懐中電灯だけ持って暗闇を実際に歩いていく訓練をしたり煙を有毒なガスに見立てて姿勢を低くして瓦礫などにも注意して訓練を行った。簡単だと思っていた訓練が実際にしてみると大変で、視界が悪く障害物があっても見えなかったからつまずきそうになった。本来ならば更に重い服を着て活動するから忍耐力が必要だと感じた。2年生では規律訓練と放水訓練を行った。私は全体リーダーを務めさせてもらった。いつものクラスの雰囲気とは違いとても緊張感があった。号令をかけるのは私なので間違えてしまうと全体に迷惑をかけてしまうことになる。さらに緊張感が増した。全体リーダーを通して感じたことは日頃から他人に物事を押し付けていたということだ。自分が人前に立って指示することがなく、話を聞いてもらう難しさを感じることができた。

(4) 令和6年能登半島地震募金

令和6年1月1日16時10分、能登半島で最大震度7を観測する地震が発生した。私はその時間寝ていたため揺れを感じなかった。母と父は揺れを感じて恐怖を覚えたそう。地震が起きてからテレビでは能登半島のニュースや被害状況に関する情報が沢山流れていた。そこで私は石川県に何か貢献したいと思い、思いついたのが募金活動だった。現場に直接ボランティアとしていくのではなく、神戸から支援できることを考えた時に真っ先に思いついたボランティア活動だった。私はこれまで募金活動に参加したことは無く、お金を入れることしかしていなかったため少し緊張した。募金活動初日は校内で行った。人通りの多い食堂前の通路で行ったため、お金を入れてくれる人がその分多いと思ったが、入れてくれる人は少なかった。お金を入れていただくことの難しさを感じたと同時に私の思いが伝わっていないことを感じた。「能登半島地震の募金活動をしています。皆さんの温かいご支援よろしくお願いします」だけでは石川県でなにが困っているのか分からないし言葉足らずなので、今の石川県の現状を知ってもらうために、石川県のライフライン状況、現在でも大きな地震が起こっていることを伝えるようにした。すると1日目より入れてくれる人が増えたと感じた。募金活動後半は正門前で行った。

3年間を振り返って

環境防災科での3年間を振り返って私は様々な学習ができたと感じる学校生活だった。環境防災科ならではの行事が沢山あり、貴重な経験をさせていただいた。消防訓練やまち歩きなどで実際に足を運んで自分の体で体験できたことをこれからも大事にしていきたいと思った。出前授業を通して自分がとても成長できたと思う。普段は他力本願なところがあり、すぐ人任せにしたり自分が苦手なところがあれば投げやりをしたり、かなり自分勝手だった。だが、出前授業をしていくうちに子どもたちのためにわかりやすい授業をしてみたいという感情や、何か1つでもいいから教えた内容が災害時に生かされればと思えるようになった。これは中学校時代の私では考えられないことだ。そのときに自分の成長を大きく感じた。だが私一人では成し遂げられたわけではなく、先生や出前授業等で出会った子どもたちのおかげだ。感謝の気持ちを忘れずこれからもさらに伸ばしていきたいと思った。

3 将来の夢

私の現段階の将来の夢は消防士になることだ。一番の理由は人のために働きたいからだ。幼い頃から消防士に憧れを抱き環境防災科に進んだ。私は地域リーダーを務めていて、地域防災を考えるときには

消防の方たちが地域に寄り添う姿を見て地域との関わりを大切にしていることが分かり、私もそのような消防士になりたいと感じたし、自分の思い入れのある神戸の安全を守りたいという強い意志も持つことができた。職場では自分が率先してみんなを引っ張っていけるような人になることを目標に頑張りたいと考えている。消防士という仕事は、プレッシャーもあり簡単には務まらないと思うが、災害時はもちろんのこと平時は地域活動にも貢献していけるような消防士になりたい。環境防災科で学んできた防災知識は、他の高校に比べてとても深い内容だ。だから、これらをみんなに共有していかなければならないと感じた。その時に、私は人を巻き込んで積極的に自ら声を上げることが得意で、コミュニケーション能力に自信があるため、この長所を活かして職場でリーダーシップを取り、他の人も巻き込めるような環境づくりをしていき、さらに良い街づくりをしていきたいと考えている。

夢と防災

消防士は災害と向き合う。例えば災害現場での消火活動、地震や風水害といった大規模災害時の救助・救出、避難誘導など様々な場面で携わっている。令和6年能登半島地震でも消防士は瓦礫の撤去活動、土のうを使った応急復旧、人命救助活動など市民にとって欠かせない存在になっていた。だが、消防士にも活動範囲にも限りがあるため、市民同士の協力も必要だ。それは甚大な被害を抑えるのに大切だからだ。そのためには正しい知識や判断力が必要だ。

消防士は災害時に様々な活動を行っている。火災対応では火災の鎮火や救助活動を行い、火災を早期に鎮火することで被害を最小限に抑えるため、迅速な対応が求められる。地震や洪水などの、被災者の救助や避難誘導を行い、被災者の復旧や支援活動も行うそう。化学物質災害対応では化学物質の漏洩や事故が起きた際は消防士が化学物質の専門知識を活かして適切な対応を行い、周囲への影響を最小限抑えるため迅速かつ正確な判断が求められる。

4 南海トラフ巨大地震

南海トラフ巨大地震は私たちが生きている内に必ず起こる。マグニチュード8～9クラスの海溝型地震が40年以内に90%の確率で起こると言われている。この大地震では津波の発生、沿岸部では20メートルを超える大津波が押し寄せてきて、高知県では最大波高34メートル押し寄せてくるそう。また、200万棟以上の建物が全壊、焼失すると想定されており、発生後20年間の経済損失は少なくとも1240兆円に及ぶと想定されている（土木学会試算）。

私はこれからの被害を最小限に抑えるには、避難する決断を1秒でも早くすることだと考えている。そのためには防災に関する知識や、状況判断を迅速かつ適切に行う必要がある。前例として東日本大震災を挙げる。東日本大震災では避難せず自分は助かると思い込んでいた人たちがたくさんいた。その結果、逃げ遅れてしまい命を落とすケースが多かった。そこで、地震が起きて津波が押し寄せてくるまでの時間を逃げる時間に使うことができれば犠牲者を大幅に減らすことができる。家族でどこに避難するかを今一度確認すべきだと思った。

また、地域の人たちの交流を深めるのも大切なことだ。家族構成や身体に何か不自由なところはないかなどを知っておくことで共助をスムーズに行える。日頃の準備が災害時に自分を守ることになる。その一つとして防災バッグだ。懐中電灯、水、非常食など災害時に何を備えておくべきかを確認、準備すべきだと考える。

おわりに

「語り継ぐ」を執筆しながら、私は、改めて防災や減災について深めていくべきだと考えた。阪神・淡路大震災で学んだ教訓を生かしていきたいと大多数の人が口にするが、これは簡単なことではないのを私は環境防災科で学んだ。阪神・淡路大震災ではどのような被害が多く、死因は何が一番多かったかなどを学んだ上で、次に何を対策すればこれらの被害を最小限に抑えられるかを考えていくことが必要だ。

私たちは他の高校生よりも深く防災について学んできているからそれらをアウトプットしていく必要がある。そのタイミングは進路などによって異なるが、私の場合は消防局だ。消防局で防災や減災について共有していきたいと考えている。だが、どうしても私一人だけでは厳しい場面があるかもしれない。その時は上司など頼るかもしれないが、頼れるのが当たり前だと思わず、信頼関係や順序を大切に過ごしていくべきだと考えている。

今後私たちが生きている間に起こると言われている南海トラフ巨大地震に対しても考えていくべきだ

と思っている。未災者として私たちにできることは限られているかもしれないが、風化を防いでいくことは可能だと思う。そのためにも私たちが防災の知識をさらに高めていく上で、防災力を絶やすことはしてはならない。これから生き抜いていく中で防災をさらに身につけていき今以上に人間として成長していきたい。

忘れさせない、未来へ残す

橋口 彩葉

はじめに

阪神・淡路大震災が発生してから30年になる。その年に私は環境防災科を卒業する。私は、これまで大きな災害を経験したことがないが、私たちは災害と共に生きていかななくてはならない。阪神・淡路大震災を風化させないために、あの日何があったのか記し、災害を経験していない世代へ語り継ぐ。また環境防災科で3年間学んだこともここに残しておきたい。

1 阪神・淡路大震災

(1) 母の体験

1995年1月17日、母は旅行中でアメリカのロサンゼルスにいた。1月14日に神戸を出発し、1月22日に帰国する予定だった。神戸で地震が起きたことを知らない母は、旅行中にツアーを案内してくれる人から「Did you know there was a big earthquake in Japan?」と聞かれ日本で地震が起きたことを知った。そこから新聞を買って記事を見てみると、漠然と神戸で地震と書かれてあった。震源地を表す黒丸で神戸が隠れているのを見た母は「これはダメやな」と思った。

ラスベガスの空港で飛行機を降りた時に記者の人たちから地震のことについて取材された。地震が起きたことを知ってから、祖母（母の母）に電話したがつながらず不安な日々が続いた。アメリカで日本の神戸から来たと言うと、「きみの家は大丈夫？」と知らない人でもみんな親切にしてくれた。数日が経ってから祖母と電話がつながり、家は半壊だが家族全員無事であることが分かり安心した。

アメリカから日本に戻り、家に帰ろうと思っても電車が動いてなくて帰れなかった。関西国際空港周辺のホテルはどれも満室で泊まれなかったが友人に力を借りて船に乗って家に帰った。母の職場は東灘にあったため神陵台から明石を経由し、船で職場まで行っていた。

(2) 祖母の体験

阪神・淡路大震災当時、神陵台にある団地の4階に住んでいた。午前5時46分「ドーン！」という大きな音とともに地面が激しく揺れだした。同時に部屋にあった本箱がタンスの横に倒れ掛かかり、それを祖父が倒れてこないように必死に支えた。前日にぜんざいを炊いていたため、コンロの上に置いていたぜんざいが床に散らばっていた。玄関に置いてあった下駄箱がドア側に倒れかかり、すぐに外に出ることができなかった。下駄箱を移動させ、1階まで下りて駐車場まで行ったとき、震度5の地震が再び起きた。その瞬間、目の前の道路が割れて膨れ上がり、波打つようだった。祖母が住んでいた団地は特に大きな被害はなく、少し傾いた程度だった。しかし、少し離れた6号棟は建物が真っ二つに折れるように壊れていた。神陵台近くの松ヶ丘という地域でガス漏れによる火災が起きていた。そのため辺りはガスのにおいがしていた。2日後、須磨に水が湧き出るところがあると聞き車で行くことにした。だが車が渋滞していて目的地になかなか着かず、途中の北須磨小学校の運動場で水を汲んだ。

3日ほど経ってからアメリカにいる娘（私の母）から電話がかかってきて家族の安否や被害状況について話した。

2 話を聞いて

私は環境防災科の授業等でたくさんの方から震災のお話を聞く機会があったが、母と祖母から震災当時のことをしっかり聞いたのは初めてだった。母は震災を経験していないが日にちがずれていけば被災していたかもしれない。震災はいつ、どこでやってくるか分からないということを改めて感じさせられた。母の弟は阪神・淡路大震災が起きた時、実家で祖母と祖父の3人で寝ていたが、地面が大きく揺れた瞬間寝ていた自分の元にテレビが飛んできた。たまたま母が置いていたキャリーケースの入っていた段ボールがクッションとなって助かったと聞いた。もしそこに段ボールがなかったら大けがをしていたかもしれない。震災は一瞬にして大切な人や物を奪ってしまうのだと思った。そして気づいたことがあった。それは、祖母の家にあるタンスや食器棚の大きな家具がまったく固定されていなかったことだ。引っ越しをしてから家具の固定をしようと思っていたが腰が痛くてなかなかできなかったと言っていた。震災当時の話を聞くため、めったに行かない祖母の家に行き初めて気が付いた。私たちは将来、

必ず大きな災害を経験することになる。大切な人や物を失ってから後悔しないために身近なところから防災を行動に移していかなければならないと思った。

3 環境防災科

(1) 入学のきっかけ

2021年7月3日静岡県熱海市で28人が犠牲となった大規模な土砂災害が発生した。当時、ニュースや新聞の記事で大々的に取り上げられた。目を疑うような現地の様子に言葉を失った。連日消防などの救助隊によって行方不明者の捜索が行われた。新聞の記事を見たとき、熱中症が懸念されるほどの猛暑の中、懸命に救助活動を行う消防士に感銘を受けた。そこから消防士になりたいと思い担任の先生に相談し、環境防災科があることを知った。消防学校体験入校や垂水消防署体験などができることに魅力を感じた。また、中学3年生の時、1・17メモリアル行事に参加させていただく機会があり、環境防災科の先輩方と一緒にワークショップを行った。中学生で参加していたのが私1人だったのでとても緊張していたが、先輩方が明るく、防災の知識がまったくない私にも分かりやすく説明してくれた。その時私も環境防災科に入学してもっと先輩方と一緒に防災を学びたいと思ったことが入学のきっかけだ。

(2) 視覚特別支援学校との交流

1年生の時から継続して参加してきたのが視覚特別支援学校との交流である。初めて参加したのは1年生の7月だった。オンライン交流で画面越しだったが、お互いの学校紹介や趣味などについて話した。初めて交流したときはとても緊張していたが、支援学校の生徒のみんなはとても気さくで話やすく、すぐに打ち解けることができた。12月には支援学校に行って、全盲や弱視などの視覚障がいのある人と障がいのない人が一緒にプレーできるフロアバレーボールを体験した。ゴーグルをつけて目の前がまったく見えない状態になり、支援学校の生徒と混合のチームで試合をした。目の前が見えないのでチーム内で声を掛け合っていたがボールの位置が分からず、目の前が見えないだけですごく不安を感じた。また、災害時の避難所生活についてのワークショップを行い、避難所での問題点や課題について話し合った。災害時に障がい者は、バリアフリーでない避難所や大勢の人がごった返す一般の避難所などでは滞在が難しく、自宅や車中に無理やり避難することがある。長期の避難生活が与える影響が大きく避難生活には障がい理解が必要であることを知った。このワークショップが障がい者の立場から防災を考えるきっかけになった。視覚特別支援学校との交流を通して感じたことは、障がいのある人とない人との間に壁はないということだ。普段の生活の中で、障がいのある方に会っても対応の仕方が分からず私自身の中で心の壁ができてしまっていたが、支援学校の生徒の方と話すとお互いに共通の趣味があったり好きなゲームの話をしたりなどして、壁を感じることはなかった。日常や災害時に障がいのある方が困っていたら、少しでも力になりたいと思った。

(3) 令和6年能登半島地震被災地ボランティア活動

令和6年3月17日、18日に石川県の志賀町で被災地ボランティアとして活動した。被災地へボランティアに行くのは初めてだった。現地では依頼主の方のお宅に行き、畳や大型の家具など災害ゴミとして出たものを搬出して仮置き場まで持っていき撤去した。一日に依頼主の方のお宅と仮置き場を何度も往復した。1日目にお伺いしたお宅で作業が終わった時に、依頼主の方が「もっと運んでほしいものがあるけど、住み慣れた家の物を捨てるのは簡単にできないからね」とおっしゃっていた。それを聞いて、思い出の詰まったものを災害ゴミとして出さないといけなくなることの辛さを目の当たりにした。被災地の様子を実際に見ると、木造、瓦屋根の家がほとんどだった。家の屋根の瓦が割れ、ブルーシートで覆われている家屋がたくさん見られた。車で移動しているときに、道路は最低限車が通れるように整備されていたものの、コンクリートは盛り上がり、6cm程の段差になっている場所や、ひびが入っている所が多く、移動しているときに体が飛び上がるほどの衝撃を感じることもあった。被災地支援活動を通して、初めて自分の目で見た被災地の状況は言葉にできないほど衝撃的で、本当にここで地震が起きたのだという事実を突きつけられた。私は大きな災害を経験していない未災者だが被災地の様子を見て震災を経験したくないと強く思った。しかし、私たちは災間を生きている。近い将来必ず起きるとされている南海トラフ巨大地震は30年以内で80%（2025年1月15日発表）、40年以内では90%程度の確率で発生すると言われるようになった。私たちはどこかで必ず災害に直面し、乗り越えていかなくてはならない。

私が行かせていただいた志賀町はまだまだ復興途中だった。活動している中で、作業が終わり依頼主にご挨拶に行くと涙ぐんで「ありがとう」と言ってくれた。大型の家具や重たいものなど搬出するのに苦勞する物もあり、大変だと思えることが多かったが、何度もありがとうと言ってくれたので少しでも私たちが力になれて良かったと思えた。また、私が印象に残っている言葉がある。それは依頼主とお話ししていた時に「この町もいいところだから次は復興した町に遊びにおいで」という言葉だ。私は災害ボランティアとして初めて志賀町に行った。初めて見た志賀町は倒壊した家屋やひび割れた地面など衝撃的な景色ばかりだった。しかし、本来の志賀町はもっと素敵な場所なのだと教えてくださった。いつか必ずまた志賀町に行き、復興した志賀町を見たいと思う。

（４）募金活動

1年生の4月に校内で行った令和2年7月豪雨募金活動が環防生として初めて参加した活動だった。初めての募金活動は緊張してまったく声が出せず、募金箱を持って立っただけだった。だが、隣で2年生と3年生の先輩が声を張って一生懸命生徒に呼び掛けている姿を見てかっこいいと思った。そこから少しずつ募金活動では声を張って呼び掛けることができるようになった。

私が活動してきた中でとても印象に残っている募金活動がある。それは2年生の3月に行った能登半島地震の全県一斉募金だ。垂水駅前に立って被災地への募金を呼び掛けた。たくさんの人が立ち止まって、バイクや自転車に乗っていた人でも降りて手いっぱい握った小銭を募金してくださった。

募金をしている中で声をかけてくださった方がいた。その方は阪神・淡路大震災で被災し、1月1日に起きた能登半島地震で被害を受けた被災地に何かできることはないかと思っていच्छやった。その時に私たちの募金活動を目にしたという。その方は募金箱にお金を入れる時、私たちに「頼んで」とおっしゃった。その方の一言が忘れられない。募金箱はお金でいっぱいになり、とても重たかった一人ひとりの被災地に対する想いが募金という形ですごく伝わった。そして私たちは募金をしてくださった方の熱い想いをしっかり被災地に届ける責任があるのだということを改めて感じた。

（５）防災教育

私は1年生の時に、防災ジュニアリーダーで考えたアクションプランの3本柱である防災運動会、避難訓練、防災教育の中の防災教育班を担当した。普通科の生徒や学校の教員に向けて行う防災教育の授業内容を考え、スライドや配布資料も作成する。学期末には放課後に防災教育班で何度も集まって話し合いを行う。どうしたら飽きずに授業を聞いてもらえるか、堅くなりすぎず楽しく防災を学んでももらえるにはどうしたら良いかなど、充実した防災教育になるよう考え続けた。当初は、退屈そうにしている生徒や、寝ている生徒がいるという課題があった。そこから退屈にならないように一方的に授業するのではなくワークショップを取り入れた授業を行った。また、昨年の3学期防災教育では凝固剤を実際に体験してもらい馴染みない防災グッズを知ってもらうことで、楽しく防災を学んでもらえた。

防災教育を通して、一から内容を考えて、分かりやすく伝えることができるように工夫を凝らし何日もじっくり時間をかけて行うためすごく大変だったが何よりも防災教育を考えることで私自身も学ばせてもらうことが多かった。正直、自分が体験してきた小学校や中学校の防災教育では、退屈だと思う時があり内容もあまり頭に入っていなかった。しかし、今では防災教育を仕掛ける立場になり、伝えることの難しさを感じた。震災の教訓を伝えたいと簡単に言っていたが本当に伝えようと思ったら簡単には語ることができないと思う。しかし防災教育で少しでも生徒や先生方に防災の知識や重要性を知ってもらうことができてよかった。

4 夢と防災

私は環境防災科に入学してからずっと消防士になりたいと思っていた。消防学校の体験入校では小隊長を務め、みんなのリーダーとして貴重な体験をさせていただいた。消防に関する様々な活動をしていく中で高校3年生になり進路について考え直したときに消防だけでなく他にも自分に向いている職業があるのではないかなと思うようになった。もう少し幅広い視点から将来の夢を考えたいと思い、高卒で消防を受けることから大学進学に進路を変えた。私の将来の夢はまだ決まっていな。大学を受験するにあたってどんな職業に興味があるのか考えている時に「Active 防災」の授業で夢と防災に関わる発表があった。みんなの発表を聞いてどの職業も防災と深く関わっていることに気づいた。私は将来どんな職業に就くのか分からないが、必ず防災と関わっていることは確かだ。これから私たちが未災者の中心となる。環境防災科で学んだ防災の知識や経験は専門的に学んだ私たちが率先して行動を起こしていかな

くてはならない。将来、どの職業に就いても防災の観点から中心となって災害時に役立てる人になりたい。

おわりに

私は環境防災科で3年間たくさんのことを学び、貴重な体験をさせていただいた。環境防災科に入学していなかったら防災を学ぶ機会はなかったと思う。元々何事にも消極的な性格だった私は、自分からなにか発言したり、みんなとコミュニケーションを取ったりすることが苦手だった。しかし、たくさんの方と交流していく中で、自分の意見を出し合ったり、みんなの前で発表したりすることがたくさんあった。その度に苦手を克服し、人として成長することができた。

今までたくさんの方のご講義を聞いたり、語り継ぐの執筆にあたって母と祖母から災害時の話を聞いたりして、命の尊さを改めて感じた。災害はいつやってくるか分からない。明日かもしれないし、数分後にやってくるかもしれない。それなのに私たちは毎日当たり前のように不自由のない生活を送っている。毎日友達と楽しく話したり、好きな食べ物をたくさん食べたりすることを当たり前だと思わず一日一日を悔いなく過ごしたいと思う。

防災をまったく知らなかった私が災害の恐ろしさを知り命の大切さや、災害に備えることの重要性を学ぶことができた。3年間様々な活動を支えてくださった先生方や親に感謝したい。

忘れないために

平尾 彩葉

はじめに

阪神・淡路大震災から 30 年を迎えている。テレビや新聞でも 1 月 17 日になれば必ず取り上げられるが、震災を経験していない世代は目を留める人も少ない。しかし、これからいつ起こるかわからない南海トラフ巨大地震などのたくさんの自然災害に対して備えていく必要がある。そのためには、過去の災害からの教訓を私たちが伝えていかなければならない。震災を経験していない私たち高校生にとっては、ひとつひとつの言葉や思いに重みを感じられる。しかし、環境防災科生徒として今まで学んできた知識とともに言葉の重みを、次の災害への備えの糧になるように伝えていきたい。

1 阪神・淡路大震災での体験

(1) 教員 O 先生の話

当時 O 先生は長田区にある長田商業高校（定時制）に勤務しており、妊婦の妻と 2 歳の娘がいた。家は明石市の松が丘にあるマンションの 5 階だった。O 先生は地震が発生する前、妻と娘と別室で寝ていた。そして、午前 5 時 46 分大きな音とともに目が覚めた。最初は状況が理解できず、近くで爆発が起こったのかと思っていたが、大きな揺れを感じすぐに別室にいた妻と娘の上に覆いかぶさった。揺れが少し収まってからは妻と娘を連れ一時的に車の中に避難した。そして朝 7 時ごろ、家の中に戻ってみると皿がすべて床に落ちて割れており、テレビも倒れていた。その後 O 先生は家を後にし、体育館に避難しようと近くにあった朝霧小学校を訪れたが、体育館の屋根が全部剥がれていてその状況に驚愕した。

少し経ってから、O 先生は当時勤務していた長田商業高校に向かった。高校に行ってみると校舎の真ん中に亀裂が入り崩れ落ちていたが、何とかして校舎に入りほかの先生たちと合流した。その後、高校は避難所になりたくさんの避難者であふれかえり、その手伝いを任されるようになった。初めは避難者たちも落ち着いていたが、日に日に支援物資をめぐって喧嘩するようになり、喧嘩の対応も行っていた。また、子どもたちの悩みを軽減するため精神科医の先生とともに心のケアも同時に行っていた。その後、2 月には第 2 子が誕生し、3 月には学校の授業の再開ができた。

(2) 母の体験

当時、私の母は 2 日前に成人式を迎えたばかりで、次の日に短大の卒業試験を控えていた。そのため前日は祖父の店の 2 階でこたつに入って勉強していた。その日は祖父も祖母も夜中に外出していて、帰宅後 3 人ともこたつで寝てしまっていた。そして当日の朝、普段なら大学に行くために準備をしている時間だが起きられず、「ドンッ」と下から突き上げられるような感覚がして目が覚め、その後すぐ横揺れが始まった。その時は何があったのか分からないまま、隣で怖がっていた祖母に布団をかけ揺れをしのいだ。揺れがおさまったあと、祖父が店のすぐ近くにある家で寝ていた叔父を見に行き叔父の無事を確認した後、懐中電灯を持って店の 2 階に戻ってきた。そこでやっと部屋の様子を見ることができた。少し経ってから、祖父の店の電気屋に多くの人が懐中電灯と電池を買いに来始めた。しかし電気が通っていないため、レジが開かず自分たちが持っている小銭をかき集めてお釣りにしていた。その後、水道も止まっているため、飲み物を買いに原付バイクで近くの自販機まで行く道中、建物が燃えていたり道が割れていたりするのを目の当たりにし、どれほど大きな地震だったのか思い知った。そして、地震当日、母は短大の卒業試験の予定だったため大学に向かおうと友人に電話するも繋がらず、水も出ないためトイレをすることも風呂に入ることでもできなかった。それ以降、水が出ない間は毎日山まで湧き水を汲みに行き、それをトイレの水として使っていた。飲み水や食べ物は祖父の会社の支援物資があり生活できた。明石の親戚の家は電気もガスも無事だったためお風呂に入れてもらうことができ、そこで水の大切さを知った。

阪神・淡路大震災から 30 年、当時の記憶が薄れてきている。地震が起きてすぐのころは余震が来る度に怖がっていたのに今では意識することもなくなった。しかし、地震のニュースを見るとやはり思い出すことがある。だからここれから起こる災害に備えて過去の記憶を繋いでいって欲しいと思うと母は言っていた。

2 話を聞いて

〇先生と母の話を聞いて、改めて今普通に生活できていることのありがたみを感じた。当時はライフラインが止まって、お風呂やトイレにも行けず余震の恐怖に耐えながら生活しなければならなかった。私だったら、絶対そのような状態に耐えられないと思う。だからこそ、これからこのようなことがないようにするため日頃の備蓄や対策が大切だと思った。また、このような体験を風化させることがないように、話したり写真を見せたりなど、いろんな形で伝えていきたいと思った。

3 環境防災科に入学して

私が環境防災科に入学したきっかけは2つある。1つ目は、中学生の時に防災に興味を持ち始めたことだ。中学1年生の時、社会の授業で初めて阪神・淡路大震災について習った。その時、当時の写真や避難所の状況などを見て言葉が出なかった。それから、実際に自分の親にも当時の話を聞いたり、地震について調べたりしているうちにどのようにしたらたくさんの人が犠牲にならずに済むのか、自分に何かできることはないのかとそう思うようになった。そこで学校の先生に話してみると環境防災科を教えてもらい、講義や実習を通して防災が学べる点に強く惹かれ入学を決めた。

2つ目は、数多くのボランティアに参加できることに魅力を感じたことだ。私は幼いころから母と共に町のごみ拾いや、餅つき大会の手伝いなど様々なボランティア活動に参加してきた。そこでもっと幅広く活動してみたいと思い環境防災科を選んだ。

(1) ボランティア活動

私は、環境防災科に入ってからたくさんのボランティアに参加した。その中でも、南あわじ市の出前授業に力を入れて活動してきた。南あわじ市にある小学校や中学校が対象で、依頼される授業テーマは様々だった。今まで私は何かを人に伝えるという経験がなかったため、最初何をしたらよいのかわからず先輩を追いかけるのに必死だった。しかし回数を重ねていく度、どのようなスライドが見やすいのか、小中学生にわかりやすく伝えるにはどうしたらいいか、ワークシートは使うのかなど試行錯誤し、たくさんの準備が大切だということを知った。また、南あわじ市の子どもたちの防災の知識量に驚かされた。南あわじ市では定期的に防災教育が行われており、ひとりひとり防災意識が高いことが分かった。そのため神戸でも積極的に防災教育を行っていく必要があると感じた。

ボランティア活動を通して私は、やってあげるのではなくさせていただくという意識を持つようになった。環境防災科で行ってきたボランティア活動の経験はこれからの様々な活動に活かしていきたい。

(2) 防災ジュニアリーダー

私は、2年間防災ジュニアリーダーとしてたくさんの活動に参加した。防災ジュニアリーダーの活動の中にはアクションプランの作成というものがあり、校内と地域の防災意識の向上を目指している。舞子高校では3つの柱からアクションを考え、「防災教育」「避難訓練」「防災運動会」があった。その中で私は避難訓練班として活動した。避難訓練は毎学期末に実施され、生徒が内容を考え運営を行う。地震や火災の想定、障害物の設置など生徒が本番を想定して避難できるように様々な工夫を行ってきた。また、生徒がどのようにしたら避難しやすいのか、避難経路の動画化や防災教育班とも連携をしながら避難訓練とつながる授業をするなど多くの準備を行った。そして毎回全ての生徒、教職員を対象にアンケートを実施し、よりよい避難訓練になるように活動してきた。

3年生でも避難訓練班として継続して参加し、これから起こる南海トラフ巨大地震に備えていろいろな人の視点から避難訓練を行いたい。そして、舞子高校全体のひとりひとりの防災意識を上げていく手助けをしていきたい。

(3) 防災フォーラム

私は、「ユース防災プロジェクト」と「世界銀行防災グローバルフォーラム」の2つのフォーラムに参加した。

ユース防災プロジェクトは、南あわじ市の教育研修施設の開所記念として、市が初めて企画したイベントで、南あわじ市と連携する高校・大学の学生を中心に、新たな防災教育のかたちを模索し、これからの防災や減災の担い手の育成および防災意識と社会参画意識の向上をめざすプロジェクトだ。このプロジェクトは2泊3日で行われ、野島断層の見学や語り部さんのお話をはじめ、防災食作りや避難所運営のワークショップなど、何人かでグループになって活動することが多かった。そして、舞子高校も

「避難所のあそび」をテーマに避難所について考え、誰でも遊びやすい遊びを考えるワークショップを担当した。その中で実際に段ボールやペットボトルなどを使って、どこでどんな風に誰と遊ぶかなど細かく設定を決めてグループごとに遊び道具を作ってもらった。自分たちが考えていた物よりもはるかに優れた作品が多く驚いた。最後には、南あわじ市の市長に提言を行い、これからの防災について考えた。周りの人達と意見を共有して具体的な案を考えて模造紙にまとめた。これがとても難しかったが、どうしたら分かりやすいか様々な工夫をし考えることができた。

世界銀行防災グローバルフォーラムは、開発途上国を中心とする防災に携わる政府・地方自治体関係者、企業、学術関係者、NGO スタッフ等が集まり、国際協力を進める上での観点を中心に、自然災害に伴うリスクを考え、減災を実施する上での課題などを議論する会合だ。私は、過去に災害を経験した4つの高校が集まり、高校生防災サミットの一員として参加した。このプロジェクトでは、各学校それぞれ3つの班に分かれ4学校混合で3グループを作り、そこでディスカッションを行った。サミット当日までは3回のウェブミーティングを通し、班ごとに課題を提示しそれについての具体的なアクションを考え、英語に訳してパワーポイントでまとめた。サミット当日は、各学校で持ち寄ったアクションプランを最終的に5つのポイントに絞り、「宣言書」として提出した。この宣言書は、防災提言として姫路市長や兵庫県知事など、たくさんの人の前で発表させて頂いた。英語を使つての発表だったため、うまく表現することができないところもあったが、協力して発表することができた。これからそのアクションをどう実現して行くか、また舞子高校では何ができるのかをしっかりと考えていきたい。

この2つの活動を通して、私は自分たちで防災について考えることの重要性和、個人の行動が社会全体の防災につながることを強く実感した。今後もどのように考えを広めていくか考えていきたい。

4 自分の夢と防災

(1) 私の将来の夢

私は将来、国際関係の仕事に就きたいと考えており、その中でも日本語教師になりたいと考えている。日本語教師とは日本語が母国語ではない人たちに日本語を教える仕事だ。私が日本語教師を目指すようになったきっかけは、舞子高校が行っていたネパール訪問にある。新型コロナウイルスの流行で私が在籍している間は再開できていないが、先輩方が交流していたネパールの話を聞き、自分とは違う文化や価値観を持った人たちとの会話を通して多文化について深く知りたいと思ったからだ。また、講義で海外の防災について触れることもあり国際関係に興味を持つようになったからだ。ボランティア活動で出前授業に参加させていただく機会が増え、人に教えることの楽しさを知ることができたし、外国の人たちと交流をしてみたいと思うようになった。

(2) 教員と防災

日本では、在日外国人の人口が年々増加傾向にある。多文化共生が謳われる反面、言語や宗教間でのトラブルも少なくない。こういった状況にある日本で、これから起こりうる災害に対して、外国人と共に防災を行う必要があるのではないかと思った。今年の1月に発生した令和6年能登半島地震の際も、何が起きているのか分からず行動できない、言葉が伝わらずコミュニケーションが取れない、物資が来たことにも気づかないなどといった問題が発生していた。そこで、私は外国人に対して日本語を教えながら、定期的に防災教育や避難訓練を行い、災害時の行動の順序を覚えてもらうことが必要だと思った。外国人にとっては急に起こる災害に備えないといけないため、事前に行動の順序や日本語での災害用語を覚えておくことで混乱して動けないといった状況は防ぐことができる。また、普段から日本人と外国人の交流が必要だと思った。実際私も外国人を目の前にすると緊張して言葉が出ないことがある。しかし、災害時にはみんなで協力して行動する必要がある。そのため、留学生や日本語教室の生徒と近所の日本人学生たちが話せる様な場を作りたいと思った。

これからは、日本人と外国人が共に防災を学び、災害に強い環境を作れる人になりたい。

5 南海トラフ巨大地震に向けて

40年以内に90%起こると言われている南海トラフ巨大地震。神戸市では最大震度6強、マグニチュードは9.1、津波の被害も出ると予想されている。この大災害と隣り合わせで生活していく中で、どのように対策をしていくのか考える必要がある。まずは、地域との交流を深めることが大切だと思う。私の家の周りはマンションや新しくできた一軒家が多く、子どもや若者、高齢者など様々な年代の人が暮らしている。新型コロナウイルス以前は、マンション住民全員が集まってパーティーをしたり地域のボ

ランティアに参加したりしていた。しかし、今となっては顔を合わせる機会がなく、誰がどこに住んでいるのか、部屋は全室埋まっているのかなどをなんとなくでしか把握できていない。そのため災害時に助け合うことや安否の確認など必要最低限のことも行うことができない。だから、普段から挨拶をしたり地域のイベントに積極的に参加したりして、顔見知りの関係を作り、地域全体で防災を行っていききたいと思った。

また、定期的にハザードマップの確認をするべきだと思った。神戸のまちは海が広がり山もあり自然豊かな良いまちだ。しかし、災害時には津波による被害や土砂災害など多くの被害が出る場所になってしまい、避難することさえも大変な状態になるだろう。そうならないためにも普段からこまめにハザードマップで自分の避難経路や危険な場所を確認し、自分の命は自分で守ることが必要だと思う。さらに、ハザードマップに自分のまちの良い所、伝えたいことを書き込めばより自分のまちを好きになれる。

これから、生きている間にもたくさんの災害に見舞われるだろう。しかし、みんなで協力して被害を減らしていくことで安全は守られる。今まで環境防災科で学んだたくさんのことを生かして安心安全な生活をしていきたい。

おわりに

「語り継ぐ」の執筆にあたって、私は当たり前の生活ができる「今」のありがたみを大いに感じる事ができた。災害はいつ起こるかわからない。南海トラフ巨大地震も生きている間に必ず起こる。そうなったとき、日々の備えや過去の災害の教訓を大切にしていかなければならない。「災害大国」と言われている日本で災害を未然に防ぐことは不可能に近い。しかし、ひとりひとりが防災意識を持つことで被害を減らす「減災」はできるということをこの3年間で学んだ。だからこそ、この「語り継ぐ」の執筆をし、一人でも多くの人に読んでもらい、これからの災害への備えに役立てて欲しい。

環境防災科としての3年間はあっという間だった。実習や講義、発表やレポートなど楽しくもあり大変でもあったけど、とてもいい経験をさせて頂いた。また、地域の人や先生、両親などたくさんの人の協力があったからこそこの3年間に有意義に過ごすことができた。とても感謝してもしきれない。これからは、この経験を生かして未曾有の災害に備えていきたい。改めて環境防災科でよかったと思った。

あの日を忘れない

深田 稜太

はじめに

阪神・淡路大震災から30年を迎えたが、メディアで震災について取り上げられる機会が年々減っているように感じる。これからメディアで取り上げられなくなっていくと震災を知らない世代が増えていってしまい、風化の一途をたどってしまう。また、地震の怖さや、この地震がきっかけでできた教訓の上に風化と同じ被害が出てしまったら、今まで教訓の継承に頑張ってきた人たちの活動が無駄になってしまう。これからも災害と向き合う中で少しでも被害を減らせるようにするのが、この「語り継ぐ」を執筆する意味であるとは私は考える。

1 阪神・淡路大震災当時の体験談（空手の先生Yさんの話）

Y先生は阪神・淡路大震災が起こったとき、垂水区にある自宅にいた。Y先生は初め、家に車が突っ込んできたのかと思った。しかし、長く揺れているのを感じて、地震だということに気づいた。揺れが収まって家の中を確認するとテレビが飛んでいて離れたところに落ちていたり、家具が倒れたりしていた。配置によって倒れたり倒れなかったりしていた。東西に置いていた家具は倒れず、南北に置いていた家具が多く倒れていた。地震が起こったら机の下に隠れるということを学校で教わるが、このとき机の下に隠れたり逃げたりできる状況ではなかった。

工場が長田にあり、見に行くために車を使って向かった。しかし、渋滞していたため近隣の住民からバイクを借りて向かった。須磨の月見山を越えたあたりから徐々に被害が大きくなっていった。向かっている途中に家が倒れていたりブロック塀が倒れていたり、家が火事になっていてもどうすることもできなかった。神戸須磨シーワールド（旧須磨水族館）のところで靄がかかっている長田につく頃には火事が起こっていた。工場に到着して中の状況を確認したら、いろいろなものがぐちゃぐちゃになっていた。工場が入っているビルもひねられたような形になっていた。ビルを建て替えるために、工場は退去せざるを得なくなった。

長田の火事に対応するために、消防が火事現場に到着しても地震の影響で消火栓から水が出ず、立っていたら住民の人に罵声を浴びせられていたのを見た。人が生き埋めになっていても火が回ってきたら埋まっている人を見捨てて逃げるしかなかった。このとき家が倒れた時に死んだほうが楽だったかもしれないと思った。火を消すために大量のホースを海まで繋げたが、道路を横断してつなげたため、車がホースを踏みながら進んでいくためあらゆる場所から噴水のように水が漏れ出していたようだ。また、火を消すために海水を使ったがポンプ車は対応していなかったため、車やホースなどの機材が使えなくなったというのを聞いた。

高校の同級生が湊川公園近くの会下山に住んでいて連絡が取れなくなっていたため様子を見に行った。行く途中、大開通の道路が陥没しているのを見た。陥没しているところは地下鉄が走っている上の道路だった。また、コンビニエンスストアのガラス部分が全て割れていて破片が大量に落ちているがその中に入って食料などを取っている人がいた。いつもなら屋根が見える位置から屋根が見えず急いでいくと、同級生が住んでいた家がつぶれていた。埋まっていると思って瓦礫をどかしながら声をかけ続けた。すると声が聞こえ、どこにいるのか聞くと後ろにいて無事だったことが分かり安心した。同じアパートのところにおばあさんが埋まっていると聞いて瓦礫を撤去しようとしても重くて動かなかった。少しずつ撤去しておばあさんの近くまで行けたが、顔のところに仏壇があり、それを殴って壊したが柱があり、自分の手では助けることができなかった。少し経って自衛隊が到着し、自衛隊の方におばあさんは救助してもらった。その後、自宅へ帰っているときに、道路の横に布団を被ったご遺体がたくさん置かれているのを見た。

当時、趣味で無線をしていたので、大型のトラックドライバーが必要なものを聞いてくれた。何台ものトラックが明石にきて物資を届けてくれた。水、カセットコンロ、LPガスとそれを使うための道具など大量に届けてもらい、自分が使う分以外は全て地域の方々に配った。携帯電話が繋がらなくなっていた時に無線が役に立った。様々な団体が全国から神戸に集まって物資を大量に持って来て余ったものを地域に配っていた。当時、舞子から三宮まで行くのに1時間程度で行けていたが地震直後は1日かかった。

阪神・淡路大震災で縦や横のつながりやコミュニティが大事だと思った。人は一人では生きていくこ

とはできない。周りとのコミュニケーションをとって助け合うことが生きていくうえで大切であると言っていた。

2 話を聞いて

Y 先生の話聞いて、阪神・淡路大震災の被害について改めて知ることができた。道路が陥没していたり、火を消すために海から水を引いたりしたことは知っていたが、海水を使った結果、車や機材が全て使えなくなったことを知らなかったため驚いた。また、普段は怖いイメージがあるような人でも災害があれば地域の人たちのために物資を配ってくれ、優しいところがあること知ることができた。Y 先生の話聞き、人とのつながりは改めて大切だと思った。つながりを大切にしていれば、困ったときには周りが助けてくれる。そのために、近隣の方に挨拶をして仲を深めて助け合えるようにしたいと思った。

3 環境防災科入学

私が環境防災科に入ろうと思った理由は3つある。1つ目は、中学3年生の時に消防士になりたいと塾の先生に相談したときに環境防災科を勧められたからだ。調べていくうちに消防学校体験入校というものがある教育課程にあったり、垂水消防署体験というものがあったりと、消防士に近づくことができるのではないかなと思ったからである。2つ目は、地震や防災について学ぶことのできる全国でも珍しい学科だということを知り、学んでみたいと思ったからである。3つ目は、私は子どもが好きで、子どもとかわることができるボランティアをしてみたいと思ったからである。

(1) 消防学校体験入校

1年生の時に初級、2年生の時に上級と2回神戸市消防学校に体験入校させて頂いた。1年生の時は初級で規律訓練がメインであった。規律訓練は中学校や高校でも体育の授業で行っていたため当初は簡単だと思っていた。しかし、消防士の方々のお手本を見たら今まで私が行ってきたものは甘いものだったと思い知らされた。足の角度や敬礼の手の角度など、あらゆるところが洗練されており、改めて消防士という職業にあこがれを持った。

2年生の時は上級で消火活動の訓練をさせて頂いた。このとき私は小隊長を務めることになった。この訓練ではホースを延ばしてつなげるところから訓練を行った。ホースをまっすぐに延ばすのが難しく斜めに蛇行したりホースが伸び切らなかつたりした。そのとき、消防士の方がコツを教えてください、うまく延ばせることができるようになった。中隊長の合図で3つの班が一斉に放水を開始したが私の班だけ水をくみ上げるポンプが故障し、放水活動を行うことができなかった。このとき小隊長として何か動いたほうがよかったのかもしれないが私は動くことができず、ただホースをもって水が来るのをひたすら待つことしかできなかった。結局、水が出ないまま1回目の放水活動が終了し、私の班だけ何もすることができないまま撤収することになった。このとき私は、阪神・淡路大震災のとき長田の消火にあたった消防士の方々の気持ちを少し理解することができたような気がした。2回目の放水活動では場所を移動して放水活動に参加した。2回目はうまくホースを伸ばし、放水することができたが1回目の放水活動で消火活動に参加できず、ただ見るだけの状況になってしまったのは少し心残りである。

(2) 垂水消防署体験

私はこの垂水消防署体験には1年生の時と2年生の時に行かせていただいた。これは年に2回あり、1回目は講義、2回目は訓練を体験するという内容だった。講義では、平成25年(2013年)7月12日に起きた宝塚市役所放火事件について学んだ。この事件は市役所に納税の相談に来た男が、話し合いの途中で激高し火炎瓶を職員の座席へ投げ入れたことで発生した。職員は消火器で初期消火を試みたが火の勢いが強く、すぐに火の高さは天井に達してしまった。消火栓を使った消火を試みたが使い方が分からず、使用することができなかったため消火を諦めて市の職員は全員避難した。火炎瓶が投げられた階はほとんどが焼けたのにもかかわらず、死者は0名で負傷者も6名と最小限の人的被害だった。最小限で済んだ理由として広いベランダがあり、そこから多くの人が避難することができたことや、排煙窓を職員が自らの判断で開けたことが挙げられる。結果、煙が外に出ていき、一酸化炭素中毒者になる人が出ず、逃げることができたということだった。ベランダや排煙窓の重要性について知ることができた。

訓練では、1年生の時に降下訓練と救助訓練をさせて頂いた。降下訓練は消防士の方のお手本を見てると素早く簡単そうに見えたが、実際にやってみると思ったよりも安定せず、自分の体重を足とロープで支えることはとても難しく感じたのを覚えている。救助訓練では、部屋を真っ暗にした状態で煙を

充滿させて行った。部屋に入ると案の定暗く、地面の状態や進む方向が分からなくなりそうになった。壁を頼りに歩くのが精一杯だった。しかし、要救助者を助けるためには大きな声を出し、呼びかける必要があったため煙を吸わないように低い姿勢で救助活動を行った。要救助者を見つけて外まで運び出す際にボンベなどが転がっており、手で確認しながらゆっくりと出口を目指した。今までこのような本格的なことはしたことがなかったため、状況判断をするのがとても難しかった。

2年生の時に消火活動と救助活動の2つに分かれて訓練をさせて頂いた。私は救助活動を行った。実際に消防士の方々が着ている服を着させてもらい、消防車に乗ってサイレンを鳴らして現場へ出動するところから訓練は始まった。現場に到着後、酸素ボンベを背負ってマスクをつけ息がしにくい中、建物に入って救助活動を行った。要救助者を発見後は意識の有無を確認し、要救助者を持ち上げて外まで連れていき、ストレッチャーに乗せ、現場の指揮官に状況報告をするところまで行った。1年生の時に煙の中の要救助者を助ける体験をしたが、2年生で行った訓練は1年生の時の訓練よりも緊張感があり、何倍もしんどかった。このような火事の現場ではなくても少し動くだけで息がしづらく、しんどかったのに消防士の方は現場に到着後すぐに火の中に飛び込み救助活動をしていると考ええると、改めて消防士の仕事はかっこいいと思った。

4 将来の夢

私の将来の夢は消防士になることだ。この夢を持ったきっかけはコロナ禍で毎日のように救急車が家の周りを走り、自身の身を挺して大勢の人を運んでいる姿に憧れを抱いたからだ。環境防災科で様々な体験をするまでは消防士の仕事は、火を消したり救急車に乗って人を助けたりと漠然としたイメージしかなかった。しかし、多くの業務があり、消防士という仕事の大変さが少し分かった気がした。私は将来、救助隊になり、火事で取り残された人を助けたいと思っている。

阪神・淡路大震災では消防トリアージをおこなって生存の可能性が高いところを優先することで多くの人を助けることができた。消防トリアージとは、被災者を救助する前にどの現場を優先して活動するのか選別することである。大規模災害のとき最も優先すべきことは火災対応としている消防が多くあった。人命救助は警察や自衛隊でもすることができるが、消火活動を行うことができるのは消防隊員にしかできないからだ。

消防と防災は密接している。消防は災害が起こった時、必ずと言っていいほど出動している。大規模災害のときには、他の自治体から応援がきて消火活動や救助活動にあたる。また、普段の生活の中でも住民ニーズの多様化等の環境の変化に的確に対応し、住民が安心して暮らすことのできるように働く消防士の活躍を見て、私もこのようになりたいと思った。

私は消防士になって地震が起こったとき、どうしたら自分や家族の身を守ることができるか常日頃から考えたり、火災が起こらないように注意喚起したりして地域の安全を守れるようにしたい。この災害の多い日本で、一人でも多くの人を助け、また率先して動いて被害を少しでも減らせるようにしたい。

おわりに

「語り継ぐ」を執筆するにあたって、改めて人とのつながりや、備えの大切さについて知ることができた。私は環境防災科に入り、普通の学校では経験することができないことを多くさせてもらった。これまでの経験からあらゆる災害の見方が変わった。環境防災科に入るまで地震や大雨などの災害はなんとなく怖いものだ、具体的になぜ怖いのかとあまり考えることはなかった。しかし、入学してから多くのことを学び、知識を少しではあるが蓄えることで災害の怖さ、しっかりと対策をすれば被害を減らすことができると知った。環境防災科で学んだことをまずは家族や友人に話して対策の大切さ、災害の怖さを伝えて備えて守ることができるようになりたい。

地球と地域を知り、災害に備える

細谷 悠彬

はじめに

私は、語り継ぐことは人の感情を動かすことだと考えている。震度、マグニチュード、人的被害、建物被害などの災害のデータは過去の災害を学ぶという点では極めて重要であるが、人に災害の教訓や体験を伝えるという点ではあまり意味をなさないと思う。一方で、固定していなかった電子レンジが2m飛んで床に突き刺さっていたから、家具家電の固定は大切だというお話を語り手から涙ながらに伝えていただけで、気持ちを動かされ、備えようと思うことができるだろう。感情が強く動かされた記憶は他の記憶よりもより長く残り続ける。

聞く人の心を動かすように伝えることは、防災意識を高めることにつながると考えている。

1 阪神・淡路大震災の体験

(1) 菅本 格さんのお話

私は、専門科目の「環境と科学」でお世話になっている外部講師の菅本格先生にお話をお聴きした。先生は神戸市垂水区出身で、大学・大学院で地球科学を学び、震災当時は神戸市立櫨谷中学校に勤務されていた。

震災以前、社会では神戸で大きな地震は起こらないという誤った考えが広まっていた。この背景には様々な理由がある。当時の義務教育では初期微動、主要動といった地震波についての学習は行われていたが、地震はなぜ起こるのか、地震が起こるとどんな被害が出るのかといった地震の本質を教える内容はなかった。テストで点を取るための教育ではなく、命を守るための教育にもなっていなかった。また、日本は1962年から兵庫県南部地震が起こるまでは地震の静穏期にあり、この約30年間に大きな地震を体験せずに育った人が多かった。1944年昭和東南海地震、1946年昭和南海地震と地震が発生していたが、太平洋戦争と終戦後の混乱の影響によりあまり知られていなかった。これらの原因から、行政から市民にいたるまでが地震の危険性を正しく理解できていなかった。1974年に神戸市企画局が神戸と地震という調査報告書を発行し、神戸市周辺で大地震が起こる可能性が高いこと、断層付近では壊滅的な被害を受けることが示され、新聞などで大々的に報道されたが、行政、市民はこのことをあまり重要視せず、神戸市においては地震による大きな建物被害がないとされる震度5を想定したまちづくりを行っていた。

先生は震災以前から、前田保夫さん、藤田和夫さん、尾池和夫さんの3人から神戸市の地質や六甲山の成り立ちについて学んでいた。そのため、神戸市で大きな地震が起こりうることを知っていた。そして、神戸で地震が起こる可能性を誰もが考えていないことを「だめだな」と思っていたらしかった。

震災4日前の1月13日、先生は神戸での地震活動についての授業を行った。地震が起こるメカニズムから、神戸市を通る活断層について話し、自分たちの住んでいる地域で大地震は起こりうるのかについて子どもたちに考えさせた。そして、神戸では大地震は必ず起こるという結論を強調して伝えた。子どもたちからいつ起こるのか聞かれると、「明日かもしれないし、千年後かもしれない、けれども、必ず起こる」と教えた。そして、1月17日には、地震の被害とその対策についてという授業を行う予定だった。震災後には、子どもたちから「先生が言うた通り、ほんまに地震が起こってもたわ」などと言われ、卒業文集に科学や地学の大切さがよく分かったと書いた生徒もいた。

1月17日、先生と家族が寝ているときに地震が起こった。地震だということは分かったが、何が起きているのかわからなかった。また、神戸の大地震についての授業をした4日後にまさか地震が起こると思っていなかった。先生が当時住んでいた神戸市西区天王山では震度5強から震度6弱ほどの揺れに数十秒間見舞われた。この地震では何もできなかった。先生は震災以前から地震が起こると腕時計で初期微動継続時間を計り、震源からの距離を計算するという習慣があったが、この時はそのことですらできなかった。家は耐震化をしていたため、ひびが入る程度の被害で済んだが、食器が散乱した。周囲の建物も瓦が落ちるなどの被害はあったが、概ね一部損壊、半壊程度の被害で済んだ。

震源は明石海峡付近で、淡路島には地表地震断層が姿を現したと聞き、その後2週間、淡路島から西区、灘区に至るまで、揺れの様子、住宅被害、学校での被害、神戸市側にあるはずの地表地震断層、体験談を調べてまわった。灘方面では震災の帯と呼ばれる建物被害の多かった地域も目の当たりにした。しかし、神戸市側では地表地震断層と言えるほどのひび割れは見つからなかった。震度7を記録した須磨区に住んでいたある教員は、洗濯機でかき混ぜられるようだったという体験を話された。長田区の教員は家の

屋根が割れて、空が見えた。震災では地震の揺れによって家が崩れるのは特別ではなかった。

震災発生後、神戸市の小中学校では最長 8 月まで被災者に避難スペースを提供していた。それにより学校教育に支障があった。学校は地域の防災拠点とされているが、本来学校は子どもたちの安心と安全の拠点であり、心の復興にもかかわるものであるため、1 週間避難所として開設し、その後は仮設住宅などの別の場所に移ってもらうほうが良かったのではないかとおっしゃった。また、山沿いに立地していたため土砂災害により被害を受けた学校もあり、災害時に子どもを守ることができないという問題も露見した。

震災後、先生方は子どもたちの心のケアをするために多くの議論を行い、対応を行った。また、神戸市では子どもたちの心のケアのために各学校に復興担当教員というものが置かれ、後に、心のケア担当教員と改められた。

子どもたちの変化を感じた。被害の大きかった地域の中学校へ移動すると、災害との関連性は分からないが、落ち着きがない生徒、授業中に勝手に喋る生徒が多くいた。子どもたち自身も、勉強したいとは思っていたが、それができなかった。地震による子どもたちの心への影響を感じた。

この震災を受け、先生は人生観が変わったとおっしゃっていた。兵庫県南部地震によって六甲山は約 12cm 隆起したことがわかった。その後の研究から、この地域では約 100 万年間に約 1000 回の地震が発生し、六甲山は現在の約 1000m まで隆起したことが分かった。このような地殻変動は、地球にとっては一コマに過ぎないが、人間にとっては阪神・淡路大震災という大災害を起こすようなとんでもないことである。自然と人間とのスケールの違いを感じた。また、関西の方々によく「大変や」と言うことがあるが、この地震に比べれば、日常の「大変」なことは取るに足らないと思えるようになったとおっしゃっていた。

(2) お話を聞いて

先生のお話をお聞きし、2 つのことを感じた。

1 つ目は、防災教育、地学教育の重要性だ。先生は、阪神・淡路大震災以前は本質を学ぶ地学教育が不足していたとおっしゃっていたが、私は現在でも地学軽視の傾向が起きていると思った。義務教育においては地学を学習するが、高校では地学基礎を学ぶ機会は増加傾向であるが、依然として少ない状況にある。また、現在の地学教育は机上が中心となっており、フィールドワークなどを通して、実学的に学ぶことがほとんどない。防災と地学を組み合わせた内容も十分でないと思う。このような現在の地学教育では、今後起こるような大地震などに対応できないと感じた。そして、日本地球惑星科学連合も進めている地学教育の改善は、今後の日本にとって必要不可欠なものであると思った。

2 つ目は、自然現象の恐ろしさだ。先生は、地球科学を学び、それを教える立場におられ、地震の 4 日前にも神戸での地震についての授業を行われている。そのように地球科学の知識を付け、地震に対する意識が高い方であっても、大地震に遭うと身を守ること以外には何もできないということも知った。そのような大地震を人間が起こすことは難しく、この様なことができてしまう自然に、恐ろしさを感じるとともに、私たちが生きている地球を造り上げたことに尊さも感じた。

2 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

私が環境防災科の存在を知ったのは小学校高学年の時だった。テレビ番組で環境防災科が紹介され、先輩方が防災を学んでいる姿を見た。当時の私は、珍しい学科だとは思ったが、入学を目指そうとは思っていなかった。その後、中学 3 年生となり、進路のことを考えていく中で、学費を払ってもらい、学校に行くのであれば、自分の学びたいことが学べる高校に行きたいと思い、環境防災科のことを思い出した。そして調べていく中で、さらに興味がわき、この学校を受験しようと決めた。

試験勉強をしていく中で、当時の担任の先生からあるインタビュー記事を頂いた。その記事には東日本大震災以前から釜石市で防災教育を行い、「釜石の奇跡」と呼ばれるでき事の立役者である片田敏孝教授のお話が掲載されていた。それまで、私は「釜石の奇跡」は本当に奇跡的なでき事であると思っていた。しかし、この記事を読んで、「釜石の奇跡」は奇跡ではなく、防災をしっかりと学んできた子どもたちが学んだことを活かし、避難したものであったということを初めて知った。そして、この時に教授に憧れを抱いた。このような奇跡と呼ばれるでき事を今後発生すると予測される南海トラフ巨大地震でも起こして人的被害を減らし、日本にとっては当たり前のことだと言われるようにしたいと思った。

（２）東北訪問

東北訪問では「小さな命の意味を考える会」共同代表の佐藤敏郎さんのお話が心に残った。特に、「地球科学者が東北地方では大地震が必ず起こると言っていたのに私たちは信じていなかった」というお話が心に響いた。この言葉は、市民の防災に対する無関心を問題視したものだったと思うが、同時に、私は地球科学者の問題でもあったと感じた。市民が危機感を持てるような伝え方、分かりやすく論理的な伝え方を用いていれば、市民の行動を変えられたかもしれないと思った。

旧大川小学校では、教員の防災知識が不足し、学校の防災マニュアルも適切なものではなかった。その結果、避難行動が遅れ、児童・教職員 84 人が死亡・行方不明となった。私は、実際にこの小学校に行って、この災害は防げるはずのものであったと思った。必要だったのは、高い防災意識と十分な量の防災知識であり、これらを学校の先生にも教えていく必要があると思った。

（３）災害メモリアルアクション KOBÉ

1 年生の時は、先生への被災体験インタビューを行った。私の所属するグループでは I 先生と S 先生の 2 人の先生にインタビューをさせて頂いた。I 先生は震災当時神戸市内の高校に勤務されていた。I 先生は震災後生徒が通学してきたことについてお話しされた。地震により公共交通機関が不通となり、徒歩で何時間もかけて通学し、帰りの HR にのみ出席し友達とたわいもない話をして、また何時間もかけて帰宅する生徒がいた。この体験から、学校は勉強をするための場ではなく、人と関わる場でもあると思うようになった。また、地震発生前日に「また、明日」と言った生徒と二度と会うことができなかったという体験もお話し頂いた。この体験から先生は、日常は続くものではなく、「また、明日」は奇跡だと思うようになった。このインタビューから私は、お話を聞くことの意味を知った。震度 7、死者 6434 人などと聞くより、「また、明日は奇跡的」のような感情がこもったお話を聞くほうが、心に訴えかけられ、記憶にも残ると感じた。

2 年生では、防災読本の作成を行った。防災読本とは、舞子校生が自分と大切な人の命を守る、舞子高校が避難所になったときにその運営をお手伝いできるようになるために作成した冊子のことだ。この冊子は、高校生に読んでもらいやすいように、イラストや図を多用し、文字もあまり多くしないように気を付けた。

3 年生になり、各クラスに防災読本の本誌を、舞子高校の全生徒に本誌から内容を厳選した mini 版を配布した。そして、舞子校生がどれくらい防災読本を読んだのかなどについて調べるためにアンケート調査を行った。その結果、防災読本を読んだ人は本誌で約半数、mini で約 6 割であった。約半数もの生徒にこの冊子を読んでもらったことにうれしさを感じる一方で、読んでいない人も半分いることを残念にも思った。今後は、防災読本をより読んでもらえるようにし、また避難所運営マニュアルの制作も行っていく。

（４）エネルギー問題に関わる活動

私がエネルギー問題に関わるようになったきっかけは、環境防災科の専門科目である「自然環境と防災」で福島第一原発事故や高レベル放射性廃棄物、エネルギーミックスなどについて学んだことである。小中学生の時はあまり興味がなかったが、高校生になり、自分の出身地について改めて考えると、原発が立地していることに気づいた。そして、原発立地地域では福島第一原発と同じように、沈み込み境界で発生する巨大地震と津波が予想されている。このことを知ってから、他人事ではないと思い、エネルギーの問題に関わるようになった。元々、私は福島第一原発事故のことが特に印象に残っていたため、原発反対派であった。しかし、環境防災科で学ぶにつれて、原子力発電が悪いのではなく人が行う対策などに大きな問題があること、現在とこれからの日本の電力供給について考えると多様な発電方式を組み合わせるエネルギーミックスが重要なことを知り、原子力発電も許容する考えに変わった。

2 年生では、東京で開催された福井南高校のゼミに参加した。そこでは、他都府県でエネルギー問題について学んでいる高校生と話すことができた。それまで、舞子高校でエネルギー問題に取り組む生徒をあまり見たことがなく心細かったが、この活動に参加し、県外には私以上にエネルギー問題に熱心に取り組んでいる高校生がいることを知り、心強いと思うと同時に自分もよりエネルギー問題について学んでいかなければならないとも思った。そして、このゼミを主催した福井南高校の方々から高校生の原子力に関する意識調査に誘われ、さらに興味を持ち、活動に参加し続けている。この活動は高校 2 年生に原子力やエネルギーに関するアンケートに回答してもらい、原発が立地している福井県と立地していない地域を比較し、現状を知ることを目的としていた。私は兵庫県の担当として、兵庫県内の高校へのアンケート調

査の依頼や集計などを行った。兵庫県では初めての調査となるため、回答が集まるかどうか不安だったが、結果として1500人以上の方から回答を頂くことができた。調査結果は他の都府県と大きな差はなかったが、ここまで多くの回答が集まったので兵庫県にはエネルギーに興味を持っている学校、生徒が多くいるのだと思った。

MIHAMA ENERGY CAMPでは、福井県美浜町とその周辺で、エネルギー教育施設「きいぱす」や関西電力美浜原子力発電所を見学し、他都府県の高校生と一緒に未来のエネルギーについて考えた。この活動から私は、原発はその周辺の地域の一部になっているということを強く感じた。それまで、原発は立地地域から見ると存在感があると思っていたが、自分の目で原発を見てみるとあまり目立っておらず、地域の風景になじんでいた。また、今回訪れた「きいぱす」も原発の立地地域に支払われる補助金で作られていた。福島第一原発事故までは丹生湾も原発の取水により湾内に栄養がもたらされ、養殖が盛んにおこなわれてようになっていた。このように、原発とその立地地域は経済、環境など多くの結びつきにより、一体となっていると感じた。

3 夢と防災

(1) 将来の夢

私は将来、地球科学者になりたいと考えている。地球科学者とは、地球とその周りで起こる地震や気象といった自然現象のメカニズムなどを研究する職業である。私がこの夢を持ったきっかけは、「環境と科学」での学びである。この科目では、地学の内容を中心に災害を発生させる自然現象のメカニズムについて学んだ。野島断層や六甲山・甲山でのフィールドワークも行われる。この科目で私は、大きなプレートがゆっくり動いている、地震により断層が地表に現れる、数百mにもなる山を作るなど、人間が動かせないようなスケールで動く地球を知り、地球科学に興味を持った。

(2) 災害・防災との関わり方

私は地球科学者として、以下の4つのことを行いたい。

1つ目は、地球科学についての研究だ。地球科学、特に地震のメカニズムや過去の地震について研究を行い、今後の地球科学の発展に役立つようにしたい。地球科学を発展させていくことで、新たな発見や地球科学を学ぶ学生・研究者の増加に繋がり、防災分野にも役立つ結果をもたらすことができると思っている。また、近年少しずつ進歩しているスロースリップや電離層異常などを用いた地震予測・予知についても研究し、火山噴火のようにある程度は発生を事前に知ることができるようにしたい。

2つ目は、防災・地学教育だ。目標は、この教育を受けた全員が、災害時に自分の命を守り、生き残ることができるようにすることである。内容は地学や防災を中心として、片田教授が提唱する津波避難3原則やシェイクアウトなど自分の命を守る内容を特に教えていきたい。そのうえで、地学やそのほかのことを教えたい。方法としては、地学と防災を通常教育科目と結び付ける、フィールドワークなどを通して学んでもらうなどを考えている。例えば、歴史では災害と昔の人や社会の動きを教える、フィールドワークでは実際に住んでいる町を防災の視点から街歩きをする、地域にある災害の痕跡や活断層を実際に見せるなどをしたいと思う。地学については、地球から、日本、自分たちが住んでいる地域の順に教え、論理的に理解できるようにしながら、実生活で役に立つ内容を教えていきたい。

3つ目は、地学教育を改善することだ。菅本先生はお話の中で、阪神・淡路大震災以前の地学教育は地震についての本質的な内容を取り上げず、命を守る実践的なものにもなっていなかったとおっしゃっていたが、私は現在の地学教育も不十分だと考えている。中学校の理科では断層がずれ動いて地震が起こるということは学んだが、住んでいる地域の活断層や活火山などについて学んだことはほとんどなかった。そのため、地学教育を地域に密着した内容にできるようにしていきたい。

4つ目は、エネルギー・原子力、環境問題に関わっていくことだ。まだ、どのように関わるのか具体的には思いついていないが、地熱発電などの再生可能エネルギー開発や原子力発電所の安全性の向上、地球温暖化などを通じて、関わっていきたい。

おわりに

「地学」は難しい、苦手だという話をよく耳にする。確かに、覚えることも多く、計算もあり、物事を正しく理解する力も必要になる。テストでもあまり良い点数を取れない人も多い。だからといって、学ばなくていいわけではない。地学は、地震、火山、気象、環境などの分野において、防災に多大な影響を与えている。明日は大雨になると予想される、高さ2.6mの津波が予測されるなどのハザードを知る

ということにおいては非常に役立っている。よく「備えをしよう」と言う人がいるが、ハザードが分からないとどのような対策をすればよいかわからないはずだ。災害に備える前に、まず地学を学び、ハザードを知るべきだと私は考えている。そして、私自身も地球科学に関わり、ハザードを伝えていきたい。

未来のために語り継ぐ

松下 由奈

はじめに

震災発生から 29 年が経ち、30 年を迎えた。少しずつ記憶が薄れていく中で、未災者である私たちには何ができるのかと考えた。それは、どんなに月日が流れても絶対に忘れてはいけない、繋げていかななくてはならないと忘れられてしまうということだ。災害から逃れることはできなくても、被害を抑えることはできる。そのため、過去を知り、助かる命を少しでも多くすることで、それが教訓となり、繋ぐことができると思う。

1 阪神・淡路大震災

(1) 父の体験

父は神戸市垂水区に住んでおり、地震発生前日、高校の同級生と会っており、その時、前震があった。その時は「神戸で地震なんて珍しいね」と言っていたところだった。次の日、ベッドで寝ていたところ、下からドンドンと突き上げるような大きな音と揺れにより起きた。静かになったと思うと、また揺れが始まりとても怖かったという。幸い家の中は被害がなく、釣り竿が倒れ、水槽の水が半分ほど減っているほどだった。そのあと、「生き物たちはどうなっているのか」と思い、すぐに身支度を済ませ、勤務先である、須磨海浜水族園へと向かった。

(2) 母の体験

母も父と同じ、神戸市垂水区に住んでおり、寝ていたところ物凄い音と揺れで起きた。揺れが収まり、家の状況を見ると、階段の途中に飾ってあった大きな絵が倒れ、ガラスが飛び散っていた。祖母は素足のままガラスを拾い、足の裏が血だらけだった。祖父は大阪に出張に行っていたため、祖母、母、叔父の 3 人だけだった。さいわい自宅は絵が倒れたほどで、他の被害はなかった。しかし、海側の家は崩れ、所々火災が発生していた。

次の日、ガスが止まっていたため、お風呂屋さんに行こうとみんなで向かったが、お湯にはアカがたくさんあり、とても入れそうになかったという。

地震発生から何日かたったとき、1 本の電話があった。それは友人の訃報であった。聞くと、スキーに行こうとし、コーヒー店に寄っていたところ、シャッターに挟まれて亡くなったという話であった。友人の母は、「電話帳の一番上に名前が書いてあったから連絡をした」と言っていた。今思うと、話を聞いた時、不思議と冷静であったそうだ。

2 勤務先での話

私の両親は須磨海浜水族園、現在の神戸須磨シーワールドに母は事務として、父は飼育員として勤務していた。

父は、地震発生からすぐに自転車で出勤した。はじめは仕事仲間の元へ向かおうとしたが、道路には瓦や壁が落ちており、到底向かえそうにないと思い、断念した。ほかにも、電車や信号が止まっており、長田の方ではすでに煙が上がっていたそうだ。また地震により、須磨海岸の砂浜は、足跡などの凸凹は消え、きれいな更地状態になっていたという。

水族館に到着すると、まず、設備管理をするため、設備会社の人と二人組で、園内の点検を行った。最初に地下のろ過設備を真っ暗の中、懐中電灯を片手に向かった。点検中にも、余震があり怖かったという。意外に、地下の設備に問題はなかった。しかし、バックヤードの水槽は割れ、足元で魚がぴちぴちと跳ねていた。だが、電気が止まっている以上どうすることもできなかった。

次に、大水槽と自分が担当している魚の様子が気になり、見に行った。大水槽ではまだ、多くの魚が生きていたが、だんだんと時間が経つうちに、酸欠になり、仰向けになって泳ぐようになり、弱っていった。特に過密飼育されている、大水槽の魚や、ピラニアは多く死んだ。

次の日は、少しでも生き残っている生き物たちを救うために、死んだ魚を処分していった。その際に、魚たちの餌を切るために使っていた包丁を使い、死んだ魚を切り刻んで処分した。今まで、魚たちのために使ってきたものを、魚たち本人にむけて使うことがとてもつらかったそうだ。その後も、魚たちの処分

は3日ほどかけて行った。その後も魚たちの後片付けの仕事や、新聞やテレビの取材を受けていたが、早く飼育の仕事に戻りたいと強く思っていた。

母は、発生から2日後に電話で自宅待機の連絡があり、地震発生から5日後に出勤した。到着してまず目に入ったのは、大水槽が壊れ、飼育員さんたちが悲しい表情で魚たちを切り刻み、ゴミ袋に入れているところだった。大水槽の中にいた魚たちはほんの数匹で、ほとんどの魚たちは死んでいた。ピラニア水槽は何匹か生き残っていたが、日にちが経つにつれて全滅した。しかし、イルカやラッコなどの哺乳類は生きていたようだ。

須磨海浜水族園では避難場所として、さかなライブ館の観覧席が使用され、多くの人が集まっていた。そんななか、水道・電気・ガスが止まっていたため、なかなかトイレが使えなかった。しかし、復旧していき、水が流れるようになったと館内放送を行うと、周りのみんなはとても喜んでいて。

その後、取材の電話の取次ぎや来客の応対などがたくさんあった。

3 二人の話を聞いて

須磨海浜水族園は、私にとってとても馴染みがある場所だからこそ、本当にそんなことがあったのだろうかと思いに思った。自分が同じ立場になったとき、今まで大切に育ててきた生き物たちを、切り刻み、ゴミ袋に入れるところを想像すると、とても心が痛んだ。また、母の話にあるお風呂については、避難所でもよく聞くトイレ問題と一緒に、衛生環境が悪いと健康にも害を及ぼすため、避難所で生活する際は、掃除を徹底的に行わなくてはならないと思った。

今まで、両親からこのような話を聞く機会がなく、震災当時、須磨海浜水族園で働いていたことさえも知らなかった。今、須磨海浜水族園はリニューアルをし、少しずつ須磨海浜水族園での記憶が少しずつ薄れていく中で、こうした貴重なお話を聞いたからには、多くの人に知ってもらう必要があると感じた。

4 環境防災科に入って

(1) きっかけ

私が舞子高校を知ったのは、兄が舞子高校普通科に入学したからであった。まだ、進路も決まっておらず、ただ家から近い、兄と同じ高校にしようと思っていた。そして、オープンハイスクールに行ってみようと、インターネットで調べると、初めて環境防災科という文字を目にした。そこには、ボランティア活動や出前授業の様子が載っていた。その様子を見て、自分は人前に立って積極的に何か行動をしたり、何か意見を言ったりすることが苦手なため、何か変わるきっかけになると思い、環境防災科に興味を持つようになった。

実際に、オープンハイスクールに参加すると、最初は、防災という専門的なことを学ぶため、少し堅苦しいイメージをもっていた。しかし、色々な先輩方からのお話を聞くと、自分と同じように勉強や人前に立つことが苦手な方がいた。また、それぞれに夢があり、それに向かって頑張っている方が多くいた。そんな姿を見て、入学を決意した。

(2) 出前授業

私は1年生の時から、南あわじ市の出前授業に毎年参加させてもらい、今でも続けているボランティアである。初めての出前授業では、自分が教える側になったという緊張で、子どもたちが話している輪に溶け込むのにも時間がかかった。また、年代が異なると、それぞれに分からない言葉や伝わりにくい表現があり、人に伝えるということはとても難しいことだと感じた。そんな時、先輩方の様子を見ると、自然と会話をし、子どもたちも安心したような表情で話していた。また、子どもたちに発表をしてもらうとき、ほぼ全員が手を挙げて発表しようとしていた。その時、私は「誰を当てるのだろう」と思っていると、先輩はとっさに喧嘩にならないよう、「じゃあみんなで言ってみよう」と臨機応変に対応していた。さすがだなという思いと、自分もこんな風になりたいと思うようになった。

その後、何回も参加するにつれて、子どもたちとの接し方や言葉遣いなどの感覚が掴め、常に子どもたちの目線で考えられるようになった。

(3) 募金活動

募金活動を続けて私は、人の温かさを感じた。毎回お金を頂く際に、応援の言葉や感謝の言葉などのお言葉を頂いたり、小学生の子たちが友達同士で「募金しに行こう」と声をかけあったりする姿を見て、とても心が温かくなった。また、募金が終わった際に、「舞子高校は毎年募金活動をしてくれるから、安心

して渡すことができる」と地域の方からお言葉を頂いたと聞き、こうして地域の方たちからの信頼を得ることができているのは、先輩方が今までつなげてきてくださったからこそだと感じた。募金活動は、私たち自身も誠意をもって行動しなくてはならないが、そもそも、支援をしてくださる地域の方がいてこそ、成り立つものである。そのため、自分も受け継いだからこそ、より多くの方に舞子高校の存在を知ってもらい、地域の方々と関わり信頼を得て、多くの方の力のなろうと思う。

5 東北訪問

私は、高校1年生の時に東北訪問に参加した。その中で特に印象に残っているのは、大川小学校である。そこでは、語り部として活動されている、佐藤敏郎先生のお話を聞いた。実際に、震災当時のまま残されている小学校を見ながら、子どもたちはどんな状況にいたのか、どんな行動をしたのかなど、細かく教えていただいた。将来、保育士という子どもたちの命を預かる職業につくためにも、命の重さについて、もっと向き合う必要があると感じた。

ほかにも、多賀城高校の方と一緒に、東日本大震災の時に津波がどこまで到達したのかを知る震災遺構などを見て回り、津波を体験したことがない私はとても恐怖を感じた。また、阪神・淡路大震災とは違った恐怖があることを知ることができた。

6 夢と防災

私の将来の夢は保育士になることだ。環境防災科を受験するにあたって、災害時、保育園・幼稚園ではどんなことが行われていたのかと調べてみた。東日本大震災で津波の影響を受けた幼稚園では、とっさに脚立を運んで、子どもたちを屋根の上に登らせた。その行動により、全員の命が助かった。率先して行動した園長さんは、伊勢湾台風での経験を経て、「災害は予想をはるかに超えることがあると過去の被災で学んでいたからだ」と振り返っていた。こうして、過去から学び、素早い判断の元で助かった命だと思った。

そもそも保育士とは、単に子どもを預かるのではなく、保育園での生活を通して、基本的な生活習慣や子どもたちの安全、集団生活の大切さなど責任を持って教えていかななくてはならない。また、子どもたちと直接関わるだけでなく、子どもたちの様子を日誌などの記録にとることや、子どもたちの成長を保護者の方と共有することも重要な仕事である。そして一番わかっておかななくてはならない、保育士は命を預かるという仕事であるということだ。災害が起きた時、子どもたちを安心して避難させるためには、子どもたちにとって先生は安心できる存在だという、子どもたちとの信頼関係が重要になる。そのため、日々コミュニケーションを怠らず、この子はどんな性格なのか、この子にはこういった接し方をすれば良いのかなど、生活する上で理解を深めていく必要がある。

私は、一人一人に寄り添う先生になりたい。きっかけは、私が幼稚園の時、担任の先生にお手紙を書いて渡したことだった。お返しに画用紙と折り紙で作った携帯型の可愛いお手紙をくれた。私は、初めて先生からお返事を貰ったことがすごく嬉しく、今でも大切に保管してある。こうした小さなことだが、子どもにとっては一生の思い出になる。そうした小さなことを大切に、「この先生なら安心できる」と子どもや保護者の方から思われるようになりたい。また、子どもたちにとって保育園や幼稚園が最期の場所にならないよう、命の重みを感じ、責任をもって行動をしようと思う。また、過去のつらい経験から学ぶだけでなく、実際に助かった経験も学んでおこうと思った。

おわりに

私は環境防災科に入って、たくさんの方々と出会い、たくさん経験をさせていただいた。それは決して当たり前なことではない。そのことをしっかり理解しながら、感謝の気持ちを持ち、夢である保育士になったときに、今までの経験を活かしたい。そして、子どもたちや保護者の方が安心して避難できるように、防災意識を持ち、あの時こうすればよかった、こうしておけばよかったなど、後悔のないようにしたい。

災害はいつどんな時に起こるかわからない。そのため、災害を食い止めることもできない。しかし、被害を少なくすることはできる。被害を少なくするためには、過去の教訓から学び、それを活かすことである。私は環境防災科で過去の様々な災害を学んできた。どの災害にも「想定外だった」というでき事が多く、私たちの想像を上回ることが多い。私一人が行動するだけで、その想定外が無くなるわけではないが、これから私たちが生きている間に必ず、南海トラフ巨大地震が起こる。そのため、いつまでも想定外にとらわれず、被害をおさえられるよう、環境防災科で培ってきた知識を活かしていきたいと

思う。また、出前授業で学んだように、人に伝えるということはとても難しいことである。そのため、これからもっとどうしたら人に上手く伝えられるのかと考えながら、多くの方の言葉をつなげていきたい。

まだ未災者のわたしたち

三村 月乃

はじめに

あなたは「語り継ぐ」と聞いて何を思い浮かべるだろうか。後世に伝えていくこと、記憶を伝承していくこと、様々だろう。では、私たちのような若い世代が語り継ぐ意味は何だろう。震災を知らない若者が誰かの体験を聞いて語り継ぐ。きっとそこには後世に伝えていくことの重要性のほかに、別の意味があるのではないだろうか。ただ話をほかの人に伝えるだけではなく、自分の気持ちを乗せることに意味があるのではないかと思う。「何時何分に地震が発生した」というだけでは語り継ぐではない。そこに自分の感情を乗せ、語り手と心を通わせることが大切なのだと思う。自分が感じたこと、繋げていきたいと思ったことを伝えるのが「語り継ぐ」ということなのではないだろうか。

1 震災体験

(1) 高校教員 I 先生の震災体験

I 先生は当時教員 1 年目で、実家の近くの家を借りて生活していた。午前 5 時 46 分 52 秒、突如として激しい揺れに襲われた。揺れで目が覚め、すぐに「地震」だと分かった。これが人生初めての地震だった。寝室には物が少なかったがその時はただ「死ぬ」と思ったそう。そのあとすぐ「ここから逃げな」と思ったが、とても歩けるような状態ではなかった。当時は頭を守るという考えがなく、ただ布団の上でじっとしていることしかできなかった。

揺れが収まるとすぐに実家に電話をかけた。安否確認のために電話をかけたのではなく、初めての状況にどうしたらいいかわからず、助けを求めるためにかけたそう。幸いまだ携帯の電波があり、電話がつながった。家族からの「玄関を開けろ」という指示でその時初めて逃げ道を確保した。1 人では心細いため、服を着替えた後実家に帰るために家を出た。そのころにはもう辺りは明るくなっていたが、町の様子には目もくれず急いで実家に向かった。

実家に着くとまず家族の安否と家の状態を確認した。幸い家族は全員無事だった。家は大きい食器棚が倒れていたが、電気は通っていた。周囲の状況が分からなかったので、とりあえず「出勤しよう」と思い駅に向かった。駅に着くと電車が全線止まっていることが分かり、これはただ事ではないと察したそう。やむを得ず 3 km ほどの道のりを自転車で通勤することにした。実家から離れた地点の道は隆起しており、多くの家が壊れていた。そのとき被害の深刻さを知った。

学校に着くと校門の前に多くの地域住民が集まっていた。だいたい 40 人くらいだろうか。I 先生以外にはわずか 2 人の教員しか出勤していなかった。今後の対応や地域住民をどうするかをたったの 3 人で決めるにはあまりに重かった。グラウンドは液状化しており、体育館も床が沈んでいたため住民を学校に入れていいかわからず、その日はとりあえず給水ポットに入っていた水や携帯ラジオなどを校門前に置くくらいのことしかできなかった。結局その日は学校の様子を見るだけで帰った。

そのあと I 先生は毎日自転車で出勤し、ほかの職員達と情報共有をした。しかし、まだやれることは少なかった。事務室を片づけて生徒の安否確認の連絡を待つことにした。I 先生は、30 年間教師をしてきてつらいことはたくさんあったけど、この電話を待っている時間が一番つらかったと語った。

ある生徒との電話で安否確認をした後、「先生明日も電話していい？」と言われたことがあった。I 先生とその生徒はお互いのことを知らなかったが、その生徒にとっては「先生」が安心できる存在だった。その時、生徒にとって学校がどれほど特別な場所なのかということを感じたそう。

(2) お話を聞いて

私は「語り継ぐ」を書くにあたって誰に話を聞こうかと思ったとき、一番に I 先生が思い浮かんだ。普段から、環境防災科での活動にアドバイスをくださったり、学校の課題点について一緒に考えてくださったりする方だったからだ。実際にお話を聞いて一番驚いたのは当時防災や災害に対する知識をあまり知らなかったということだ。とても今の I 先生からは想像できなかった。そして安否確認の電話を待っていたというお話を聞いて、もし自分が I 先生の立場だったら耐えられる気がしないと思った。電話がかかってきた時、よくも悪くも「わかって」しまうというのがどれだけ恐ろしかったことだろう。そして驚くことに I 先生はそれを 5 日間もやっていたそう。私だったら着信音がトラウマになってしまうかもしれない。

私はこのインタビューの最後に先生にとって「語り継ぐ」とは何かを聞いた。なぜなら震災から30年を迎えるにあたって、自分でもずっと考えていたことだからだ。I先生は「同じことを繰り返さないためとか、忘れないためとか、平たく言ったら何とでもいえるけど、私が何で震災体験を話すかと言われたら、結論は亡くなった子にできることがこれしかないから、その子が確かに生きていたということを、証明するために語り継ぐ」と語った。さらに私たちのような若い世代が語り継ぐことについては、「私も人間だから話しているときに感情的になってしまうときがある。でも話を誰かに伝えるときにはそれがいいときと悪いときがある。だから未災者だからと遠慮するのではなくて、若い世代の未災者だからこそできる『語り継ぐ』をして欲しい。」と語った。誰かに震災体験を話すというのは、決してたやすいことではない。それでも私に語り継いでくださったことにとても感謝している。私は時々「この話を私が聞いていいのか」と思うときがある。この「語り継ぐ」も私にできるのかと不安になっていた。しかしI先生の想いを聞いて自分だからできる、自分なりの「語り継ぐ」を精一杯やればいいと気づかされた。

2 環境防災科に入学して

私が環境防災科の存在を知ったのは中学2年生の時だ。これといった夢もなく悩んでいた私に当時舞子高校に通っていた3つ上の姉が「環防はどう？」と私に紹介してくれた。その科では防災のことを学び、生徒が主体となってボランティア活動をしているということを教えてもらった。その話を聞いたときは「そんな科もあるんだな」くらいにしか思っていなかった。しばらくしてテレビで防災ジュニアリーダーの活動が紹介されていたのを偶然目にした。自分と大して年も変わらない学生が防災を楽しく伝えるために「防災すごろく」を使って地域の人に教えていた。その姿を見て私もこんな風に何かに一生懸命に取り組みたいと思うようになった。

環境防災科では様々な講義を受けることができる。災害救助犬、災害時のライフライン、災害時の消防の動きや自衛隊の動きなどについて学ぶ。講義では普通の授業では知ることのできなかった専門的な知識を得ることができる。中でも私が一番印象に残っているのは、北淡震災記念公園総支配人で代表取締役社長である米山正幸様の「野島断層からのメッセージ」というご講義だ。講義では阪神・淡路大震災での地震発生直後の北淡町について語られた。旧北淡町では地元の消防団が独断で救助活動を開始し、行方不明者を誰1人として出さなかった。それは消防団が日ごろから地域と深いかかわりを持ち、誰がどこに住んでいてどこで寝ているかということまで熟知していたからだ。地域と交流することがここまで被害を減らせるということがとても衝撃的だった。講義も終盤に差し掛かるところ、震災で大切な家族を失われた方の体験談が綴られた手紙が読まれた。その手紙が読み終わられたとき、クラスのほとんどの人が泣いていたと思う。私も気づいたら泣いていた。それくらい心に残る手紙で、その講義が終わったとき自分は環境防災科に来たのだと再認識させられた。

講義は基本1時間から2時間で行われる。その短い時間の中で講師の方の人生をかけて培った知識や考えを学ぶことができる。それは本当に貴重なことで、私たちに受ける資格はあるのかと感ずることもある。それでも講師の方は防災・減災、そして想いを伝えに来てくださるのだ。どの講師の方からも情熱が伝わってきて自分も頑張ろうと元気づけられる。そして私もこんな風に話だけで誰かの心をつかめる人になりたいと思う。

3 活動

(1) 募金活動

私が初めて活動に参加したのは1年生の1学期の頃。東日本大震災で被災した方たちの防災集団移転地である、あおい地区に届ける募金活動だった。事前にその場所について調べ、なぜ舞子高校はあおい地区の力になりたいのか、そしてその想いに自分はどうかたえたいのかということを考え活動する。私はこのボランティアが環境防災科に入って初めての活動だったため、とても緊張していたことを今でもよく覚えている。活動が始まると一列に並び、街ゆく人々に向かって一人ひとり順番に呼びかけをする。だんだん自分の番が近づいてきて、緊張が焦りに代わる。心の中で大きな声を出すぞと意気込んだが、結果は声もあまり出ず、おまけにカミカミだった。それでも隣にいた先輩が「焦らずゆっくり自分のペースで」と声かけをしてくださって、そのあとは落ち着いて活動することができた。私はこの活動のあとも何度か募金活動に参加した。自分が先輩になって初めて参加したときには、私があの日先輩にしてもらったように緊張している1年生に声かけをした。こういう小さな助け合いが続いてほしいと思う。

私は募金活動をするうえで一番大切なのは謙虚でいることだと思う。例えば遠くから財布を持って近づいてくる人が見えたとする。この時、間違っても自分から入れてもらいに行くようなことをしてはなら

ない。なぜなら催促しているように見えてしまうからだ。「そんな大袈裟な」と思う人もいるかもしれない。しかしこういった些細な気遣いが何年もこの活動が続いている理由だと思う。そして、もしお金を入らせていただいたときには、何円であってもお礼を忘れてはいけない。「ありがとうございます」と感謝を伝えるのはもちろんのこと、深々と頭を下げて誠意を伝える。

「舞子高校が募金活動をしていると多くの人が入れてくれる」その時同行していたある先生の言葉だ。これは決して「ラッキーだね」という意味ではなく、なぜ多くの人から入れてもらえるのかということを考えて行動しろということだ。つまり、この活動は私たちよりもずっと前から活動していた先生や先輩方がつないでいる大切な活動だということを感じなければならぬということだ。休憩しているときの態度や移動中も常に見られていると思って行動する。募金してくださる方の中には被災地に行けないから少しでも役に立てばと入れてくださる方や、舞子高校に思い入れがある方など様々だ。そんな方たちの想いを無下にしないためにも、その想いを受け取りつなぐ立場である私たちは慎重に行動する必要がある。募金活動は、募金を始める前から始まっているのだ。

（２）防災教育

私がこの３年間、一番頑張ったことは何かと聞かれたら、間違いなく防災教育と答えるだろう。防災教育とは普通科生や先生方に行う授業のことだ。授業といっても、皆で一緒に学ぼうというのが主な目的である。なかには防災教育に対して厳しい意見を持っている方もおり、心が折れそうになることもあった。それでも続けて来られたのは仲間が支えてくれたおかげだと思っている。

防災教育で一番大変だったのは、どうしたら防災を知らない人にわかりやすく伝えられるかということだ。普段私たちは環境防災科で災害や防災を学んでいる。しかし普通科の生徒は防災にかかわる機会は少ない。そんな人たちに一から授業するのは並大抵のことではない。私たちも防災の専門家ではないため、様々な資料を組み合わせながら試行錯誤しながら作っていかなければならない。最初にこの活動を始めたときはほとんど先輩が考えてくださっていたので、私たち後輩は先輩に指示されたことを調べてまとめるだけだった。授業の内容はどんどん決まってくいけれど、それを全部理解できていたかは今となっては怪しいところである。しかし回数を重ねていくうちに自分から意見を言えるようになり、この活動が楽しくなった。そしていつしか自分の「責任」になった。

私たちの代からは以前の防災教育とは少し異なり、生徒と一緒に楽しみながら防災を学ぶということを目指して活動していた。いわゆる「楽しく学べる防災」だ。班で意見を出し合うワークショップをしたり、クイズ形式にしたり、防災グッズを実際に体験できるような内容も取り入れた。新しいことにチャレンジし、事後アンケートを踏まえ反省する。それを繰り返していくうちにどんどん良くなっていくのを感じた。

先生方とは、一緒に学校の課題を共有することに重きを置いて内容を考えていた。そうすることで生徒の私では思いつかなかった視点を取り入れることができる。中には防災教育に協力的でない教員もいて、厳しい意見を聞いてやるせない気持ちになることもあった。それでも、ここまで続けてこられたのは途中で投げ出したいくないという自分のプライドと一緒に頑張ってきた仲間がいたからだ。つらいことや悩むことはたくさんあったけれど、続けたからこそ今の自分があるのだと思う。

４ 私の夢

（１）目指す理由

私の母は、美容院に勤めていたので、幼いころから頻繁に行く機会があった。カットやカットモデルをしに何度もいったが、その時はただ髪の毛を切ってもらおうという認識しかなかった。高校生になって周りの子はみんな身だしなみに気を使い始めた。私もそのころから自分の理想の姿があったので勇気を出して初めて一人で美容院に行くことにした。はじめこそは緊張したが美容師さんのコミュニケーション力と優しい雰囲気ですぐリラックスして施術を受けることができた。そしてみるみるうちに自分の思い描いていた通りの髪形に仕上がった。その時私は「魔法にかけられたみたい」と思った。この出来事をきっかけに美容師という職業に興味を持ち、美容業界にあこがれを持ち始めた。そして自分も誰かを幸せな気持ちにしたい、喜んでもらいたいと思うようになった。

（２）夢と防災

美容師は普段防災や災害にかかわる機会は少ないといえるだろう。しかし美容師という職業は災害発生後の避難生活においてその実力を発揮する。避難所での生活はいつもよりストレスがたまることが多

いだろう。女性は特に美容面でのストレスが後を絶えない。そこに目を付けたいくつかの美容師のボランティア団体が被災地支援としてカットのボランティアを行った。令和6年に発生した能登半島地震でも行われたボランティアだ。カットだけでなくカラーやシャンプーも行う。このボランティアは身だしなみを整えるだけでなく心のケアも同時に行える活動だと思う。実際にカットボランティアを行った美容師の方のインタビューでは、来られた方が施術をされているときとてもリラックスしている様子で、今までつらかったことや家族のことを話してくださった人がいたと語っていた。ただ髪を切るだけでなく、被災者の方の心に寄り添えるようなボランティア、これは美容師にしかできないことだと思う。

防災の知識はどんな職業でも、何をしていても絶対に役立つ。そのことを心にとめ将来も防災減災にかかわっていききたい。

おわりに

私はこの「語り継ぐ」で伝えたいのは一つだけだ。それは毎日を大切にしてほしいということだ。明日地震が来るかもとおびえて過ごす必要はない。でも毎日を大切に過ごすことはできる。挨拶をしっかりする、感謝を忘れない、それだけで一日がちょっと素敵になる。私たちはいつまでも未災者ではいられないということを胸に刻まなければならない。私が今「語り継ぐ」を執筆できているのは私たちの代までつなげてきてくださった多くの人の想いがあってのことだと思う。その一部に私もなりたい。そしてこれからもずっと変わらぬ想いが未来へとつながっていったほしい。

過去から未来へ語り継ぐ

宮田 和輝

はじめに

阪神・淡路大震災から 30 年になり、私たちのような震災を経験していない人が増えている。経験していない人でも過去の災害について知り、教訓を活かして備えることはできる。災害に備えることができたから災害が起きた時も減災に繋がられる。過去の災害の教訓を風化させないためにも、語り継いでいくことが重要だ。

1 阪神・淡路大震災

(1) 祖父の話

祖父は当時、神戸市垂水区に住んでいた。1 階で寝ていた時に地震が起こった。家ごと持ち上げられたようなものだった。揺れは建物全体が揺さぶられてドンドンと突き上げられるようなものだった。揺れが収まるまで待った。まず、家族全員の無事を確認した。その後、食器が落ちて割れていたの、靴を履いて行動した。割れた食器のごみやあらごみが多くなった。2 階にはひびが入り傾いた。外に出るとガスの匂いがして怖かった。「ガスの匂いがするからガスを止めて」とガス屋や役所に連絡するとメインのガスが止まった。ガスが止まっていたため、お風呂が使えず電気温水器が設置されている家に行ってお風呂に入っていた。水も出なかったため、学校のプールの水を汲んで手に入れた。祖父は西宮にある会社にバイクで向かった。阪神高速は横倒しになっていた。長田は火災によって焼け野原になっていた。六甲道では、JR の橋げたが落ちていた。その光景を見て被害が凄まじいものだったということを感じた。

(2) 祖母の話

祖母も当時、神戸市垂水区に住んでいた。1 階で寝ていた時に地震が起こった。先に上下の揺れを感じた後、横揺れを感じた。今でも体が覚えているぐらいの衝撃があった。家の外に出るとガス管が破裂していてガスの匂いが充満していた。ガスが使えなかったため、カセットコンロで料理した。電気も水道も使えなくなった。お風呂が入れなくなりお風呂屋に並んで入った。飲み水も少しの間手に入らなかったことから、水の備蓄の大切さを学んだ。垂水は道路の被害が少なかった。古い家は壊れやすく、高齢者も巻き込まれた。長田は火災の被害が大きく、六甲山が爆発したのではないかとという人もいた。長田の空は赤くなっていた。阪神・淡路大震災後、復興に向けて進んでいった。家の工事は 10 年以上かかる家もあった。軽い瓦の家や新築の家が増えた。町が新しくなり美しくなった。地域住民で協力し合うことの重要性を体感した。阪神・淡路大震災以降、地震に対する備えがしっかりした。建物がつぶれにくく地震に強い構造が使われるようになった。祖母も、たんすの固定をするようになった。寝る部屋には、落ちてくるようなものを置かないようにした。火災になると大変なので、ガスの元栓を閉めることが大切だと感じた。阪神・淡路大震災で感じた経験を、「備える」という行動に移すことが重要だ。

(3) 伯母の話

母の姉に当たる伯母は 25 歳で、前日も普通の生活を送っていた。まさか地震が来るとは思ってもいなかった。当時、伯母は神戸市垂水区に住んでいて 5 人暮らしだった。2 階で寝ていた時に地震が起こった。車が家に突っ込んだのではないかとというぐらいの衝撃を感じた。ガスが止まっていて調理ができないので、弁当の屋台が作られてそこでご飯を手に入れた。水道も使えなかったため、高砂の友達と連絡を取って高砂でお風呂に入っていた。星陵台では、崖が崩れた。最初は崩れた崖の補修に対して、住民がお金を払うようになっていた。しかし、それでは住民の負担が大きくなるため、住民がお願いをして国と市が分割して支払うようになった。阪神・淡路大震災が基礎となって様々な法律が作られた。

伯母は震災当時、三宮の会社に勤めていて、会社に被害がないか心配になった。そして、仕事ができなくなるかもしれないため、給料がもらえないのではないかと不安になった。一部の人は会社に出勤したが伯母は仕事が休みになった。そのため、仕事があるのかお金が入るのか分からないためとても心配になった。電車は通っておらず、3 週間は歩いて出勤した。三宮の事務所や取引先などは潰れていた。会社の中に資料のコピーが残っていたため、整理するだけで済んだ。その後は、神戸が復興してきてビルも建てられた。ハーバーランドも開発された。阪神・淡路大震災はボランティア元年と呼ばれるようになり、災害

に対しての意識も変わってきた。震災後も頑張っている人がたくさんいた。協力して助け合うことの大切さを知った。支援するための NPO 団体も立ち上がるようになった。その後、伯母は NPO にも関わるようになった。困ったときに助け合える受援力が大切だ。助けてもらったことから、助けたいという感情が生まれた。地域のつながりが大切だと知った。町の人とつながることや町を大切にすることが必要だと感じた。

（４）話を聞いて

私は話を聞いて考えたことがある。阪神・淡路大震災の被害は凄まじいものだったことが分かった。阪神・淡路大震災はとても大きな災害で、当時の記憶や衝撃は今でも心に残っていることを聞いて災害の怖さを知った。災害の怖さを知り、その後は備えという行動に移すことが大切だと思った。そして、地域のつながりも大切だ。阪神・淡路大震災で大きな被害が出たが、復興に向けて協力して助け合っていたことを知って、地域の人々のつながりは重要だと思った。町や地域を大切に協力をして過ごしていくことで地域のつながりを向上させることができるのだ。南海トラフ巨大地震はいつ起こるか分からないため、地域の防災力を上げていくことで被害は減らせるのだ。地域のつながりは防災に必要不可欠なものだ。

２ 環境防災科での経験

（１）入学したきっかけ

環境防災科に興味を持ったのは中学３年生の時だ。中学校の先生に舞子高校に環境防災科があることを教えていただき興味を持ち始めた。舞子高校のオープンハイスクールに行って環境防災科を進学すると防災のことをたくさん学べると思ったため志望した。命の大切さや助け合いのすばらしさを学びたいと思っていた。命を守るための方法を学んで減災に繋がりたいと考えていた。そして、私は中学生のころ人前に立って発表することが苦手だったので、環境防災科で発表を経験して苦手を克服することができると思ったので志望した。

（２）環境防災科で学んだこと

環境防災科で外部講師の授業や体験学習を通してたくさんのことを学んだ。高校１年生の「災害と人間」では、災害の基礎知識だけではなく、ライフライン関係者や公助に関わる方々や大学の先生の講義を受け、それぞれの視点からお話をしていただいた。体験学習では、人と防災未来センターに行って過去の災害による教訓や災害の起こり方などを学ぶことができた。

高校２年生の「環境と科学」では、神戸の地形を学ぶことができた。岩石の特徴や神戸の地層を学ぶことによって、六甲山がどのように作られていったのか理解できた。六甲山フィールドワークを通して六甲山地と大阪湾の生い立ちについて学べた。そして、「社会環境と防災」では、長田のまちあるきに行った。阪神・淡路大震災によって区画整理の地区と白地地区に分かれて、復興するまでに時間がかかった。長田のまちあるきで学んだことは、大国公園が阪神・淡路大震災が起こったときに焼け止まりの効果をもたらしたことだ。そして、地域に公園があると子どもたちが遊べるだけでなく、避難場所になるため防災にも重要な施設だと感じた。

（３）全国防災ジュニアリーダー育成合宿

高校１年生の時に全国防災ジュニアリーダー育成合宿に参加した。全国の中学生や高校生が防災について話し合った。１日目には、舞子高校で行った震災メモリアル行事の振り返りを行った。グループワークを行う中で他人の意見を否定しないことがルールにあったため、他人の意見を否定しないで話し合いをした。他人の意見を否定しないことで多様な視点からの話し合いができると思った。似ている内容をまとめてグループ分けを行い、発表によって私たちの班の意見を伝えることができた。

２日目はグループで学校の取り組みを紹介して、１つの模造紙にまとめて壁新聞を作成した。テーマを明確にして作成を進めていった。パネルディスカッションでは、それぞれの学校の取り組みを発表した。舞子高校では、環境防災科の生徒が中心となって防災教育や避難訓練を実施している。環境防災科で学んだことを活かし、地域の防災訓練に参加して地域の人に防災の大切さを伝えている。気仙沼向洋高校は、修学旅行生や教育委員会の職員に向けた語り部活動を行っていた。

２日目の最後には、アクションプランを作って発表した。私たちの班では、高校生ができることについて考えた。私たちの班は５つのことを目標にした。１つ目は、防災について考える機会を増やすことだ。そのためには、家族などと防災について話し合う必要がある。２つ目は、防災バッグの中身を整理して使

える状態にすることが必要だ。防災バッグを使えるようにしておいて災害時に利用できるようにする。3つ目は、避難経路や避難場所やハザードマップを確認しておくことだ。ハザードマップを確認しておくことで災害の危険性や地域の危険な場所を知ることができるので大切だと思った。4つ目は、色々なパターンの防災訓練を計画してみることで、災害は様々なものがあるため、どんな災害が来ても対処することができるような準備が必要だ。5つ目は、地域の人と連携をもつことだ。地域の人と連携を取るためには、日ごろから挨拶をして、交流をしておくことが重要だ。

全国防災ジュニアリーダー育成合宿を通して、全国の学校の防災に対する取り組みを知ることができた。全国の学校と防災について話し合うことによってたくさんのことを学べた。舞子高校では環境防災科があり防災に力を入れているが、まだまだやらなければならないことがたくさんあることを知った。地域の人に防災の大切さを伝えたり防災教育を行ったりして、地域と学校の防災力を上げていくことがとても大切だ。

3 将来の夢

私は現在将来に就きたい仕事が決まっていない。それでも、環境防災科で学んだことを活かして防災に関わっていきたいと思っている。例えば、地域の防災訓練に参加することで地域の人と繋がることができる。防災訓練に参加すると地域の防災力が上がり、減災に繋がれる。そして、地域の人と繋がることができたら災害時でも地域で支えあうことが可能になる。そのため、地域の防災訓練を通して地域の人と繋がって防災に関わっていきたいと思っている。

4 ボランティア活動

(1) 募金活動

環境防災科に入って初めて参加したのが募金活動であった。最初は初めてで緊張していたが回数を重ねるごとにだんだんと慣れてきた。東日本大震災で被災された方々の防災集団移転によってできたあおい地区は、舞子高校が東北訪問でつながりがあることから募金活動を行った。募金活動で頂いたお気持ちは地域行事などに活用された。垂水区社会福祉協議会に困っていることは何かをお尋ねして子ども食堂への募金活動を行った。子ども食堂は子どもたちに食事を与えるだけではなく、子どもたちの居場所づくりにもなっている。

募金活動を行うことによってたくさんの事を経験することができた。人の温かさを感じた。「いつも頑張っている」や「環防生の姿をみて募金したくなった」などの声をかけてもらいうれしくなった。暑い時はわざわざ飲み物を買ってきてくださったり、寒い時にはカイロをいただいたりなどもした。とても優しい人がたくさんいると感じた。そして、募金活動のリーダーとなり、みんなをまとめることができた。実際に現地に行って支援することができなくても、募金を通して心と心をつないで支援することが重要だと思った。

(2) 地域行事

私は環境防災科で地域行事に参加した。多聞東地区の祭りでは、的あてゲームのお手伝いをしてたくさんの子供と触れ合った。子どもたちも楽しく遊んでくれてよかったと感じた。名谷地区では、防災訓練があり参加した。そこで舞子のブースを出して、ローリングストックの大切さを伝えられた。普段から備えておくことで災害時にも役に立つので、備えておくことの重要性を伝えることができた。垂水区防災訓練では、防災楽習迷路を利用した防災クイズを行って防災のことを地域の人に理解してもらった。そして、段ボールベッドの組み立ての訓練も行われた。段ボールベッドは説明の紙があり、それに従って作ることができた。実際に段ボールベッドで寝てみた時には、安定感がとてもあると感じた。

地域行事に参加してたくさんのことを学んだ。地域の人に防災の大切さを伝えるときに地域のつながりがとても重要だと思った。地域コミュニティーを作っておくことで災害時にも助け合うことができると感じた。普段から防災訓練に参加して交流しておくことが大切だと分かった。

(3) 防災運動会

防災運動会のブースを運営した。防災ウォーキングでは、災害時の避難を想定して重さの異なる防災バックを持って歩いてもらった。そこで、歩くことで楽しく防災のことを知ってもらえた。バケツリレーのブースでは、子どもが楽しくバケツリレーをしてくれた。バケツリレーの大切さを伝えるだけではなく、初期消火の大切さを伝えられた。防災運動会を通して防災の知識をたくさんの人に広めることができた。

5 南海トラフ巨大地震と備え

南海トラフ巨大地震がおこる確率は40年以内に90%まで引き上げられた。神戸市垂水区の震度は6強と予測されている。大災害が起こる可能性があるため、今から備えを進めていくことが必要だ。まず、防災に関する知識を増やしていかなければいけないのだ。防災に関する知識を増やすためには、テレビやインターネットで情報を得たり防災訓練に参加したり自分から行動を起こしていかなければいけないと思う。自分の身を自分で守ることが重要なため、家具の固定や耐震補強などの対策を行う必要がある。そして、南海トラフ巨大地震における津波のハザードマップを確認して自分の地域の危険な場所を事前に確認しておいて、避難経路を決めておくことも大切だ。非常用持ち出し袋や防災バックを作っておいて災害時にも使えるようにするべきだ。防災バックには災害時に役に立つものだけではなく、自分の好きなものを入れておくことで心も少し穏やかになるため、自分の好きなものをいれておくべきだと考えた。

おわりに

環境防災科での3年間を通してたくさんの経験をした。「語り継ぐ」を通してたくさんの人に話を聞かせていただいて、阪神・淡路大震災を風化させてはいけないと思った。震災を風化させないことは、過去の教訓を活かすことであり、災害が起きても同じ過ちを繰り返さないことに繋げられる。同じ過ちを繰り返さずに、震災を風化させないためにも「語る」だけではなく、「語り」を継いでいきたい。「語り」を聞いて、災害に備えるという行動に移せるようにする。そして、備えることで災害の被害を減らせるようにしていくべきだと考えた。

未災者が増えてきている中、未災者も震災のことや過去の災害を知る必要がある。そして、未災者も得た知識をもとに語り手となって災害のことを伝えていくことが大切だ。環境防災科で学んだことを身近な人に伝えていきたいと思う。環境防災科で学んだことを将来にも活かしてたくさんの人の想いを伝え続けていきたい。現代を生きる私たちが過去から未来へ「語り継ぐ」ことが私たちの使命だと思う。その第一歩として「語り継ぐ」を作成して、たくさんの人の想いを伝えていきたい。

未災者が紡ぐ

森田 悠

はじめに

阪神・淡路大震災から 30 年を迎える現在に、環境防災科現役生としてできることは何か。防災ジュニアリーダーとして活動し、力を入れた防災教育、東北訪問でお聴きした一人ひとりの想い。石川県被災地支援活動で何度も感じた人と人との繋がりや、やるせない気持ち。私にしか感じられなかったことを語り継ぐ。

1 阪神・淡路大震災の体験

(1) N さんの話

N さんは当時、夫と 2 人の息子さん、1 匹の犬と暮らしていた。地震が発生した時は就寝していて、布団の中にいた。タンスの上に置いてある箱が落ちてきたため必死に布団の中に入り、揺れが収まるのを待った。「これが地震」と思った。1 階にあるものは同じ方向に向かってほとんどが倒れていたが、食器棚と冷蔵庫、その上に置いてあったおでんの入った鍋だけは倒れていなかった。ガス、水は出なかったが、電気がすぐについたため、テレビをつけた。長田のまちが火に包まれていて、一緒にテレビを見ていた夫と呆然とするしかなかった。

N さんの夫は元町に事務所を構えていたため、17 日の間に車で向かった。しかし道路はでこぼこになっている上、渋滞で中々進まず、すぐに自宅へ戻り自転車を出した。事務所は倒壊していなかったが、屋上にある貯水タンクが壊れて、パソコンは電源が落ち、書類も濡れた。その後は息子を連れて、家にあるだけのタオルを持っていき、書類を拭く作業をしていた。

ご飯を食べようとしても、スーパーにはお米がなかったため、家から少し離れたお米屋さんで買い、備蓄していた水で炊いた。水を使うのはもったいないと思い、ラップをお皿代わりにして食べていた。倒れなかったおでんを少しずつ食べた。高槻に住む弟が電気鍋を持ってきてくれたため温かいご飯を食べることができ、とても有難かった。お風呂も入ることができず、数日に一回、体を拭くだけだった。

建築士になった息子の勧めで耐震工事をした。立て直すのではなく元ある家に足りないところを補ったため、現在も床が傾いていたり、柔らかくなっていたりするところがある。

(2) I さんの話

I さんは当時、長女を妊娠していて、臨月だった。1 月 10 日まで三宮で正社員として働いていた I さんは仕事帰りにすぐ病院に寄れるようにと灘区にある大谷産婦人科に通っていた。

地震発生時は夫と自宅にいた。1 階の廊下は真横に亀裂が入り、壁が浮いていた。家がつぶれるかもしれないと恐怖を感じ外に出ると、ガスのにおいが充満していた。とにかく寒かったため、自宅に戻り、電気が復旧するとテレビをつけた。そこでは、高速道路が倒れ、長田に火災が広がっていた。夫は長田区に実家があり、すぐに家を出た。夕方遅くに帰ってくると、まつげが燃えていた。車内でも熱さを感じるほどだったそうだ。家は全壊していたが、実家に住む 3 人全員が避難所へ避難していて無事だった。

19 日の夜中、陣痛を感じ病院に電話をすると、出産できると聞いたため、車で病院に向かった。普段なら 1 時間で到着するところ、渋滞により 7、8 時間かかった。県庁から渋滞をされていて、緊急車両用に空けておいた道路を使わせてほしいと言ったが、救急車を呼ぶように言われた。救急車は他の出動で忙しいだろうと判断しそのまま車内で渋滞が過ぎるのを待った。その間も定期的に陣痛に襲われ、不安を感じていた。19 日の夕方に病院に到着した。家を出てから何も食べていなかったが、食欲もなかった。夫は食べ物を探しに行ったが、物不足で値段が上がり巻きずしが 1 本 2000 円近くしていた。病院についてから 24 時間以内の 20 日に出産し、早めに出発したため車内で出産することにならなくて良かったと思った。その後は 6 日ほどで退院したが、物がなく、入院中に出た食べ物は一食おにぎり 1 つと牛乳 1 本だけだった。人手も足りていなかったため、夜に子どもを見られる人がおらず、出産した次の日からはベビーベッドを隣に置き夜中はずっと見ていた。1 週間から 10 日後に検診で病院に再び向かった際には渋滞はしておらず、高速道路以外は通常通りだった。また、入院中に十分なものを出せなかったからと、綿やおむつ 3 パックをもらった。

産後、テレビ局から産後すぐの人にインタビューをしているため、自宅に伺って良いか電話があった。当時は個人情報の管理が甘く、おそらく病院から聞いた情報で電話をかけてきたのだろうと思い、承諾

し、聞かれたことに答えた。

今になって思い返すと、判断能力がすべて欠如していて、冷静にゆっくりと考えることができなかった。病院なら神戸市より西の被害が少ない地域にすればよかった。自分や夫、子どもの命を顧みずに病院を選んでしまったことが後悔であると語ってくれた。

（３）阪神・淡路大震災を体験していない両親の話

両親は当時９歳で、兵庫県の北西部に住んでいたため、直接的な被害はほとんどなかった。朝起きると、テレビで報道されていて、「神戸が大変なことになっている」と思い、強い衝撃を受けた。学校では模造紙にメッセージなどを書いて、神戸に送った。

２ 話を聴いて

お話を聴く中で「うちはましだったから」「もっとひどい方はたくさんいる」という言葉を何度も耳にした。阪神・淡路大震災を経験したから被災者ということでもなく、経験された方一人ひとりに想いがある、感じることも違う。被災者という言葉でひとくくりにはできないと思った。両親は当時幼く遠いところに住んでいたため、記憶が曖昧なところが多いと言っていたが、テレビを見たときの光景ははっきりと覚えていると話していた。どれだけ幼くても心に残るものがあるのだと感じさせられた。

お話をしていただき、震災経験を語ってくださったことに感謝したい。今までの日常生活から地震発生でできなくなったこと、現在までの３０年間の震災体験を語ることは大きな力があることだと思う。それでも語ってくれた想い、記憶を私なりの形で繋いでいきたいと改めて感じた。

３ 環境防災科

（１）入学のきっかけ

私が地震に関心を持ったのは小学４、５年生だった。このころからよく耳にした「南海トラフ巨大地震」という言葉。当時の私は南海トラフ巨大地震が何なのか知らなかったけれど、「たくさんの人が亡くなってしまうかもしれない。もしかしたら自分も死ぬかもしれない」と思っていた。緊急地震速報が流れるだけで、次はもっと大きい地震が来るかもしれないと必要以上に怖がっていた。しかし、怖くても、知れば怖くなくなるかもしれないという気持ちが湧いた。その後は図鑑を買ってもらったり、ニュースを見たりして地震を知ろうとしていた。中学２年生の時２つ年上の姉から、友人が環境防災科で地震やハザード、防災を勉強していると教えてもらい、ここだったら私が勉強してきたことをさらに深く学べると思い、入学を志した。

（２）防災ジュニアリーダー

私は１、２年生で参加し、兵庫県の高中生と意見交換をしたり、防災を広げ深める方々のお話を聴いたりして、防災を多方面から勉強させていただいた。いくつもある防災ジュニアリーダーの活動の中で、防災教育、避難訓練、防災運動会の３本柱のアクションプランに力を入れてきた。私はその１つである防災教育を担当し、学校防災の一部に関わらせていただいた。防災教育は避難訓練とともに、毎学期末に行われ、生徒が主体となってその企画、運営をする。事後アンケートを行い、何が足りなかったのか、何がよかったのかをジュニアリーダーで何度も話し合った。普通科生に、より楽しみながら防災に親しみをもってもらえるように、皆と話し合いができるワークショップを取り入れたり、防災クイズを考えたりして工夫をした。

また、環境防災科生と普通科生での防災の意識に違いが出ていたこともあり、何をしたら理解し、覚えてもらえるかを避難訓練班と一緒に考えた。毎回反省として出た、「避難経路が分かりにくい」ことには、スライドに映した避難経路図を１つずつ説明したり、動画を撮ったりした。それを防災教育の際に生徒に見てもらうことで、アンケート結果では分かりにくいと回答する人が各段に減り、原則となる避難経路を間違える人も少なくなった。また、生徒とは別に、教員研修も行い、先生方とも一緒に防災を考えた。普段は授業を受ける側の生徒がファシリテーターになって防災を考えることに、私たち自身も不安を感じることがあったが、マニュアルを読み災害対応班を確認することで、先生方の行動と一緒に考えることができた。生徒目線の疑問を先生に質問することで、お互いに新たな気づきを得ることができた。

３年生でも防災ジュニアリーダーに参加し、校内の防災教育に取り組んで、さらに防災力、防災意識向上、防災の楽しさを広める力になれるように考え、工夫していきたい。

(3) 東北訪問

東日本大震災は私が幼稚園生のころに発生したため、当時の様子はほとんど覚えておらず、唯一残っている記憶はテレビで真っ黒の波が道路に押し寄せてくる映像を見たことだけだ。幼いながら一緒にいた母の焦りを見ていつもと違うと感じ少しパニックになった。環境防災科に入学し東日本大震災はどのようなことが起こったのかを学ぶ中で、実際の土地で一人ひとりの想いやお気持ちに触れたいという思いから、2年生の夏に東北訪問に参加させていただいた。2泊3日の短い時間で子どもを亡くされた方や生徒を亡くされた方、様々な立場の方からお話を沢山伺った。そして、私は東日本大震災が起こる前は私たちと変わらない日常があったことを伝えたいと思った。これは大川小学校で語り部の活動をしている佐藤敏郎先生の想いでもある。佐藤敏郎先生は「あの大川小と言われる前の大川小を伝えたい」とおっしゃっていた。大川小学校は、児童 74 名教員 10 名が津波により犠牲になった。私が見た大川小学校は壊れた校舎や津波で倒れた渡り廊下があり、震災の大きさを肌で感じた。しかし、校庭には土俵やステージがあり、元気いっぱいの小学生たちが遊んでいた様子が想像できるような場所でもあった。東北訪問に参加する以前の私のように大川小学校は悲しいイメージを持っている人が多いだろう。しかし実際は、悲しい場所ではなく暖かい空気が流れる場所だと思ったこと、生の声を聴かせていただいたからこそわかる思いの強さを大切にしたいと思った。

4 令和6年石川県能登半島地震被災地支援活動

3月17日、18日に令和6年1月1日に発生した能登半島地震の被災地支援活動に参加させていただいた。2日間の活動で被災をされた方一人ひとりとお話しし、沢山の想いを受け止めさせていただいた。そして、人と人とのつながりを感じた。環境防災科生は人と人とのつながりという言葉大切にしている。しかし、実際に目で見て感じるのではその言葉の重みは全く違っていった。他のボランティアの方やボランティアセンターの方とお話し、岩手や東京、香川や鳥取など全国各地から能登半島のことを想って集まったと知った。人と人とのつながりを目の当たりにして私もその一部になり、能登半島のために全力を尽くしたいと思った。

非日常に当たる生活が、日常になってしまっている方の生活と隣り合わせで行う活動の中で、「どこまで話を聴いていいのだろう」「どのような言葉を返したらいいのだろう」と言葉の使い方や選び方を悩むことが何度もあった。また、重い家具や家電、コンクリートの撤去や片付けをすることが多く、「男の子のほうがいいかな」と言われることがあり、力になれないことに申し訳ないと思った。しかし、ボランティアの私がこのようなことを思っているのかとも思い、やるせない気持ちになった。自分の中では消化しきれない想いはあるが、感じたことを少しずつ言葉にしていくことで何をしたいのか見えるようになった。現地では1軒たった数時間の関わりだったが、優しく接してくださったり笑顔をたくさん見せてくださったりして最大限の力で活動ができてうれしいと思った。

被災地支援活動では私と支援活動をさせていただく現地の方、同じ活動をしている仲間や、他のボランティアの方、活動の仲介をして下さるボランティアセンターの方すべての人とつながりを感じ、つながったご縁は切らせたくないと思った。そのためにも、これから能登半島の現地に行くだけでなく募金活動や私の経験を他の人に伝えるなどの形で関わり続けていきたい。

5 将来の夢

私の夢は海上保安官になることである。きっかけは、1年生の「災害と人間」の授業の際に海上保安官の業務について知り、私も同じように海の安全を守る海上保安官になりたいと思ったこと、中学から5年間続けていた吹奏楽を仕事にできることを知り、憧れたことである。音楽隊は音楽を通して聴いてくださった方の心に訴えかけることができると思う。私は、それができる音楽隊で聴いてくださった方にホッとする一瞬を届けたい。そして、被災地や未災地に関係なく、聴いてくださる方の想いを繋げられる存在になりたい。

また、将来大切にしたいことが2つある。1つ目は自分から学ぶ姿勢を忘れないことだ。環境防災科生である現在は、防災情報を常に意識して取り入れるようにしており、先生方からも多くの情報をいただいている。新たな立場に加えて、環境防災科生であった経験を考慮できるのは私にしかできないことである。そのため、防災情報が入りやすい環境を離れるから防災からも離れるのではなく、今まで以上に防災情報に敏感になり学んでいきたい。2つ目は、「1か月、行方不明者の捜索をして、家族の元に戻せたことに意味はある」という言葉である。この言葉は講義の際に、海上保安官の方がおっしゃった。この方は

東日本大震災で行方不明者の捜索を行い、ご遺体になられた方を家族の元に戻した。たった一言が私の想像のつかないほどの想いを抱えて捜索にあたっていたと感じた。そして、この言葉と私が感じた想いは決して忘れてはいけないと思った。私はこの2つを大切に、海上保安官になり気持ちを繋げられるようになりたい。

おわりに

私は「語り継ぐ 21」を執筆するにあたって、環境防災科で過ごした3年間を振り返って思うことは、1人では何もできないことがあるということである。環境防災科に入学し防災の知識や気持ちが膨らんでいくのは、語ってくださった方、今まで環防を支え作ってきた先輩方、近くで支えてくれた先生方や友達、家族がいたからこそだと思う。

これまでに大きな地震や災害を経験したことがない未災者である私が、災害を経験された方の気持ちを自分が語って良いのかと不安に思うことがあった。しかし、高齢者や自分より小さい子、障がいがある方に向けたボランティア活動、出前授業や特別支援学校との交流・共同学習、防災ジュニアリーダーでの活動、東北訪問、能登半島地震被災地支援活動を通して、たくさんの方々とかわらせていただいた。一人ひとりに感謝し、語っていただいた生の声や想いを語るのは私にしかできないことである。今災害が起きてもおかしくない時代に生きる私は、防災を学んできた者として、次へ紡いでいくことができる語り方で、1人でも多くの方が災害時に助かるように願いを込めて、語り継ぎたい。

つなげたい

山内 皓成

はじめに

阪神・淡路大震災から 30 年を迎える。私は震災を体験していない。震災を体験した人は少なくなっていく。だから防災に身近で触れてきた私たちが震災を体験していない人に防災を身近で触れてもらえるように私たち環境防災科は語り継いでいく。

1 阪神・淡路大震災

(1) 母の話を聞き

母は震災当時明石の大久保に住んでおり、高校 2 年生だった。大きい揺れが来る直前にパッと目が覚めて、まだ起きる時間じゃなかったのもう一度寝ようとした瞬間「ゴオオオオオ」という音が地鳴りのように聞こえて、下からはねあがるような感じの縦揺れが起き、そのあとに横揺れが始まった。その時地震とは思ってなかったらしいが、和室のガラスケースが倒れる音がして、その瞬間恐怖が増したらしい。地震直後にリビングに行くと 300 キログラムのピアノが動いており、食器棚自体は動いていなかったが、食器棚の中で食器が散乱してぐちゃぐちゃに割れていたそう。明石市全体はあまり被害がなく、母の地域は電気もガスも止まっていなかった。しかし母のマンションの貯水タンクに亀裂が入ってしまい、水が出なくなったことが一番困ったことだったそう。水が出なくなり、でも水は必要だったため近くの中学校に毎日水を汲みに行っていた。お風呂にも入らないといけなかったので近くに住んでいた親戚の家に入りに行っていた。電気が通っていてテレビもつくため、テレビをつけるとどのチャンネルでもニュースが流れ、長田のまち、倒れる阪神高速、道路から落ちそうな観光バスなどの様子をみていると現実と思えなかったそう。それより、毎日毎日家に届く朝刊の新聞に載っている阪神・淡路大震災の死者が、毎日毎日増えていくのが何よりも怖かったそう。母と叔父の安否はすぐに祖母が確認したのだが、当時兵庫区に住んでいた曾祖母の安否確認ができず、とても心配だったそう。電車も走っておらず、電話の回線が切れてしまっていて、つながらず、約 1 か月安否が確認できなかったそう。電車が須磨駅まで動いたときに、祖母と叔父が須磨まで JR で行き、そこから兵庫まで歩いて曾祖母の家まで行ったそう。母の地域は被害が少ないのもあり、ショッピングモールやお店、電車の運行が比較的早かったり、学校もすぐに始まったりした。しかし家が半壊や全壊してしまった生徒もいた。その生徒たちは学校に来なかった。震災の 1 週間後に修学旅行があり、延期にはなってしまったものの長野にスキーをしに行った。現地では旅館の人が、ニュースを見たのもあってか、ものすごく手厚くおもてなしをしてくれて、とても気持ちがほっこりしたそう。

(2) 母の話を聞いて

今までの講義や被災者の話を聞いていたら、ライフラインがほとんど遮断されて生活もままならない感じだと思っていたので、母の話を聞いていたら意外と不便はしていなくてとてもびっくりした。母が言っていた毎日毎日新聞に載っている死者数が増えていくのが怖かったというのを聞いてゾッとした。自分がもしその状況にあってテレビで黒い煙が上がっているところや高速道路が倒れている姿を画面越しでもみただけで気分が落ち込む、新聞で増える死者数を見たくないけど毎日届くから見てしまうのがとても耐えられないだろうなと思ったし、もし自分がその地震の現場にいたら周りが燃えていたり、壊れている家があったりしたら冷静を保つのは無理だし、トラウマになるほどの体験になると思うからその現場にいたらと考えたらゾッとした。母の話を聞いて被害は地域によって、マンションによってライフラインの使用できる違いやいろんな点で差があるんだと思った。

2 環境防災科に入ったきっかけ

私はハンドボールがしたいと思い舞子高校のオープンハイスクールに母親と一緒に参加した。オープンハイスクールが終わってから舞子高校のパンフレットを読んでいたら環境防災科と書いていて初めて環境防災科の存在を知った。親に「環境防災科って何？」と聞いたらテレビでボランティアの活動で活躍しているとニュースになっている学科だと聞きそこから関心を持つようになった。そして自分なりに学校について調べているといろいろなボランティア活動をしていてすごいなと思いこの環境防災科を志望することを決めた。

中学生の時に志望すると決めたけど成績が良くなかったため自分の強みを作るために学校の先生や母親に協力してもらった。学校の昼休みや放課後に面接の練習を付き合ってもらい、家で寝る前に毎日母親と面接の練習をした。担任が国語の先生だったので小論文の練習にも力を入れることができた。そのおかげで面接も小論文も当日自分なりに満足できるくらいにできたと思う。この時が今までで一番頑張った時だったかもしれない。

3 入学後

私は入学してから外部講師の授業や校外学習などとても貴重な体験をさせてもらった。1年生の時に外部講師の授業では様々な職業の防災へのかかわりや災害への想いを知ることができた。そして防災や減災の大切さを知ることができた。2年生では長田のまちあるきで区画整理を知り街の人の大変さ、震災当初の街の形やその後の変化を知ることができた。

私が3年間環境防災科で学んで一番大切だと思ったことは、備えることだ。備えていたら災害時に冷静に行動できるようになり、家族、恋人などの大切な人を助けられるかもしれないから、私は30年以内に高い確率で発生するとされている南海トラフ巨大地震に家族や周りの人と話し合い災害にしっかりとそなえて大事な人を失わないように環境防災科で学んだ事を活かせるようにしたいと思った。

(1) 長田のまちあるき

阪神・淡路大震災の際に大きな被害を受けた長田のまち。2年生の時に私たちは長田のまちあるきに行った。火災によって被害を受けた長田のまち、区画整理で生まれ変わった長田のまち、いろいろな長田を見ることができた。その中でも私は大国公園のクスノキの木が火災の延焼を止めたという話が一番心に残っている。私は木が焚火や木炭などで燃料として使われているのもあり木は絶対に燃えやすいものだと思っていたから、一本の木が延焼を止めたと聞いたときにとってもびっくりした。

区画整理では自分の土地を納得できない状況で譲らないといけなかったり、道を広くするために家を少し後ろに下げないといけなかったり長田のまちの人がみんな「災害に強い街づくり」をおこなった。被害を受けなかった家は建て直しができいていないため、長田全体ではないが阪神・淡路大震災が長田のまちと人々の意識を大きく変えたでき事になった。

長田のまちあるきに行き、自分のまちと比較し、自分のまちはニュータウンなため比較的きれいで災害対策もされているけど子どもが多いことが少し問題になると思う。子どもが多いと避難所などがあふれかえってしまったり、避難所での喧嘩の原因になったりと、街にとっての最大のメリットが最悪のデメリットになりかねないと思った。長田のまちあるきを行うことで自分のまちをもう一度見直すきっかけとなった。

(2) 消防学校体験入校

環境防災科では1年時と2年時の2回にわたって神戸市消防学校に体験入校させていただく。そこで私は命の重みや日々の訓練の大切さを学ぶことができた。1年時に「回れ右」「右向け右」などの動きを練習した。最初私はこの訓練は必要ないだろうと思っていたけれど、災害の現場で連携がとれなかったら大変だと気付くこの訓練の大切さを理解することができた。

2年時では放水訓練の体験をさせてもらった。ホースから水を出すのにも何人もの連携が必要で連携がとれていなかったら大事故になりかねないことを知った。そして自分たちで連携をとれた時にとても達成感がわいてきた。被災地での連携の大切さを知れてとても貴重な体験になった。

4 この場所だからできた夢

(1) 将来の夢

中学生の頃の私は夢がなくとてもあいまいだった。でも環境防災科に入学して「夢」ができた。私は管理栄養士になりたい。3年間の学習を通して被災地での栄養の重要さを痛感した。そして非常食のレパートリー、便利さにもとても関心を持った。基本栄養は食事からとるものだが、被災地ではその食事を十分にとることは難しくなり栄養を摂取できなくなる。避難所で栄養を取れなくなると免疫が下がり、感染症になるリスクがありそこから災害関連死の可能性が出てきてしまうため、とても栄養は大事なもののだと知った。そして私は管理栄養士になってしっかり避難所でも栄養が取れておいしくて老若男女手に取りやすい非常食を作りたいと思った。そして調べていくうちに管理栄養士の災害支援チーム JAD-DAT(日本栄養士会災害支援チーム)があることを知った。そのチームは被災地に派遣されて栄養補給物資

の支援や直接的な栄養補給などの要務があるが、私は管理栄養士が被災地にはとてもじゃないけど関わらない仕事だと思っていた。でも調べていくうちに被災地で活躍できるのだと知った。だから管理栄養士になって防災に関わり続けたい。管理栄養士になりたいという夢を見つけさせてくれたこの場所に感謝したい。

（２）JAD-DAT（日本栄養士会災害支援チーム）とは

日本栄養士会災害支援チームは国内外で大規模な自然災害が発生したときに、被災地内の医療・福祉・行政と協力して、緊急栄養補給物資の支援など、状況に応じた栄養・食生活支援活動を通じ、被災地支援を行っているチームだ。そのためこのチームは、災害発生後 72 時間以内に行動できる機動性、大規模災害に対応できる広域性、栄養支援トレーニングによる専門的スキルを持っている必要がある。これらは、研修によって養われる。また、食料の調達、移動手段の確保などを自身で行う自己完結性も備えている。

（３）管理栄養士になったら…

管理栄養士になって老若男女手に取ってもらえる非常食を作るのに携わりたい。その時に大切にしたいことは、手に取っていただける人たちのニーズに合わせて開発することだ。手に取ってもらえる人たちの要求や願望をしっかりと調査して、避難所でも汎用性が高く誰もが食べたくなるようにとしっかり意見を取り入れることを大切にしていきたい。

私は入学して防災・減災の考え方が変わった。環境防災科に入る前は減災という言葉自体知らなかったし、防災もいつかやればいーだろって考えていた。でも入学して、外部講師の先生の授業やいろいろな活動を通して、災害はいつ発生するかわからないということ、自然災害のためにも備えることが大事ということを知った。

ボランティアに対する考え方も変わった。入学当初はボランティアをしてあげていると思っていたけれど、先生からボランティアをさせていただいている気持ちで取り組むことを教えてもらい、しっかりボランティアに取り組むことができた。ボランティアでもかかわらせていただいた地域の方々の体験談を聞くことができたり、先輩や後輩と協力してみんなで一つのことに向かったりと頑張っていくことの大切さをボランティアから学ぶことができた。

6 南海トラフ巨大地震

近い未来必ず発生するといわれている南海トラフ巨大地震。南海トラフでは 100 年から 200 年周期で地震が発生しており、この 30 年の間におよそ 80% の確率で発生するといわれている。この地震で最悪約 32 万人の人がなくなると予想されており、経済被害も 220 兆円に及ぶといわれている。またこの地震では沿岸部の津波による被害も予想されており、太平洋沿岸の広い地域に約 10 メートル規模の津波が来るかもしれない。

もし発生してしまったらまず避難がとても大切だと思う。東日本大震災の時「ここは津波が来ないから大丈夫」と言って避難せず津波に飲み込まれてしまった方が多く、津波が来るまでに避難すれば死者も減らせると思う。そのために家族や大切な人と離れ離れにならないようにあらかじめ避難する場所を決めておくことや家の家具の固定をすることが大切だ。家具を固定することで死者の約 60%～70% 減らすことができるため身近にある家具や自分より高い家具などを固定するなど今すぐにでもできることに取り組むべきだと思う。東日本大震災や過去の数々の災害の教訓を生かして自分の命を守り、大切な人のために生き延びることが必要だと思った。

おわりに

この「語り継ぐ」を執筆するにあたって、環境防災科で学んだ 3 年間はとても濃く貴重な時間だったと改めて痛感した。この教室で作った夢を大切にしたいとも思えた。震災のことや自分のまちについてもう一度見直すことができた。今まで両親や弟との会話で震災の話をする機会が少なく、母親の話を聞いているとこの震災の話は絶対風化させてはいけないとより強く思えたと思う。それに災害は人々の幸せな家庭や時間を一瞬にして奪ってってしまうことを改めて認識することができ、少しでも被害を減らすために防災・減災が重要になってくることも認識した。南海トラフ巨大地震では今までにない、みんなの予想をはるかに上回ってくる程の被害になると思う。今あたり前に過ごせている家族、恋人との時間はとても貴重で大切なものだとことを理解できた。だから周りの大切な人と一緒に暮らしていくために防災を次の世代次の世代へとつなげたい。

災害の教訓、私たちの使命

山口 大輔

はじめに

阪神・淡路大震災が起きてから、今年で30年になる。被害や教訓を風化させないために自分たちは次の世代へと語り継いでいかなければならない。未災者が増加していく中で、阪神・淡路大震災を知らない、そういう人たちが増加すると、次に起こる災害では被害を拡大させてしまう可能性がある。だから、被害を少しでも減らすためには、防災、減災について知識を持っている環境防災科の私たちが、阪神・淡路大震災の教訓など責任をもって災害の怖さを伝えていきたい。

1 両親の体験談

(1) 父の話

父は消防隊員で消防署に勤務していた。地震が起きた時は、尼崎市の家で寝ていて地震があつてから目が覚めた。最初は情報が全くなく、どこが震源になっているか分からなかったの、まず家の周りを見に行つた。尼崎市では家屋の倒壊などの被害がなかったの、家に戻つてすぐに職場に行く準備をした。当時は車を持っていなかったの、電車で通勤していた。電車に乗ろうと駅に向つたが、電車は動いていなかったの、タクシーで神戸市の中央区にある職場に向かおうとした。タクシーに乗って西宮市に入ると大渋滞で全く動くことができなかったの、また家に戻つて、自転車で三宮の職場に向かうことにした。職場に向かう途中に通つた芦屋市、神戸市東灘区では道沿いの家が多く倒壊していたの、神戸市では大変なことが起きていると感じた。家から2〜3時間で、仕事場に到着した。ロッカーは倒れていて更衣室もぐちゃぐちゃになっていた。なんとか更衣をして、消防隊員で現場活動に入った。震災当日は、中央区では火災はほとんど起きていなかったがビルやマンション、住宅の倒壊が多く、下敷きになっている人が多数いた。救助するために必要な重機がなかったの、声は聞こえているが助けることができない状態だったのが最も悔しかったそう。次から次へと現場要請があり、その日はほとんど寝ていない状態だった。兵庫区・長田区で火災があり出動したが水が出ない状態だったので消火することができなかった。翌日からはローテーション制で現場に行くことになったが、1月18日に中央区で大きな火事が起きて、約2日間は燃え続けていた。この時水は出始めていたが、量が少なかった。被害にあった人たちだけではなくて、消防士もPTSD（心的外傷後ストレス障害）になる人も多数いた。

阪神・淡路大震災を通して悔しかったことは、2つある。1つは人命救助の時に重機がなくてがれきをどけることができず、助けることができなかったことだ。もう1つは、火事が多く起こつたが水道が止まっていて水が出ず、消火することができなかったことだ。そして困つたことは、1週間も家に帰ることができず、風呂に入ることもできず、食事は救援物資で届いた菓子パンばかりだった。1週間ほどして家に2時間だけ帰れることになって、家でお風呂に入った時の気持ちよさは今でも鮮明に覚えているそう。この経験から父は、大きな災害では消防・警察だけではできることが限られるので、行政に頼りすぎない「助け合い」が重要だと言っていた。前の年の消防学校では「神戸では大きな地震が起こることはありません」と習つたそう。今と違って断層に対する研究が進んでいなかったの、神戸市では地震への準備ができなかったことも被害が拡大した原因だ。

(2) 母の話

母は当時、三宮にある会社で事務員をしていた。地震が起きた時は自宅で寝ていた。揺れが収まつたあと外の様子を見に行つたが、誰も出てこなかったそう。避難するような被害が出ていなかったの、三宮にある職場に向かおうとしたが電車が止まっていた上に、会社に被害があつたの、いったん自宅待機となったそう。話を聞いて、困つたことは何があつたのかを聞いたが、被害が少なかったため、困つたことは特になかったそう。しかし、母の会社の上司は地震によって亡くなってしまった。そして、友人の家が全壊し、友人を探しに避難先の小学校へ行くが、見つけることができなかった。そこで母は、連絡先を書いた貼り紙をして帰つた。会社が入っているビルも全壊し、後処理も大変だったそう。

2 体験談を聞いて

これまで、阪神・淡路大震災の時の話は1回聞いたことがあるが、当時父や消防がどんなことをしていたのかを具体的に聞くのは初めてだった。そして、なぜ被害が大きくなったのかも、父の話を聞いて、さらに理解を深めることができた。震災当日、中央区では火災がほとんどなく、ビルやマンション、住宅の倒壊が多くて建物の下敷きになっている人が多くいたと聞いて、消防士の人たちもPTSD（心的外傷後ストレス障害）になる人が出る要因が分かったと思う。そして準備の大切さを改めて感じることができた。父は消防士になってまだ1年目で、前の年の消防学校では、神戸市で大きい地震は来ないと教えられていたが、翌年、阪神・淡路大震災が発生して対応が適切に行えず、被害を拡大させた。地震はどうせ起きないではなくて、いつでも起きる可能性があると思って備えていくことが大事だと思った。母の話を聞いて、被害がほとんどなく困ったことは特にないと聞いたので、将来、どこの地域だったら災害に強いのだろうかなども考えて、住む場所を考えていくことが大事だと感じることができた。そして、災害時は公助（消防士、警察、自衛隊等）だけでは、助けられない人が多くいると聞いたので、頼りにしすぎるのではなくて自助や共助といった一般市民たちで「助け合い」が必要なことが改めて理解できた。だから、大災害が起きてしまった場合は自分が誰かを助けるという思いを持って、「備え」をしていこうと思っている。また、災害が来ない場合もいつ来ても冷静に対応ができるように準備を怠らずに行いたい。

3 環境防災科

（1）入学しようと思ったきっかけ

中学3年生の時に受験する志望校を決めるのに悩んでいた時、父が環境防災科について教えてくれた。父は「これからの時代、防災の知識は絶対必要になってくる。」と言ってくれた。そして、自分は当時防災について全く知識がなかったので、今の地球などの環境や防災の知識をつけたら将来誰かの役に立てると思った。自分は人前に立って何か発表することや喋ることが苦手で、この環境防災科では、人前で発表する機会が多いと知って、多くの人の前で喋ることが苦手なのを克服したいと思ったのも理由の1つだ。また、自分は今までボランティア活動に参加したことがなかったので、環境防災科に入ってどんなことをやっているのかを知りたくて参加してみたいとも思った。

（2）東北訪問

東北訪問に参加したいと思ったきっかけは、諏訪清二先生の著書だ。『高校生、災害と向き合う』を入学前に読んでいて、「東北訪問」について内容が書いていて、津波の被害に遭った家の泥を処理したり、がれきを撤去したりするなどの活動を知って、行ってみたいと思ったのがきっかけだ。

東北訪問で印象に残ったことは、大川小学校を訪問したことだ。まず、話をお聞きして安全な場所ではないといけな学校で生徒や先生方が亡くなってしまったことに驚きがあった。東日本大震災が発生したとき、どこに避難をするかを考えるだけで、50分もグラウンドに滞在していたのが原因で、教職員・生徒を含める84人が亡くなってしまった。大川小学校のすぐそばには山があり、登りにくい地形だが、2～3分で登ることができる。もしその山に早く登っていれば、教職員と生徒の命は助かっていたかもしれない考えると、とても辛い気持ちになった。そして、このような形で大きな被害を出すのは、これからはないようにしないといけないと思った。学校が安全な場所であるために、子どもを助けることができるのは大人たちの行動だと思うので、教職員が防災について少しは知識をつける必要があると感じた。そして、生徒たちは避難訓練や災害について学ぶことと防災マニュアルを作ることで、生徒自身で命を守ることができると思った。東北訪問を通して、防災について、深く学ぶことの大切さを改めて感じることができた。そして生徒たちを助けることができるのは、教職員の人たちの行動だということも理解できた。

（3）環境防災科での活動

自分が最初に参加した活動で、印象に残っているのは、芦屋特別支援学校へ行って共同学習をしたことだ。最初のほうは準備も時間はそんなにかからないだろうと思っていたが、リハーサルや、どのように教えたか相手に伝わりやすいかを先輩や先生方にチェックをしてもらわないといけないなどひとつひとつに多くの時間をかけないといけないということが分かった。特に難しかったと感じたのは、基本自分より下の学年の人たちと防災について共同学習をさせてもらうので、どの文字が読めないのか、どのように表現をしたら伝わるのかを考えることだ。そして、いざ本番になると、自分が考えてきた言葉を

伝えたくても言葉にできないことがあり、人になにかを教えることは、簡単ではないことだとそこで初めて理解ができた。この経験を通して、ボランティア活動に参加するのに生半可な気持ちを持つてはいけないことが分かった。さらに、この出前授業の経験から、様々な人たちと関わることができたので、コミュニケーション能力をつけることができた。この能力は人間関係の構築など、様々な状況で活かせると思うので、これから活用していきたい。

そして、苦労したことは、募金活動だ。最初に参加したのは、1年生の3学期だった。私は人前で大きな声を出すのが得意ではないので周りの人に聞こえやすいように、声を張るのに苦労した。そのことよりも大変だと感じたのは令和6年の1月1日に起きた能登半島地震で、石川県に支援をしようと、自分たちから企画をしたことだ。特に、義援金・支援金の受付をしている場所はどこにあるのかを調べるのが大変だった。そして、企画をただすればいいのではなくて先生方に確認、段取りを整えるのが一番苦労したことだった。なぜなら、言葉や、どのような被害が出ているのかなどを調べて確認をするという作業では、先生方や部員同士で完全下校の時刻の間近まで居残りをして、計画を立てていったからだ。募金活動を通して、準備の大切さを感じることで改めて理解を深めることができた。

もう一つ印象に残ったのは、2年生の7月の時に参加した本多聞夏祭りの運営のボランティア活動で、イベントの運営を実際に体験した。祭りなどのイベントで運営がスムーズにいくことは、当たり前ではないことが理解できた。朝早くから集合をして、テント、ブースの設営や、祭りに使用する機材などを運ぶなど困難なことがたくさんあった。準備をするために時間がたくさんあるわけではないので、タイムマネジメントの能力も必要だと思った。さらに、片付けがどれだけ時間がかかるかを実際に体験して、大変さを感じることもできた。この経験は、避難所での運営にも繋がっていく部分があると感じたので、活かしていきたい。

4 南海トラフ巨大地震

近いうちに、南海トラフ巨大地震が起これと予想されている。今後30年以内に80%の確率で起こるといわれていて(2025年1月15日発表)、予測されているマグニチュードは8~9の規模で、もし南海トラフ巨大地震が発生したら、大規模な災害になる。想定されている被害は、茨城県から沖縄県までの約2000km以上にかけて、大地震を起こすといわれている。予想されている死者は、32万人を超えて、国民の半分が被災者になると予想されている。さらに、津波も発生し、関東地方から九州地方の太平洋沿岸では、10mを超える大津波の襲来があるといわれている。建物が耐震構造になっているかや、津波の場合、被害を抑えるために堤防を設置することも必要だと感じた。そして、インフラの被害も、停電は約2710万軒で、上水道は約3400万軒が断水、下水道は約3210万人が利用できなくなり、都市ガスは約180万戸で供給ができなくなると予測されている。だから、食料や飲料水や、カセットコンロ、簡易トイレなどの準備をしたりする必要がある。経済的損失は、東日本大震災の約10倍を超えると予想されていて、被災から復興までに必要になる金額は最大、国家予算の2倍以上の220兆3000億円にのぼるといわれている。

被害を少しでも減らすためには、市民の私たちが準備をすることが大切だ。例えば、自分の周りでどこが危険かを知って、避難経路をハザードマップで確認したり、想定外のことが起きるかもしれないことを考えて、臨機応変に対応するということも考えるべきだ。そして、被害は東日本大震災と同じで津波による被害が大きいと予測されているので、自分の住む地域で予測されている津波の高さよりも高い場所にいるのか、避難できるかを確認することが重要になる。自分が将来、海の近くや川の近くに住んでいたら、ほかの人たちの命を助けることができるように自身が起きたら、早く逃げて率先避難者となり、周りの人たちを導いていきたい。

おわりに

私は3年間環境防災科で過ごして、とても貴重な経験をさせていただいた。私は将来、3年間積み重ねてきた知識を活かして、まずは自分の身体を守ることができるようになりたい。そして、自分の安全が確保できれば、ほかの人たちのサポートに回りたいと考えている。そのためには、日頃からの防災についての意識を持つことが大切だと思っている。災害が起きた時にはどこに避難をすればいいのか、保存食といった食糧やラジオなどの防災グッズなどの準備をすることが大切だ。

自然災害を完全に無くすということとはできない。だが、被害を抑えるということはできる。そのためには、過去に発生した阪神・淡路大震災や、東日本大震災などの災害から得ることのできた教訓を後世に伝えていかなければならない。伝えていくためには、私たち環境防災科が少しでも多くの人に発信を

していく、知ってもらうことが大切だと改めてこの執筆で感じる事ができた。

そして、環境防災科には「出前授業」というボランティア活動があり、これは防災教育をするものとなっている。この活動は、私たちや先輩たちが継続してきたものになるので、終わらせるということなく、これから先にもつないでいてほしい。なぜなら、防災教育をすることで災害について少しでも関心を持ってもらえるので、備えをする人が増える。そして、私たちが教えることでアウトプットができ、防災についての知識がつくので続けていてほしい。将来、私は自分自身を助けることのできる存在になりたいと思っている。そのためにも3年間で学んできた知識を活かして、これから起きるといわれる南海トラフ巨大地震に備えて、さまざまな準備を行っていきたい。そして、災害時に自分の安全を確保することができたら、周りにいる、困っている人をどんな形でもいいから助けたいと思う。

「あの日」から学んだ多くの想いを繋ぎ

山口 優心

はじめに

日本は、災害大国と呼ばれるほど自然災害の発生数が多く、犠牲者も出している。このようなことが続くと、災害の知識を持っていない方々が逃げ遅れ、命を落とすことに繋がってしまう。そうならないためにも、私たちが「語り継ぐ」をしていかなければならない。私たちは、実際に大きな被害に遭ったことはないが、今までに災害を経験された方々の講義を聴いてきた。しかし、思ったことを伝えるのは簡単ではないと感じることができた。環境防災科で学んできた知識と数々の活動を行ってきたことを活かし、相手に何が大切であるか伝えられるよう、まとめていく必要がある。

1 経験された方の体験談

(1) 父の経験

当時、神戸市垂水区に住んでいた。大学2年生で、テストが近く勉強していたため寝るのが遅くなった。午前5時46分、大きな音とともに揺れ始め、慌てて起きた。2階にいた父は、最初は近くで工事をしているのだと思ったが、本棚やタンスが横や縦に動き異変を感じ、数十秒ほど今までにない感覚で揺れていた。安否を確認しようと1階にいた父の両親に駆け寄った。怪我はなく、家族全員無事であった。このとき、東京に住んでいる姉に無事生きていることを伝えたかったが、ライフラインは途絶えてしまっており、会話をする事なくそっと受話器を置いた。外を見ると、大きな庭が一面木の枝や少量のガラスで埋め尽くされていたため歩くのが困難であった。近くに住んでいる人も怪我がなかったため、すぐガラスの破片を庭で撤去作業が行われ、数十分で歩ける道を確保するようになった。車には被害は少なく動けたから、発車しようとするも道はあちらこちらで通行止めになっており、身動きが取れない状態であった。

また、父は試験日であったため、大学に行ったがしばらくの間休校だと分かり、レポートで課題を提出する形となった。冷蔵庫の中に水と食料はある程度入っていたため困ることはなかった。家族全員このような大きい地震は初めてだと語っていた。自然災害はいつ来るかわからないから、貴重品や食料の場所、物が落ちてこないように固定し、避難経路も予め家族で立てていかなければいけないと気付かされた。

(2) 母の経験

当時、奈良県天理市に住んでいた。母は学生で、17日は5時半には目が覚めており、母の父と一緒にニュース番組を見ていた。明るいニュースが流れていた時、5時46分、突然揺れが襲った。最初は、何が起こったか分からなくただ揺れているくらいであった。タンスが倒れたが無事であった。この時の奈良県全域は震度4と記録されていた。負傷者は少なく、犠牲者はいなかった。ニュースは一気に地震の話に変わり、神戸の街が大変だということを知った。テレビからしか状況は分からなかったが、悲惨な映像を見せられ心が痛かった。また、長田で火事が起こった映像を見て、恐怖を感じた。家族9人と親戚全員は奈良県に住んでいたため、被害もなくライフラインも止まっていなかった。

駅が近かったため、覗いて見ると、しばらくの間電車は止まっていた。住んでいる場所が内陸県であるため、二次被害である津波は来ないけれど、土砂崩れや山火事が起きるかもしれないため、行動を速やかにしていくべきだと気付かされた。

(3) 卒業生Eさんの経験

Eさんは当時星陵台の近くに住んでおり、小学2年生で被災した。震災発生直前に起き、トイレに行ったがその後は浅い睡眠であった。発生直後、物が倒れ身動き取れなかったが、母がEさんの体を守ってくれた。何度もドッカーンという轟音が鳴り響いていた。それは爆発しているかのような大きな音であった。家族全員無事であった。家は半壊となってしまう、家の修復を試みたが費用がかかると困っていたところ、鳥取県で工務をしている親戚が修復してくれたので、数年かかったが元通りの家になった。ライフラインは止まっていた。祖父と一緒に近くの中学校に行き、プールの水を持って帰って、トイレの洗浄に使っていた。また、風呂に入れなかったため近くの銭湯に行ったり、食事の面でも食器にラップをかけて食べたりと様々な工夫をしていた。神戸市の被害が大きく、垂水区に報道が来ると思ったが、地震後に火

災で焼け野原となった長田区や須磨区を中心に報道を行っていた。長田に報道陣も目を向けていたので、垂水区も大きな被害が遭ったことを伝えられることができなかった。小学校登校が夏から始まったがプールの授業は3年生になるまでなかった。

Eさんが経験したなかで一番苦労されたことは、小学校1年から2年の1年間水が出なかったことである。ある程度の水がないとまともにご飯が食べられなかった。給水車が来ると案内されていなかったの、見つけたら行くことの繰り返しであった。この経験から環境防災科に入学して防災について学びたいと思ったのである。

経験されたお話を聞いて

私は、阪神・淡路大震災を経験していない。両親の被災したお話とEさんのお話を聞いたのは初めてであった。ここまで阪神・淡路大震災の記憶が残っているのは、それほど衝撃的な災害で恐怖や不安などがあったのではないかと考える。Eさんは、就寝以外は祖父母と行動していることが多いとおっしゃっていて、病気を患っていないでも不安である毎日だと感じた。当時は、長田区が地震の後火災が発生し大きな被害を与えたが、母が住んでいた奈良県でも大きな揺れが観測された。震源発生地から離れた場所でも大きく揺れるということは絶対に風化させてはいけない災害であり、私たちが話を継がなければならないのだと思った。

2 環境防災科に入学して

私が環境防災科に入学したきっかけは、中学1年生の時に社会科の先生が私にある新聞を読ませてくれたことであった。内容は、東北訪問についてだった。できることとして、世界中に発信していきたいと書かれており、私も人のためになにか貢献できることはないだろうかと興味を持ち、環境防災科に入学しようと思った。

私が今まで学んできた中で、高校1年生の時にジュニアリーダーとして様々な経験をさせていただいたことが一番印象に残っている。他の高校と交流をさせてもらい、アクションプランを実行したり、地域防災セミナーで地域の方と携わったりと様々なことを行った。最初、私は人とコミュニケーションを取るのが苦手であったが、このような活動を通していく中で、自分の意見を相手に伝えることができるようになっていくようになったのでいい経験であった。

(1) 神戸市消防学校体験入校

私は消防学校体験入校を2回経験し、命の大切さについて学んだ。体験の中で、自分がまず助からなかったら人を救うことは絶対にできないと気付かされた。自分の命が守れたら、他の人の命を守る。消防に勤めている方はこれを心がけているのだと思った。自分の命を守るためには、数々の厳しい訓練であったり、日々のトレーニングであったりと毎日の積み重ねが大事だと学べた。消防士の方は人の命を助けることは必ずしもできるとは言えないが、自分の限界を超えるほど日々追い込まないといけないと思った。

規律訓練では誰かがずれると次のことができなかった。この厳しい指導のおかげでもし本当の災害に遭ってしまったときに、私たちの動きが揃っているとスムーズに行動しやすくなり、連携などで命を助けることができると知ることができた。また、ある程度の知識がないと消防は受からないので、過酷であると思った。事故はいつ起こるのが分からない。寝ている時であったり、ご飯を食べたりしている時に、連絡が入ることもあると考える。だから、いかなる時にも対応しなければならないと気付かされた。

私は、消防ではなく福祉分野の職に将来就きたいと考えている。だが消防と同様に命を救うことの大変さは福祉にもつながっていくと私は考えている。

(2) 出前授業

私は出前授業で新たな視点から防災をみることができた。高校1年生の8月に神陵台中学校に行かせてもらい、授業を行った。その事前準備のとき、中学生にどのような口調で話したらよいか、工夫をしなければわからない点はどこか班のみんなと共有しながら、意見を言い合っていた。中学生に初めて教えるので緊張して自分の言いたいことが上手く伝えられなかった。しかし、前に立って話したことはいい経験となった。

このような経験を積み重ね、私は、防災についての色々なことを教えられたらいいと思えるいい機会になった。

（３）高齢者疑似体験

私は疑似体験を通して年を取る人の気持ちが分かり、講義においても、実際に生きていく中での高齢者の行動の配慮について深く知れた。最初に疑似体験を行った。歩くことが困難で大変だという程度にしか理解できていなかった。しかし、体験すると思っていた何十倍もの圧力がかかっており、杖を持つての歩行でも困難であった。さらに視力の低下により前が見えなかったり事故が原因で緑内障がでたりと日常生活をいかに苦勞しているか知れた。自分が、もし高齢者になった立場を考えると健康な人に毎日支えてもらいたいと思うようになった。身体が不自由であったため、外出を避ける理由もわかった。

日本では、段差がないようにスロープやエレベーターの設置などあると思うがもっと増やしていいと感じた。高齢者の事故は小さい子どもの事故より危ないと思う。それは近くに人がいないからである。講義で、高齢者は大人であるため自立しているが、数々の病気を患い、親などがおらず誰も面倒を見てくれず、孤独死する方もいるとおっしゃっていた。このような危険性もあり得ることなので、高齢者の行動等を理解していくべきであると学んだ。

（４）防災ジュニアリーダー

私は高校１年生の時、防災ジュニアリーダーの一員を務めさせてもらった。ジュニアリーダーは防災向上を実現し、オンラインで他の高校と交流をし、防災に対する意見を共有しあっていく場であった。私が高校１年生の時は新型コロナウイルスの影響もあり、夏のリーダー研修ではオンライン組と現地組に分かれた。現地に行きたい気持ちが高まり、応募をして選考に通った。現地でしかわからないこともたくさんあり、オンラインでは学べないことがあった。神戸学院大学に実際に行かせてもらい他の高校生とも交流をした。まず初めにアクションプランの作成をした。少し足を引っ張ってしまったこともあったが、先輩方にフォローしてもらい頼もしいと思い、自分が最高学年になったらこのような先輩になりたいと思った。

また、夏休みの終わりに地域防災セミナーがあり参加させてもらった。この行事は、地域の方を対象として行っている。地域の方からの質問をされた際、初めはぎこちない対応をしてしまい、地域の方も少し戸惑っていたが、何回も受け応えをしていくうちに自分の言葉で説明できるようになった。１年間という短い期間であったが、とても貴重な経験となった。また、防災ジュニアリーダーを通して個人のスキルが少し上がったと感じた。防災ジュニアリーダーで学んだことを将来どう活かしていくか考え行動していきたい。

３ 夢と防災

私の将来の夢はまだ決まっていはいないが福祉について興味がある。福祉について興味を持ったのは、高校に入学してから地域との関わりによるものだ。そして、ボランティアを通して、高齢者にとってどのように過ごしていけば良い街になるのかと疑問を持つようになったからである。

福祉には「防災介助士」という方がいる。防災介助士とは、いつでも起こり得る災害について理解し、普段からどのように備えるか、災害時にどのように行動するのか学び、実践に活かしていける人を指す。私はこのような人になりたいと思っている。

おわりに

「語り継ぐ」を執筆していく中で、伝えることの大切さも学び、阪神・淡路大震災の怖さも改めて感じた。環境防災科に入学して、これまでに多くの被災者の方からお話を聞かせてもらった。一つの震災であるが、同じ体験談を話す人はいなかった。この阪神・淡路大震災だけでどれだけの苦しみや悲しみがあるかが伝わってきて、とても辛いと感じた。伝えることは簡単ではなく、過去の記憶を呼び起こすことになる。それでも、お話をしてくださったことを私たちは、次の世代に語り継いでいかなければならない。また、聞いたことをそのまま伝えるのではなく、しっかり自分の言葉で言えるように整理をしておかなければならない。そして、この災害が風化することなく、伝承させるためにまずは、私たちから継いでいかなければならない。

また、この３年間様々なことを学び、体験してきた。防災、減災の知識を無駄にすることなく他の場所でも生かしていきたいと思う。また、今言われている南海トラフ巨大地震はいつくるかわからないが発生確率は高くなっている。このような大災害が起こったとしても、環境防災科で培った防災の知識を使って助かる人が増える行動を実践し、地域の人に教えていきたいと思う。

経験をこれからへ

横田 翔星

はじめに

阪神・淡路大震災から30年を迎える。あれだけ沢山の人の記憶に残った衝撃も経験していない人が増えている今、私たちは少しずつ風化を感じている。風化することは、時がたつと同時にいずれは感じてしまうことだ。しかし、災害はこれからもなくなるならない。災害とともに生きていかなければならない。被災された方々のためにも、これから生きる人のためにも、誰かが未来へつなげなければならぬ。だから私が語り継ぐ。

1 阪神・淡路大震災当時の話

(1) 父の経験

当時中学1年生。家族5人で神戸市西区に住んでいた。17日、まだ寝ていた時に、隕石が降ってきたような衝撃を感じて起きたという。初めは地震とわからず、大きな衝撃の後の揺れで地震と気づいたそう。揺れは1分ぐらい続いた。揺れが収まり、布団から出るとテレビが倒れていて、家にはひびが入っていた。その後、昼ぐらいに電気がついた。テレビをつけると、長田の火事の現場ばかり映されていた。水道が止まっていたため、中学校に自衛隊が来ており、父（祖父）と一緒に片道20分から30分歩いて水を汲みに行った。2日から3日に1回行ったが、いつもたくさんの人が並んでいたため、朝、昼しか行けず大体3往復ぐらいしか行けなかった。汲んできた水はほとんどトイレに使った。水が限られていたため、食事をするときは食器にラップを巻いて使っていた。飲み物は家の近くにあるローソンでもらっていた。ガスも長い間止まっていたため、銭湯は、3日から4日に1回行けるぐらいだった。1週間ほど休校になり、その後春休みまで午前中授業が続いた。そして、新年度と同時に発災以前の生活がスタートした。

(2) 父の経験を聞いて

私は会話の中で震災当時の話を何回か聞いたことがあった。しかし、これほど具体的に話を聞くことは初めてだった。正直に言って、学校で聞くような話とは全然違う。大きな被害を受けたわけでもないし、誰かを失ったとかでもないが、だからこそリアルで今の私たちが想像しやすい。話を聞く中で、防災対策の必要性を感じることができた。例えば、給水へ行くことはすごい重労働になるので、百均とかでも売っている給水バッグがあれば、少しは楽に運ぶことができる。そして湯船の中に水をためておくことの大切さを感じた。他にも、食器にラップを巻いて食事をしていたことを聞いて、私たちが1年生の時に学んだことが実際にも役立っていたことを知ることができ、防災知識を高めておくことは、自分の命と自分の周りの人の命を守るために重要だと改めて思えた。私は当時の父とは違い、防災を専門として学んでいる。だからこそ、父の話を将来自分の子どもができたときに話したいと思っている。加えて、防災・減災の必要性も伝えたい。そして、3年間でインプットしたことをこれからは身近な人にアウトプットしていきたい。

2 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

私が環境防災科に入学したきっかけは、小学生の頃に「1.17 灯りのつどい」という行事があり、「しあわせ運べるように」を歌ったり、黙とうをして亡くなった方にお祈りを捧げたりする行事があったことだ。たったの数秒で6434人の尊い命が失われたと聞いたときは、胸が張り裂ける思いだった。そして、長田の火事で両親を亡くした子どもがお皿の中に母の骨を集めている写真を見て、これが自分だったらと想像するとものすごく悲しい気持ちになったことを今でも覚えている。その時に、テレビで「ORENGE〜1.17 命懸けで闘った消防士の魂の物語〜」というドラマを見て、この人たちのように災害が起こったらたくさんの人を助けたいと思うようになった。

これらのことがあり、阪神・淡路大震災についての関心がすごく高まった。その頃はまだ災害がどういうものなのかということをしりもわかっておらず、ただただ人の命を助けたいと思っていた。そして、中学校ではそれ程地震や災害について学んでこなかったが、高校への進路の時に、両親に警察官になりたいと相談すると、父が「災害について興味あるなら、舞子高校の環境防災科とか行ってみたら」

といわれ、元々少し興味のあることだったので学んでみたいと思った。他にも、課外活動や校外学習が多く、他の学校では絶対に学べないことを学べるというところに惹かれ環境防災科に入学することに決めた。

（２）募金活動

私が色々なボランティアに参加した中でも特に３年間続けてきたことは募金活動だ。令和６年能登半島地震やこども食堂、あおい地区などの募金活動を行ってきた。以前からしてみたいと思っており参加してみたら、まずは調べるところから始まり、呼びかけの言葉を考えて、募金箱も作って、思っている以上に大変だった。だが、先輩方と協力することで先輩方とも仲良くなり、募金当日もしっかり行うことができた。街中で大きな声を出すことはほとんどの人が恥ずかしいと思うはず。しかし、どこかで助けを求めている人のためにそんなことを気にしては、災害時に大きな声で避難を呼びかけることはできないと思う。ましてや私は、将来の夢が警察官なので大きな声を出すことで人の命を助けることができるかもしれない。だからこそ重要なことだと思っている。募金当日になると、通りかかる地域の人「ご苦労様です」や「寒いのに偉いね。頑張ってるね」と声をかけてくださった。そして、募金箱にお金を入れてくださった。このことがあってから、募金してくださる人の思いを私たちは繋げる大事な役割を担っているのだと自覚し、高校を卒業してからも募金活動をしている団体があれば、積極的に参加しようと思う。

（３）出前授業

出前授業を行う中で、人に教えることの難しさを知った。元々小さい子と遊ぶことが好きだったので、環境防災科で行ったボランティア活動の中ではすごく楽しいと思えるボランティアだった。伊川谷小学校や神陵台中学校での活動が特に心に残っている。伊川谷小学校では、初めて参加した出前授業だったのですごく緊張した。「防災すごろく」は、一つ一つのコマを進める中で、即興で防災に関する質問をすることになっていて、今まで習った知識をアウトプットしながらするのがとても難しかった。それをスムーズにしている３年生を見て、私もこうなりたいと思った。神陵台中学校では、授業の後「防災カルタ」を行った。初めは、中学生も緊張していたが、少しずつ和やかな雰囲気になってきて、中学生も楽しそうにやっているのを見て、こういう方法で防災教育を広めていきたいと思った。出前授業は、相手の年齢を考えて言葉を選ばなければならない。この表現で伝わるか、この表現はわかりにくいかなどを考えるのがとても難しかった。だがこの経験を踏まえて、自分には何が必要なのかを知ることができた。そして、これから防災教育を広めていく際に、自分の課題を克服したうえで、分かりやすい防災を広め、社会の防災力を上げるとともに、これから必ず起こるといわれている南海トラフ巨大地震から少しでも助かる人が増えるように、減災、防災の知識をたくさんの人に広めたい。

（４）令和６年能登半島地震

私は、２年生の３月に令和６年１月１日１６時１０分に発生した、「令和６年能登半島地震」の被災地ボランティアに参加した。この地震は、マグニチュード７.６の規模で石川県志賀町と輪島市で最大震度７を記録した。その他に、輪島市では広い範囲で火災にも見舞われ、珠洲市や能登町などでは津波も発生した。そして５０４名の尊い命が亡くなった（２０２５年１月現在＊災害関連死含む）。

私たちは、生徒９名教諭４名の計１３名で２日間ボランティア活動をした。１日目は、全員で志賀町にいき、１件目はＭさんのご自宅にお邪魔して、布団や家具、電化製品や瓦などを運び出してごみ処理場まで持っていく作業をした。２件目はＹさんのご自宅にいき活動させていただいた。ここは飲食店を経営しており、私たちが行く前にすでに何組かボランティアが活動しており、応援に入る形になった。初対面の人と協力してボランティアする形になったが、コミュニケーションもとれてスムーズに作業は終了した。飲食店だったので、業務用冷蔵庫を運ぶのがすごく重くて大変だった。他にも、椅子やソファ、ビール瓶や食器なども大量に運んだ。２日目は、志賀町と七尾市に分かれて活動した。私は、２日目も志賀町で活動した。１件目はＯさんのご自宅にお邪魔させていただき、家の片付けを手伝った。Ｏさんは活動中気さくに話しかけてくださり、昔に姫路城を見に兵庫県に行ったという話もしていただいた。２件目ではＳさんのお宅に伺った。すでにたくさんのボランティアの人がいて、協力して食器や畳、座布団を運んだ。そこではＳさんが感謝の気持ちとして餅せんべいをくださった。とても美味しかった。

石川県に行って思ったことは、金沢市の方は普段通りの生活が始まっていたが、市街地から離れてい

くにつれて、地面が割れていたり、屋根の上にブルーシートがかかっていたり、明らかに車通りが少なくなっているとわかった。七尾市に行くと、全壊や半壊判定されている家屋をたくさん見かけた。実際ボランティアさせていただいた家も車庫が今にも崩れそうで、全壊判定を受けていた。道路はマンホールが突き出ていたり、大きな段差があったりと自転車はもちろんのこと車でさえも通ることが大変だった。活動の中で使用した車も、タイヤがパンクしたため、道路が整備されている重要性をすごく感じた。ごみ処理場に行くと、山盛りの災害廃棄物があり、仮置き場でこれだけあるということは処分し終えるまでに長い時間と労力が費やされることになり、家が再建されるだけでは復旧ではないということを知ることができた。そして、被災者の方の腰の低さであったり、気さくに話しかけてくださったりと人の温かさもすごく感じられた。

3 夢と防災の関わり

私の夢は警察官になることだ。その夢を目指すきっかけは、2015年にテレビで放送された「ORANGE〜1.17 命懸けで闘った消防士の魂の物語〜」というドラマで、一人のおばあちゃんを助けるため満身創痍頑張っている消防士を見て、自分もこういう人になりたいと思った。しかし、災害だけでなく、日常生活の中でも市民の力になりたい、凶悪な事件などからも人を助けたいと思い警察官を目指すようになった。

私はよく、「警察官はいるだけで怖い」「警察官はあまり好きじゃない」と言った話を聞く。私はそう思ったことはない。なぜなら私たちを守るために、いつも朝早くからと夜遅くまで見回りを行ってくれて、私たちを守ってくれているからだ。環境防災科に入って、警察の方のご講義を受けて、さらに警察官になりたいと思った。そして、災害専門のチーム「広域緊急援助隊」があることを知った。環境防災科に入ったからには警察官になっても、災害に関わりたいたいと思っていたので、さまざまな職種がある警察官の中でも刑事になって、広域緊急援助隊の刑事部を目指そうと思っている。広域緊急援助隊とは、全国の都道府県警察本部に設置されている災害警備活動を行う部隊のことで、1995年の阪神・淡路大震災での体験を教訓として創設された。広域緊急援助隊は発災現場に1週間以内に派遣される。そして、救出救助を消防や自衛隊と協力して行う。他にも、行方不明者の捜索等に従事するほか、検視・身元確認、各種交通対策、被災地における各種犯罪等への対策等も行っている。被災地に行くということは自分にも命の危機があるということ、実際に能登に行き今にも崩れそうな建物を見て肌で感じた。余震であったり、津波であったり、土砂災害などの二次災害で怪我する可能性もある。危険がたくさんある場所に行くので、自分の命は自分で守なければならない。そのために、様々な災害の知識やどういう行動をしたらいいのかを知っている必要がある。環境防災科では、災害のメカニズムだけでなく災害の対応とその背景や私たちの暮らしと防災について学ぶことができる。そのような知識が災害現場では役立つと思っている。自分の命を守るだけでなく、自分の周りにいる人の身を守ることにもつながる。それでも、わかかっていても行動できなければすべての知識が無駄である。そうならない為にも、日々訓練をおこない、環境防災科で身につけ、学んだ知識、経験が決して意味のないものにならないように精進していこうと思う。

おわりに

「語り継ぐ」を執筆する前から父や母の阪神・淡路大震災当時の話を軽く聞く機会はあったが、これほど詳しく話を聞いたのは初めてだった。このきっかけがなければ、これほど詳しく聞くことはなかったと思う。そして、父や母以外にも親戚や祖父、祖母などにも話を聞いてみたいと思った。こういった思いを抱くことができ、環境防災科に入学してよかったと改めて思えた。

震災当時の、崩れた家や倒れた電柱、焼け野原になった住宅街、完全に倒れてしまった高速道路などは、2024年の今には長田の大国公園の木や震災遺構以外跡形もない。私は今とても住みやすい場所で何の不自由なく何気に生活しているが、それらは全て震災当時復旧・復興に関わり立て直そうと努力してくれた人、支えあって立ち直った被災者の方々がいたからこそあるものなのだと痛感した。今こうやって、「語り継ぐ」を執筆できているという環境にも感謝するべきだと思う。

記憶というものは悔しいがずっと鮮明に覚えていることが難しい。また、今は阪神・淡路大震災を経験していない人がほとんどの時代だ。阪神・淡路大震災という災害自体が風化する可能性も考えられるのだ。だからこそ、自分の将来の夢である警察官と防災の関係が深いことをもっと広めていきたい。そして、これから必ず起こるといわれている南海トラフ巨大地震からたくさんの人を助けたい。

今、私たちにできることや考えなければならないことを環境防災科の仲間全員で授業を通して考えていきたい。環境防災科で学んだ防災の知識だけでなく、これからも防災、減災を学び将来に活かし伝え続けたい。災害の恐ろしさを知ってもらい、災害が迫っているときはどういう行動をしたらいいのか、いざという時は防災の大切さを思い出し、自分の身を守る行動を行ってほしい。そしていつか、人々が災害や防災の知識を当たり前を持っているような自然災害に強い世界が実現するよう、小さなところから努力を積み重ねていきたい。

明日を生きる

渡邊 陸斗

はじめに

1995年1月17日午前5時46分に起こった阪神・淡路大震災でたくさんの命が失われた。私は2006年、震災発生から11年後に生まれ、テレビや資料などでしか震災の様子を見たことがない。また私が5歳の時に東日本大震災が発生した。環境防災科に入学し、3年間様々なことを学んできた。これから起こるといわれている「南海トラフ巨大地震」による犠牲者を1人でも多く減らしたい。

そのために震災を経験していない私たちが阪神・淡路大震災をはじめとした大災害を風化させないよう、次の世代に語り継ぐことが必要である。

1 環境防災科

(1) 環境防災科に入学するきっかけ

私が環境防災科を知ったのは、中学3年生の頃だ。当時、私は進路にこだわりがなく、とりあえず行けるところに行こうと考えていた。当時の担任の先生と面談をしている時、行きたい高校を聞かれたが答えられなかった。将来、どういった人になりたいか聞かれたとき、たくさんの人と関わり、役に立てる人になりたいと明確に答えることができた。そこで先生に環境防災科を提案された。その後、環境防災科について調べると、防災やボランティア活動などに力を入れていることを知り、魅力を感じた。災害や防災の知識はないけれど、3年間を通し、防災の知識を身につけ、たくさんの人の手助けをしたいと思い入学を決めた。

(2) 入学後

環境防災科に入学して授業や講義を受け、自分の知識が未熟であることに気づかされた。環境防災科の授業は「環境と科学」、「自然環境と防災」、「災害と人間」といった中学では無かった科目を学び、自然災害はどのようにして発生するのか、それに対する備えには何が必要なのか、命の大切さを一から教わった。

講義では専門の方からのお話や、実際に体験している方などの様々なお話を聞くことができ、たくさんの知識を得ることができた。受けた講義をレポートにまとめ上げたり、パワーポイントを使い発表を行ったりすることで、文章をまとめ上げる力や人前で話す力、自分の意見を伝える力を身につけることができた。実際に野島断層を見て地震について学んだり、六甲山フィールドワークで山について教えてもらったり、環境防災科でしかできないことを経験することができた。

環境防災科に入学して、たくさんの人に話を聞かせていただいた。警察や消防、海上保安庁や、様々な専門の方にたくさんの講義を受けた。いままでは災害時の情報は少ししか知らなかったが、阪神・淡路大震災や東日本大震災の被害の規模や活動などを教えていただき、多くの知識を得ることができた。

様々な方の話を聞いた中で、「災害は年々進化していく」という言葉が印象に残っている。災害が進化していくととも私たちの備えも進化していかなければならない。現場で直接対応する人ではなく、いろんな調査をしたり、防災について研究したり、間接的に誰かの役に立とうと働いていることを知ることができた。どのような仕事でも必ず防災とかかわっているということを、講義を受けて理解した。私も責任をもって仕事に取り組んでいきたい。

(3) 消防学校入校体験

私は消防学校の体験で命を守ることは簡単なことではないということを知った。体験をするまで私は命を守るということを軽く考えてしまっていた。災害時に自分の身を投げ出してほかの命を守ればよいと思っていたが、まずは自分の命を守ることが本当に大切なことだと気づかされた。

1年生は初級の訓練で主に規律訓練を行った。規律訓練では大きな声を出し、俊敏に動かなければならない。部活動でも全員で並んで準備運動や整列などでも、息を合わせて揃えていたが、それはただ強く見えるという理由でやっているのだと思っていた。しかし、消防体験を通して、息を合わせて周りと一緒に揃えるというのは、周りの行動を確認することだと知った。

2年生は上級の訓練でホースの取り扱いや放水訓練を行った。規律訓練で教わった大きな声を出し、

揃えることをしながら小隊長の指示に従わないといけない。常にアンテナを張り続け、指示を待つ集中と緊張を実感した。

(4) 様々な活動（募金活動と出前授業）

私は募金活動を通してたくさんのことを学んだ。募金活動を行っている際、募金箱にお金を入れてくれる人がたくさんいて、その中に、お金を入れるときに「ありがとう」や「頑張ってるね」などと声をかけてくれる人がたくさんいた。人の温かさを感じ、感謝することがどれだけ大切かということを知ることができた。

出前授業では、災害時には周りの人々と協力しあうことの重要性を伝えることができた。グループでの活動は役割分担なども決めて取り組み、チームワークの大切さを学ぶことができた。

授業対象の子どもを通じて、子どもたちの防災意識が高まったように感じた。災害への備えや適切な行動を身につけることの重要性について理解し、家庭や学校での対策に積極的に取り組む姿勢が見られた。

環境防災科に入学してたくさんのボランティアに参加させてもらった。高校に入学するまではボランティアに参加することがなく、初めてのボランティアでは不安と緊張が大きかったが、学校の先生方や生徒だけではなく地域の人などたくさんの人と関わることができ、とても貴重な体験をさせてもらった。

2 夢と防災

(1) 将来の夢

私は将来、体育の教員を目指している。環境防災科に入学する前は消防士になり、たくさんの人を救済したいと考えていた。高校での活動の中で防災教育を学び、防災教育の徹底が災害による被害者を減らすことにつながるとわかった。

私は体を動かすことが好きだということと、野球部に所属しており様々なことでお世話になった顧問の先生のようになりたいと思い、防災に関わることができ、かつ、自分の得意分野を伸ばすことのできる体育教員になりたいと思った。

(2) 教員と防災の関わり

学校は災害が起こったとき、地域防災計画のよって避難場所や避難所と指定されていることが多い。また、日ごろから「防災管理」や、教育の場として子どもに「防災教育」を通して生徒たちにも防災知識を広げていく役割を担っている場所だと考える。予期せぬ災害時に最善の行動をとれるように学校では避難訓練を工夫して実施することなどが重要だと思う。また、教員には学校周辺のハザードマップを読み解く能力も求められる。

次に防災教育がとても重要となってくる。ほとんどの学校では「防災」という科目はなく、実際に災害が起きた際に対応できない。災害時に対応できる生徒を作り出すには、教員が一方向的に知識を教えるのではなく、生徒が主体的に防災を学ぶことのできる場を作ることが大切であり、その場所を作っていくべき。

過去に教員の対応の不十分さで発生した、石巻市立大川小学校の悲惨な事例がある。東日本大震災による津波に飲み込まれ、児童 108 人中 74 人、教員 10 人が亡くなった。地震後、大津波警報が発令され、町が避難を呼びかけていたのにも関わらず、教員たちは校庭にとどまることを選択し、結果として多くの犠牲者を出すこととなった。この事例から教員の判断が生徒全員の命を左右するということを理解した。この事例を知り、教員は生徒の命を守り、安全な場所へ避難させ、災害時に教員は、冷静に正しい判断をする必要がある。そのためには防災の知識も必要となってくる。私が教員となったとき生徒全員が無事でいられるよう職務を果たしたい。大学へ進学しても、防災への意識を忘れることなく、防災の知識を深めていきたい。

3 被災体験

(1) 祖母の話

祖母は当時、小野市に住んでいた。小野市は神戸市などに比べると被害は少なかった。13 階建てのマンションの 11 階に住んでおり、揺れを感じ起床した。少しして揺れは収まり、テレビをつけると、神戸の様子が映り、燃えている長田の町や高速道路が映っていた。テレビを見て「これは本当に神戸なのか」

と驚きと、神戸に住んでいる知り合いがどうしているのか、という焦りで頭がいっぱいだった。神戸に住んでいる知り合いに電話をすると、サイレンの音や人の声で何も聞こえなかったが、どれだけ大変な状況なのかすぐわかった。

(2) 話を聞いて

南海トラフ巨大地震は、広範囲の被害が想定される地震として知られており、概ね 100～150 年間隔で繰り返し発生している。地震調査委員会では、今後 30 年以内に 80% の確率（2025 年 1 月 15 日発表）でマグニチュード 8 から 9 の巨大地震が発生すると予測している。

南海トラフ巨大地震は事前に備えていても被害をゼロにすることはできない。助けを求めている人を全員助けることも難しい。しかし、備えていれば被害をゼロにすることはできなくても、おさえることはできる。備えていれば救える命もあると私は思う。家具を固定するだけでも、地震によって死亡する確率を下げるができる。

防災は難しいと思う人もいるけど、家具の固定や避難場所の確認など、簡単にできることもたくさんある。そのため、1 人でも多くの人に防災を知ってもらう必要がある。そのために私は教員となり、多くの生徒に防災を伝え、1 人でも多くの人が苦しまないように備えをしなければいけない。

たくさんの方から阪神・淡路大震災のお話を聞いてきたが、親族に災害当時の話を聞くのは初めてだった。阪神・淡路大震災では大きな被害、そして多くの犠牲者が出た。自分の住んでいる場所の特徴などを把握しておくことが大切だと感じた。

祖母との会話の中で、地震が来てもどんな行動をとったらよいのかわからないと言っており、地震に関する知識や備え、行動など当時は全く知らなかったことに驚いた。災害時、どんな行動をとるかによって被害の大きさが変わってくると思う。災害についての知識を知ることや、備えることの大切さを改めて感じた。

おわりに

私は「語り継ぐ」を執筆することで防災や災害に改めて向き合うことができ、将来の夢を明確にすることができた。また、伝えることの重要性を学ぶことができた。私は環境防災科に入学して、多くの被災者の方からお話を聞かせてもらい、たくさんの方の講義を受けさせていただいた。伝えることは簡単ではなく、つらい記憶を呼び起こすことにもなる。それでも、話していただいたことを私たちは伝えていかなければならない。聞かせていただいたことを、自分なりに理解し、次の未災者に伝えていくことが私たちの使命だと思う。

私にとって環境防災科での 3 年間はかけがえのないものになった。普通の高校生では体験できないことをこの 3 年間で経験してきた。防災や災害について学ぶことは、災害大国と言われる日本に生きる私たちにとって必ず必要なものだ。私たちが執筆する理由とは、阪神・淡路大震災、東日本大震災や過去にあった災害を忘れないため、風化させないためだと考えた。執筆をしていると、これから、自分たちがどのような形で防災と関わっていき、どのようにしてたくさんの方へ伝えていくかを整理していくこともできる。

これから先も必ず災害は起こる。その時に、少しでも被害がなくなるように、誰かがこの「語り継ぐ」を読んで、災害や防災について知るきっかけになってほしい。そして、これからも防災に関わっていきたい。

「30 年に想いを寄せて」

21 期生と『語り継ぐ』を作り上げていく中で、「30 年」について考える機会を設けた。自分たちが生きてきた時間の倍ほどになる期間を、震災を経験した人々はどのような思いで過ごしてきたのか。「共に」できること、託してもらえること、繋げたいこと…36 人の想いを今ここに記します。

阪神・淡路大震災から 30 年を迎えた今、私たちが今まで学んできたあの日の記憶、そしてその教訓を次に語り継ぐことの責任を感じる。震災がもたらした大きな悲しみ、そして復興への道のりは長くかなりの困難を乗り越えてきた。しかし、その過程での知恵や経験は今後の災害対策に活かしていくことができる。そして、これからも震災と向き合いながら、語り継ぐことを大切にしていきたい。

震災から 30 年が経とうとしている。震災を経験していない人が増えた。だがあの日の悲劇を繰り返さないためにも、絶対風化させてはいけない。現在も日本では様々なところで地震が発生し、南海トラフ巨大地震への警戒が強くなっている。そこで南海トラフ巨大地震が発生するとされている今、周りの人へ防災を認知してもらうことの大切さ、防災の役割を伝えることが防災を学ぶ私たちの役割だと考える。自分が被災者だったら、自分がその場にいたらなど様々な視点を持ち更に防災に取り組みたい。

阪神・淡路大震災から 30 年を迎えた今でも、その時の被災者たちがどれほど苦しんだかを考えさせられる。私は経験をしていないなりに、当時のことについて 3 年間学び続けた。被災者たちの心の強さ、共助などの行動には高校生ながら感動したことを覚えている。今後、同じような災害が起きても、私たちにできる準備や支援をしていきたい。当時を生き抜いた人たちが築いてきたものを継承し、被災した方も、被災していない若い世代も安心して生活できるまちが増えてほしい。二度と同じことが起きないように。

阪神・淡路大震災から 30 年の時が経とうとしている。現代の社会や人々は、復興が進むにつれて徐々に災害に対する危機感が薄れつつあると感じる。一方で、まちのふとしたところに震災の痕跡を残している場所も見かける。自分の使命は、これから社会に出て環境防災科で学んだことをまずは周りの人から伝えていくことだと考える。

震災から 30 年という年月を経て、神戸の町は以前よりも発展し災害に強くなった。それと共に、実際に震災を経験した方は少なくなっている。しかし、これから先に起こる災害から身を守るためには、風化させてはいけない。3 年間様々な方から講義を受け、フィールドワークとして現地に出向いて震災に向き合ってきた。未災者である私が、ここまで詳しく鮮明に震災の記憶を学び、恐ろしさを知ることができたのは、環境防災科があったからだ。私は、多くの方々からこれからの未来を託された。受け取った思いや記録は、次世代につなげなくてはならない。この学科での学びを最大限に活かして、多くの人に語り継いでいきたい。

私が入学した時から、「阪神・淡路大震災から 30 年の時に高校生」と、何度も言われていた。その時から、私はもう 30 年も経つのだと感じた。この 30 年のうち 18 年しか生きていない私は、阪神・淡路大震災の恐怖を第三者としてしか感じる事ができていない。しかし、環境防災科として、外部講師の方々や、語り部さんなどから当時の状況を鮮明に学んできた。その中から、私もこれから生きる一人として、私も阪神・淡路大震災に寄せる思いを感じたい。そして、多くの人に防災意識と災害に向き合う気持ちをもってほしいと思っている。

私は阪神・淡路大震災から復興する神戸の街とともに成長してきた。当時のビデオや写真を見ても、この写真の町は本当に神戸なのかと思ったこともある。なぜなら、私が過ごしてきた神戸の街と比べると、全く別の姿だからだ。私は写真と神戸の街を見比べて、戦後のような惨事から神戸の街を復興させた人たちの力を凄いと感じた。被災者の方は心身ともに傷ついた状態で、逃げたくなるような悲惨な現状と30年間向き合い続けてきた。

この30年という長い月日をかけて神戸の街は震災以前より発展した。この功績は間違いなく、神戸の街に住んでいる人たちのおかげだ。現在の神戸の街は、人口減少などの多くの課題を抱えている。この課題と向き合っていくのは私たち未災者だ。私は30年目の今年は、世代交代の年だと感じている。今まで神戸の町を支えてきた被災者から未災者へ、知識や経験を語り継いでいくこと。それと同時に、私たち未災者は語り継がれてきた災害の教訓から新しい防災・減災を作っていくことが必要だ。私は、これまで神戸の街を支えてきた人たちと同じように、辛い時も災害から逃げず、防災と向き合い、これからの大災害に立ち向かっていきたい。

発災から「30年」。30年という時間が早いのか遅いのか私にはわからない。大きな災害を経験していない。あの日の衝撃や悲しみは直接体験した人々にしかわからない。でも震災を経験していない私たちの世代にとっても、その記憶を忘れずに次の世代に伝えることが大切な使命だと思っている。環境防災科で学んだ復興への道のり、助け合いや絆の大切さ、今後の備えを怠らないことは誰にでもできることであり、責任でもある。阪神・淡路大震災の教訓として、私たちは防災意識を高め、地域社会の絆を強くすることを努力しなければならない。震災を経験していない世代から未来の世代にその教訓を伝えていきたい。発災から30年に私たち環境防災科21期生として改めてその教訓を胸に刻み、環境防災科で学んだことも活かすことができる環境をつくりたい。

阪神・淡路大震災が発生してから30年を迎えた。30年という月日の感じ方は人によってそれぞれ違うだろう。時間の経過とともにこの大災害を体験した方々が減り、お話を直接聞く機会が少なくなっている。一方で、知らずに育ってきた若者が増えてきている。

私は、環境防災科に入り、当時のお話を聞く機会があった。お話を聞かせていただく中で、災害を経験していない私が語り継いでも良いのだろうか、と考えさせられることが多くあった。体験談の中には、お話をしてくれた方の思いが詰まっており、私がその思いを次世代に繋げていかなければならないと思った。災害が多い世の中、いつ自分の身に危険が迫ってくるかわからない。過去の災害を教訓として、今後起こる災害に向き合いたいと思う。また、体験談を話してくれた方や、今までの環境防災科生の思いを繋ぎ、風化させないため、語り継ぐことをためらいたくない。

阪神・淡路大震災が発生してから30年、町は整備されて当時の面影も無くなっている。私のような未災者が当時のことを知るには、被災された方からお話を聞いたり、映像などの当時の記録を見たりすることしかできない。しかし、テレビを見ても報道が少なくなっていて、目を向けようと思わなければ情報を得ることができないので、人によって知っていることも変わってくる。だんだんと震災が風化していく中で、震災を経験していない未災者にどのように震災のことを語り継いでいくかについて、とても考えさせられる。

阪神・淡路大震災から30年が経とうとしているなか、現在日本では南海トラフ巨大地震の発生確率はますます高くなり、社会全体は警戒している。この巨大地震が起きるとされるときこそ、阪神・淡路大震災の経験から備えや教訓を生かしていくべきだと考える。また、阪神・淡路大震災は「ボランティア元年」と言われており、ボランティアが充実していた。私は、将来教員になりたい。もし、教員の立場で巨大地震が起こったらボランティア活動や学校再開に積極的に参加していきたい。

私は防災を3年間学んできたが、特に阪神・淡路大震災の30年を迎えた今日、震災への想いは一層強くなっている。被災地の復興の光景も目にすることができる。復興に向けた努力と人々の絆は街を見て感じることができる。これからも防災の重要性を伝え、災害に強い社会の実現に向けて努力を続けたいと思う。また、震災から学んだもう一つの大切な教訓は、困難な状況でも助け合い、絆を強めることの大切さ。阪神・淡路大震災では、多くの人々が助け合い、支え合って生き抜いた。被災地に駆けつけたボランティアや救助隊の活動には感動した。これから私は地域との連携を大切にしていきたいので、挨拶などで顔を覚えてもらうなどすることを行うことを大切にしていきたいと思う。

今でも1月17日になると、人それぞれ「あの日」を思い出すと思う。震災から30年を迎え、段々あの話を語り継ぐ当事者も減っていってしまうと考え、震災を経験していない私たちは、いろんな方からお話を聞いて今まで被災した方に繋いできていただいた思いを私たちが繋いでいかなければならないと考えた。30年という年に私が環境防災科の3年生となり、私たち高校生が震災を忘れず、継承していくことが大事だと感じた。だからこそ、3年生として被災者の方の想いを受け取って消えないように残していきたいと思う。南海トラフ巨大地震が迫るなか、私はあの日と同じでき事を繰り返さないようにしたいと思っている。二次被害を減らす、私の周りの人を無くさないために防災バッグの準備や話し合いといった誰でもできることを行い、後悔をしないようにしたいと改めて思った。

あの日から30年になる。長い月日を経て甚大な被害を受けた町や人々は変わりつつある。30年も経てば阪神・淡路大震災を全く知らず防災教育や避難訓練を受ける世代も増えてくる。私も幼いころは避難訓練をすることの意味を全く知らずにいた。そのような世代を減らすため、昔の教訓を生かすため私たち未災者が被災者から聞いた体験を未災者に繋いでいくべきだと考える。阪神・淡路大震災から学んだ教訓は必ず風化させてはいけなものである。被災された方の想いを無駄にしないためにも今を生きる若い世代が教訓をこれからの防災に取り入れていく必要があると考えた。被災体験は必ず教訓となり、今後の防災に生かされる。たくさんの被災体験はこれからの日本だけでなく世界を守ることになると私は考える。

30年という月日は子供が成長し、ある程度自分の生きる道を見つけ歩き出し始めるような時間だ。私たち高校生からしたらそれは自分の生きている時間より長く想像もできないものだ。阪神・淡路大震災からそんな月日がたって人々の暮らしが何か変わったのかということと自身を意識する機会が減ったことぐらいだろう。しかし私は忘れない。今まで学んできたことをすべて生かせなくても、これから大人になっていく中で少しでも、自分の大切な人にだけでも伝えられたら良いと思う。

阪神・淡路大震災から30年が経とうとしている。私は未災者の一人であるからこそ、今一度震災に目を向ける必要があると考えた。この震災は記録には残るが、人の記憶からは少しずつ消えていく。私たち環防生は同じ過ちを繰り返さないために日頃勉強をしている。30年という年を記憶から消さない事、忘れない事、ともに支えあう共助の大切さを再認識する機会にしたい。震災の記憶は、過去のでき事、「死者が何名出た」や、「マグニチュード、震度はどれくらいだったのか」だけではない。現在の防災意識やコミュニティの結束につながった。次に来る災害のために知識や理解を深めることは震災を経験した人々だけでなく、後の世代にとっても重要な事である。いま日本の各地で大きな地震に備える準備期間だと思うので、阪神・淡路大震災のような大きな震災を引き起こさないようにする。

私は環境防災科に入学し、過去の災害や被害を学び、無知の怖さを知った。だからこそ私たちが未来へ継ぎ、阪神・淡路大震災を知らない世代が出てこないようにすることが防災を学んだ私たちの使命だと思う。

私は阪神・淡路大震災から30年に思いを寄せ、1.17のつどいの今までの灯籠文字を調べ、一つ一つの意味を考えてみた。その中特に印象に残っている文字は「忘れない」だ。忘れないように過去の災害を伝えるだけではなく、防災や減災につなげて伝えることで阪神・淡路大震災のことも広がっていくと思った。

震災から29年が経ち、当時を経験した人々の記憶も少しずつ薄れてきている。家族に話を聞いても、その記憶ははっきりしないこともある。しかし、「語り継ぐこと」によって、当時の経験が忘れ去られることはない。私は、それと同時に大切にすべきなのは、当時感じた「思い」だと考えている。震災を経験した人々が感じた恐怖、希望、そして復興への強い意志—それらの思いこそが、次世代に伝えるべきものだと思うのである。

私の夢は「人の役に立ちたい」ということである。防災に関して学びを深めてきた私にとって、誰かの命を守り、支えることこそがその夢の実現だと感じている。だからこそ、「未災者」として、その思いを語り継ぎ、次世代の防災意識を高めることで、人々の安全を守りたいと強く思っている。阪神・淡路大震災から30年が経とうとしている今、その思いを未来の未災者たちに伝え、新たな防災意識を築くことで、より多くの人々の役に立ちたい。

阪神・淡路大震災から30年が経とうとしている。私たち21期生は、環境防災科で3年間様々な学びを通してきて阪神・淡路大震災を忘れないように語り継ぐ責任があると思う。学んだことを地域に発信し、伝えることで人々を災害から救えると考えている。そして、南海トラフ巨大地震に阪神・淡路大震災からの教訓を活かすことで、住民の素早い対応や、行政の素早い対応につながり、被害を最小限に抑えることができると考えている。

私は環境防災科で阪神・淡路大震災を学んで、改めて「凄まじい」災害であったことと、復興したことの「凄さ」を感じた。今の神戸を見ると震災があったとは思えないほど綺麗な街になっていて、何度今の街並みを見ても被災した街から復興したことの凄さに驚く。しかし阪神・淡路大震災で受けた被害や、復興のために努力した人々のことを忘れてはいけないと思う。阪神淡路大震災のことを未来に繋いでいくことで、これから起こる災害に備えることができると思うし、私たちには阪神・淡路大震災のことを未来に繋いでいく役割があると思う。

神戸の街を歩くときや景色を見ているとき、私は、阪神・淡路大震災へ思いにふけることがあった。この30年の間に新しい世代が生まれたが、阪神・淡路大震災の教訓は忘れられておらず、今も残っている。私は、その教訓を未来の防災に残していかなければならないと改めて確認した。そのために私は消防士になったら、地元の人や企業の防災教育などを通して、私も一緒に学んでいきたいと思った。

多くの人の命を奪い、町に大きな被害を与えた阪神・淡路大震災が発生してから30年が経とうとしている今、私たちがすべきことは何なのか。それは当時のでき事や、そこから得られた教訓を風化させず、災害の多様化が進んでいる現代を生きる私たちの防災に活かし、後世まで伝えていくことではないかと思う。30年という月日が流れ、震災を経験している世代から震災を経験していない世代へと変わってゆく中で、私は環境防災科生として防災を伝え続け、災害に強い街づくりに力を注ぐべきだという使命があると思っている。少しでも多くの人に防災への興味関心を持ってほしいという思いがある。

震災 30 年目を迎えた今でも苦しみながら日々を過ごしている人もいることを忘れてはいけないと考える。震災で命を落とす人たちを少しでも減らすために日々から防災への意識や準備が必要だと思った。なぜならば、日々の備えが災害時にとても役立つことを学んだからだ。具体的に防災バッグを作成するなどだ。私たちが生きている時に起こると言われている南海トラフ巨大地震に対する対策も同時に必要だ。8 月に入って大きな地震が 2 度起きている。いつ私たちの町に大きな地震が起きるか分からないから今のうちから備えておくべきだと感じている。

私は環境防災科で阪神・淡路大震災についてたくさんを知った。あの日、私の住み慣れた大好きなまちが悲惨な姿に変わり果て、たくさんの命が奪われた。私は将来、作業療法士になることを目指している。震災から 30 年が経とうとしているが、あの日の教訓を忘れず大学で学ぶりハビリの専門知識と高校で学んだ防災知識を融合させ、災害時には即戦力として活躍できるようになりたい。これからも震災があったことを忘れず、将来の災害に備えたい。

私は、阪神・淡路大震災から 30 年が経とうとしている今、より多くの方に語り継いでいくことに力を入れていくべきだと考える。被災経験のある方々が減っていく中で、私たちの世代が被災者の思いや当時の状況を理解し、正確に伝えていくことがとても大切になってくる。阪神・淡路大震災を経験していない私たちにとって語り継ぐことはとても不安で、難しい。だが、環境防災科 3 年間で学んだことや、聞いたお話を私なりに理解して、次の世代へ繋げていく。

多くの学校では毎年 1 月に入ると震災について学ぶが、他人事として捉え、自分に関係ないと思っている人が多いと思う。しかし、南海トラフの震源域で地震が起こる確率が上がっている。今後南海トラフ巨大地震が発生したときに、自分が何も知らなければ動くことができないが、自分事のようにとらえることで過去の災害から学び、知ることで備えることができ、自分自身や家族を守ることができる。

ある語り部さんのお話をお聞きした。その方のお話は、20 年以上も前のでき事のはずなのに、心が激しく動かされ、その様子が頭の中に映し出された。震災を体験していなくても、被災された方に共感し、その当時のことを想像することができることを知った。この経験から震災を語り継ぐことは難しいことではないと思った。私たち若者が被災者と一緒に震災の経験と学びを伝え、防災の大切さを伝えていきたいと思う。

令和 6 年 8 月 8 日に宮崎県で最大震度 6 弱を観測し、初めて「南海トラフ巨大地震臨時情報」が出された。それにより、多くの人が水やお米を買うようになり、生活する為に食料などを買う人が増えた。備える人が増える一方で、こんなに多くの方が今まで対策を行えていなかったこと、過去の震災の恐怖が広まっていなかったことに驚いた。そのため、今多くの方が備えなければならないと思っている中で、阪神・淡路大震災からの教訓を多くの人に知ってもらうため地域での活動や、出前授業などを通して伝えていきたいと思った。

「あの日」から 30 年を迎え、多くのメディアが「節目」という言葉を使っている。しかし、私は「節目」という言葉に疑問を感じる。被災者の気持ちは 31 年でも 32 年でも変わらないはずだ。多くの方は「30 年」という数字に目が行くだろう。言い方を変えれば、若い世代はこの「節目」でしか関心を持たないのではないかと思う。防災意識が低い日本の現状は、経済停滞により防災資金が不足していることも影響している。行政の意識が低いなら、私たち国民が自主的に防災・減災に取り組み、未来を担う若い世代が、様々な職に就き、さまざまな角度からアプローチすることが重要だと私は考えている。

未災者は震災を経験していないけれども、震災のことを聴いて語り継いでいくことが大切だと考えた。未災者が得た知識をもとに語り手となって語っていく必要がある。語り手となるために私ができることは身の回りの人や大切な人に震災を語り継いでいくことだ。そして、震災を風化させず教訓を通して備えることが重要だ。私は防災訓練や地域行事を通して防災の大切さを伝え、減災に繋げていきたいと思う。

私たちは阪神・淡路大震災を体験していない世代である。体験していないのに聴きした震災体験を語って良いのだろうか、と何度も考えた。しかし、私たちはただ体験を聴いただけではない。語っていただいた一人ひとりの想いも聴きした。この想いを次の世代へ語ることで何年先も風化させることがない未来を作ることができると思う。

2025年1月17日で阪神・淡路大震災から30年を迎える。「30年」という言葉は阪神・淡路大震災を知ってもらう窓口としては入りやすいのかもしれない。しかし、そのまま「30年」に目が行き過ぎると、その言葉だけが様々なところで一人歩きをしてしまうかもしれない。そうすると、本来であれば最も大切にしなければならない震災体験をした方の想いが隠れてしまうであろう。震災体験をした方の生の声、お気持ちを聴かせていただいた私たちが語ることが「30年」を一人歩きさせないためにできることだと思う。

震災から30年が経つ年になった。震災を経験していない人が増えてきている。だがあの日の悲劇を絶対に風化させてはいけないと思う。現在日本では様々な所で地震が発生し南海トラフ巨大地震への警戒が強くなっている。そこでこの南海トラフ巨大地震が発生するといわれている今周りの人へ防災の大切さ、役割を伝えることが防災を学ぶ人の役目だと思う。自分が被災者だったら、自分がその場にいたらなど様々な視点から防災を学びたい。

私は3年間でたくさんの人たちの話を聞いて、たくさんのことを学ばせてもらった。講義を聞かせていただいた中で、自然災害の恐ろしさや被災者の人たちはどのような思いで、避難生活を送ったのかを理解できた。今、私たちのような未災者がだんだんと増えていっている。阪神・淡路大震災の記憶と記録を風化させないためには私たちがこれまでの経験を周りの人たちや、後世に伝えていかなければならない。なぜなら、阪神・淡路大震災の記録や記憶がなくなってしまうと、どのような災害だったのかわからない人たちが増加し、次の災害が起きた時に被害が大きくなる可能性があるからだ。そして、伝えていくために自分は過去に起きた災害について、まずは周りの人たちに伝えていくことから始めたいと考えている。

阪神・淡路大震災から30年が経とうとしている今でも、被災者のあの様な恐ろしい災害はもう起きてほしくないという気持ちや経験して苦しんだ想いが非常に伝わっている。しかし、30年が経つと同時に震災を経験していない世代も増えていく。私たちもその世代である。私たちは、震災を経験した被災者からお話を聴けただけでなく、語った方一人一人の想いも聴くことができた。阪神・淡路大震災を体験した人の色々な想いを次の世代に語るにより、数十年先でも風化させることなく、災害の知識も身につけることができ良い未来になっていくと思う。私たちは、阪神・淡路大震災で被災した人の鮮明な記憶を聴ける最後の世代だからこそ、声を大切に繋いでいかなければならない。

私は、環境防災科に入学してから、阪神・淡路大震災について授業や外部講師、校外学習でいろいろな場所に行き学んできた。北淡震災記念公園では、自然の力の破壊力や恐ろしさ、東遊園地では、震災で亡くなられた方々の想いを感じた。論理的に学ぶことももちろんやってきたが、心で感じて何を思うかということも経験した。しかし、どれだけ学んでもまだ18年しか生きていない私たちには30年という月日に現実味はない。実際、たくさんの人のお話を聞いてきたが、もう30年も経つのかという人もいれば、まだ30年しか…、という人もいた。私は、石川県へ被災地ボランティアに行った時、語り部さんではない一般の人の被災体験を聞いた。それは、生と死の境を経験し非常に恐怖を感じたというお話だった。私はこのお話を心に留めて自然災害を学び続けたいと思った。そして、40年、50年までも想いを繋げ、風化をさせないということが私たちの世代の役目だと感じている。

阪神・淡路大震災から30年目を迎えようとしている。私は将来体育の教員になりたいという夢がある。ほとんどの学校では防災という科目はなく、実際に災害が起きた際に対応できない。災害時に対応できる生徒を育成するには、教員が一方向的に知識を教えるのではなく、生徒が主体的に防災を学ぶことのできる場を作ることが大切だと考える。災害での犠牲者を減らすために私は教員という職業で、「生徒全員の命を背負っている。」という気持ちを大切にしていきたい。

「卒業研究」担当者の30年

30年に寄せて

教諭 麻原 潤平

「お前はな。父さんの体の下にうずくまって、ぎゃあぎゃあ泣いとったんやぞ。」と震災当時に父がとった行動と、赤ん坊同然だった私の様子を、笑いながらよく話してくれた。それを聞かされた子供の私は、まだまだ災害に関する知識がなく、「ふーん。」と聞き流すしかなかった。というのも、大学生になるまでは、何も考えずバスケットボールに明け暮れ、夢中で目の前のことをこなすのに必死だった。私が震災の恐ろしさを感じ始めたのは、大学受験を終え、もうすぐ学生生活が始まろうとしていた3月であった。自宅で進学する大学のパンフレットをぼーっと眺めていたときに、東日本大震災のニュースが突如流れテレビを独占した。恐ろしい津波の映像、発災当時の被災者が悲鳴を上げる映像、当時流れたテレビコマーシャル（スポンサー企業が放送を自粛し、全て同じコマーシャルとなった）など、全てが恐怖で今でも頭から離れることはない。その後も大きな災害は毎年のように日本を襲い、その都度テレビやインターネットでその情報を入手するようになった。そして現在、私は環境防災科の担任として、災害を伝える立場になった。講師の方々やインフラ企業、宮公庁が掲げる災害への取り組みは、当然ながらよく考えられており、これまでにない視点のものばかりだった。やはり1番印象に残ったのは、東北訪問で大川小学校跡に訪れた際に聞いた、佐藤敏郎氏の震災体験談である。2歳の子供を持つ私にとっては、あまりにも残酷で、本来教師としてはこの経験から次にどう繋げるかが大切なのだろうが、ただただ涙を流し何もその時考えられなかったことをよく覚えている。

ようやく新天地の舞子高校にも慣れ、顧問をするバスケットボール部の元へ向かおうとしたときに、ふと環境防災科生徒に呼び止められ、こんな質問をされた。「先生は阪神・淡路大震災当時、どのような行動をとられましたか」。もちろん記憶はない。しかし父と食卓で話したあの話を思い出すことはできた。私は現在1児の父となり、数多くの生徒を預かる教師という立場になった。笑顔で過ごす生徒のこと、あの日の私のようにバスケットボールを追う部員のこと、そしてあの愛くるしい私の子供のことを想うと、30年前の父の恐怖や焦り、そして息子を守らないといけないという感覚は、あまりにも容易に想像できた。「父さんはな。じいちゃんの体の下にうずくまって、ぎゃあぎゃあ泣いとったんやぞ。」と自分の息子に語り継ぎ、さらに次世代の子供たちにも父が体験したこの想いが色あせることなく伝わることを私は願っている。

未来を創造する

教諭 小寺 真穂

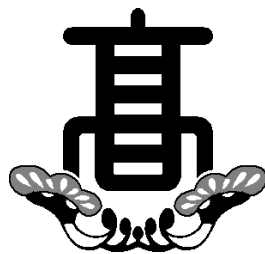
私は阪神・淡路大震災発災時は小学5年生だった。しかし、震度7の揺れは体感していない。長田の火災も大きなビルの倒壊も、避難所になった学校の混乱も目の当たりにしていない。私が生まれ育った京都は震度5（当時の震度階級）の揺れに見舞われたが、自宅に大きな被害はなかった。ただ、畳に広がった仏壇の香炉灰を両親がかき集めている姿は今でも覚えている。小学校は通常通り開校された。地震のお話を聞いたり、自分の身を守る方法等を教わったりした記憶はない。長い間、私自身も災害や防災に対し、学びたいという意欲や特別な思いを抱くことはなかった。

2008年、私は淡路島にある高校に着任し、防災に関わる科目を担当することになる。担当と言っても名ばかりで、主担当の先生の授業を生徒と一緒に受けるという感覚であった。生徒たちは2、3歳で震災を体験している。その生徒たちが地元の保育園で防災紙芝居を披露したり、商店の人たちに当時の様子をインタビューしたり、四川大地震の支援に立ち上がったりと活動することに感化され、阪神・淡路大震災をきちんと学ばなければならないと思うようになった。

2011年には東日本大震災が発災し、生徒たちとボランティア活動に向うことになったが、保護者や地域の方、たくさんの企業や団体が「恩返し」という言葉とともに後方支援に携わってくださった。生徒たちと共に、ふたば学舎（神戸市長田区）の語り部さんからお話を聴かせていただき、東北の方にどのように寄り添うことができるのかとみんなで考えた。私の中で兵庫と東北が繋がった機会であり、この経験が、自分ができることを丁寧に取り組みたいという意志を固めることになる。

様々なご縁をいただき、舞子高校で勤務して6年になる。環境防災科での授業や取り組みを通して「震災を経験する」ということを自問してきた。震度5の揺れでも怖かったし、たくさんのお話を聴かせていただく中で、その様子を、気持ちを想像してとてつもなく悲しくなることもある。1月17日を何とも言えずモヤモヤ過ごす自分がいる。この6年間で出会ってきた防災に関わる高校生も同じような感覚や気持ちなのではないかと思うことがある。特に、環境防災科を志した生徒たちは、3年間の学びを経て「災害と向き合う」機会をいただき、たくさんの事例から防災・減災の在り方を追究し、人々の想いを知っていく。「使命・責任」が高い壁になったり、背中を押す追い風になったりする中で葛藤することもある。しかし、自身の夢と防災が掛け合わされた「自分事」を持つ高校生は最強である。

私の手元に『まっすぐに西へ』という一冊の本がある。30年前に自分で購入した本で、阪神・淡路大震災を題材にしたものであるが、不思議と手放すことなく残っている。私が「兵庫の震災」に触れた原点だ。今後は、最強の世代と一緒に触れる機会を創り、ゆるやかにしなやかに災害と向き合い続けたい。



兵庫県立舞子高等学校

〒655 - 0004 神戸市垂水区学が丘3丁目2番

Tel : 078 - 783 - 5151 Fax : 078 - 783 - 5152